

京都府遺跡調査報告集

第168冊

新名神高速道路整備事業関係遺跡

(1) 下水主遺跡第4次(F地区)

(2) 女谷・荒坂横穴群第14次

2017

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1 新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第4次(F地区)



(1) F7区井戸SE0704検出状況(南から)



(2) F12区整穴建物SH1202全景(南西から)



調査区全景(南東から)

巻頭図版3 新名神高速道路整備事業関係遺跡

女谷・荒坂横穴群第14次



(1) 51号横穴遺物出土状況(南から)



(2) 御毛通2号墳埴輪出土状況(南から)

序

京都府は、丹後、丹波、山城の各地域がそれぞれに、個性豊かな歴史と文化に彩られています。埋蔵文化財は、これら地域の歴史や文化の成り立ちを理解するうえで重要な手がかりを現代に生きる私たちに与えてくれます。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年の設立以来、36年間にわたって発掘調査を実施し、府内各地域の歴史を解明してまいりました。

これらの調査成果をもとに、地域の歴史を広く府民の皆様方にお伝えするよう努めることが責務だと考えております。

本書は、平成25・27・28年に西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した下水主遺跡、女谷・荒坂横穴群の発掘調査報告を収録したものです。本書を学術研究の資料として、また、地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された西日本高速道路株式会社をはじめ、京都府教育委員会、城陽市教育委員会、八幡市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりでである。

新名神高速道路整備事業関係遺跡

- (1) 下水主遺跡第4次(F地区)
(2) 女谷・荒坂横穴群第14次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
(1) 下水主遺跡第4次 (F地区)	城陽市水主大將軍、寺田 金尾	平成25年4月22日～ 平成26年2月27日	西日本高速道路株 式会社関西支社新 名神京都事務所	筒井崇史 岡田健吾 高野陽子 石井清司 竹村亮仁 伊賀高弘 米田拓海 清水麻里奈
(2) 女谷・荒坂横穴群 第14次	八幡市美濃山御毛通地内	平成27年10月19日～ 平成28年3月4日 平成28年4月5日～ 平成28年5月13日		

3. 上記1事業2遺跡は本部事務所(向日市寺戸町)と新名神城陽事務所(城陽市寺田)で整理・報告作業を実施した。作業については、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。
4. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。
5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を使用した。
6. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。
7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係主査田中彰が行った。

本文目次

新名神高速道路整備事業関係遺跡平成25・27・28年度発掘調査報告	1
(1)下水主遺跡第4次(F地区)	3
(2)女谷・荒坂横穴群第14次	103

挿図目次

1. 下水主遺跡第4次(F地区)

第1図	調査地および周辺主要遺跡分布図	4
第2図	調査年度別調査区配置図	8
第3図	調査地区配置図	9
第4図	下水主遺跡・水主神社東遺跡全体地区剖図	14
第5図	小地区剖概念図	15
第6図	下水主遺跡第1～6次調査遺構配置図	17
第7図	下水主遺跡F地区調査区配置図	18
第8図	下水主遺跡F地区調査区土層断面柱状図	19
第9図	F1区遺構配置図	21
第10図	F1区東壁土層断面図	22
第11図	F1区掘立柱建物SB0116・0124実測図	23
第12図	F2区遺構配置図・南壁土層断面図	25
第13図	F1・F2区出土遺物実測図	26
第14図	F3区遺構配置図	27
第15図	F3区南壁土層断面図	28
第16図	F3区井戸SE0308・0311実測図	29
第17図	F3区土坑SK0309遺物出土状況図	30
第18図	F3区出土遺物実測図1	31
第19図	F3区出土遺物実測図2	32
第20図	F3区出土遺物実測図3	33
第21図	F3区出土遺物実測図4	34
第22図	F3区出土遺物実測図5	35
第23図	F3区出土遺物実測図6	36
第24図	F4区遺構配置図・南壁土層断面図	38

第25図	F 5区遺構配置図・北壁土層断面図	39
第26図	F 6区遺構配置図	41
第27図	F 6区北壁土層断面図	42
第28図	F 6区溝 S D0601平面図・検出遺構断面図	43
第29図	F 5・F 6区出土遺物実測図	44
第30図	F 7区遺構配置図・南壁土層断面図	47
第31図	F 7区井戸 S E 0704実測図 1	48
第32図	F 7区井戸 S E 0704実測図 2	49
第33図	F 7区井戸 S E 0704遺物出土状況図	50
第34図	F 7区井戸 S E 0705実測図	50
第35図	F 7区出土遺物実測図 1	51
第36図	F 7区出土遺物実測図 2	52
第37図	F 7区出土遺物実測図 3	53
第38図	F 7区出土遺物実測図 4	54
第39図	F 7区出土遺物実測図 5	55
第40図	F 7区出土遺物実測図 6	56
第41図	F 7区出土遺物実測図 7	57
第42図	F 7区出土遺物実測図 8	58
第43図	F 7区出土遺物実測図 9	59
第44図	F 7区出土遺物実測図 10	60
第45図	F 7区出土遺物実測図 11	60
第46図	F 8区遺構配置図・南壁土層断面図	61
第47図	F 8区溝 S D0801・井戸 S E 0802土層断面図	62
第48図	F 8区出土遺物実測図	63
第49図	F 9区遺構配置図	65
第50図	F 9区北壁土層断面図	66
第51図	F 9区ピット S P 0928・井戸 S E 0929・0930実測図	67
第52図	F 9区掘立柱建物 S B 0922実測図	68
第53図	F 9区出土遺物実測図 1	70
第54図	F 9区出土遺物実測図 2	71
第55図	F 10区遺構配置図	73
第56図	F 10区北壁土層断面図	74
第57図	F 10区土器溜まり S X 1016・1017実測図	74
第58図	F 10区竪穴建物 S H 1020実測図	75
第59図	F 10区出土遺物実測図 1	76

第60図	F10区出土遺物実測図2	78
第61図	F10区出土遺物実測図3	79
第62図	F11区遺構配置図・南壁土層断面図	81
第63図	F11区溝SD1101実測図	82
第64図	F11区溝SD1102・井戸SE1110ほか実測図	83
第65図	F11区土坑SK1109実測図	84
第66図	F11区出土遺物実測図1	85
第67図	F11区出土遺物実測図2	86
第68図	F12区遺構配置図・北壁土層断面図	89
第69図	F12区井戸SE1201、土坑SK1225ほか実測図	90
第70図	F12区溝SD1204実測図	91
第71図	F12区溝SD1245・1235実測図	92
第72図	F12区竪穴建物SH1202実測図1	93
第73図	F12区竪穴建物SH1202実測図2	94
第74図	F12区竪穴建物SH1202遺物出土状況図	95
第75図	F12区竪穴建物SH1202復原図	96
第76図	F12区遺物実測図1	97
第77図	F12区遺物実測図2	99
第78図	F12区遺物実測図3	101

2. 女谷・荒坂横穴群第14次

第79図	調査地および周辺遺跡分布図	104
第80図	女谷・荒坂横穴群の過去の調査と今回の調査地区配置図	106
第81図	1トレンチ平面・西壁土層断面図	108
第82図	2トレンチ平面・西壁土層断面図	109
第83図	3トレンチ御毛通2号墳平面図	110
第84図	3トレンチ土層断面図	111
第85図	3トレンチ埴輪出土状況図	112
第86図	4トレンチ平面・西壁土層断面図	113
第87図	4トレンチ土坑状遺構SX01平面・土層断面図	114
第88図	5トレンチ平面・東壁土層断面図	114
第89図	周溝SD01内出土埴輪実測図1	116
第90図	周溝SD01内出土埴輪実測図2	117
第91図	周溝SD01内出土埴輪実測図3	118
第92図	周溝SD01内出土遺物実測図	120

第93図	4トレンチS X01出土遺物実測図	121
第94図	女谷・荒坂横穴群 荒坂A支群遺構配置図	122
第95図	7トレンチS D01土層断面図	123
第96図	6トレンチ平面図	124
第97図	7トレンチ平面図	125
第98図	6トレンチ45・46・47号横穴土層断面図1	126
第99図	6トレンチ45・46・47号横穴土層断面図2	127
第100図	6トレンチS X04・05土層断面図	129
第101図	48号横穴平面・立面図	131
第102図	49号横穴平面・立面・土層断面図	132
第103図	S X09・10土層断面図	134
第104図	50号横穴平面・立面図	135
第105図	50号横穴土層断面図	136
第106図	S X13・14土層断面図	138
第107図	51号横穴平面・立面図	140
第108図	51号横穴土層断面図	141
第109図	51号横穴遺物出土状況図	143
第110図	7トレンチS D01出土遺物実測図	144
第111図	6・7トレンチ出土遺物実測図	145
第112図	7トレンチ51号横穴出土遺物実測図	146
第113図	埴輪取り上げ地区剖図	147
第114図	埴輪出土分布図	149
第115図	横穴配置図	150

付 表 目 次

1. 下水主遺跡第4次(F地区)

付表1	下水主遺跡調査回数一覧表	10
付表2	水主神社東遺跡調査回数一覧表	10
付表3	下水主遺跡調査地区別一覧表(新名神高速道路整備事業分)	11
付表4	水主神社東遺跡調査地区別一覧表(新名神高速道路整備事業分)	12

2. 女谷・荒坂横穴群第14次

付表5	女谷・荒坂横穴群調査回数一覧表	107
-----	-----------------	-----

付表6	御毛通古墳群調査次数一覧	107
付表7	女谷・荒坂横穴群検出遺構一覧	121
付表8	下水主遺跡第4次(F地区) 出土土器・土製品観察表	153
付表9	下水主遺跡第4次(F地区) 出土木製品観察表	171
付表10	女谷・荒坂横穴群第14次 出土埴輪観察表	173
付表11	女谷・荒坂横穴群第14次 出土土器観察表	175
付表12	女谷・荒坂横穴群第14次 出土石製品・骨製品観察表	176
付表13	女谷・荒坂横穴群第14次 出土瓦観察表	176
付表14	女谷・荒坂横穴群第14次 出土銭観察表	176
付表15	女谷・荒坂横穴群第14次 出土金属製品観察表	176

図版目次

巻頭図版1 下水主遺跡第4次(F地区)

- (1) F7区井戸SE0704検出状況(南から)
- (2) F12区竪穴建物SH1202全景(南西から)

巻頭図版2 女谷・荒坂横穴群第14次

調査区全景(南東から)

巻頭図版3 女谷・荒坂横穴群第14次

- (1) 51号横穴遺物出土状況(南から)
- (2) 御毛通2号埴輪輸出土状況(南から)

1. 下水主遺跡第4次(F地区)

図版第1 (1) 調査地西半部全景(東から)

(2) 調査地北東部全景(西から)

(3) F1区全景(南東から)

図版第2 (1) F1区島畑106検出状況(西から)

(2) F1区島畑106完掘状況(西から)

(3) F1区東壁土層断面(西から)

図版第3 (1) F1区下層遺構全景(西から)

(2) F1区掘立柱建物SB0116・0124全景(南西から)

図版第4 (1) F1区掘立柱建物SB0116全景(南東から)

(2) F1区掘立柱建物SB0116全景(南西から)

(3) F1区掘立柱建物SB0116・0124全景(北東から)

- 図版第5 (1) 掘立柱建物 S B0116柱穴 S P0116土層断面(南西から)
 (2) 掘立柱建物 S B0116柱穴 S P0117土層断面(南西から)
 (3) 掘立柱建物 S B0116柱穴 S P0119土層断面(南西から)
 (4) 掘立柱建物 S B0116柱穴 S P0120土層断面(北東から)
 (5) 掘立柱建物 S B0116柱穴 S P0120土層断面(北東から)
 (6) 掘立柱建物 S B0116柱穴 S P0122土層断面(北東から)
 (7) 掘立柱建物 S B0124柱穴 S P0124土層断面(南西から)
 (8) 掘立柱建物 S B0124柱穴 S P0126土層断面(南から)
- 図版第6 (1) F 2区全景(北から)
 (2) F 2区北壁土層断面(南から)
 (3) F 2区土層確認状況(東から)
- 図版第7 (1) F 3区拡張前全景(東から)
 (2) F 3区南壁(東半)土層断面(北から)
 (3) F 3区須恵器甕出土状況(北から)
- 図版第8 (1) F 3区土坑 S K0305遺物出土状況(西から)
 (2) F 3区溝 S D0309全景(南西から)
 (3) F 3区井戸 S E0308上部土層断面(南西から)
- 図版第9 (1) F 3区井戸 S E0308遺物出土状況(南西から)
 (2) F 3区井戸 S E0308遺物出土状況(北から)
 (3) F 3区井戸 S E0308完掘後全景(南から)
- 図版第10 (1) F 3区井戸 S E0311上部土層断面(西から)
 (2) F 3区井戸 S E0311下部土層断面(西から)
 (3) F 3区井戸 S E0311完掘後全景(南から)
- 図版第11 (1) F 3区土坑 S K0309遺物出土状況(南西から)
 (2) F 3区土坑 S K0309全景(南東から)
 (3) F 3区弥生土器出土状況(南から)
- 図版第12 (1) F 4区調査地全景(南から)
 (2) F 4区南壁(東半)土層断面(北から)
 (3) F 4区南壁(西半)土層断面(北から)
- 図版第13 (1) F 5区全景(南から)
 (2) F 5区東壁(北半)土層断面(西から)
 (3) F 5区拡張区全景(南東から)
- 図版第14 (1) F 6区鳥畑107検出状況(南東から)
 (2) F 6区鳥畑107・溝状遺構 S D0612検出状況(北東から)
 (3) F 6区鳥畑107完掘後全景(南から)

- 図版第15 (1) F 6 区下層遺構面全景(南から)
(2) F 6 区溝 S D 0603 検出状況(南から)
(3) F 6 区土坑 S K 0604 全景(南から)
- 図版第16 (1) F 6 区溝 S D 0601 全景(南から)
(2) F 6 区溝 S D 0601 護岸施設検出状況(南西から)
(3) F 6 区溝 S D 0601 護岸施設(北半部)検出状況(南東から)
- 図版第17 (1) F 7 区北壁中央土層断面(南から)
(2) F 7 区南壁中央土層断面(北から)
(3) F 7 区井戸 S E 0704 検出状況(南西から)
- 図版第18 (1) F 7 区井戸 S E 0704 検出状況(南から)
(2) F 7 区井戸 S E 0704 全景(南から)
- 図版第19 (1) F 7 区井戸 S E 0704 水溜め・礎敷検出状況(南から)
(2) F 7 区井戸 S E 0704 井戸枠撤去状況(南から)
- 図版第20 (1) F 7 区井戸 S E 0704 柄杓出土状況(南から)
(2) F 7 区井戸 S E 0704 柄杓・須臾器壺 M 出土状況(南から)
(3) F 7 区井戸 S E 0704 曲物出土状況(北から)
- 図版第21 (1) F 7 区井戸 S E 0704 葺串出土状況(南東から)
(2) F 7 区井戸掘形(東半)土層断面(南から)
(3) F 7 区井戸 S E 0704 掘形(西半)土層断面(南から)
- 図版第22 (1) F 7 区井戸 S E 0704 最下部大型板材検出状況(南から)
(2) F 7 区井戸 S E 0704 解体状況(南から)
(3) F 7 区井戸 S E 0704 南西隅横棧結合状況(南から)
- 図版第23 (1) F 7 区井戸 S E 0704 完掘状況(南から)
(2) F 7 区井戸 S E 0705 完掘後全景(南から)
(3) F 7 区落ち込み S X 0706 検出状況(北から)
- 図版第24 (1) F 8 区全景(北から)
(2) F 8 区溝 S D 0801 全景(北西から)
(3) F 8 区井戸 S E 0802 全景(南から)
- 図版第25 (1) F 9 区上層遺構面全景(南から)
(2) F 9 区溝 S D 0901・0902 全景(南から)
(3) F 9 区北壁土層断面(南から)
- 図版第26 (1) F 9 区下層遺構全景(西から)
(2) F 9 区井戸 S E 0939 土層断面(東から)
(3) F 9 区井戸 S E 0930 全景(東から)
- 図版第27 (1) F 9 区井戸 S E 0929 全景(西から)

- (2) F 9 区柱穴 S P 0922 検出状況 (南西から)
- (3) F 9 区柱穴 S P 0922 土層断面 (西から)
- 図版第28 (1) F 9 区銭貨出土状況 (南から)
- (2) F 9 区土器溜まり S X 0932 遺物出土状況 (東から)
- (3) F 9 区土器溜まり S X 0932 遺物出土状況 (北から)
- 図版第29 (1) F 10 区西部上層遺構面全景 (南から)
- (2) F 10 区下層遺構面全景 (南から)
- (3) F 10 区北壁土層断面 (南から)
- 図版第30 (1) F 10 区作業風景 (南東から)
- (2) F 10 区竪穴建物 S H 1020 全景 (南から)
- (3) F 10 区土器溜まり S X 1016・1017 全景 (南から)
- 図版第31 (1) F 11 区全景 (北から)
- (2) F 11 区溝 S D 1101・1102 全景 (西から)
- (3) F 11 区落ち込み S X 1103 全景 (北から)
- 図版第32 (1) F 11 区井戸 S E 1110 土層断面 (南から)
- (2) F 11 区井戸 S E 1110 網代出土状況 (東から)
- (3) F 11 区土坑 S K 1106 遺物出土状況 (南東から)
- 図版第33 (1) F 11 区土坑 S K 1109 検出状況 (東から)
- (2) F 11 区土坑 S K 1109 遺物出土状況 (東から)
- (3) F 11 区落ち込み S X 1115 検出状況 (北から)
- 図版第34 (1) F 12 区全景 (南から)
- (2) F 12 区遺構検出状況 (南から)
- (3) F 12 区井戸 S E 1201 全景 (南から)
- 図版第35 (1) F 12 区土坑 S K 1230 遺物出土状況 (南西から)
- (2) F 12 区溝 S D 1204 全景 (南西から)
- (3) F 12 区溝 S D 1235 全景 (南西から)
- 図版第36 (1) F 12 区溝 S D 1245 全景 (北西から)
- (2) F 12 区竪穴建物 S H 1202 検出状況 (南から)
- (3) F 12 区竪穴建物 S H 1202 土層断面 (南から)
- 図版第37 (1) F 12 区竪穴建物 S H 1202 全景 (南西から)
- (2) F 12 区竪穴建物 S H 1202 完掘状況 (南から)
- 図版第38 (1) F 12 区竪穴建物 S H 1202 焼土・炭化材検出状況 (南から)
- (2) F 12 区竪穴建物 S H 1202 焼土・炭化材検出状況 (西から)
- (3) F 12 区竪穴建物 S H 1202 焼土・炭化材検出状況 (南西から)
- 図版第39 (1) F 12 区竪穴建物 S H 1202 遺物・炭化材検出状況 (南東から)

- (2) F12区竪穴建物SH1202遺物・炭化材出土状況(南から)
 (3) F12区竪穴建物SH1202遺物出土状況(南から)
- 図版第40 (1) F12区竪穴建物SH1202遺物・炭化材出土状況(南から)
 (2) F12区竪穴建物SH1202遺物・炭化材出土状況(南西から)
 (3) F12区竪穴建物SH1202遺物・炭化材出土状況(西から)
- 図版第41 (1) F12区竪穴建物SH1202遺物出土状況(南西から)
 (2) F12区竪穴建物SH1202周壁溝炭化材出土状況(北から)
 (3) F12区竪穴建物SH1202内ベッド状遺構土層断面(西から)
- 図版第42 (1) F12区竪穴建物SH1202内土坑SK1250検出状況(西から)
 (2) F12区竪穴建物SH1202内主柱穴SP1246土層断面(南から)
 (3) F12区竪穴建物SH1202内主柱穴SP1247土層断面(南から)
- 図版第43 (1) F12区竪穴建物SH1202内主柱穴SP1248土層断面(南から)
 (2) F12区竪穴建物SH1202内主柱穴SP1249土層断面(南から)
 (3) F12区竪穴建物SH1202完掘後全景(西から)
- 図版第44 出土遺物1 F2・F3区出土遺物
- 図版第45 出土遺物2 F3・F7・F9区出土遺物
- 図版第46 出土遺物3 F10・F11区出土遺物
- 図版第47 出土遺物4 F12・F3区出土遺物
- 図版第48 出土遺物5 F3区出土遺物
- 図版第49 出土遺物6 F7区出土遺物
- 図版第50 出土遺物7 F7区出土遺物
- 図版第51 出土遺物8 F7区出土遺物
- 図版第52 (1) 出土遺物9 F1・F3区出土遺物
 (2) 出土遺物10 F3区出土遺物
- 図版第53 (1) 出土遺物11 F3区出土遺物
 (2) 出土遺物12 F5・F6区出土遺物
- 図版第54 (1) 出土遺物13 F7区出土遺物
 (2) 出土遺物14 F8区出土遺物
- 図版第55 (1) 出土遺物15 F9区出土遺物
 (2) 出土遺物16 F9・F10区出土遺物
- 図版第56 (1) 出土遺物17 F10区出土遺物
 (2) 出土遺物18 F10区出土遺物
- 図版第57 (1) 出土遺物19 F11区出土遺物
 (2) 出土遺物20 F11区出土遺物
- 図版第58 (1) 出土遺物21 F12区出土遺物

2. 女谷・荒坂横穴群第14次

- 図版第59 (1)御毛通2号墳埴輪出土状況(南西から)
(2)御毛通2号墳周溝完掘状況(南西から)
- 図版第60 (1)御毛通2号墳埴丘盛り土土層断面1(西から)
(2)御毛通2号墳埴丘盛り土土層断面2(西から)
(3)御毛通2号墳周溝内土層断面(南から)
- 図版第61 (1)御毛通2号墳周溝検出状況(南から)
(2)御毛通2号墳周溝遺物出土状況1(北西から)
(3)御毛通2号墳周溝遺物出土状況2(西から)
- 図版第62 (1)御毛通2号墳1トレンチ全景(西から)
(2)御毛通2号墳2トレンチ全景(南西から)
- 図版第63 (1)御毛通2号墳4トレンチ全景(南西から)
(2)御毛通2号墳4トレンチSX01遺物出土状況(南から)
- 図版第64 (1)御毛通2号墳4トレンチSX01完掘状況(西から)
(2)御毛通2号墳5トレンチ全景(北東から)
(3)御毛通2号墳5トレンチ東壁断面(北西から)
- 図版第65 (1)6トレンチ遠景(南から)
(2)45・46・47号横穴全景(南から)
(3)45・46・47号横穴全景(北東から)
- 図版第66 (1)45号横穴断面(南東から)
(2)45号横穴全景(南東から)
(3)45号横穴墓道縦断面(南から)
- 図版第67 (1)46・47号横穴全景(南東から)
(2)46号横穴墓道横断面(南東から)
(3)46号横穴墓道縦断面(北から)
- 図版第68 (1)7トレンチ遠景(南東から)
(2)48・49・50号横穴遠景(北東から)
- 図版第69 (1)7トレンチ横穴天井部掘削後遠景(南東から)
(2)48・49・50号横穴天井部掘削後遠景(北東から)
- 図版第70 (1)48号横穴完掘状況(東から)
(2)49号横穴墓道・玄室調査状況(南東から)
(3)49号横穴完掘状況(南東から)
- 図版第71 (1)49号横穴玄室完掘状況(北西から)

- (2)50号横穴、S X09・10掘削状況(南東から)
 (3)50号横穴完掘状況(南東から)
- 図版第72 (1)50号横穴玄室埋土堆積状況(南東から)
 (2)50号横穴墓道埋土堆積状況(南東から)
 (3)50号横穴墓道先端部埋土堆積状況(南から)
- 図版第73 (1)7トレンチS D01全景(南から)
 (2)7トレンチS D01埋土堆積状況(南東から)
 (3)7トレンチS X09・10掘削状況(南東から)
- 図版第74 (1)7トレンチS X10埋土堆積状況(南から)
 (2)7トレンチS X13・14埋土堆積状況(南東から)
 (3)7トレンチS X13・14埋土堆積状況(南東から)
- 図版第75 (1)51号横穴完掘状況(南西から)
 (2)51号横穴玄室・羨道遺物出土状況(北から)
- 図版第76 (1)51号横穴羨道縦断面(西から)
 (2)51号横穴墓道横断面(南西から)
 (3)51号横穴玄室内断ち割り状況(北から)
- 図版第77 (1)51号横穴玄室・羨道遺物出土状況(南西から)
 (2)51号横穴遺物出土状況(西から)
 (3)51号横穴遺物出土状況(東から)
- 図版第78 (1)51号横穴人骨出土状況(北東から)
 (2)51号横穴東側人骨出土状況近景(東から)
 (3)51号横穴西側人骨出土状況(南東から)
- 図版第79 (1)御毛通2号墳甲冑形埴輪1
 (2)御毛通2号墳甲冑形埴輪2
- 図版第80 (1)御毛通2号墳草摺形埴輪・家形埴輪
 (2)御毛通2号墳盾形埴輪
- 図版第81 (1)御毛通2号墳埴輪門筒部
 (2)御毛通2号墳鶏形埴輪
- 図版第82 (1)御毛通2号墳周溝・4トレンチS X01出土遺物
 (2)6・7トレンチ出土遺物
- 図版第83 (1)7トレンチS D01出土瓦
 (2)48号横穴古銭、51号横穴金属製品他、御毛通2号墳周溝石製品
- 図版第84 51号横穴出土遺物

新名神高速道路整備事業関係遺跡 平成25・27・28年度発掘調査報告

はじめに

新名神高速道路整備事業に伴う発掘調査は、平成20年度から西日本高速道路株式会社の依頼を受けて継続して実施している。新名神高速道路は、愛知県名古屋を起点とし、兵庫県神戸市に至る総延長約174kmの高速道路で、既存の名神高速道路や京滋バイパス、近畿自動車道などと交通機能を分担することで、名神高速道路等の混雑を解消し、利用者の利便性の向上を目的として建設が進められているものである。また、大規模な災害や事故等による交通規制時には、名神高速道路等と相互に役割を補完することが期待されている。

新名神高速道路の予定路線のうち、京都府内では、宇治田原町・城陽市・京田辺市・八幡市の各市町を通過する路線として17.7kmが計画された。このうち、京奈和自動車道と第二京阪道路を接続することによる高速道路網の機能強化等を目的として、先行して事業認可が下りた城陽ジャンクション・インターチェンジ(仮称)(以下、城陽JCT・IC(仮称)と表記)から八幡ジャンクション・インターチェンジ(仮称)(以下、八幡JCT・IC(仮称)と表記)までの区間(事業距離3.5km)については、平成20年度より発掘調査に着手している。当該区間において調査の対象となる遺跡は、東から城陽市水主神社東遺跡、同下水主遺跡、京田辺市門田遺跡、同西村遺跡、同向谷遺跡、同向山遺跡、同松井横穴群、八幡市女谷・荒坂横穴群、同荒坂遺跡、同御毛通古墳群、同美濃山廃寺、同美濃山廃寺下層遺跡の各遺跡である。これらの遺跡については、現地の発掘調査終了後に整理作業を行い、順次、報告書を刊行しているところである。

本書は、城陽JCT・IC(仮称)の建設に伴い、平成25年度に調査を実施した下水主遺跡第4次調査のうち、もっとも西に位置するF地区の調査と、八幡JCT・IC(仮称)の建設に伴い、平成27・28年度に調査を実施した女谷・荒坂横穴群第14次調査、御毛通古墳群第3次調査について報告するものである。

下水主遺跡は、木津川右岸の扇状地と埋没した微高地上に展開する。下水主遺跡は、当初、東西540m、南北760mほどが遺跡範囲と考えられていたが、本事業に伴う調査の進展の結果、遺跡がさらに北に広がる⁽⁸¹⁾ことが確認されたため、現在、南北の広がり⁽⁸¹⁾は1,200mとなっている。一連の発掘調査以前には、表採遺物のみが知られていた。

女谷・荒坂横穴群は八幡市の南東部にあたり、京田辺市とのほぼ市境に位置する。女谷・荒坂横穴群ではこれまでに13次にわたる発掘調査が実施され、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての横穴が総計80基調査・確認され、推定で総数300基以上の横穴で構成される大規模な横穴群であることが明らかになっている。また、平成24年度に実施した第13次調査では、横穴が所在する丘陵頂部に墳丘規模22.0mに復原される御毛通2号墳が確認されている。今回の調査は、第14次調

査にあたり、第13次調査の南隣に位置する。また、平成14年度に調査を実施した御毛通遺跡の調査地の西側に位置している。

現地調査にあたっては京都府教育委員会、城陽市教育委員会、八幡市教育委員会、京都府立山城郷土資料館をはじめ、各関係機関のご指導・ご協力をいただいた。また、地元自治会や近隣住民の方々には発掘調査へのご理解とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査にかかる経費は、全額、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が負担した。

(筒井崇史・竹村亮仁)

〔平成25年度現地調査体制〕

現地調査責任者	調査課長	水谷壽克
現地調査担当者	調査課参事調査第3係長事務取扱	石井清司
	同 主任調査員	戸原和人・引原茂治・高野陽子・筒井崇史・村田和弘
	同 専門調査員	岡崎研一
	同 調査員	福山博章・関広高世・大高義克・山崎美輪・岡田健吾

調査場所 京都府城陽市水主大將軍・倉貝・宮馬場、寺田金尾・今橋
(うちF地区は水主大將軍、寺田金尾に所在)

現地調査期間 平成25年4月22日～平成26年2月27日
(うちF地区は平成25年4月22日～平成25年8月30日)

調査面積 10,393㎡(うちF地区は2,756㎡)

〔平成27年度調査体制等〕

現地調査責任者	調査課長	有井広幸
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第3係長	岩松 保
	同 総括主査	石井清司
	同 調査員	竹村亮仁・武本典子

調査場所 京都府八幡市美濃山御毛通地内

現地調査期間 平成27年10月19日～平成28年3月4日

調査面積 2,500㎡

〔平成28年度調査体制等〕

現地調査責任者	調査課長	森 正
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第3係長	岩松 保
	同 調査員	竹村亮仁・武本典子

調査場所 京都府八幡市美濃山御毛通地内

調査期間 平成28年4月5日～5月13日

調査面積 1,800㎡

(1) 下水主遺跡第4次(F地区)

1. はじめに

下水主遺跡は、新名神高速道路の城陽JCT・IC(仮称)建設予定地に分布し、橋脚建設や盛り土造成の行われる範囲をおもな対象として、下水主遺跡の南東側に位置する水主神社東遺跡とともに発掘調査を実施することとなった。城陽JCT・IC(仮称)建設予定地における発掘調査は、平成23年度に開始し、平成27年度にはほぼ調査が終了したところである。

今回報告する下水主遺跡第4次調査F地区は、平成25年度に調査を実施した調査区の1つで、当該年度にはF地区のほか、A～E・G地区と、水主神社東遺跡A～C地区についての調査を実施した。これらのうち、下水主遺跡D・E・G地区と水主神社東遺跡A～C地区については、平成23・24年度調査の成果と合わせてすでに報告済みである。

城陽JCT・IC(仮称)建設予定地において実施した発掘調査にかかる調査回数・調査地点・調査期間等については、第2・3図、付表1・2の通りである。本報告は、新名神高速道路整備事業の城陽JCT・IC(仮称)の建設に関わる発掘調査報告書としては2冊目に当たる。

また、新名神高速道路整備事業に伴い、城陽JCT・IC(仮称)から一般国道24号までの接続道路の建設や一般国道24号の金尾交差点の改良事業などが国土交通省によって計画された。これらに伴い下水主遺跡や水主神社東遺跡を対象とした発掘調査を平成24・25・27年度に実施した。

なお、刊行済みの報告書については付表1～4を参照されたい。

2. 位置と環境

1) 地理的環境

下水主遺跡の所在する京都府城陽市は、京都府南部を北流する木津川の右岸に位置する。城陽市の地形は、西部では木津川による河川堆積と度重なる氾濫によって形成された沖積平野で、現在は水田地帯が広がるが、これまでの発掘調査の結果、微高地や後背湿地が分布していることが明らかになっている。東部は鷲峰山山塊に連なる山地があり、山麓から低地の中間部には大阪層群からなる洪積丘陵である宇治丘陵が位置する。この丘陵部と低地との境界には段丘が発達し、木津川の支流である大谷川、長谷川、青谷川によって形成された扇状地が広がる。このような段丘上や扇状地上に集落が営まれ、現在の城陽市街地となる。また、木津川周辺に形成された微高地上には富野、枇杷庄、水主などの集落が営まれる。後背湿地を中心に条里型地割が良好に遺存し、水田と土を盛り上げて畑作を行う島畑が分布している。

2) 歴史的環境

下水主遺跡周辺に分布する主要な遺跡について概観する(第1図)。

旧石器時代については、遺構は確認されていないが、芝ヶ原遺跡でナイフ形石器と舟底形石器が、森山遺跡でサヌカイト片が、それぞれ出土している。

縄文時代では、横道遺跡(丸塚古墳周濠下層)で、前期後半の深鉢形土器が土坑に納められた状

態で出土しており、周辺に集落の存在が想定されている。森山遺跡では後期後半と考えられる円形の堅穴建物が規則的に配置された状態で検出されている。晩期の土器が沖積低地に立地する塚本東遺跡や下水主遺跡、水主神社東遺跡などで出土していることから、木津川流域の沖積低地が活動領域として利用されていたと考えられる。

弥生時代になると、木津川沿岸を中心に遺跡が増加する。前期では木津川左岸に、中期になると木津川右岸でも集落が出現し、巨椋池周辺にも集落が営まれるようになる。城陽市域では、森山遺跡で中期後半の甕棺と後期後半の堅穴建物2棟が検出されている。また、芝ヶ原遺跡や正道遺跡などでは、遺構は検出されていないものの、中・後期の土器や石器が出土している。沖積平野に位置する塚本遺跡や塚本東遺跡、水主遺跡などで後期末の土器が出土している。特に塚本東遺跡では、北東から南東に流れる溝から大量の庄内式土器が出土した。出土した土器には高杯・器台・甕・鉢・手焙形土器など多様な器種が認められ、丹波・丹後地域の特徴を持つ土器も多数出土している。また、溝の南側から堅穴建物が検出されており、庄内期の集落が確認されている。しかし、後期になると南山城地域各地でみられる高地性集落は、城陽市域ではほとんど確認されていない。

古墳時代になると、南山城地域にも古墳が築かれるようになる。芝ヶ原古墳は城陽市域に築かれた前方後方形の初源期の古墳である。鏡・銅製腕輪・鉄製品・玉類・土器などが出土している。次いで、南山城地域各地に前方後円墳が出現する。城陽市域においても北部地域の大谷川の周辺に、前期では、上大谷古墳群、西山古墳群、尼塚古墳群が造営される。小規模ではあるが、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳と多様な墳形の古墳が造営された。

中期になると、城陽市の北半部に多くの古墳が集中するようになる。久津川古墳群である。同古墳群は、大きく3つの支群(広野支群・久世支群・富野支群)に分かれる。このうち久世支群では、前方後円墳である久津川車塚古墳や芭蕉塚古墳、帆立貝形前方後円墳である丸塚古墳、方墳である梶塚古墳や青塚古墳、円墳である山道東古墳などの大規模な古墳が築造される。南山城地域の他地域と比べても規模の面で群を抜いている。久津川車塚古墳は、埋葬施設として竜山石製の長持形石棺を使用し、副葬品として銅鏡・玉類・石製模造品・刀剣類などが出土している。遺物の年代から5世紀前半の築造と考えられる。墳丘規模、埋葬施設、副葬品のいずれにおいても王権と密接な関係を持った首長が、城陽市北部を中心とした地域に存在したことを示している。芭蕉塚古墳は5世紀中頃の前方後円墳で、墳丘から埴輪列や葺石が検出されている。久津川車塚古墳に続く首長墳であるが、久津川古墳群最後の大型前方後円墳である。

後期では芝ヶ原古墳群、上大谷古墳群、芝山古墳群などで小規模な円墳が造営される。芝山古墳群では5世紀中頃から6世紀末頃に造営され、小型方墳から円墳へと変化し、規模も縮小化してゆく。6世紀末には造墓活動を停止すると考えられている。これらの古墳はいずれも木棺直葬墳であり、横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳は尼塚5号墳、上大谷12号墳、上大谷17号墳と数少ない。

古墳時代の集落遺跡はおもに市域東部の段丘上に営まれた。前期では芝山遺跡で堅穴建物が検

出されており、隣接する森山遺跡では方形周溝状遺構と堅穴建物が検出されている。森山遺跡の方形周溝状遺構は豪族居館と評価されている。中期には室木遺跡、後期には芝ヶ原遺跡、正道遺跡、芝山遺跡などがある。

文献資料の検討から、飛鳥時代以前に城陽市域には栗隈県が置かれたと考えられている。『日本書紀』仁德天皇十二年十月条に「大溝を山背の栗隈県に掘」とあり、推古天皇十五年是歳条にも「山背国に大溝を栗隈に掘」と記載されている。栗隈大溝を現在の古川に比定する説もあるが、発掘調査等では確認されていない。この時期の木津川流域の沖積地における開発行為を物語る伝承であろう。

城陽市域は、古代律令制のもとでは山背国久世郡や綴喜郡に属していた。

飛鳥～奈良時代の遺跡としては、久世廃寺、平川廃寺、正道官衙遺跡などがある。久世廃寺は7世紀に創建された寺院で、塔を東に、金堂を西に置く法起寺式伽藍配置である。8世紀中頃に整備され、平城宮や恭仁宮と同じ軒瓦が供給されている。南門跡からは金銅製誕生釈迦仏立像が出土している。平川廃寺は8世紀に造営された寺院で、塔を西に、金堂を東に置く法隆寺式伽藍配置であり、塔跡や金堂跡の周辺から塑像片が出土している。また、塔や金堂の基壇がよく保存されており、築地の痕跡などから寺域の広がりがほぼ確認されている。正道官衙遺跡は当初、寺院跡と考えられていたが、7世紀後半から9世紀前半にかけての大型掘立柱建物群が複数検出され、山背国久世郡衙跡と推定されるに至った。これらの寺院や郡衙を通るように北陸道や東山道が想定されている芝山遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての道路側溝と想定される遺構が検出されている。

平安時代以降の遺跡は顕著なものが少ないが、文献資料との比較からいくつか注目すべき事実がわかる。まず、鎌倉時代になると調査地周辺は、賀茂別雷神社、石清水八幡宮、元興寺などの寺社領となって寺田荘、富野荘、水主荘などの荘園が整備された。このころから現在まで、富野や水主などの集落周辺や、寺田集落の西側にはこの地域に特有の鳥畑が形成される。土を盛り上げた部分で畑作を行う一方、鳥畑と鳥畑の間の凹地では水田を行っていた可能性がある。

室町時代の応仁・文明の乱の動乱期には南山城地域が主要な戦場の1つとなったことから、在地の土豪たちが、枇杷庄城、外野(富野)城、水主城などを築造して防備を固めていた。水主氏の勢力基盤であった水主城は、木津川に近い現在の水主集落一帯に築かれた平城であるが、文献資料から山城国一揆の拠点であるとともに、当時の南山城地域支配の要の城郭であったと考えられている。発掘調査では遺構は検出されていないため、城郭の構造は不明である。また、寺田環濠集落も応仁の乱ごろに防御を目的として形成されたものと考えられている。

江戸時代になると、水主村は綴喜郡に属し、天領として幕府の支配下に置かれた。調査地周辺では中世から現代にかけて、鳥畑を主体とする景観から水田を主体とする景観へと変化していたと考えられる。

(筒井崇史)

3. 調査の経過

1) 調査の経過

平成25年度の調査は、城陽JCT・IC(仮称)の建設工事が本格化するのに合わせて、埋蔵文化財の調査も本格化し、2万㎡を越える調査となった。調査の対象となったのは下水主遺跡・水主神社東遺跡の2遺跡で、それぞれ第4次、第5次調査にあたる。また、新名神高速道路整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に並行して、一般国道24号金尾交差点改良事業に伴う調査が実施された(水主神社東遺跡第4次・下水主遺跡第3次調査)。

なお、新名神高速道路整備事業に伴う水主神社東遺跡第5次調査C地区、下水主遺跡第4次調査D・F地区の各地区と、一般国道24号金尾交差点改良事業に伴う水主神社東遺跡第4次調査D地区の調査成果を合わせて、平成25年8月3日に現地説明会を実施し、約120人の参加があった。

平成25年度調査のうち、今回報告するF地区は新名神高速道路本線から城陽IC(仮称)出入口や京奈和自動車道などに接続するための道路に伴う橋脚建設予定地にあたる。F地区では合計で12か所の調査区を設定したが、個々の調査区は付表3に示したように200㎡前後の小規模な調査区であった。F地区の調査の経過については以下の通りである。

F地区の調査は平成25年4月22日に開始した。なお、調査開始前に西日本高速道路株式会社の協力により、F4・F6・F7・F8・F10の各調査区において、表土を除去済みであり、調査を迅速に開始することができた。これらの調査区では重機による堆積層の除去を行い、順次、人力による精査、遺構検出作業を開始した。また、未着手であった調査区についても、順次、重機による表土掘削を開始した。重機掘削の終了した調査区から人力による精査、遺構検出作業を行った。また、F2・F3・F5の各調査区は現用の市道と重複することから、まず、市道部分を残して調査を行うこととなり、重機掘削を開始し、順次、人力による作業へ移行した。この間、各調査区では遺構検出後、その掘削と記録作業を行い、下層遺構面がある場合は、再度、重機による堆積層の除去を行い、下層遺構面の調査を実施した。この間、F7区で6月24日に井戸枠を伴う井戸を検出した。

各調査区において、遺構面の調査と全景写真撮影が終了すると、埋め戻しを行った。また、F2区・F3区・F5区については、市道の付け替えが終わると、順次、調査に着手した。

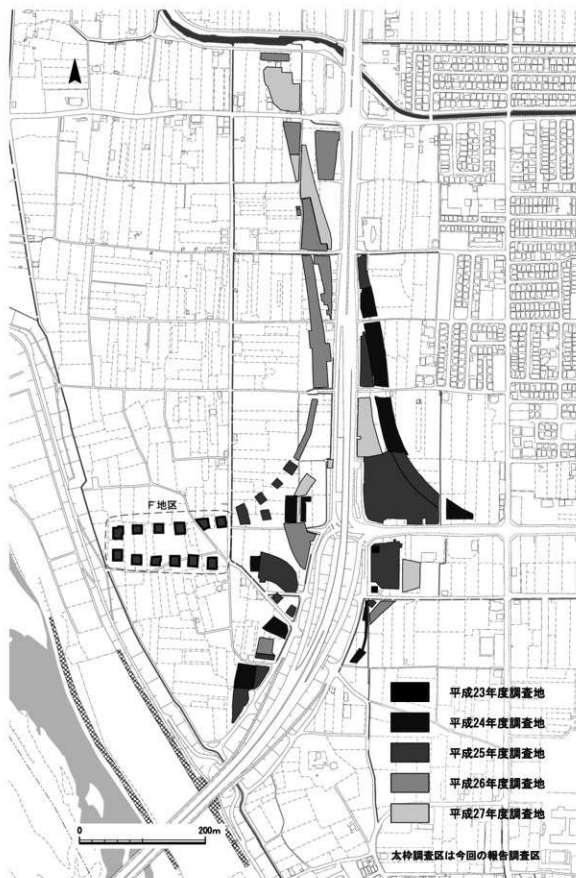
そして、先述のように調査期間中の8月3日に現地説明会を実施した。当日、F地区において現地を公開したのはおもにF7区の井戸とF12区の竪穴建物である。

現地説明会後も残りの調査区の調査を進め、8月30日にF12区の埋め戻しを完了して、調査を終了した。

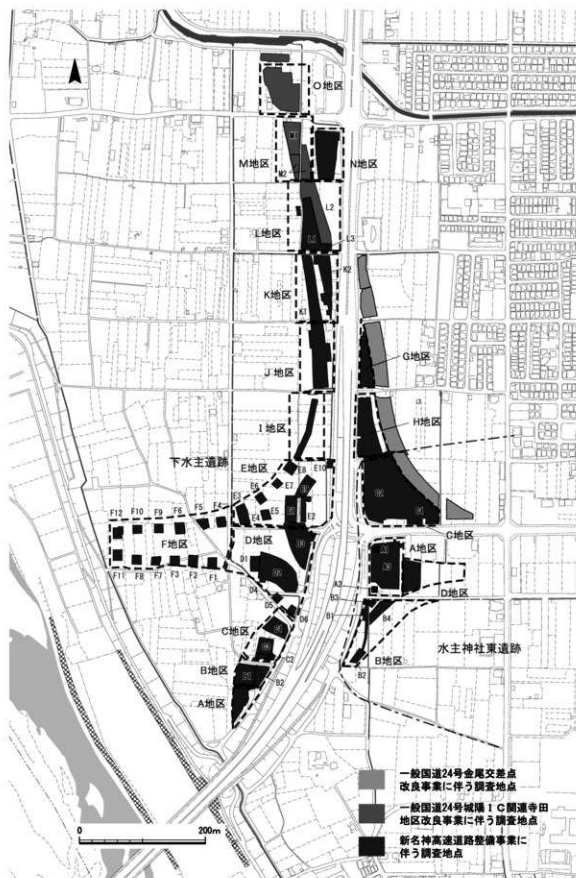
2) 報告書作成作業について

下水主遺跡・水主神社東遺跡の報告書の作成にあたっては、調査の終了した地点から順次、基礎的な整理作業に着手するとともに、報告書についても複数に分冊して刊行することとした。

整理作業は、まず、出土遺物の台帳登録と洗浄を行った。洗浄作業の終了した遺物は、注記作業や接合作業を行った。下水主遺跡F地区の調査では、小規模な調査区が多かったものの、整理箱



第2図 調査年度別調査区配置図(1/6,000)



第3図 調査地区配置図(1/6,000)

にして60箱の遺物が出土した。これらの遺物は、数点の縄文土器を除くと弥生時代後期から平安時代までの土器類と井戸から出土した木製品が大半を占め、少量の石製品・銭貨などがある。また、F7区で検出した井戸は井戸枠が残存していたため、その部材についても整理作業の対象となった。注記等が終了すると、報告書に掲載すべき遺物の選別を行い、実測や拓本を行った。

また、遺構図は、原則、調査区の遺構配置図は縮尺1/200、土層断面図は縮尺1/100でそれぞれ

付表1 下水主遺跡調査次数一覧表

調査年度	次数	調査地区	調査期間	調査面積	調査機関	報告書
平成24年度	第1次	B地区(B1区)・C地区(C1区)・D地区(D1区)・E地区(E1・E2区)	2012.5.21～2013.3.8	3,360㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)一部今後報告予定
	第2次	24号A・B・C地区	2012.9.24～2013.3.8	5,570㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
平成25年度	第3次	24号A北地区	2013.4.26～2013.9.3	500㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
	第4次	A地区・B地区(B1・B2区)・C地区(C3区)・D地区(D2・D4～D6区)・E地区(E3～E8区)・F地区(F1～F12区)・G地区	2013.4.22～2014.2.27	10,393㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016) 『京都府遺跡調査報告集』第168冊(本書)一部今後報告予定
	第5次	-	2013.10.15～2013.10.22	530㎡	京都府教育委員会	『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成25年度(2014)
平成26年度	第6次	A地区・B地区(B1・B2区)・C地区(C2区)・D地区(D3区)・I地区・J地区・K地区・L地区・M地区・N地区	2014.4.9～2014.3.6	17,110㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今後報告予定
	第7次	-	2014.9.19, 10.8, 12.8～12.10, 12.12	636㎡	京都府教育委員会	『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成26年度(2015)
平成27年度	第8次	L地区(L2区)・M地区(M2区)・O地区	2015.4.24～2015.10.9	6,000㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第170冊(2017)
	第9次	L地区(L3区)・E地区(E9・E10区)・H地区	2015.5.18～2016.2.3	3,260㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今後報告予定

付表2 水主神社東遺跡調査次数一覧表

調査年度	次数	調査地区	調査期間	調査面積	調査機関	報告書
平成23年度	第1次	A地区(A1・A2区)	2012.2.15～2012.3.14	300㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
平成24年度	第2次	B地区(B1・B2区)	2012.5.23～2012.9.27	630㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
	第3次	24号E地区	2012.9.24～2013.3.8	800㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
平成25年度	第4次	24号D地区	2013.4.26～2013.9.3	2,800㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
	第5次	A地区(A3区)・B地区(B3区)・C地区	2013.5.14～2014.1.8	11,375㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
平成26年度	第6次	B地区(B4区)	2014.11.19～2015.2.27	590㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今後報告予定
平成27年度	第7次	D地区	2015.11.24～2016.2.5	1,280㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今後報告予定

作成した。各遺構については、堅穴建物・掘立柱建物は縮尺1/80で、溝は縮尺1/100で、土坑は縮尺1/40・1/20で、また遺物出土状況図は縮尺1/20で、それぞれ作成した。

本報告書に関する基本的な整理作業等は、おおむね平成27年度に終え、平成28年度は、遺物の写真撮影、遺構図面の補足、遺物図面のトレース作業、遺構写真図版の作成等を行った。また、上記の作業に並行して報告書の本文執筆や遺物観察表の作成を行った。実測した遺物の一部については石膏による復元を実施した。復元した遺物や破片資料について、写真撮影を行い、遺物写真図版として掲載した。なお、最終的に本報告に掲載した遺物は499点である。また、F7区で出土した井戸枠の部材などについても平成27・28年度に保存処理を実施した。

本報告は、現地調査を担当した高野陽子・筒井崇史・岡田健吾(現神戸市教育委員会)が執筆し、全体の文章の調整等を筒井が行った。(筒井崇史)

付表3 下水主遺跡調査地区別一覧表(新名神高速道路整備事業分)

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成24年度	第1次	B地区	B1区	2012.5.23～2013.3.8	1,070㎡	今後報告予定
			C1区	2012.10.9～2013.1.30	700㎡	今後報告予定
		E地区	D1区	2012.11.28～2013.3.8	450㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			E1区	2012.12.10～2013.3.8	770㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			E2区	2012.12.18～2013.3.8	370㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
平成25年度	第4次	A地区		2013.10.4～2014.2.27	940㎡	今後報告予定
		B地区	B1区	2013.11.1～2014.2.27	330㎡	今後報告予定
			B2区	2013.11.25～2014.2.27	580㎡	今後報告予定
		C地区	C2区	2014.1.20～2014.2.27	200㎡	今後報告予定
		D地区	D2・D4区	2013.5.7～2013.9.20	2,617㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			D5区	2013.9.9～2013.12.6 (中断期間あり)	150㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			D6区	2013.9.9～2013.10.22	180㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
		E地区	E3・E4区	2013.7.17～2013.10.4	470㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			E5区	2013.8.6～2013.10.2	230㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			E6区	2013.8.6～2013.10.4	210㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			E7区	2013.8.23～2013.10.23	160㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
E8区	2013.8.23～2013.10.23		290㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)		

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成25年度	第4次	F地区	F1区	2013.5.21～2013.7.5	260㎡	本書
			F2区	2013.6.13～2013.8.23	255㎡	本書
			F3区	2013.6.11～2013.8.29	230㎡	本書
			F4区	2013.4.22～2013.6.12	218㎡	本書
			F5区	2013.6.6～2013.7.22	220㎡	本書
			F6区	2013.4.22～2013.7.22	265㎡	本書
			F7区	2013.4.22～2013.8.27	190㎡	本書
			F8区	2013.4.22～2013.7.8	220㎡	本書
			F9区	2013.5.9～2013.7.18	198㎡	本書
			F10区	2013.4.22～2013.7.18	185㎡	本書
			F11区	2013.5.7～2013.7.8	240㎡	本書
			F12区	2013.5.1～2013.8.30	275㎡	本書
		G地区	2013.9.5～2013.11.14	1,290㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)	
平成26年度	第6次	A地区	2014.4.9～2014.6.13	600㎡	今後報告予定	
		B地区	B1・B2区	2014.4.9～2014.6.13	400㎡	今後報告予定
		C地区	C3区	2014.4.22～2014.5.30	600㎡	今後報告予定
		D地区	D3区	2014.11.5～2015.2.27	2,050㎡	今後報告予定
		I地区		2014.4.21～2014.7.15	900㎡	今後報告予定
		J地区		2014.6.18～2014.12.5	2,590㎡	今後報告予定
		K地区	K1区	2014.4.23～2014.8.5	1,660㎡	今後報告予定
			K2区	2014.8.6～2014.10.30	1,460㎡	今後報告予定
		L地区	L1区	2014.4.25～2014.10.30	2,620㎡	今後報告予定
		N地区		2014.4.25～2014.12.5	2,420㎡	今後報告予定
平成27年度	第7次	E地区	E9区	2015.11.5～2016.2.3	365㎡	今後報告予定
			E10区	2015.12.8～2016.2.3	115㎡	今後報告予定
		L地区	L3区	2015.5.18～2015.6.29	110㎡	今後報告予定
		H地区	H1区	2015.5.18～2015.10.19	1,500㎡	今後報告予定
			H2区	2015.8.24～2015.11.19	1,170㎡	今後報告予定

付表4 水主神社東遺跡調査地区別一覧表(新名神高速道路整備事業分)

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成23年度	第1次	A地区	A1区	2012.2.15～2012.3.15	100㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			A2区	2012.2.15～2012.3.15	100㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
平成24年度	第2次	B地区	B1区	2012.5.23～2012.8.7	200㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
			B2区	2012.6.4～2012.9.27	430㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
平成25年度	第5次	A地区	A3区	2013.10.1～2014.1.8	3,100㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
		B地区	B3区	2013.11.19～2013.12.17	100㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
		C地区	C1・C2区	2013.5.14～2013.12.12	8,175㎡	「京都府遺跡調査報告集」第167冊(2016)
平成26年度	第6次	B地区	B4区	2014.11.19～2015.2.27	590㎡	今後報告予定
平成27年度	第7次	D地区		2015.11.24～2016.2.5	1,280㎡	今後報告予定

4. 調査の方法

1) 調査の方法

調査にあたっては、A地区、B地区などの調査地区を設定し、その地区内に実際の調査を行った調査区を設定した(2項参照)。また、調査の対象となる範囲には、国土座標にもとづいて、地区割を設定した(3項参照)。

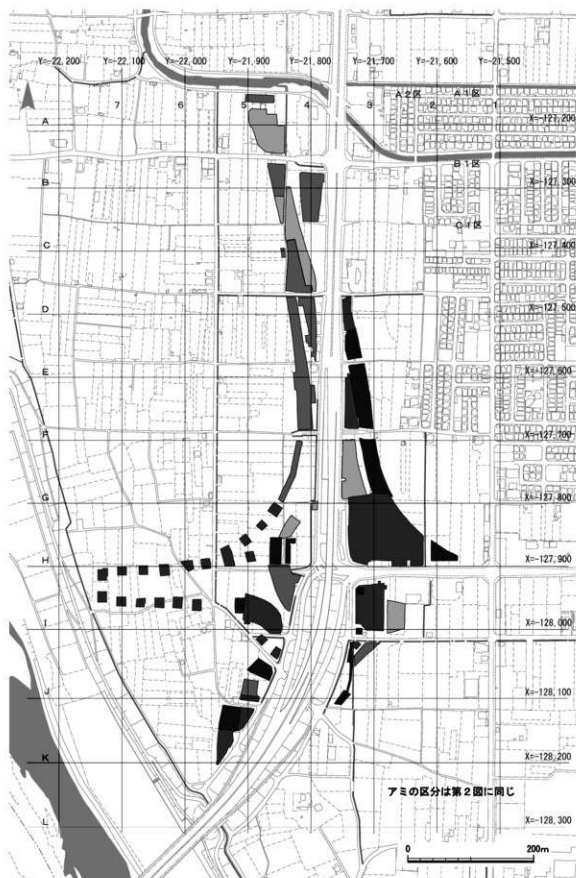
調査の開始にあたっては各調査区の設定および基準点の設置作業を行った。その後、遺構面直上まで重機で表土を除去し、さらに人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査作業を行って遺構の検出に努めた。検出した遺構は、その位置を縮尺1/100ないし1/50の平面図に記録しながら、順次、掘削作業を行った。遺構の掘削を終えると、必要に応じて縮尺1/10ないし1/20の平面図や断面図、あるいは縮尺1/10ないし1/5の遺物出土状況図などの記録図面の作成を行った。並行して、遺構や土層断面などの記録写真の撮影を行った。遺構面全体の調査を終えると、調査区ごとに全景写真を撮影した。また、下層遺構を確認した場合、上層遺構面から下層遺構面まで人力もしくは重機によって除去し、上記の作業を繰り返した。

検出した遺構には原則として各調査区ごとに1番から通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付与した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、堅穴建物：SH、掘立柱建物：SB、井戸：SE、土坑：SK、溝：SD、柱穴・ピット：SP、不明遺構：SXである。本報告で使用した遺構番号は原則として調査時のものであるが、調査時に番号のなかった遺構については、本報告作成時に新たに付与した。ただし、鳥畑の遺構番号については、調査時の遺構番号とは別に一般国道24号金尾交差点改良事業の調査報告に始まる鳥畑の通し番号を付与した。なお、鳥畑番号の初出時に調査時の遺構番号も合わせて示すようにした。

2) 調査地区の設定

調査対象地が広大であることから、調査対象地をいくつかの調査地区に分割して調査を進めることにした。この調査地区名は、平成24年度調査で一部使用をはじめたが、平成25年度の調査に際して、本格的に設定した。この「調査地区」は現行の市道等で区分したもので、面的な空間をさし、A地区、B地区、……、L地区、……というように、アルファベットで呼ぶこととした。この中に実際に調査を実施した「調査区」を設定し、複数の調査区がある場合はD1区、D2区、……D6区と、アルファベットと数字の組み合わせで表すこととした。したがって、「○地区」と「○○区」は、異なるものをさす区分名称である。ただし、調査区が1つしかない場合は、「○地区」という名称を使用した(第3図)。

調査区の設定は、西日本高速道路株式会社の工事計画にしたがい、橋脚部分については、橋脚本体と施工に伴い掘削される部分を、また、盛り土部分については、造成範囲のすべてを対象とすることとした。ただし、平成26年度以降は盛り土造成部分のうち、道路幅部分の造成範囲に限り発掘調査を行い、下層遺構等が検出された場合に必要に応じて盛り土造成範囲まで調査区を拡張することとした。



第4図 下水主通跡・水主神社東通跡全体地区割図(1/6,000)

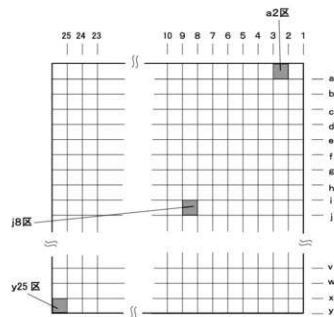
なお、平成26年度以降は、平成25・26年度の京都府教育委員会の試掘調査等の結果、下水主遺跡の範囲が北に広がったことから、新たな調査地区を追加した。調査区ごとの調査期間や調査面積については、付表3・4にまとめた。

3) 地区割の設定

城陽JCT・IC(仮称)の建設に伴う発掘調査では、上記の調査地区の設定とは別に、検出遺構や出土遺物の位置を記録する目的で、対象地全体を覆う地区割を国土座標(世界測地系)にもとづいて設定した。

まず、対象地全体に100m四方の大区画を設定した(第4図)。大区画は、X=-127,200、Y=-21,500を起点とする、100m四方の方眼である。大区画の基準線は南北・東西とも国土座標系に一致させ、東西方向は東から1、2、3、……とし、南北方向は北からA、B、Cとし、両者の交点をA1、B2、……、H4、などとした。大区画の地区名は100m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとした。この大区画の一辺を25等分して4m四方の方眼を設定し、小区画とした(第5図)。小区画の基準線も国土座標系と一致させ、東西方向は東から1、2、3、……、25とし、南北方向は北からa、b、c、……、yとし、両者の交点をa1、b1、c3、y25などとした。小区画の地区名も4m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとした。Y軸座標の下2桁で表すと、1ラインは00m、25ラインは96mに当たる。また、X軸座標の下2桁で表すと、aラインは04m、yラインは00mに当たる。国土座標系にもとづく地区名は「H3-r12区」のように表記する。

なお、城陽JCT・IC(仮称)の建設に伴う発掘調査では、多数の調査区を設けているが、100mを越える調査区はほとんどないため、大区画の地区割を調査時に表記していないことが多い。また、小地区割は、遺物包含層や規模の大きな遺構内で出土した遺物の取上げに使用したが、多くの調査区で多くの遺物を含む遺物包含層がほとんど見られなかったため、調査の進捗に合わ



第5図 小地区割概念図

せて小地区割を設定、使用した。特にF地区の調査では、調査区が小規模であったため、遺物の出土位置等については、小地区割を使用せず、調査区内での相対的な位置で示すことが多かった。報告にあたっては、島畑をはじめ各遺構が検出された地区名を明記したが、遺構の規模が大きいものについては、一部の地区名に代表させて表記した。また、遺構配置図には小地区割の基準となるライン名を表記した。

(筒井崇史)

5. F地区の調査

1)はじめに

(1)調査の概要

F地区は、新名神高速道路整備事業等に伴う下水主遺跡の調査では最も西に位置する調査地区である。橋脚建設予定地12か所を対象として調査を実施した(第6・7図)。調査の結果、上層遺構として鳥畑7基、溝状遺構8条などを検出した。また、下層遺構として、古墳時代後期～古代(一部中世を含む)の掘立柱建物3棟、柱穴70基以上、井戸9基、土坑12基、溝17条、弥生時代の竪穴建物2棟、土坑3基、溝1条などを検出した。さらにF5区では縄文時代晩期の土器1点が出土したが、遺構は確認できなかった。調査面積の合計は2,756㎡である。出土した遺物は整理箱にして60箱である。なお、F7区で検出した井戸SE0704の井戸枠材はこの数量とは別である。

調査地のすぐ西側には木津川の堤防があり、調査前には水田として利用されていた。次項で述べるように、F地区は、木津川によって形成された微高地上に立地していると考えられる。

(2)基本的な層序

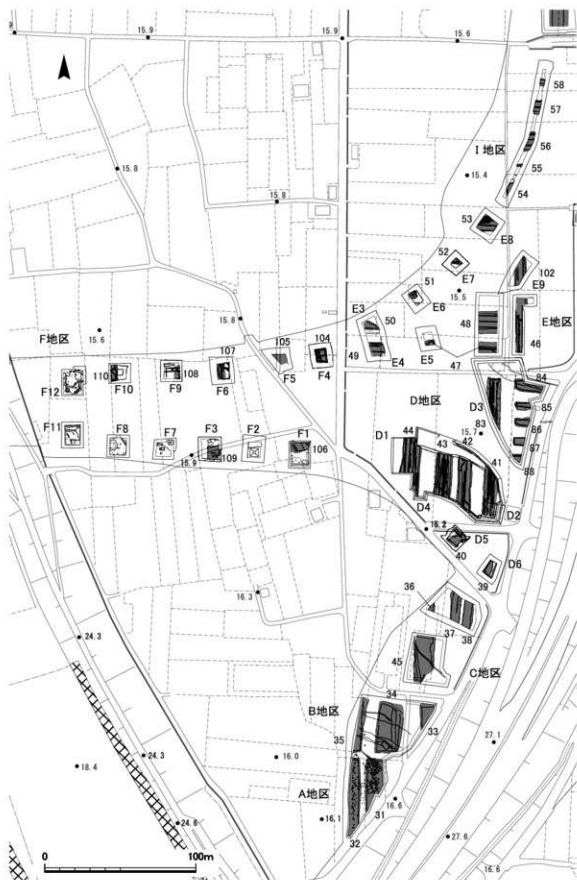
ここでは、F地区の調査に伴う全体的な層序について述べる。個々の調査区の具体的な層序については、各調査区の項で記述する。

今回報告する下水主遺跡F地区は、一般国道24号や京奈和自動車道城陽インターチェンジなどの西側に位置し、調査地のすぐ西側には木津川の堤防が設けられている。

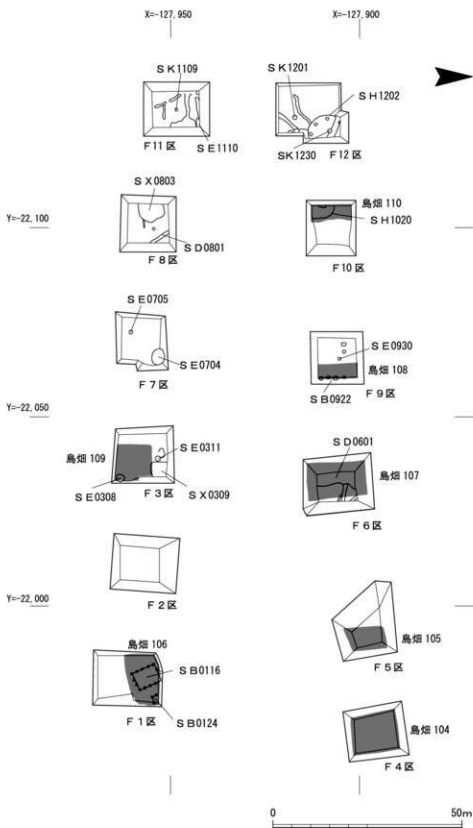
F地区の調査前の土地利用は原則、水田であった。現水田面の標高は、F12地区付近で15.5m、F6区付近で15.6m、F4・F1区付近で15.8mで、わずかであるが、東ほど高く、西に向かって徐々に低くなっていく。なお、下水主遺跡・水主神社東遺跡全体でみると、すでに報告した通り、L地区付近が最も低くなり、この付近から北と南に向かって徐々に高くなる。そして、木津川に最も近い下水主遺跡B地区付近が最も高くなる。また、今回報告するF地区も木津川に近い位置にあるが、調査前の水田面が標高15.5～15.8mであり、周辺に比べてやや高い場所である。

第8図に示した柱状図をもとにF地区の堆積状況を概観すると、おおむね現水田に伴う厚さ20cm前後の耕作土や床土が認められる。この下に灰色粗砂混じり細砂や灰色細砂などの砂層が多く、調査区で認められた。これらの多くは洪水によって堆積した砂層と考えられる。これらの砂層から遺物はあまり出土していないが、鳥畑の時期等から近世に堆積したものと思われる。これらの砂層に覆われてF1・F3～F6・F9・F10区では鳥畑が分布する。鳥畑はおおむね標高14.5～15.4mで検出したが、F1・F2区で検出した鳥畑は、北側のF4～F6・F9・F10区で検出した鳥畑よりやや高い位置で検出した。

鳥畑、あるいは洪水による砂層の堆積層の下層では、標高13.8～14.2m付近で弥生時代から古代にかけての遺構面を確認した。これらは東部では黄褐色粘質土の上面、中央部ではオリブ灰色粘土ないしシルトの上面、西部では暗青灰色シルトの上面で検出した。この時期の遺構を確認したのはF1・F3・F6～F12区である。遺構は調査対象地の西に集中する傾向がある。なお、F地区の東側に位置するD地区やE地区では竪穴建物や掘立柱建物等の遺構、あるいは遺物がほ



第6図 下水主遺跡第1～6次調査遺構配置図(1/2500)

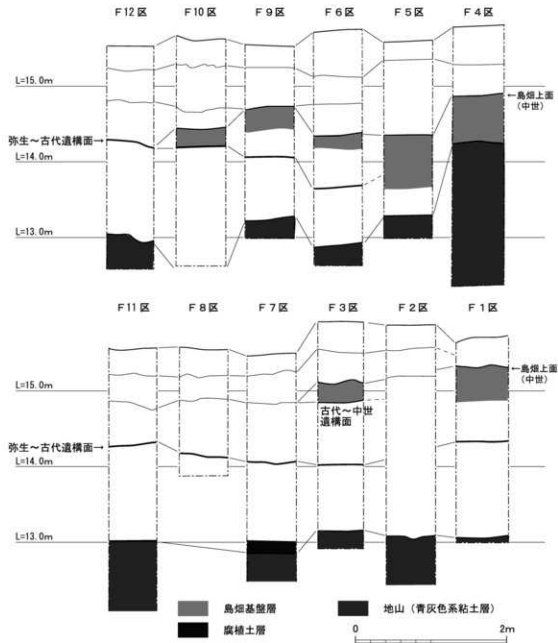


第7図 下水主道跡F地区調査区配置図(1/1,000)

とんどみられないのに比べ、F地区では、建物のほか、井戸や土坑などの遺構とともに大量の遺物が出土していることから、木津川に沿った対象地を含む広い範囲が、弥生時代から古代、さらに中世まで、集落を形成しやすい地形であったと推定される。

これらの遺構面の下層では、標高13.0m付近で地山と判断される緑灰色ないし暗緑灰色、もしくは灰色を呈するシルトないし粘土の層位を確認している。また、F7区では標高12.7~13.0mで腐植土層を確認しており、平面的な検出には至っていないものの、地山上には腐植土層の堆積した谷状地形や自然流路の存在が予想される。ただし、腐植土層の詳細な時期は不明である。

(筒井崇史)



第8図 下水主遺跡F地区調査区土層断面柱状図(1/50)

2) F1区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

F地区の南東に設定した南北18m、東西14.5mの矩形的調査区である(第9図)。現地表面の標高はおよそ15.8mである。調査面積は260㎡である。出土した遺物は整理箱2箱である。

基本的な層序は、表土・耕作土である黒色砂質土(1層)や暗褐色砂質土(2層)を除去すると、調査区の北側で鳥畑(8層)を、南側で溝状遺構を検出した(標高15.4m付近)。前者の上面には耕作に伴うと思われる素掘り溝が認められた(4・5層)。後者の上層は洪水に伴う砂層(3層)、中層はオリブ黒色粘質シルト(6層)が堆積し、下層には黄灰色粘質土(7層)が厚く堆積する。6・7層は鳥畑よりも新しく、近世以降の堆積と推定される。これらを除去すると、鳥畑106(上層遺構)の基盤層である赤褐色粘質土(8層)となる。この上面では鳥畑106に伴う素掘り溝を多数検出した。8層は土層の状況から盛り土の可能性もあるが、断定することはできなかった。この8層を除去すると、下層遺構の基盤層である黄灰色粘質土(10層)となる(標高14.4m付近)。下層遺構の時期の詳細は不明であるが、わずかに出土した土器片から古代と考えられる。一方、7層の下層を断ち割ったところ、赤褐色シルト(11層)や黄灰色シルト(12層)を確認し、その下層で地山と思われる灰オリブ色粘質土層(13層)を確認した(第10図)。11～13層では遺物は出土しなかった。

(2) 検出遺構

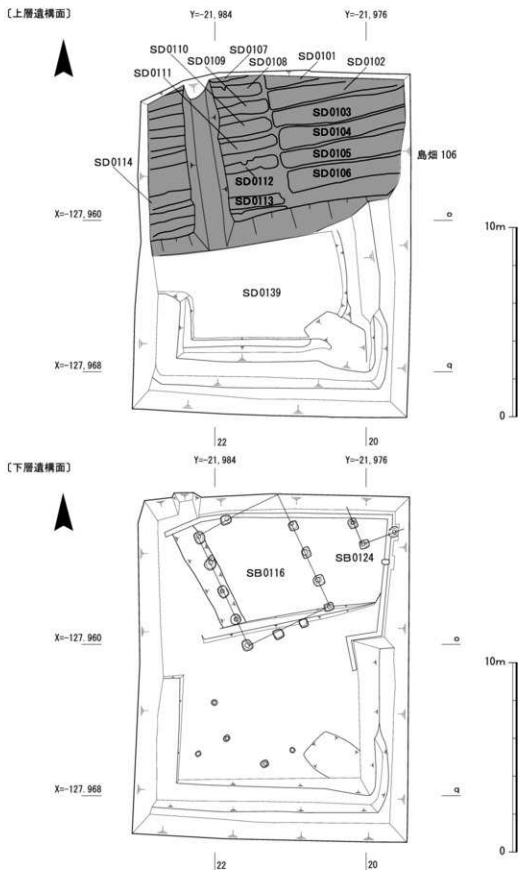
① 上層遺構

鳥畑106(第9図上段) 調査区の北半部で検出した(I5-n19区ほか)。東西方向の鳥畑と推定される。南北の検出長9.0m、東西の検出長13.7m、高さ1.3mを測る。鳥畑上面の標高はおよそ15.4mである。鳥畑の上面には耕作に伴うと考えられる素掘り溝14条を検出した(S D0101～0114)。素掘り溝から天目椀・瓦器椀・土師器皿などが出土した。出土した土器から中世後半から近世にかけてのものと判断される。

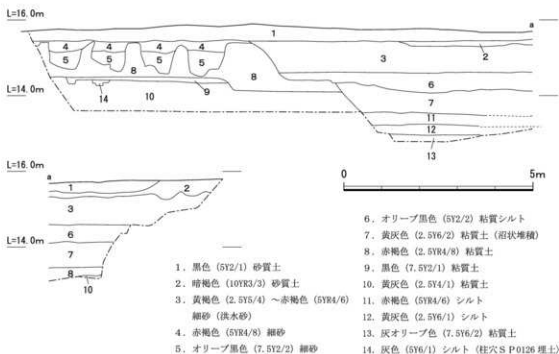
溝状遺構 S D0139(第9図上段) 調査区の南半部で検出した(I5-p19区ほか)。東西方向の溝状遺構と推定される。南北の検出長7.4m、東西の検出長10.0m、深さ1.3mを測る。溝の埋土は、洪水に伴うと推定される砂層が約0.8mの厚さで堆積している(第10図3層)。この洪水砂は木津川の氾濫に伴うもので、西南西の方向から流入したものと考えられる^(注3)。

② 下層遺構

掘立柱建物 S B0116(第11図上段) 調査区北半部で検出した(I5-n20区ほか)。規模は、桁行4間(6.4m)、梁行3間(4.8m)である。柱間寸法は1.6mである。主軸は北に対して24.5°西に振る。建物の北東部分は調査区外となるため、北東角とその両隣の柱穴は未確認である。桁行の柱穴に比べ、梁行の柱穴は建物復原線の外側に少し張り出す。柱穴の平面形は、大半が隅丸方形を呈するが、柱穴 S P0119は円形に近い。掘形は一辺約0.5m、深さは0.2～0.5mである。柱当たりの直径は約25cmである。南辺の柱穴は、上部を鳥畑に伴う溝状遺構 S D0139によって削平されており、掘形の底のみを検出した。また、西辺の柱穴は溝状の攪乱と重複しており、上部を10cm程度削平されている。遺物はほとんど出土していないが、柱穴 S P0122から土師器甕の体部が出



第9図 F1区遺構配置図(1/200)



第10図 F1区東壁土層断面図(1/100)

土した(図版第5-6)。詳細な時期は不明であるが、古代の建物である可能性が高い。

掘立柱建物S B0124(第11図下段) 調査区の北東隅で検出した(15-n19区ほか)。東西1間(1.8m)分、南北1間(1.35m)分を確認した。建物の南西隅と考えられる。主軸は北に対して23°西に振り、S B0116とはほぼ同じ方位である。柱穴の平面形は、隅丸方形で、掘形は一辺約0.5m、深さ0.2~0.4mである。柱当たりの直径は約25cmである。遺物はほとんど出土していないので時期は不明であるが、建物の主軸などからS B0116と近い時期の建物と考えられる。

(3) 出土遺物

鳥畑106(第13図1~9) 1は土師器の皿で、口縁端部に煤が付着する。2は天目碗である。3はやや小型の瓦器碗である。口縁端部内面に沈線を1条施す。4は瓦質土器の壺である。肩部に沈線が1条めぐる。5は須恵器鉢の口縁部の破片である。いわゆる東播系の須恵器であろう。6は須恵器甕の頸部から肩部にかけての破片である。7は白磁碗の口縁の破片である。細片のため法量の復元は困難である。8は土師器皿である。時期は中世後半と推定される。9は須恵器杯B蓋の破片である。奈良時代後半のものとして推定される。

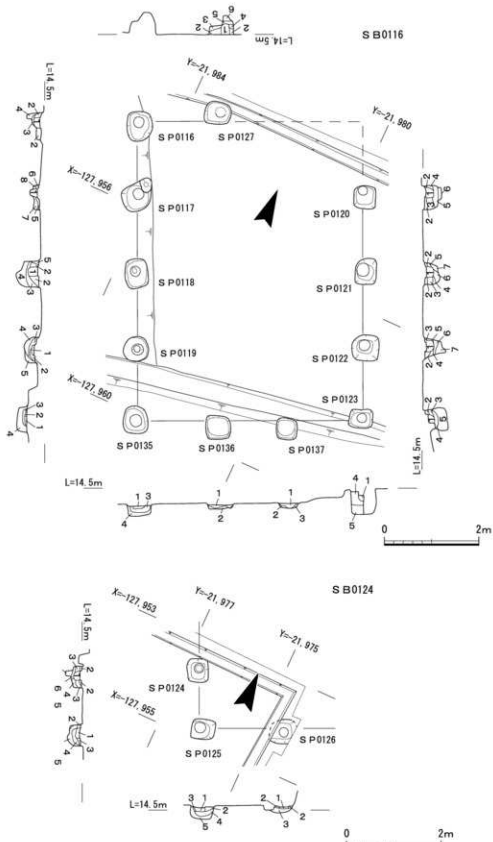
遺物包含層(第13図10~12) 10・11は須恵器杯身である。短く立ち上がる口縁部と小さな受け部をもつ。11は底部外面に回転ヘラケズリを施す。古墳時代後期末(陶邑編年T K209型式段階並行)のものである。12は弥生土器の壺か甕の底部の破片である。

(岡田健吾・筒井崇史)

3) F2区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

F1区の西側に設定した南北17.3m、東西14.8mの矩形の調査区である(第12図上段)。現地表



第11図 F1区掘立柱建物SB0116・0124実測図(L/80)

SB0116 柱穴土層名

SP0116

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰色 (5Y6/1) シルト
3. 灰色 (10Y4/1) 粘質土
4. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粘質土

SP0117

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰色 (7.5Y4/1) シルト
3. 灰色 (10Y6/1) シルト
4. 黄褐色 (2.5Y5/1) シルト
5. 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト

SP0118

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰色 (5Y5/1) シルト
3. 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土
4. 黒色 (2.5Y2/1) 粘質土

SP0119

1. 灰色 (7.5Y4/1) シルト
2. オリーブ灰色 (10Y5/2) シルト
3. 黒色 (5Y2/1) シルト
4. オリーブ灰色 (10Y5/2) 粘質土
5. オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘質土

SB0124 柱穴土層名

SP0124

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰色 (7.5Y5/1) シルト
3. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト
4. 黒色 (7.5Y2/1) 粘質土
5. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土
6. 黒色 (2.5Y2/1) 粘質土

SP0120

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰色シルト (7.5Y5/1) シルト
3. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) シルト
4. 灰色 (10Y5/1) シルト
5. オリーブ黄色 (7.5Y6/3) シルト
6. 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土

SP0121

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) シルト
3. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
4. オリーブ黄色 (5Y6/3) シルト
5. 灰色 (5Y5/1) シルト
6. 灰色 (10Y5/1) 粘質土
7. 灰色 (10Y4/1) 粘質土

SP0122

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰色 (7.5Y6/1) シルト
3. 灰色 (10Y6/1) シルト
4. 灰色 (10Y4/1) 粘質シルト
5. オリーブ灰色 (10Y3/2) シルト
6. オリーブ黒色 (10Y3/2) 粘質土

SP0125

1. 灰色 (5Y5/1) シルト
2. 灰色 (5Y4/1) シルト
3. 灰色 (10Y5/1) シルト
4. 黒色 (7.5Y2/1) 粘質土
5. オリーブ灰色 (10Y5/2) 粘質土

SP0123

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. オリーブ灰色 (10Y5/2) シルト
3. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
4. 灰色 (10Y4/1) 粘質土
5. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘質土

SP0127

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰オリーブ (5Y6/2) シルト
3. 灰色 (10Y5/1) シルト
4. オリーブ黄色 (5Y6/3) シルト
5. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土
6. オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘質土

SP0135・0136・0137

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. 灰色 (5Y6/2) シルト
3. 灰色 (5Y4/1) シルト
4. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト

SP0126

1. 灰色 (5Y6/1) シルト
2. オリーブ灰色 (10Y5/2) シルト
3. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
4. 灰色 (10Y4/1) 粘質土
5. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘質土

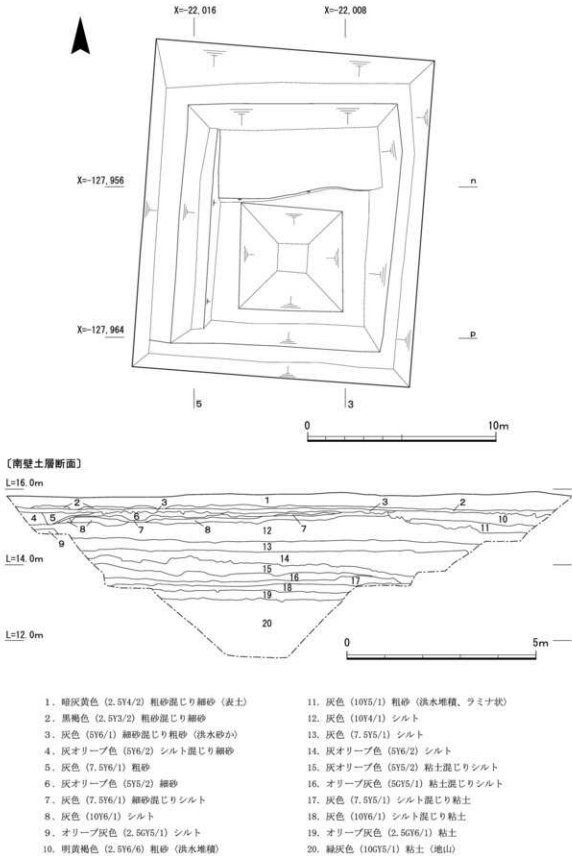
面の標高はおよそ15.8mである。調査面積は255m²である。出土遺物はごく少量で、整理箱1箱に満たない。

F2区における基本的な層序は、耕作土である暗灰黄色粗砂混じり細砂(1層)や黒褐色粗砂混じり細砂(2層)を除去すると、調査区の西側では洪水堆積と考えられる明黄褐色粗砂(10層)や灰色粗砂(11層)が堆積している。この堆積は、F1区で確認した洪水砂と推定される砂層(第10図3層)と同一の層と考えられる。その東側では粗砂や細砂、シルトの薄い堆積(3・6～8層)が認められる。その下層には灰色ないし灰オリーブ色のシルトや粘土(12～19層)などがほぼ水平に、合わせて2mほど堆積している。いずれの層からも時期を判断しうるほどの遺物がなく、各層の詳細な時期は不明である。調査した範囲の最下層には緑灰色粘土(20層)を確認し、これが地山と判断した(第12図下段)。

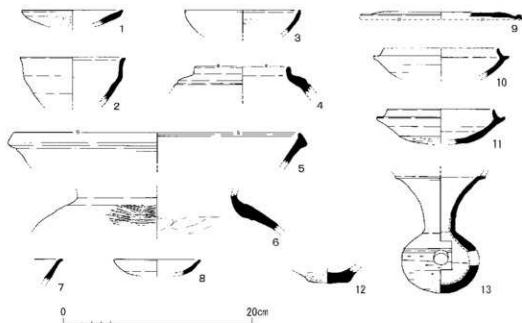
調査の結果、標高15.4m付近で近世以降の耕作に伴うと考えられる土層を確認した。しかし、それよりも下層では安定した遺構面が形成されることなく、湿地状の堆積が繰り返されたと考えられる。遺物はほとんど出土しなかったが、調査区西壁の精査中に15・16層付近で須恵器甕1点(第13図13)が残りの良い状態で出土した。(岡田健吾・筒井崇史)

(2) 出土遺物

遺物包含層(第13図13) 13は須恵器甕である。口縁端部は遺存しないものの、ほぼ完形である。



第12図 F2区遺構配置図(1/200)・南壁土層断面図(1/100)



第13図 F1・F2区出土遺物実測図(1/4)

体部最大径8.2cmのやや扁球形の体部に、すぼまった頸部から大きくラッパ状に開く口縁部をもつ。体部中位には直径1.5cm程度の円孔を穿つ。肩部には沈線が1条めぐり、それ以下には回転ヘラケズリを施す。古墳時代後期のものである。(筒井崇史)

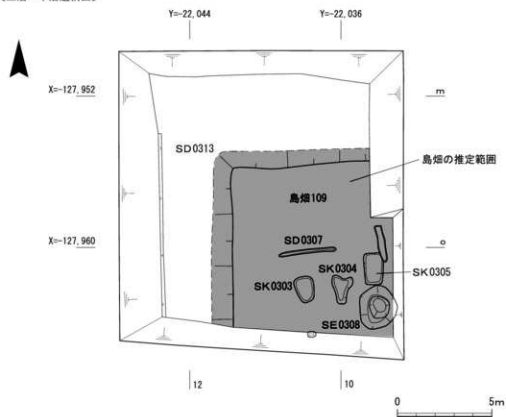
4) F3区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

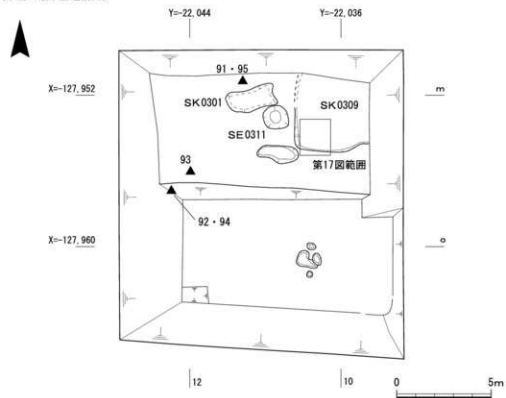
F2区の西側に設定した南北16m、東西15mの矩形の調査区である(第14図)。現地表面の標高はおよそ15.9mである。調査面積は230㎡である。出土した遺物は木製品も含めて整理箱11箱である。

基本的な層序は、表土である黄灰色粗砂混じり細砂(1層)の下層には灰色粗砂混じり細砂～灰色細砂(2～4層)が堆積しており、その下層に鳥畑109の基盤層である灰色細砂混じりシルト(5層)を確認した(標高15.2m付近)。2～4層は、鳥畑よりも新しいことから近世以降の堆積と考えられる。5層上面(鳥畑上面)では素掘り溝等を確認することはできなかった。鳥畑109の基盤層である5層や灰色粗砂混じり細砂(6層)は、堆積状況から自然堆積層と考えられる。これらを除去すると、中層遺構面である灰黄色粗砂混じりシルト(8層)を検出した(標高14.8m付近)。8層上面では灰オリーブ色粗砂(7層)を埋土とする溝をはじめ、土坑や井戸などを検出した。これらの遺構は、中世前半頃である。その下層の灰色シルト(9層)を除去すると、下層遺構面である灰色粘土(11層)を検出した(標高14.0m付近)。11層上面では、平安時代の井戸や弥生時代の土坑などのほか、調査区北西部の遺構面直上で遺存状態の良い弥生土器が出土した。さらに、調査区の南半部について、東西約12m、南北約7mの範囲を約0.8m掘り下げた結果、11層の下層には灰色シルト混じり粘土層(12層)をはさんで、地山と考えられるオリーブ灰色粘土(13層)を確認

〔上層・中層遺構面〕



〔下層・最下層遺構面〕



第14図 F3区遺構配置図(1/200)

した。13層の上面で精査を行った結果、時期不明の落ち込みを確認したにとどまり、遺物はほとんど出土しなかった(第15図)。

(2) 検出遺構

① 上層遺構

鳥畑109(第14図上段) 調査区の南東部で検出した(I6-o9区ほか)。検出状況や周辺の水田の地割を検討しても鳥畑の方向は断定できない。南北の検出長9m前後、東西の検出長7.5m前後、高さ約1.1mを測る。鳥畑の北側と西側には溝状遺構(S D0313)が認められた。鳥畑上面の標高はおよそ15.2mである。鳥畑の上面では素掘り溝等の遺構は確認できなかった。

溝状遺構 S D0313(第14図上段) 鳥畑109の北側ならびに西側で検出した(I6-n10区ほか)。南北の検出長約13m、東西の検出長約11.5m、深さ約1.1mを測る。

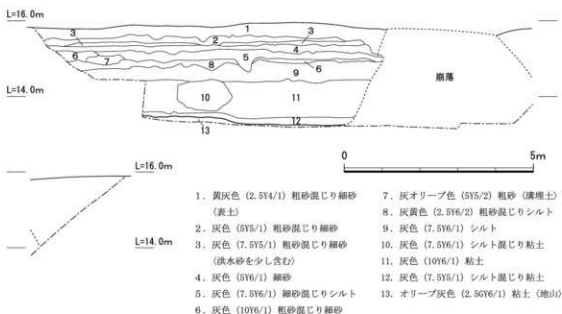
② 中層遺構

土坑 S K0303(第14図上段) 調査区の南東部で検出した(I6-p10区)。平面形は楕円形を呈する。規模は、南北1.4m、東西1.0m、深さ0.1mである。埋土から土師器皿や瓦器椀などが出土した(第18図17・18)。

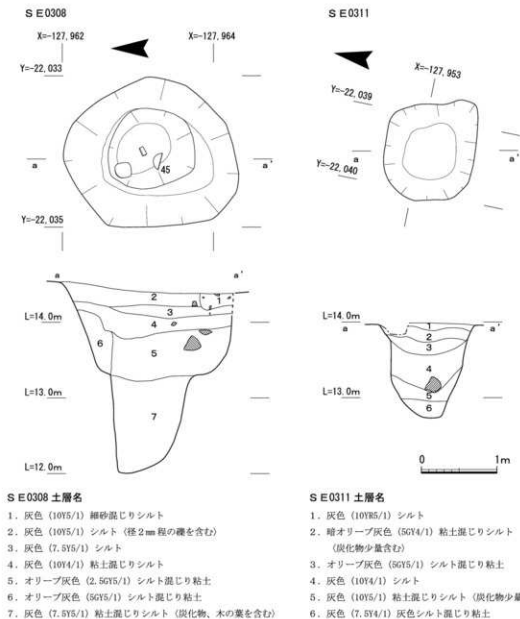
土坑 S K0304(第14図上段) 調査区の南東部、S K0303の東側で検出した(I6-p9・p10区)。平面形は不定形である。規模は、南北1.5m、東西1.0m、深さ0.05mで、非常に浅い。埋土から瓦器椀などが出土した(第18図19)。

土坑 S K0305(第14図上段) 調査区の南東端で検出した(I6-p9区)。平面形は方形で、南北1.0m、東西0.4m、深さ0.1mである。完形に近い土師器皿と瓦器椀が出土した(第18図20・21)。

溝 S D0307(第14図上段) 調査区の南東部で検出した(I6-p10区)。東西方向に延びる溝で、全長3.0m、幅0.2m、深さ0.1m前後である。土師器皿などが出土した(第18図22)。



第15図 F3区南壁土層断面図(1/100)



第16図 F3区井戸SE0308・0311実測図(1/50)

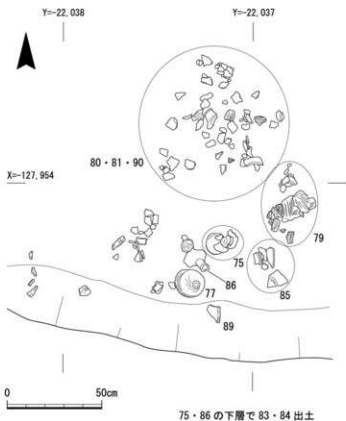
井戸SE0308(第16図左) 調査区の南東端で検出した(16-p9・q9区)。素掘りの井戸で、平面形は多角形を呈している。南北2.2m、東西2.0mの規模で、深さは約2.5mであった。検出面から1.2mほどで井戸の幅が狭くなり、ここで上層(1～6層)と下層(7層)に分かれる。

1～6層では、土器に混じて拳大の礫が井戸の南西側に大量に集中して出土したことから、井戸を廃棄する際に投げ込まれたと考えられる。礫の中には表面に焼けた痕跡を持つものが認められた。出土した土器には、瓦器碗、須恵器甕、瓦質土器羽釜、白磁碗などがあり、とくに瓦器碗が多く出土した(第18図22～43)。須恵器甕は、体部が数個体分出土しているが、口縁部や底部は全く出土していない。7層では、土器はそれほど多くないが、木製品や植物遺体が出土した。木製品は曲物の底板のほか、木材なども出土した(第19図44～50)。植物遺体ではどんぐりや木の葉が出土した。時期は出土した遺物から中世前半(12世紀後半頃)である。

③下層遺構

土坑 S K 0301 (第14図上段) 調査区の北辺中央で検出した (I6-m11区ほか)。検出位置は溝状遺構 S D 0313の底にあたる。平面形は不整形な長方形を呈する。規模は東西2.6m、南北1.1m、深さ0.1m程度である。埋土から緑釉陶器や須恵器の破片などが出土した (第18図14・15)。平安時代の遺構である。

井戸 S E 0311 (第16図右) 調査区の北半部、中央付近で検出した素掘りの井戸である (I6-n10区)。平面は楕円形で、直径は1.2mを測る。検出面からの深さは約1.3mである。出土遺物には、土師器皿、須恵器甕、黒色土器椀などがある (第21図51~59)。遺物の多くは1



第17図 F3区土坑 S K 0309遺物出土状況図(1/20)

~3層で出土しているが、51の黒色土器椀は4層から出土している。また、底に近い6層には、木の葉が多く堆積していた。時期は平安時代後期(11世紀前半頃)である。

土坑 S K 0309 (第17図) 調査区の北西部で検出した (I6-m9区ほか)。平面形は方形に近く、調査区内では1.6m四方にわたって検出した。深さは約0.2mである。埋土には炭や焼土が混じっており、部分的に集中している地点もみられた。検出当初は、堅穴建物の可能性も考えたが、主柱穴や周壁溝が確認できなかったため、最終的に土坑と判断した。

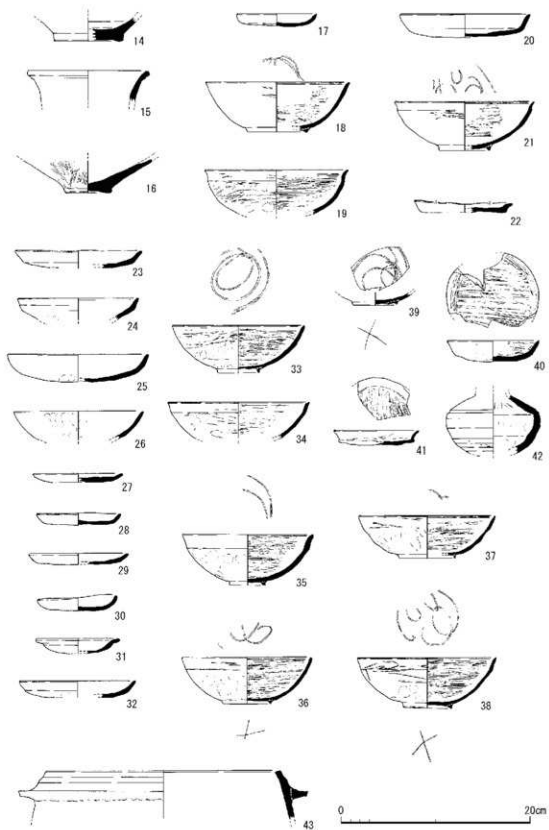
S K 0309からは弥生土器が多く出土し、完形に近いものも含まれていた。器種には、壺、甕、高杯、器台、鉢などがある (第22図75~90)。また、上層出土遺物として壺の底部がある (第18図16)。土器の出土状況から、これらの土器はまとめて S K 0309に遺棄された可能性が高い。遺構の時期は弥生時代後期前半から中葉である。

弥生土器出土地点 (第14図下段) 溝状遺構 S D 0313の底面(下層遺構面直上)で、大型の破片や遺存状態の良い弥生土器が出土する地点を5か所確認した (第14図中▲地点)。これらは遺構に伴わないもので、壺や甕、手焙形土器などがある (第23図91~94)。いずれも弥生時代後期の土器である。

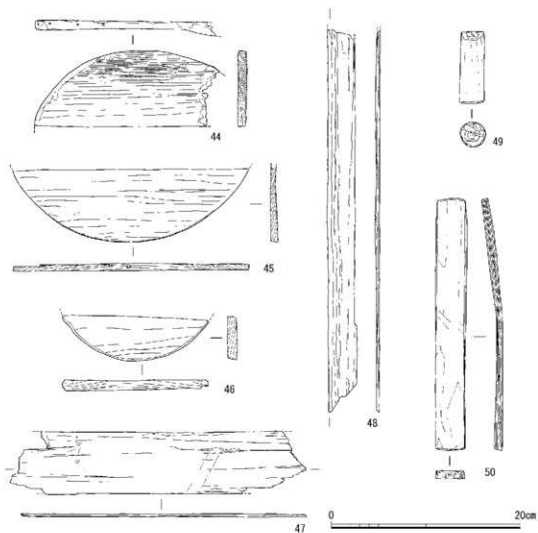
(岡田健吾・筒井崇史)

(3)出土遺物

土坑 S K 0301 (第18図14・15) 14は緑釉陶器椀の底部である。高台は削り出し高台で、内面に沈線が1条めぐる。15は須恵器壺の口縁部である。端部外面が回転ナデにより段状をなす。



第18回 F3区出土遺物実測図1(1/4)



第19図 F3区出土遺物実測図2(1/4)

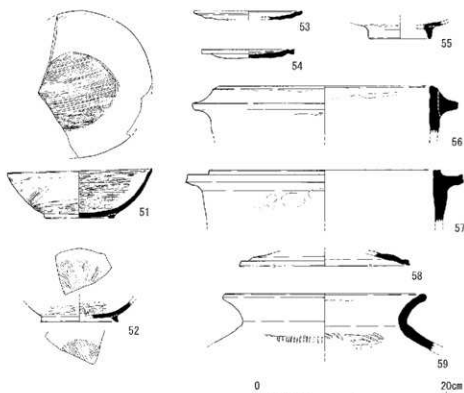
土坑 S K 0303 (第18図17・18) 17は小型の土師器皿である。中世以降のものであろう。18は楠葉型瓦器碗である。口縁端部内面に沈線を施す。内面には密にミガキを施す。

土坑 S K 0304 (第18図19) 19は楠葉型瓦器碗であらう。底部を欠損する。18に比べて体部がやや強く内湾する。

土坑 S K 0305 (第18図20・21) 20は土師器皿である。口径がやや大きく、平底気味の底部から口縁部が斜め上方に立ち上がる。21は楠葉型瓦器碗である。口縁端部内面に沈線を施す。内面には密にミガキを施す。

溝 S D 0307 (第18図22) 22は土師器皿である。平底に短く立ち上がる口縁部を有する。

井戸 S E 0308 (第18図23～第19図50) 遺物は各層から出土している。報告遺物の出土層位については観察表を参照されたい。23～25・32は中型の土師器皿、27～31は小型の土師器皿である。いずれも口縁部にヨコナデを施す。31は口縁部が屈曲する「て」字状口縁を呈する。33～39は瓦器碗である。35は和泉型、他のものは楠葉型であらう。口径13.7～15.0cm、器高4.5～5.5cmである。35を除き口縁端部に沈線を1条施し、内面のミガキは緻密に施されている。35は口縁部が若干外



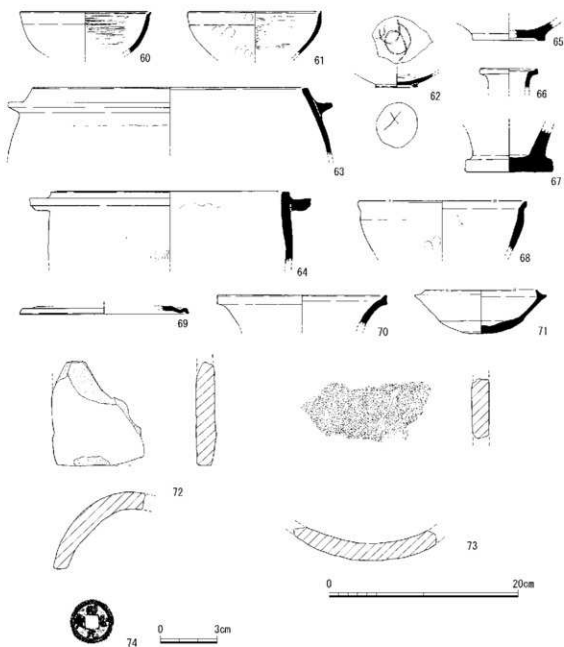
第20図 F3区出土遺物実測図3(1/4)

反し、器壁もやや厚く高台の断面形が台形状を呈する。高台が確認できる他の瓦器碗は断面三角形である。40・41は瓦器皿である。40は口縁部がほぼ直線的に延びるが、41は口縁部がやや大きく外反する。42は古墳時代後期の須恵器甕の体部の破片であろう。肩部内面に口頸部成形時の粘土のシボリ痕跡が認められる。43は土師器羽釜の口縁部の破片である。出土した遺物には古墳時代のものも認められるが、おおむね中世前半のものと考えられる。

44～50は木製品である。44～46は曲物の底板である。47は曲物の側板の破片である。48・50は用途不明の板材である。50は厚さが0.6～0.8cmとやや厚いが、土圧等によりやや屈折している。49は工具の柄の破片である。

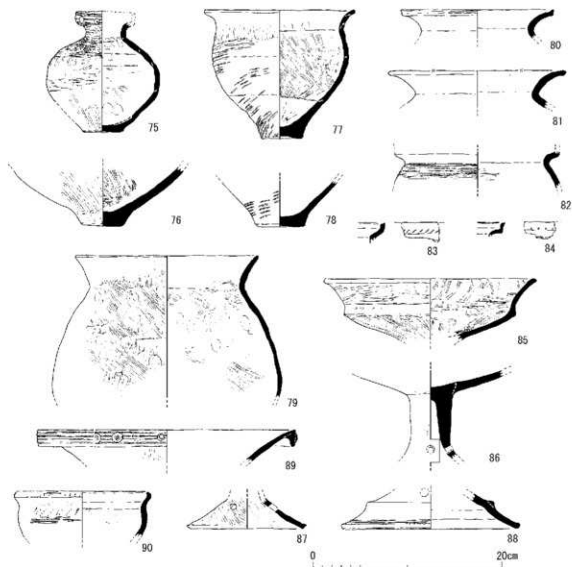
井戸SE0311(第20図51～59) 51・52は黒色土器碗である。51は内外面とも黒色を呈する。口縁端部に沈線を1条施し、内面には密にミガキを施す。高台の断面形は台形である。52は底部のみの破片であるが、底部内外面に密にミガキを施す。高台はやや外方に向かって「ハ」字のような形状となる。53・54はやや扁平な土師器皿である。どちらも口縁部が「て」字状を呈する。55はやや高めの高台を有する土師器碗の底部の破片と考えられる。56・57は土師器羽釜の口縁部の破片である。両者は形態が異なるものの、口縁端部のすぐ下に鈎を有する。58は奈良時代ないし平安時代前期の須恵器蓋の破片である。59は須恵器甕である。口縁端部は内面がわずかに肥厚し、全体に丸くおさめる。古代のものである。出土した遺物には奈良時代のものも認められるが、ほかは平安時代後期のものと考えられる。

上層・中層遺物包含層(第21図60～74) 鳥畑の掘削中や上層遺構・中層遺構の検出時に出土し



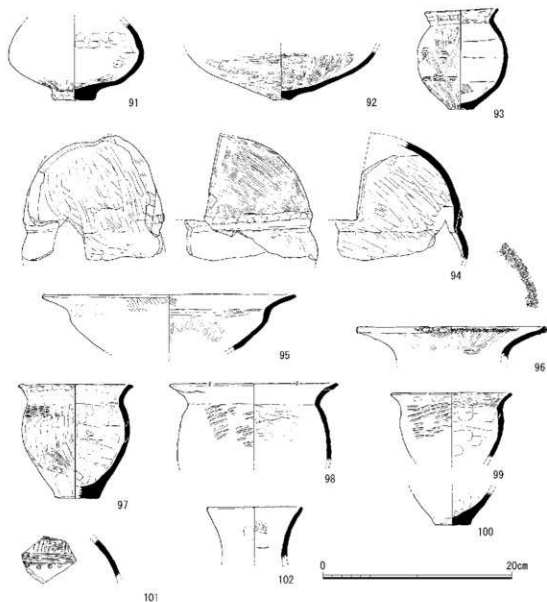
第21図 F3区出土遺物実測図4 (1/4・1/2)

たものである。60-62は瓦器碗である。60・61は桶葉型瓦器碗で、口縁端部に沈線を1条施し、内面に密にミガキを施す。62は瓦器碗の底部の破片で、断面台形状の高台を貼り付ける。63・64は土師器羽釜である。形態は63の体部が球形状を呈するのに対して、64は円筒状を呈する。65は緑釉陶器碗の底部である。66は須恵器壺Mの口縁部の破片と思われる。67は須恵器鉢Fである。底部外面に不定方向のケズリを施す。68は須恵器鉢であろう。口縁端部が強く外反する。69は須恵器杯B蓋で、口縁部の破片である。70は須恵器壺ないし甕の口縁部である。71は古墳時代の須恵器杯身である。72は丸瓦である。73は平瓦である。72・73は摩滅が著しい。74は北宋銭で、紹聖元寶(初铸1094年)である。直径2.2cm、重量2.0gである。



第22図 F3区出土遺物実測図5(1/4)

土坑S K0309(第18図16・第22図75~90) 16・75~90はいずれも弥生時代後期のものである。16は壺の底部である。わずかに上げ底気味である。上層・中層遺構面調査時に、溝SD0302出土として取り上げたが、出土位置の検討により、土坑S K0309の上層にあたと判断した。75は受口状の口縁部をもつ広口壺である。口縁部外面に擬凹線3条を施し、円形浮文を貼り付ける。また、肩部に直線文・波状文・直線文を施す。76はやや大型の壺の底部である。77~84は甕である。77はほぼ完形で、肩部があまり張らない小型品である。78は底部のみの破片であるが、77に比べると大型品であろう。79は口縁部が単純「く」字状を呈し、体部は肩部があまり張らない。80・81も口縁部が単純「く」字状を呈する破片である。80は口縁端部をややつまみ上げる。これに対して81はやや丸く仕上げる。82は受口状口縁の甕で肩部外面に直線文を施す。83・84も受口状口縁の甕の破片で、口縁部外面に列点文を施す。82~84は形態等から、いわゆる近江系の甕と考えられる。85は高杯杯部である。口縁部がやや大きく外反する。内外面とも密にミガキを施す。



第23図 F3区出土遺物実測図6(1/4)

は高杯の脚部である。87は高杯の脚裾部である。88も高杯の脚裾部である。裾部の中位に稜をもち、古相の器形を呈する。脚裾端部にキザミを、脚裾部外面に沈線4条を、それぞれ施す。89は器台の口縁部と思われる。口縁部はいわゆる垂下口縁で、擬凹線を4条施し、その上に円形浮文を貼り付ける。円形浮文は4か所確認できる。また、上から2本目の擬凹線上に刺突文を施す。90は鉢と思われる。口縁部がやや内傾気味の受口状を呈する。口縁部外面に直線文・列点文を、体部外面に列点文・直線文を、それぞれ施す。

下層遺物包含層(第23図91~102) 図示したものはいずれも弥生時代後期のものである。91は体部下半が下膨れ気味となる壺である。体部から底部にかけて残存する。底部は高さ1cmほどの突出底である。92はやや大型の壺の底部である。底部はわずかに突出し、外面側が少し凹む。93は小型の甕である。外面はタタキの後に、全面にハケを施す。94は手焙形土器である。覆い

部分から鉢部の上部までの破片である。鉢部と覆い部の接合部付近は指で押さえて突帯状を呈する。95は高杯杯部の破片である。杯底部から1cmほど上方に立ち上がった後、大きく外上方に広がる口縁部をもつ。96は広口壺の口縁であろう。垂下口縁部の貼り付けた部分が剥離して欠損する。口縁部上面と口縁部外面に波状文を施し、口縁部外面の波状文の上に円形浮文を貼り付ける。97～100は甕である。97は小型の甕で、最終調整に板状工具によるナデを施す。98は中型の甕と考えられる。99は98に比べ小型品である。97～99はいずれも肩部が張らない点で共通している。100は外面をナデで仕上げる甕の底部と思われる。101は壺の体部片である。102は長頸壺の口縁部である。(筒井崇史)

5) F4区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

F4区の最も北東に設定した南北16m、東西14.5mの矩形的調査区である(第24図上段)。現地表面の標高は約15.8mである。調査面積218㎡である。出土した遺物は整理箱1箱に満たない。

基本的な層序は、置き土であるにぶい黄褐色粗砂(1層)を除去すると、耕作土である褐灰色粗砂混じり細砂ないし黄灰色細砂(2・3層)などが堆積している。これらを除去すると、洪水砂と考えられるにぶい黄褐色礫混じり粗砂(4層)が堆積している。時期は不明である。この下層は水成堆積と思われる灰色粗砂やオリブ灰色シルトなど(5～10層)がおおむね水平に堆積している。このうち、7層の上面では素掘り溝を検出した(標高14.9m付近)ことから、島畑の上面に当たると考えられる。島畑104は7層以下の自然堆積層を整形して形成されたと考えられ、盛り土は確認できなかった。5・6層は近世以降の堆積と推定されるが、8層以下の詳細な堆積時期は不明である。これらの下層で地山と考えられる灰色シルト(11層)を確認した。11層上面で、時期不明の南北方向の溝を数条検出した(標高14.3m付近、第24図)。

(2) 検出遺構

島畑104 調査区全体が島畑に相当する(H5-x17区ほか)。規模は南北の検出長9.5m、東西の検出長8.0mである。島畑上面の標高は14.7～14.9mである。島畑上面で素掘り溝を7条検出した。出土遺物はほとんどないが、ほかの調査区の成果から、中世後半から近世にかけての島畑と思われる。(岡田健吾・筒井崇史)

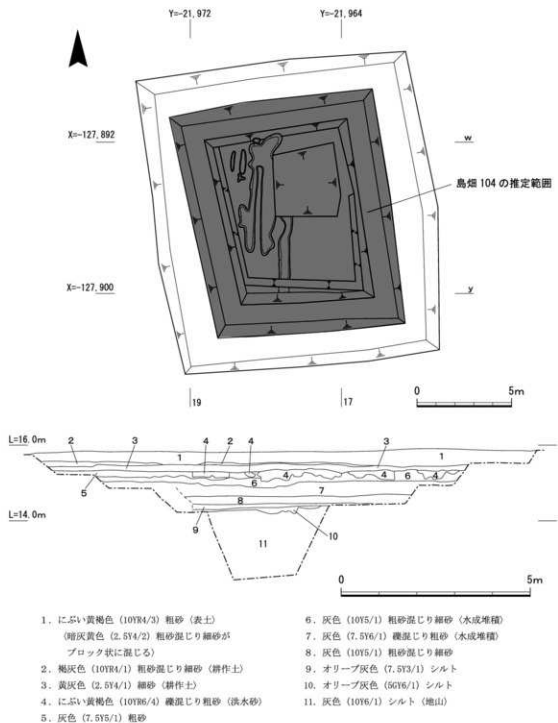
6) F5区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

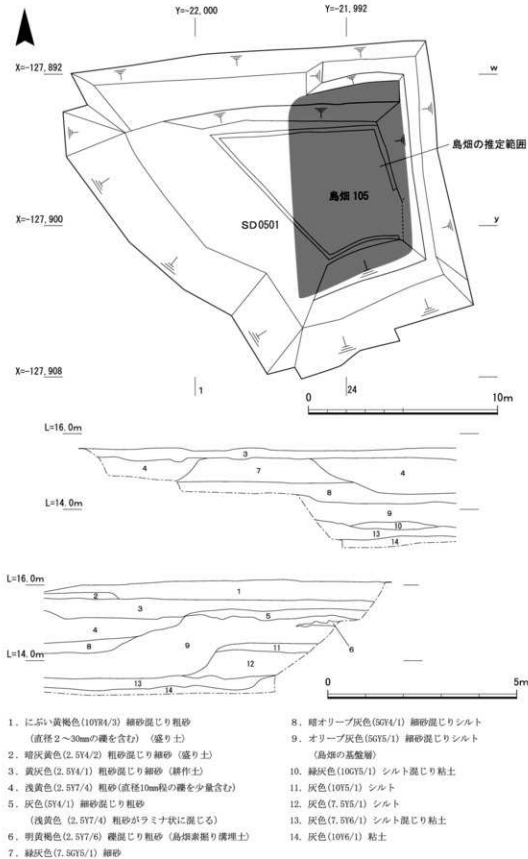
F4区の西側に設定した調査区である。当初は調査対象地を現用の市道が通っていたため、これを避けて調査区を設定した。市道の付け替え後、残りの部分についても調査区を設定し、調査を実施した(第25図上段)。調査区の形状は不定形なものとなり、南北は最大17m、東西は最大21.5mとなった。現地表面の標高は15.6～16.1mで、西に向かって低くなる。調査面積は220㎡である。出土した遺物は整理箱1箱に満たない。

基本的な層序は、置き土であるにぶい黄褐色細砂混じり粗砂や暗灰色粗砂混じり細砂(1・2層)を除去すると、耕作土である黄灰色粗砂混じり細砂(3層)が堆積している。これらを除去

すると、鳥畑と考えられる灰色細砂混じり粗砂(5層)や溝状遺構の埋土である浅黄色粗砂(4層)、暗オリーブ灰色細砂混じりシルト(8層)などを確認した。5層は自然堆積層で、この上面が鳥畑として利用されたと考えられる(標高153m付近)。また、4・8層は近世以降の堆積と考えられる。これらの下層には鳥畑の基盤層と判断するオリーブ灰色細砂混じりシルト(9層)が堆積している。9層の下層には緑灰色シルト混じり粘土や灰色シルトなど(10~14層)がおおむね水平に堆積している。11・12層はほかの調査区では弥生時代から古代にかけての遺構面となっている堆積層



第24図 F4区遺構配置図(1/200)・南壁土層断面図(1/100)



第25図 F5区遺構配置図(1/200)・北壁土層断面図(1/100)

であるが、F5区では遺構は検出されなかった。また、これらの下層には灰色シルト混じり粘土(13層)や地山と判断する灰色粘土層(14層)が堆積する。これらの各層では遺構は検出されなかったが、14層直上において、縄文時代晩期の突帯文土器(第29図103)が1点出土している(標高133m付近、第25図下段)。

(2) 検出遺構

島畑105 土層断面の観察の結果、確認したもので、詳細な規模や島畑上面での検出遺構等については不明である(H5-y22区ほか)。ただし、土層断面から島畑の高さは1.1mほどと推定される。島畑に伴う遺物はほとんどなく、周辺の調査成果から島畑は中世後半から近世にかけてのものと考えられる。この島畑は、F4区で検出した島畑104と同一のものである可能性がある。

溝状遺構 S D 0501 島畑105と同様、土層断面の観察の結果、確認したもので、時期等も島畑105と同様、詳細は不明である。土層断面から深さは1.1mほどと推定される。

(3) 出土遺物

遺物包含層(第29図103) 103は口縁端部の直下の口縁部外面に突帯を有する縄文時代晩期の深鉢の破片である。ただし、口縁端部は欠損する。内外面ともナデで調整して仕上げる。

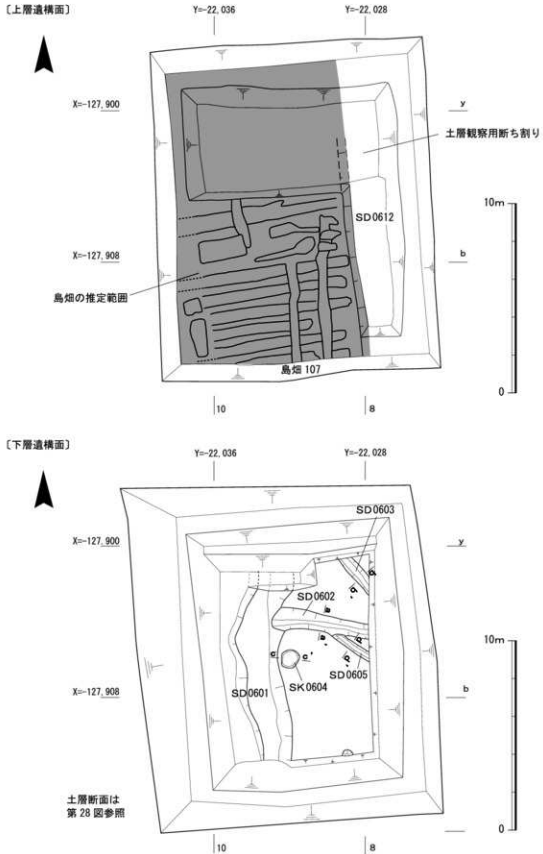
(岡田健吾・筒井崇史)

7) F6区の調査

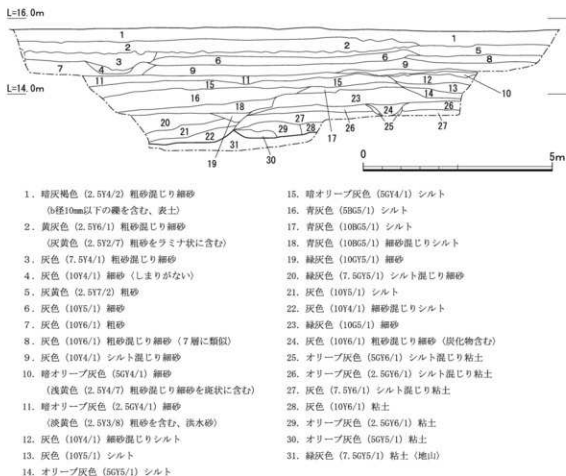
(1) 調査区の概要と基本的な層序

F5区の西側に設定した南北18m、東西15.5mの矩形の調査区である(第26図)。現地表面の標高は約15.7mである。調査面積は265㎡である。出土した遺物は整理箱2箱である。

土層断面の観察は、調査区の北半部を当初の段階で大きく断ち割って行った。基本的な層序の確認は、暗灰褐色粗砂混じり細砂(1層)を除去すると、黄灰色粗砂混じり細砂をはじめ、灰色細砂や灰黄色粗砂、暗オリーブ灰色細砂などの砂層(2～11層)がそれぞれ0.1～0.3mの厚さで堆積している。これらのうち、6層と9層は島畑の盛り土である可能性が高い。これらの各層は近世以降のものであろう。これらを除去すると、島畑107の上面である暗オリーブ灰色シルト(15層)と溝状遺構の灰色細砂混じりシルト(12層)を確認した(標高14.8m付近)。溝状遺構の埋土は12層以下、灰色シルト(13層)、オリーブ灰色シルト(14層)である。島畑107は15層以下、青灰色シルトや緑灰色細砂(16～18・23層)が基盤層を構成している。いずれも自然堆積層と考えられる。これらを除去すると、下層遺構面であるオリーブ灰色シルト混じり粘土(26層)と溝 S D 0601を確認した(標高13.7m付近)。S D 0601の埋土は、緑灰色シルト混じり細砂や灰色シルトなど(20～22層)である。また、溝 S D 0603の埋土は灰色粗砂混じり細砂・オリーブ灰色シルト混じり粘土(24・25層)である。26層上面では平安時代から中世にかけての遺構を検出した。また、弥生時代の遺構である溝 S D 0601も26層を基盤としていていると考えられる。26層の下層には灰色シルト混じり粘土やオリーブ灰色粘土など(27～30層)が堆積し、最も下層で地山と判断される緑灰色粘土(31層)を確認した。27～30層の堆積時期は不明であるが、S D 0601の基盤層であることから、弥生時代後期以前の堆積であろう(第27図)。



第26図 F 6区遺構配置図(1/200)



第27図 F6区北壁土層断面面図(1/100)

(2) 検出遺構

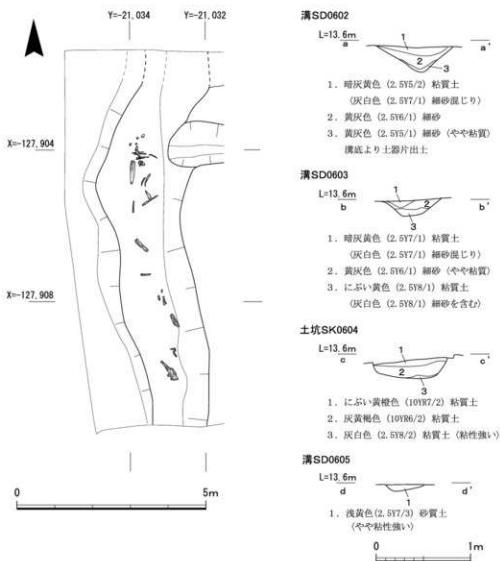
① 上層遺構

鳥畑107(第26図上段) 調査区の西半部で検出した(I6-b8区ほか)。本来は調査区内を南北に延びていたが、調査区の北半部を土層断面観察のために断ち割りをを行ったため、その範囲については鳥畑に関する記録が得られていない。現状での検出規模は検出長8.8m、検出上面幅9.0m、高さ0.6mである。鳥畑上面の標高はおよそ14.8mである。鳥畑上面には東西方向の素掘り溝を7条以上、南北方向の素掘り溝を2条以上検出した。素掘り溝は、いずれも検出長7m前後、検出幅0.5~0.9m、深さ0.1~0.2mである。埋土から遺物は少量しか出土しなかったが、ほかの調査区の結果から中世後半から近世にかけての鳥畑と考える。

溝状遺構 S D0612(第26図上段) 鳥畑107の東側で検出した(I6-b8区ほか)。規模は検出長7.5m、検出幅2.2m、深さ0.6mである。埋土は大きく3層に分かれ、上層から灰色細砂混じりシルト(12層)、灰色シルト(13層)、オリーブ灰色シルト(14層)である。遺物は出土しなかった。

② 下層遺構

溝 S D0601(第28図) 調査区の西半部で検出した(I6-a9区ほか)。調査区外に延びるため、長さ・幅ともに不明であるが、検出長約10m、検出幅約3m、深さ約1mである。溝底の標高は



第28図 F6区溝SD0601平面図(1/100)・検出遺構断面図(1/40)

12.5～12.7mで、わずかに南に向かって傾斜している。SD0601の東斜面では、木材で構築したと思われる護岸状の施設を検出した。木材はほとんどが南北方向に長軸を描いた状態で据えられており、ほぼSD0601の形状に沿って一列に並べられていた。護岸施設の検出高は0.15m前後である。使用されている木材の大きさは直径5～15cm、全長20～60cmである。遺物の出土量は多くないが、弥生土器甕や鉢などが出土した(第29図119～121)。遺構の性格については不明であるが、弥生時代後期である。

溝SD0602(第26図下段・第28図) 調査区中央部やや北寄りで検出した(I6-a8・a9区)。東西方向の溝で、西端はSD0601に重複し、東側は調査区外へ延びる。SD0601よりも新しいが、SD0601の上面で検出することはできなかった。検出長4.5m、幅0.8m、深さ0.3mである。溝の断面形は逆三角形に近い。遺物は瓦質土器の播鉢などが出土した(第29図112)。時期は中世後半であろう。

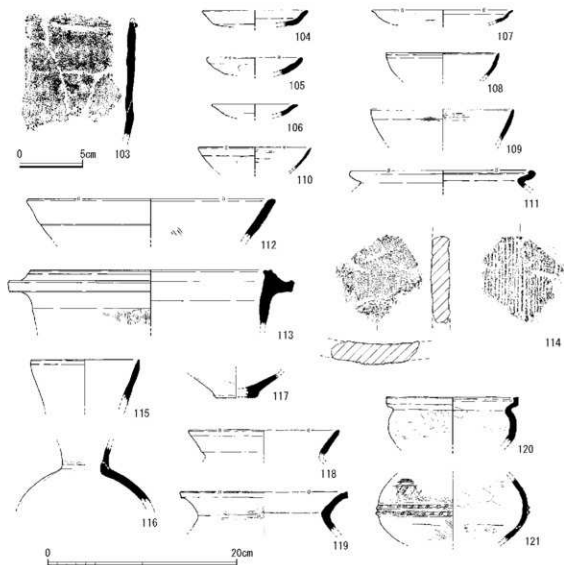
溝 S D 0603 (第26図下段・第28図) 調査区北東隅で検出した(16-a8区)。検出長2.5m、幅0.6m、深さ0.2mである。断面は台形である。北に対して41°西に振る。遺物は土師器皿などが出土した(第29図107)。時期は平安時代であろう。

溝 S D 0605 (第26図下段・第28図) 調査区東部で検出した(16-a7・a8区)。北に対して56°西に振る。西端は S D 0602 と重複しているが遺物からみると、S D 0605の方が古い。溝の東側は調査区外に延びる。検出長2.0m、幅0.2m、深さ0.1mと、非常に浅い溝である。遺物は土師器皿や羽釜、弥生土器の破片などが出土した(第29図105・113・117)。時期は平安時代であろう。

土坑 S D 0604 (第26図下段・第28図) 調査区中央、S D 0601の東側で検出した(16-b8区)。平面は円形で、直径0.8m、深さ0.2mである。遺物は土師器皿が出土した(第29図104)。時期は平安時代後期である。

(岡田健吾・筒井崇史)

(3) 出土遺物



第29図 F5・F6区出土遺物実測図(1/4)

溝 S D0602 (第29図112) 112は瓦質土器の播鉢と推定される。口縁端部が水平気味で、口縁部の中ほどに沈線が1条めぐる。内面にこくわずかであるが、掘り目が認められる。

土坑 S K0604 (第29図104) 104は土師器皿である。口縁部と底部にわずかな稜を有する。

溝 S D0605 (第29図105・113・117) 105は土師器皿である。口縁部が底部から緩やかに斜め上方に延びる。113は土師器羽釜であるが、後述する111と異なり、罎と一体気味の口縁部に、ほぼ円筒状を呈する体部をもつと考えられる。117は弥生土器壺の底部と思われ、突出気味である。

溝 S D0603 (第29図107) 107は口縁部が外反する土師器皿である。

遺物包含層 (第29図106・108～110・114・115・118) 106は口縁部が外反する土師器皿で、口縁端部に煤が付着する。108は土師器椀であろう。109・110は瓦器椀である。109は口縁端部内面に沈線を1条施す。114は平瓦の破片である。凹面に布目、凸面に平行縄目タタキが認められる。ただし、周囲に瓦葺きの建物などは想定しにくい状況である。115は須恵器長頸壺あるいは提瓶等の口縁部の破片である。118は単純「く」字状の口縁の甕である。弥生時代後期のものであろう。

島畑107 (第29図111・116) 111は土師器羽釜の口縁部で、「く」字状を呈する短い口縁部に、端部内面に粘土を折り返して大きく肥厚させる。116は須恵器提瓶の頸部から肩部にかけての破片である。外面全体に灰が被る。古墳時代後期のものである。

溝 S D0601 (第29図119～121) 119～121は弥生土器である。119は単純「く」字状口縁の甕であるが、外反気味で、口縁端部は面を有する。頸部にハケらしき痕跡が認められる。120は受口状を呈する鉢である。口縁端部はやや幅広いの水平な面をなす。121は手焙形土器もしくは鉢の体部最大径付近の破片である。肩部に直線文と列点文を施す。最大径付近にはキザミを施した突帯が2条めぐる。これらの遺物は弥生時代後期のものである。(筒井崇史)

8) F 7 区の調査

(1) 調査区の概要と基本的層序

F 3 区の西側に設置した一辺13.5mの矩形の調査区である(第30図上段)。ただし、後述する井戸 S E0704を検出した北東部では、井戸の調査に伴う安全確保のために部分的な拡張を実施した。現地表面は約15.5mである。調査面積は190㎡である。出土した遺物は整理箱7箱である。このほか、井戸枠の部材がある。

基本的な層序は、調査地の東側で灰黄褐色細砂など(1・2層)の攪乱が認められるものの、表土である黄灰色粗砂混じり細砂や灰色細砂(3・4層)を除去すると、新しい時期の素掘り溝などが確認できる(5～8層)。これらは近・現代のものと考えられる。これらの基盤層である灰色細砂(12層)を除去すると、さらに溝を確認した(13～15層)。出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、これらは近世以降のものと考えられる。これらの基盤層となっている黄灰色粗砂混じり細砂(17層)の下層には、灰色シルトやオリーブ灰色細砂混じりシルト、緑灰色シルト混じり細砂など(18～25層)など、還元化が著しいシルト質の堆積層と洪水によると考えられる細砂の堆積層が続く。これらも出土遺物が少なく詳細は不明であるが、中世から近世にかけての堆積と考えられる。これらを除去すると、古代の遺構面であるオリーブ灰色シルト(26層)を検出した(標高

14.0m付近)。26層の下層には緑灰色シルト混じり細砂や緑灰色シルト、緑灰色細砂など(27～32層)がほぼ水平に堆積しており、その下層には植物遺体を多く含む腐植土層である褐灰色シルト(33層)が約0.4mの厚さで堆積している。33層の下層で地山と判断される青灰色粘土(34層)を確認した(第30図下段)。

(2) 検出遺構

溝SD0703 近代ないし近世の堆積層を掘削している際に確認した溝である(I6-p18区)。時期は近世ないし近代と思われるが、混入品として、中世の瓦器椀などが出土した(第45図230)。

井戸SE0704(第31～33図) 調査区の北東隅で検出した(I6-n17区)。掘形内に井戸枠が遺存していた。掘形は隅丸方形で、規模は南北3.4m、東西3.8mである。井戸底までの深さは検出面から1.6mを測る。井戸枠の構造は隅柱横板横棧留である。井戸枠は一辺1.4mの方形を呈する。四隅に柱を建て、その柱にはほぞ穴を穿ち、そこに横棧を組み込むことで井戸枠の骨格とする。隅柱は断面形が八角以上の多角形を呈しており、対辺長は18cm前後を測る。横棧は一辺につき上下それぞれ1本ずつである。同じ段の横棧でも南・北辺と東・西辺では高さを少しずらしている。

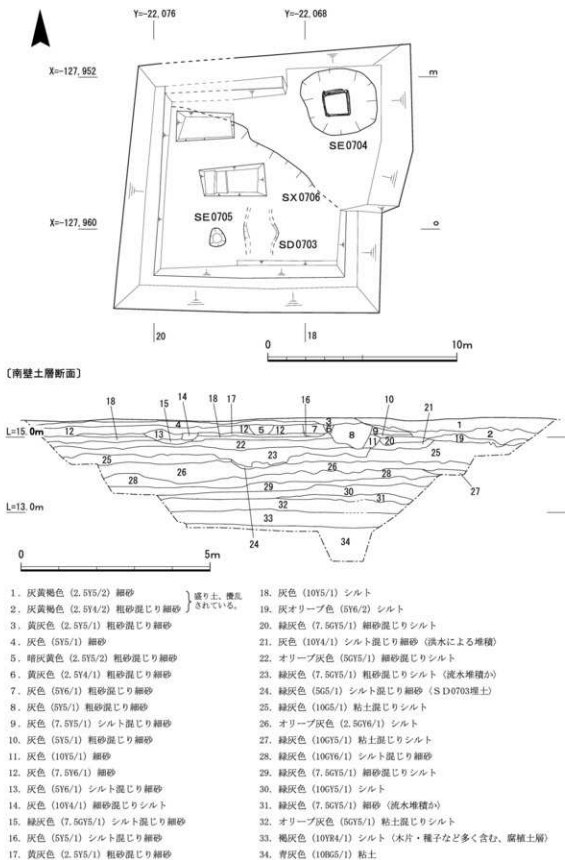
横板は、柱や横棧の外側に板を積み上げて構築されていた。板同士を組み合わせず、外からの土圧と柱で支えていた。各辺とも、幅10cm前後の板が5～9段残存していたが、一番下の材には高さが70cm前後の大型のものを使用している。横板には井戸枠の構造とは関係ないほぞ穴を穿っているものがあることから、建築部材を転用したものと考えられる。

隅柱の外側には、幅15cm、厚さ3cmほどの当て板が置かれていた。これは、横板の隙間から井戸枠内に土砂が流入しないようにするための処置と考えられる。当て板と柱との間には直径数cmの礫が多数詰まっており、裏込めと考えられる。

井戸底の中央には、一辺0.8mの井籠組の水溜めが設けられており、その周囲に礫が敷かれていた。この礫敷には直径15cmほどの大礫と直径5cmほどの中礫が使われており、大礫の隙間に中礫が充填されていた。ただし、西側ではほぼ中礫のみが使われている。水溜めの深さは0.25mある。4枚の板材を2枚組み継ぎによって方形に組んでいる。井籠組の底にも大礫と中礫を使用した礫が敷かれていた。ただし、大礫の直径は10cmほどである。

横板や隅柱の下からは構造を支えるための礎板を検出した。礎板には規格性がなく、適当な板材を用いたようである。礎板の中には、被熱により焦げた痕跡があるものもある。礎板や礫敷を取り外すと、一番底に曲物が埋められていた。1/3ほどしか残存していなかったものの、大型の曲物で、直径が55cm程度に復元できる。したがって、井戸の下部は、まず掘形の底に曲物を据えたのち、灰色シルト混じり細砂(11層)で埋め、曲物を覆うように礫を敷いたと考えられる。その後、井籠組の水溜めを設置し、これに井戸枠本体を構築したと考えられる。

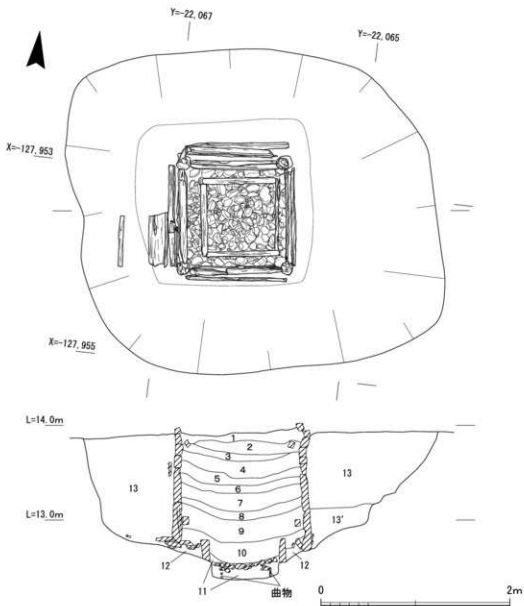
井戸枠内の埋土は11層に分層ができた。堆積状況から、徐々に埋没していったものと考えられる。いずれの層からも遺物が出土しているが、下層ほど、木の葉や種子などの植物遺体が増える。井戸の掘形埋土(13・13'層)は、ほぼ単一層で井戸底の礫敷の下部に12層が認められる程度である。遺物は破片を中心に土師器や須恵器が出土した(第35図139～153)。



第30図 F7区遺構配置図(1/200)・南壁土層断面図(1/100)

8層上面で、斎串・横櫓・柄杓など(第43図219~222・227・第44図228)が、ほぼ同じ高さでま
とまって出土した。柄杓は3点が重なるような状態で出土した。9層上面では柄杓と須恵器壺M
(第35図131)がほぼ同じ高さで出土している。井籠組の埋土である10層からは曲物、木皿、木片
など(第43図218・223)が出土した(第32図下段)。

土器は、細片の出土が目立つ。器種としては、土師器杯・皿、須恵器杯・壺M、黒色土器碗、



- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1. オリーブ灰色 (5G7S/1) 細砂混じりシルト | 9. 灰色 (10Y4/1) シルト |
| 2. 灰色 (10Y4/1) シルト混じり粘土 (炭化物少量含む) | 10. 灰色 (7.5Y4/1) シルト (粗砂を少し含む) |
| 3. 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 11. 灰色 (10Y5/1) シルト混じり細砂 (隙間の埋める砂) |
| 4. 灰色 (10Y4/1) 細砂混じりシルト | 12. 灰色 (7.5Y4/1) 細砂混じりシルト
(オリーブ灰色 (2.5G7S/1) シルト混じり粘土に混じる) |
| 5. 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂混じりシルト | 13. 灰色 (10Y5/1) シルト (オリーブ灰色 (2.5G7S/1)
粘土混じりシルトがブロック状に混じる)
(13' はブロックの割合が増える) |
| 6. 灰色 (5Y4/1) 細砂混じり粘土 | |
| 7. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混じりシルト | |
| 8. 灰色 (7.5Y4/1) 細砂混じりシルト | |

第31図 F7区井戸SE0704実測図1(1/40)

緑釉陶器、製塩土器などがある(第35図)。井籠組のなかの礎敷に混じって土師器皿(第35図136・137)が出土している。136・137は平安時代前期(9世紀後半)に位置づけられ、井戸の使用時期の一端を示している。

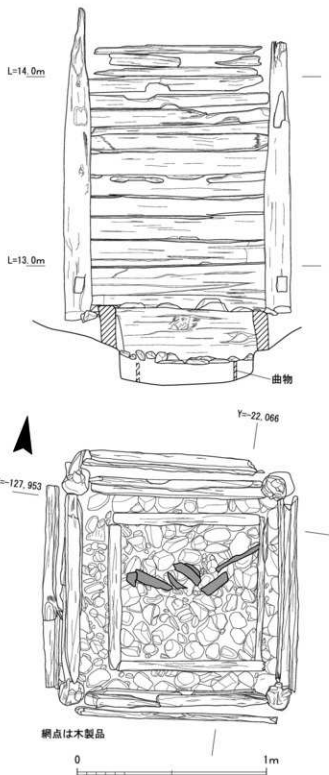
井戸 S E 0705(第34図) 調査区南西寄りで検出した(16-o19区)。素掘りの井戸で、平面形は楕円形で、直径0.8~0.9m、深さ0.6mである。井戸掘形に接して一辺0.2mほどの三角形の掘形が3か所認められる。この掘形の用途は不明であるが、井戸の上屋構造が存在した可能性も考えられる。遺物の出土量は少ないが、3層から土師器皿(第45図231・232)が出土している。時期は平安時代中期である。

落ち込み S X 0706(第30図上段) 調査区の南西側で確認した浅い落ち込みである(16-o18区ほか)。北東から南西に向かって傾斜しており、最も深いところで0.3mの深さを確認した。古代の遺構基盤層となっている26層が埋土である。

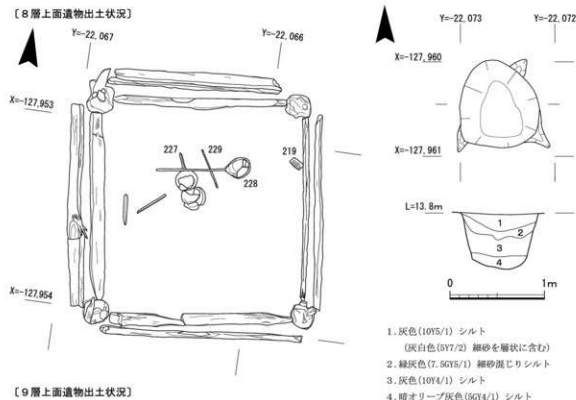
(3) 出土遺物

井戸 S E 0704(第35図122~第44図229) 122~135は井戸枠内の各層から出土したものである。122~124は土師器皿である。122・123は口縁部が外反するが、122の口縁部内面

はわずかに凹む。124は口縁端部内面が少し肥厚し、底部はおおむね平らである。125は土師器碗もしくは杯である。126は122~125に比べてやや大型の土師器皿であろう。127は口縁部がやや外反した後に内湾気味となり、端部がわずかに肥厚する土師器皿である。奈良時代のいわゆる杯Aと考えるが、暗文は施されない。128~130は黒色土器碗である。128は口縁部の破片で、内面に

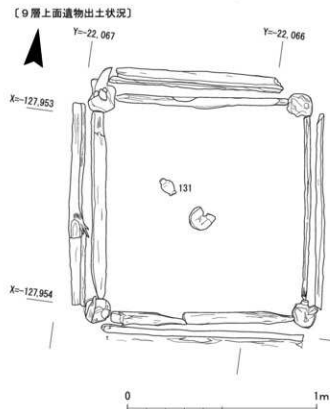


第32図 F 7区井戸 S E 0704実測図 2 (1/20)



1. 灰色(10Y5/1)シルト
(灰白色(5Y7/2) 細砂を層状に含む)
2. 緑灰色(7.5GY5/1) 細砂混じりシルト
3. 灰色(10Y4/1)シルト
4. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト

第34図 F7区井戸SE0705
実測図(1/40)

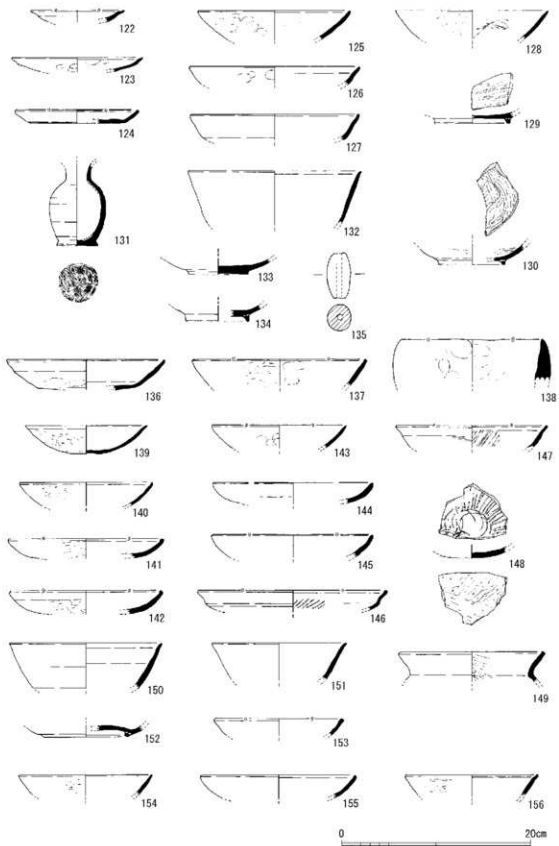


第33図 F7区井戸SE0704遺物出土状況図(1/20)

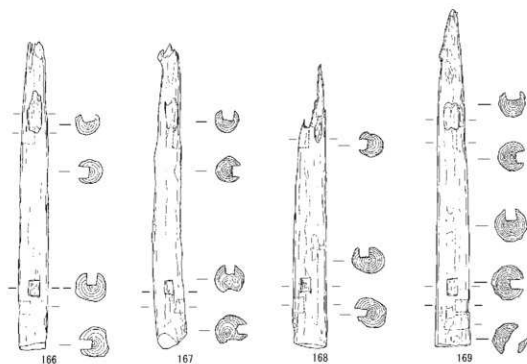
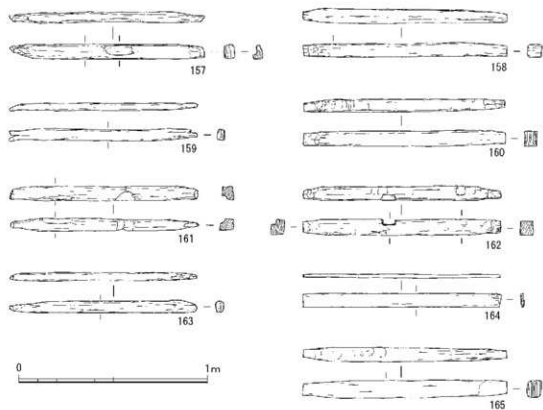
135は土堆である。

136～138は、井戸底で検出した礫敷の直上や除去時に出土したものである。136は土師器杯で、平底気味の底部から口縁部が斜め上方に立ち上がり、口縁端部がわずかに屈曲している。杯Aの

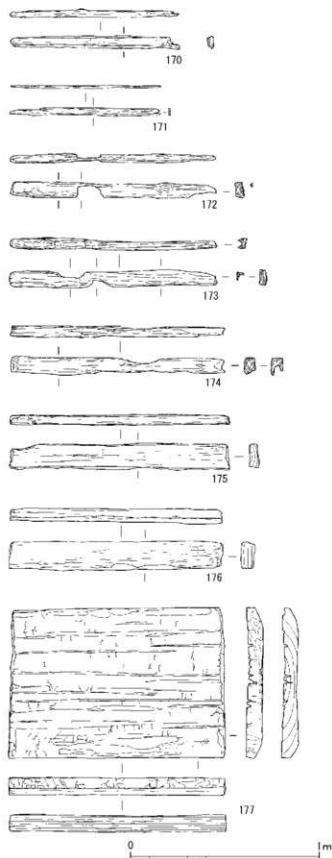
わずかにミガキ(暗文か)の痕跡が確認できる。129・130は底部の破片で、ともに断面台形の高台をもち、内面には密にミガキを施す。131は須恵器壺Mである。口縁端部を欠損するほかは完存する。底部外面に糸切り痕が明瞭に認められる。132は須恵器杯の口縁部である。大型の器形で、口縁部はほぼ直線的に延びる。大きさから奈良時代中頃のものである可能性がある。133は緑釉陶器碗の底部である。高台は削り出し高台である。134は灰釉陶器碗の底部である。



第35図 F7区出土遺物実測図1(1/4)



第36図 F7区出土遺物実測図2 (1/20)

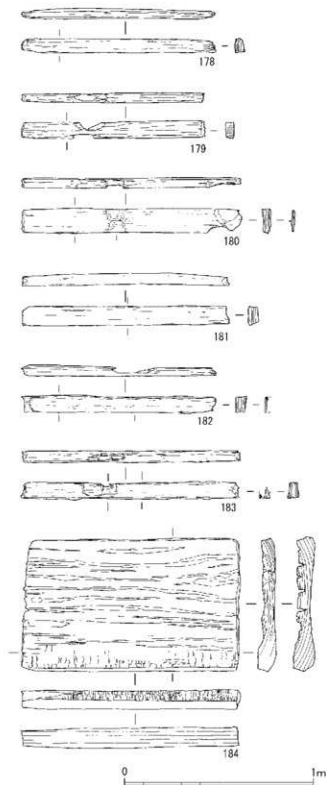


第37図 F7区出土土遺物実測図3 (1/20)

系譜を引くものと考えられる。137も土師器杯であろう。口縁端部がわずかに肥厚し、外面は口縁部まで全面にケズリを施す。138は製塩土器であるが、当該期のものかどうか断定できない。古い資料が混入した可能性もある。

139～153は井戸の掘形から出土したものである。139・140は137と同じ特徴を持つ土師器碗もしくは杯である。口縁端部は139が丸くおさめ、140が上方につまみ上げ気味となる。141・142は土師器皿で、137などと同じく口縁部外面にケズリを施す。どちらも口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部内面が肥厚する。143は土師器杯もしくは皿である。外面はナデで仕上げられる。144・145は土師器皿で、外面にヨコナデを施す。146は土師器皿Aである。内面に1段の斜放射状暗文を施すことから奈良時代のものと考えられる。口縁部はやや外反し、口縁端部は内面が肥厚する。147は土師器杯ないし碗と推定される。内面に1段の斜放射状暗文を施すが、口縁部の形状が146とは異なる。外面にもミガキを施すことからやや古相の土器と考えられる。148は土師器杯の底部の破片である。内面に螺旋状暗文と斜放射状暗文を施す。外面にはケズリを施す。146～148は暗文を施すことや形態から奈良時代のものと考えられ、139～145よりも古相の遺物が

混入したものと考えられる。149は土師器甕である。口縁部内面にハケを施した後、ヨコナデを施す。150・151はともに深手の須恵器杯である。底部を欠損するため杯Aなのか杯Bなのか判断がつかない。ともに口縁端部がわずかに外反する。152は須恵器杯Bの底部である。焼け歪みの



第38図 F7区出土遺物実測図4(1/20)

ため、分量等は正確さを欠く。153は須恵器皿あるいは碗の口縁部の破片と考えられるが、具体的な器形は明らかでない。口縁端部は内面がやや肥厚しつつ丸くおさめている。

154～156はS E 0704の検出時に井戸枠外から出土したものである。154は139・140と、155は141・142と同様の特徴を有する土師器杯や皿である。156は土師器の杯もしくは碗と考えられる。口縁端部に沈線を施す。

掘形から出土したものには、9世紀中ごろの土師器碗・杯などが含まれることから、このころに構築されたと考えられる。また、井戸枠内の上層から出土した遺物には黒色土師器碗が含まれることから10世紀中ごろには廃絶したと考えられる。

157～218は井戸枠を構成していた部材である。これらのうち、樹種が同定できたものについては付表9に示した。157～163・165は井戸枠の横棧である。横棧はいずれも断面形が一边8cm前後のおおむね正方形を呈し、隅柱のはぞ穴に棧を挿入するために材の両端を少し削り込んで細くしている。各材は全長が100cm余りと、大きさも揃えられている。164は南辺の横棧を支えるために付け加えられた板である。

166～169は井戸枠の四隅に立てられていた隅柱である。いずれも先端は腐植により先細りとなっている。それぞ

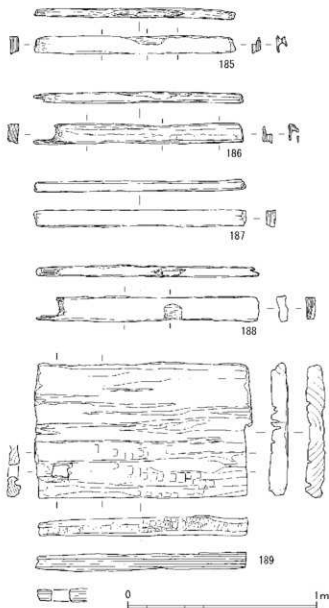
れ上部に2個ずつ、下部に2個ずつのほぞ穴を穿っている。隅柱の下部は工具等で成形した痕跡が明瞭に残る。断面形はやや不正確な点もあるが、八角以上の多角形に面取りしていた可能性が高い。166は北東、167は南東、168は南西、169は北西の隅柱である。最も残りの良い169は全長178cm、対辺長は最大で18cmを測る。

170～194は井戸の各辺を構成していた板材である。170～177は北辺、178～184は東辺、185～189は南辺、190～194は西辺を構成していたものである。第37～39図では井戸枠の最下部を構成していた大型の板材から順に上方に向かって置かれていた板材を図示している。170は検出時に残存していた最も最上部の板材であるが、ほかの辺では図示できないものもあり、出土状況から少なくとも9段はこうした板材が使用されていたと考えられる。板材の多くは腐植が著しいが、比較的残りの良い176や193から類推すると、全長115cm前後、幅15cm前後、厚さ8cm前後の部材を使用していると考えられる。

177・184・189・194は井戸枠の最下部を構成する大型の板材で、全長113.2～115.2cm、幅70.8～78.0cm、厚さ9.2～11.2cmを測る。189には長辺8cm、短辺6cm程度の方形の穴が穿たれていることから、建築部材等を転用した可能性がある。各辺の構成は基本的に同じで、最下部に大型の板材を使用し、その上部には幅15cm前後の板材を積み上げている。

195～198は井戸底に設けられた水溜めを構成していた板材である。板材は長辺82.8～83.6cm、短辺23.6～28.8cm、厚さ5.2～7.2cmである。いずれの板材も短辺の上部側半分と下部側半部分を、長辺9～15cm、短辺5cmほど切り取って鍵手状にし、これらを2枚組み雑ぎで接合して水溜めを構成していた。

199～212は横板や隅柱を支えるための礎板である。支える上部の部材の大きさなどによって、さまざまな大きさの板材が使用されて

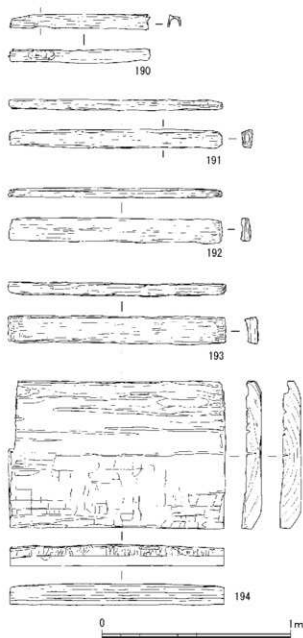


第39図 F7区出土遺物実測図5 (1/20)

いるが、厚さは、薄いもので1cm前後、厚いもので5cm程度のものがある。199や202には、195～198と同じく、短辺の半分ほどを切り取った痕跡が認められる。

213～217は井戸枠の最下部の大型横板や隅柱に添えられていた板材である。各部材と掘形の間から出土しており、各部材の固定のために使用されたものと考えられる。213は194(西側の大型横板)の上段に添えられていた板材である。214は177(北側の大型横板)の下段に添えられていた板材である。図の右側2/5ほどが炭化している。215・216は169(北西の隅柱)に添えられていた板材である。217は166(北東の隅柱)に添えられていた板材である。

218～229は井戸枠内から出土した各種の木製品である。218は木皿で、轆轤を使用して成形さ

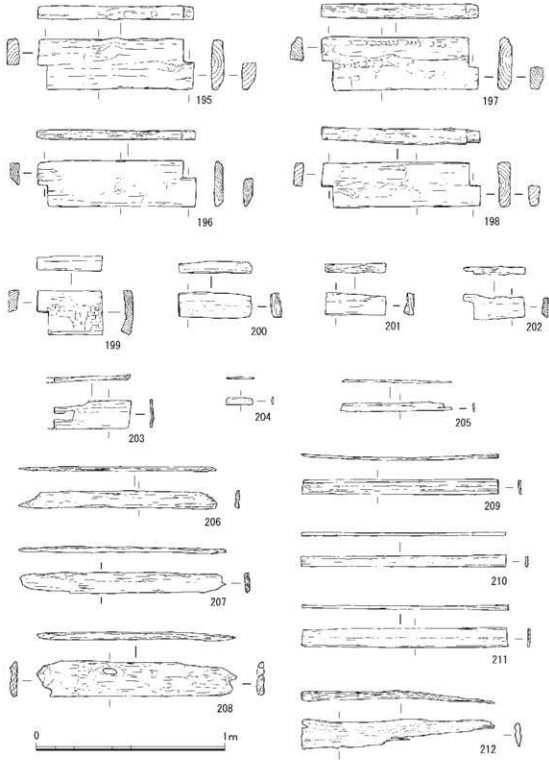


れたものである。219・220は横櫛である。薄い歯を作り出している。221・222は京串である。ほぼ同形同大のものであるが、222は上部が欠損する。残りの良い221を見ると、木材の上部はやや扁平に尖らせ、その両端から1.5cmほど切れ込みを入れている。下部は先端に向かって細くなっていき、先端はやや尖り気味である。223はほぼ完形で出土した曲物である。曲物の側板を丸めて円形とし、結合部は桜の樹の皮で留めている。224・225は曲物の底板と推定される。224はほぼ完形であるが、225は半分ほどが欠損する。226は曲物の側板である。厚さは0.4cmほどである。227・228はどちらも液体を扱う器の部分にひょうたんを使用した柄杓である。228はほぼ完形品で、全長51.6cmで、器の長さ12.7cm、幅11.4cm、高さ6.5cmを測る。柄の直径は1cm前後である。229は柄杓の柄と考えられる。

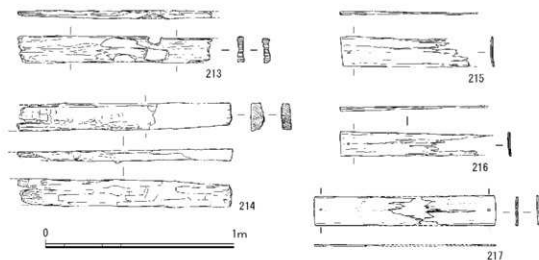
244・245は井戸枠の掘形から出土した瓦類である。244は川原寺式もしくは藤原宮式の軒丸瓦である。復元すると複弁蓮華文になると考えられる。中房には直径0.7cm程度の蓮子が1つ確

第40図 F7区出土遺物実測図6(1/20)

認できる。7世紀後半から8世紀前半の軒丸瓦と考えられるが、同時期の遺構や遺物はF7区に限らず、下水主遺跡や水主神社東遺跡の一連の調査では確認していない。245は平瓦の破片である。凹面に布目の、凸面に縄目タタキの痕跡が認められる。凸面には明瞭な梓板の痕跡が認められないことから一枚造りの可能性が高い。8世紀前半以降のものと思われるが、同時期の遺構は確認



第41図 F7区出土遺物実測図7 (1/20)



第42図 F7区出土遺物実測図8 (1/20)

していない。

溝SD0703(第45図230) 230は瓦器碗の底部の破片である。混入品と考えられる。

井戸SE0705(第45図231・232) 231・232は、平安時代中期ものと思われる。どちらもいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。231はかなり扁平な器形に復元できる。

遺物包含層(第45図233~243) 遺物包含層の掘削や遺構面の精査中に出土した遺物としては、瓦器・土師器・須恵器・弥生土器などがある。233は瓦器皿である。234は土師器皿である。235は土師器甕である。外面に条線の幅が広いハケを縦方向に施す。口縁端部は内方へ折り曲げて成形する。236は須恵器杯B蓋である。扁平な形状を呈する。237は須恵器皿Bである。高台が底部の最も外側に貼り付けられている。236や237は器形等から8世紀後半以降のものであろう。238は須恵器の杯もしくは碗と考えられる。239は須恵器甕の頸部から体部上半にかけての破片である。肩部に2条の沈線を施し、直径1.5cmと推定される円孔を穿つ。240は須恵器提瓶の頸部から体部上半にかけての破片であらう。241は須恵器杯身である。底部に回転ヘラケズリを施した痕跡が確認でき、古墳時代後期後半(陶邑編年TK43型式前後)と推定される。242は須恵器杯身である。口縁端部を欠損するが、復元された法量から飛鳥時代前半に位置づけられる。243は弥生土器壺もしくは甕の肩部の破片である。上から列点文・直線文・列点文・直線文・扇状文を施す。

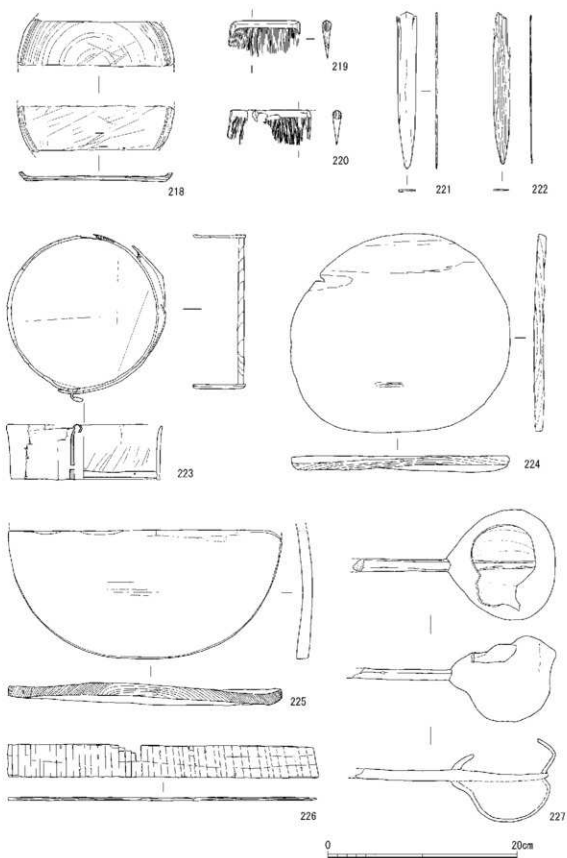
(岡田健吾・筒井崇史)

9) F8区の調査

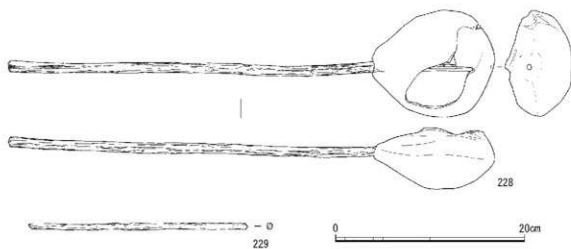
(1) 調査区の概要と基本的な層序

F7区の西側に設定した一辺15mの矩形の調査区である(第46図上段)。現地表面の標高はおおよそ156mである。調査面積は220m²である。出土した遺物は整理箱4箱である。

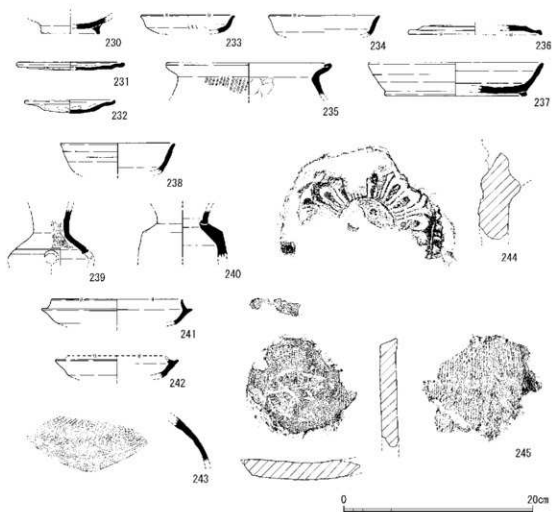
基本的な層序は、表土である黒褐色粗砂混じり細砂(1層)を除去すると、暗灰黄色粗砂混じり細砂や黒褐色礫～粗砂混じり細砂、灰色粗砂混じり細砂、黄灰色粗砂混じりシルトなど耕作土もしくは耕作土と推定される堆積が続く(2~8層)。これらの層は近世ないし近代の堆積と考えら



第43図 F7区出土遺物実測図9(1/4)

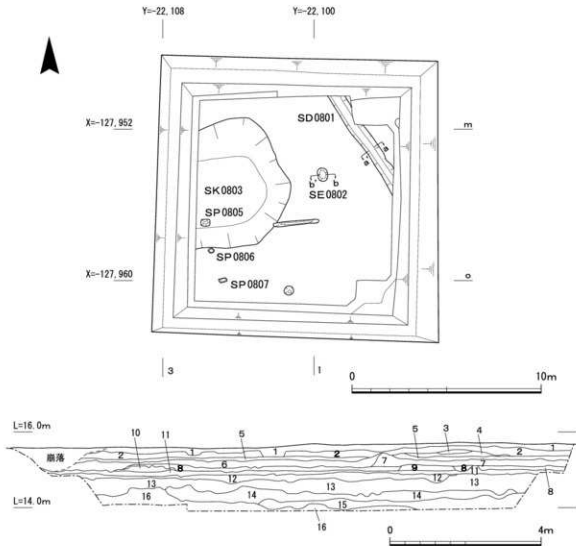


第44図 F7区出土遺物実測図10(1/4)



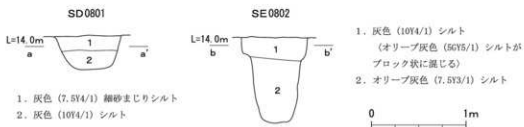
第45図 F7区出土遺物実測図11(1/4)

れる。8層を除去すると、暗灰黄色細砂混じりシルト(9・11層)が確認でき、一部に流水による堆積と考える黄褐色細砂混じり粗砂(10層)が認められる。これらの砂層は近世の堆積と思われる。9・11層の下層には、オリーブ灰色シルトや灰色シルトなど(12~14層)など還元化した堆積層が続く。これら還元された堆積層は中世もしくは近世の堆積と考えられる。これらを除去すると、弥生時代から古代にかけての遺構面であるオリーブ灰色粘土混じりシルト(15層)を検出した(標高14.2m付近)。15層の下層には地山と判断される暗緑灰色シルト(16層)を確認した(第46図下



- | | |
|--|--|
| <p>1. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粗砂混じり細砂 (表土)</p> <p>2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂混じり細砂
(耕作土、礫を少量含む)</p> <p>3. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 礫~粗砂混じり細砂
(耕作土、締まっている)</p> <p>4. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂混じり細砂 (耕作土)</p> <p>5. 灰色 (5Y 4/1) 粗砂混じり細砂 (耕作土)</p> <p>6. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粗砂混じり極細砂 (耕作土)</p> <p>7. 灰色 (5Y5/1) 極細砂 (耕作土)</p> <p>8. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂混じりシルト (耕作土)</p> | <p>9. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混じりシルト
(灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂混じりシルトが
ブロック状に混じる)</p> <p>10. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂混じり粗砂 (流水堆積)</p> <p>11. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混じりシルト</p> <p>12. オリーブ灰色 (5Y5/2) シルト</p> <p>13. 灰色 (7.5Y5/1) シルト</p> <p>14. 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト (弥生時代後期~古代の遺構面)</p> <p>15. オリーブ灰色 (5G7.5/1) 粘土混じりシルト</p> <p>16. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト</p> |
|--|--|

第46図 F 8区遺構配置図(1/200)・南壁土層断面図(1/100)



第47図 F 8区溝 S D0801・井戸 S E0802土層断面図(1/40)

段)。

(2) 検出遺構

溝 S D0801 (第46図上段・第47図左) 調査区北東部で検出した(I6-m25・n25区)。検出長6.3m、幅0.7m、深さ0.35mである。方向は北に対して35°西に振る。埋土は、上層が灰色細砂混じりシルト、下層が灰色シルトである。出土遺物には、須恵器杯蓋・杯身、弥生土器片などがある(第48図246~249)。時期は古墳時代後期と考えられる。

井戸 S E0802 (第46図上段・第47図右) 調査区の中央で検出した(I6-n25区)。井戸枠等を伴わない素掘りの井戸である。平面形は円形で、直径0.7m、深さ0.9mを測る。20cm程度掘り下げたところで直径が0.5mと狭くなる。埋土は上層が灰色シルト、下層がオリブ灰色シルトである。出土遺物は全くなく、時期は不明である。

土坑 S K0803 (第46図上段) 調査区西半部で検出した(I7-n1区ほか)。遺構の西半部が調査区外に広がるため全容は不明であるが、南北7.0m、東西5.0m分を検出した。深さは0.25mである。埋土は粘性の強い土で、炭化物が含まれていた。遺構の南東部からまともな弥生土器が出土した(第48図251~260)。いずれも弥生時代後期のもので、S K0803もこの時期のものであろう。

ピット S P0805~0807 (第46図上段) 調査区の南西部で検出した小規模なピット群である(I7-o2区ほか)。平面形は方形または円形を呈する。直径ないし一辺0.2~0.5m、深さ0.15~0.25mを測る。S P0805は土坑 S K0803の埋土上面に掘られていることから、S K0803よりも新しい遺構と考えられる。土器などの小破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

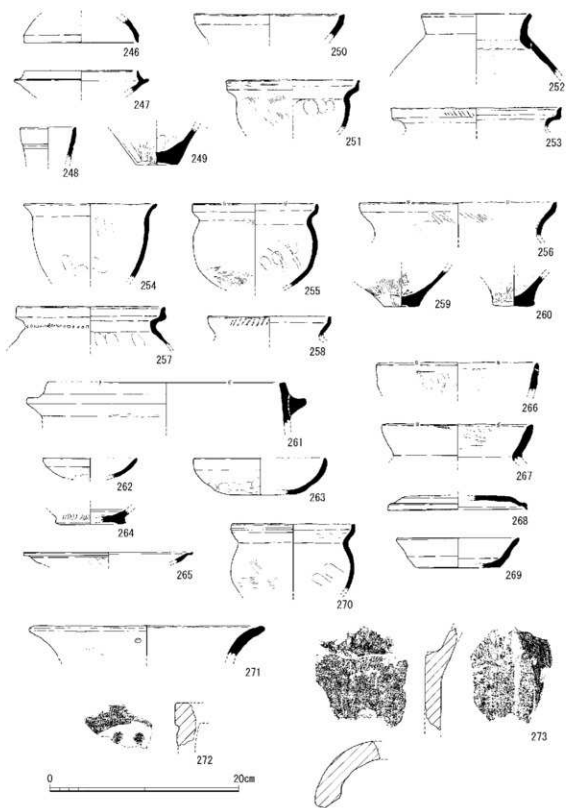
(岡田健吾・筒井崇史)

(3) 出土遺物

溝 S D0801 (第48図246~249) 246は須恵器杯蓋の小破片である。247は須恵器杯身の小破片である。口径が12cm前後と推定されることから古墳時代後期末頃(陶邑編年T K209型式並行)と推定される。248は須恵器提瓶の口縁部であろう。中位に幅0.4cmの沈線を1条めぐらす。246・247と同時期のものと考えられる。249は弥生土器甕の底部の破片と思われる。

ピット S P0805 (第48図250) 250は土器器甕の口縁部の破片と思われる。内湾気味の口縁部の端部がわずかに凹む平坦面をなす。

土坑 S K0803 (第48図251~260) いずれも弥生時代後期の弥生土器である。251は受口状口縁を呈する鉢もしくは小型の甕と思われる。口縁部外面に少なくとも擬凹線が2条めぐる。252は



第48図 F 8区出土遺物実測図(1/4)

短い口縁がわずかに外反する古式土師器の短頸壺である。253は251と同じく受口状口縁を呈する甕と考えられる。口縁部外面に列点文を施す。以上の251～253は埋土の上層から出土した。254は口縁部が緩やかに外反するもので、ほとんど肩部が認められない器形を呈する。甕と考えられるが、鉢の可能性もある。255は受口状口縁を呈する小型の甕であるが、鉢の可能性もある。体部はやや球形状を呈する。256は受口状の口縁部から頸部にかけて緩やかに変化する。小破片であるが、口径の大きな壺に復元できる。257は受口状口縁を呈する甕である。頸部に工具の痕跡が認められる。全体に摩滅が著しく、調整等は不明である。258も口縁部が受口状を呈する甕であるが、256のように緩やかに頸部に至るものである。口縁端部がほぼ平坦な面をなす。口縁部外面に列点文を施す。259・260は甕もしくは壺の底部である。259は底部外面がわずかに凹む。

遺物包含層(第48図261～273) 261は土師器羽釜である。土坑SK0803で出土したが、新しい時期のものであることから混入したものと考えられる。262は小型の土師器皿である。中世のものであろう。263は土師器杯ないし椀である。内湾気味に立ち上がる口縁部を有し、口縁端部を丸くおさめる。古墳時代後期のものであろう。264は白磁椀Ⅳ類の底部で、中世前半(12世紀前半)のものであろう。265はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。平安時代中期のものであろう。266・267は土師器甕の口縁部と思われる。口縁端部を266は丸くおさめ、267はやや面をなす。どちらも古墳時代中・後期のものであろう。268は須恵器杯B蓋である。やや扁平な天井部に口縁部が屈曲している。奈良時代後半のものであろう。269は須恵器杯Aであるが、やや外方に開き気味の器形を呈する。奈良時代後半もしくは平安時代前期のものであろう。270は受口状を呈する弥生土器甕である。口縁部から頸部にかけて緩やかに変化する。271は土師器二重口縁壺の口縁部と考えられる。口縁端部は面を作りながらまどめられている。直径0.7cmほどの竹管文を1個確認できる。272は軒丸瓦の破片である。平坦な面をなす外縁と外区に大粒の殊文をめぐらす構成をとる。平安時代のものであろう。273は丸瓦の玉縁の付近の破片である。凹面に布目痕が認められるが、凸面はきれいにナデ上げられている。(筒井崇史)

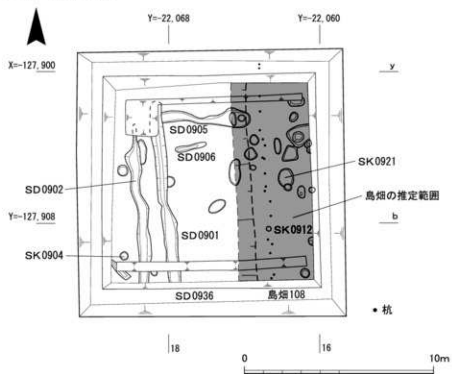
10) F9区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

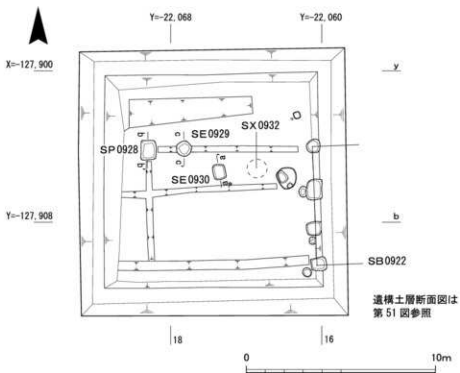
F6区の西側に設定した一辺14mの矩形の調査区である(第49図)。現地表面の標高は約15.5mである。調査面積は198㎡である。出土した遺物は整理箱5箱である。

基本的な層序は、表土である黄灰色粗砂混じり細砂(1層)を除去すると、一部に洪水による堆積と思われる暗灰黄色粗砂(4層)が認められるものの、灰色粗砂混じり細砂や灰色細砂などの耕作土もしくは耕作土と推定される堆積が続く(2・3・5～7層)。出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、近世以降あるいは近代の堆積層と考えられる。7層を除去すると浅黄色細砂ないし粗砂のブロックが混じった灰色ないしオリブ灰色シルト(10～12層)が確認でき、これは洪水による堆積と考えられる。10～12層が堆積した時期も明らかでないが近世と推定される。これらの下層で上層遺構である鳥畑108の基盤層と推定される緑灰色シルト(13層)を確認した(標高14.5m付近)。13層は盛り土の可能性もあるが、詳細は不明である。その下層に中層遺構面である暗

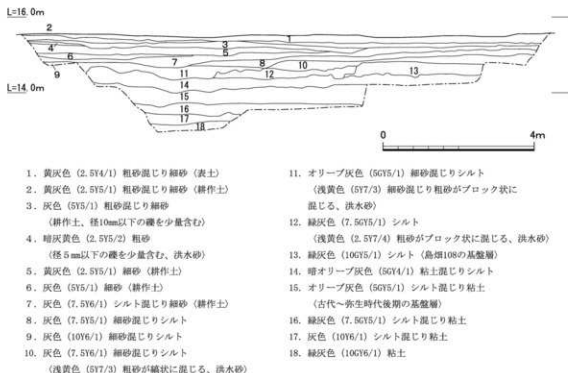
〔上層・中層遺構面〕



〔下層遺構面〕



第49図 F 9区遺構配置図(1/200)



第50図 F9区北壁土層断面図(1/100)

オリーブ灰色粘土混じりシルト(14層)を確認した。この層は自然堆積層と考えられる。この14層を除去すると下層遺構面であるオリーブ灰色シルト混じり粘土(15層)を検出した(標高14.0m付近)。下層遺構面では、掘立柱建物や井戸、ピットなどを検出したが、弥生時代から平安時代にかけての遺構を同一面で確認した。この下層には緑灰色シルト混じり粘土(16層)や灰色シルト混じり粘土(17層)があり、17層の下層で地山である緑灰色粘土(18層)を確認した。15～17層はいずれも自然堆積層と考えられる(第50図下段)。

(2) 検出遺構

① 上層遺構

島畑108 (第49図上段) 土層断面の観察の結果、調査区の東半部で確認したものである(16-a16区ほか)。当初は島畑との認識はなかったため、規模等は推定の部分がある。確認した規模は南北の長さは10.5m、東西の長さは4.0mである。高さは0.5m程度である。島畑上面の標高は14.5m前後と推定される。島畑の上面に素掘り溝があったかどうかは不明であるが、土層断面では確認できなかった。調査区の東壁から西へ4～5mのところ、直径5cm前後の杭が南北方向に並んだ状態で検出した。この杭列は中層遺構面の上面で検出したが、島畑108の護岸もしくは保護のための杭列と思われる、島畑の西肩の位置に相当すると考えられる。調査前の現況の区画ではF6区と合わせた広い一筆が田畑であったことから、F6区検出の島畑107とは同一の島畑である可能性がある。島畑の時期を示す遺物はないが、周辺の事例から、中世後半から近世にかけてのものと推定される。

溝状遺構 S D 0936 (第49図上段) 調査区の中央から西半部にかけて存在したと考える(16-

a17区ほか)。当初、島畑108の存在の認識が不十分であったため、断面観察等によって確認したものである。確認した規模は南北10.5m、東西8.0m、深さは0.5m程度である。埋土としては第50図の土層断面図の11・12層が相当すると思われる。

②中層遺構

溝SD0901(第49図上段) 調査区西半部で検出した(I6-a18区ほか)。検出長9.5m、幅0.7m、深さ0.15mで、南北方向に延びる。埋土に洪水砂と思われる黄褐色粗砂混じり灰色細砂である。出土遺物はない。

溝SD0902(第49図上段) SD0901の西側で検出した(I6-a18区ほか)。検出長7.9m、幅0.7m、深さ0.08mで、SD0901に平行する。埋土はオリーブ灰色シルトである。出土遺物はない。

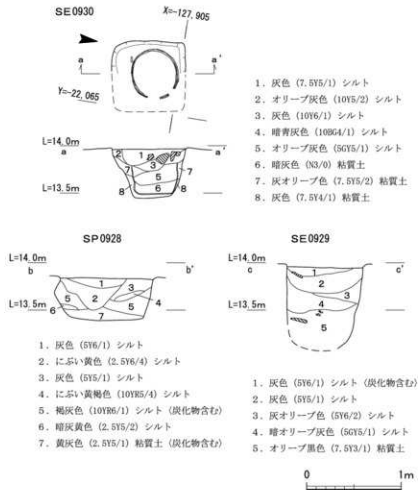
土坑SK0904(第49図上段) 調査区の南西隅で検出した(I6-c18区)。ほぼ円形の土坑で、直径約0.5m、深さ約0.05mである。弥生土器壺などが出土した(第54図298)。

溝SD0905(第49図上段) 調査区の北辺部で検出した(I6-a17区ほか)。東西方向に延びる溝で、検出長4.6m、幅0.3~1.1m、深さ0.05m前後である。出土遺物はない。

溝SD0906(第49図上段) 溝SD0905の南側で検出した(I6-a17区)。東西方向に延びる小規模な溝で、全長1.6m、幅0.3m前後、深さ0.1m前後である。土師器皿などが出土した(第54図295)。

土坑SK0912(第49図上段) 調査区の南東部で検出した(I6-c16区)。ほぼ円形の小規模な土坑で、直径約0.25m、深さ約0.05mである。不明土製品などが出土した(第54図300)。

土坑SK0921(第49図上段) 調査区の東半部で検出した(I6-b16区)。長軸が南北方向に延びる楕円形の土坑で、長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約0.1m



第51図 F9区ビットSP0928、井戸SE0929・0930実測図(1/40)

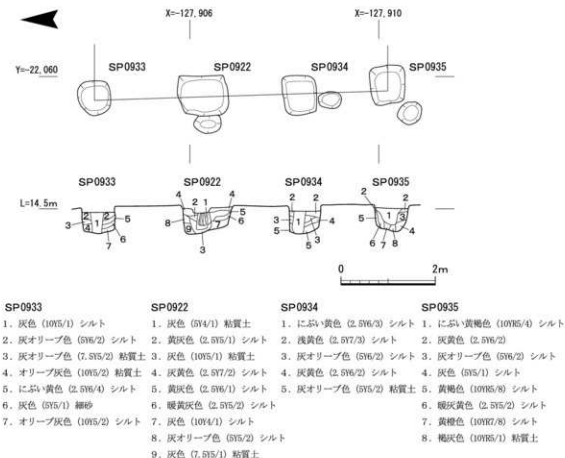
である。弥生土器壺の破片などが出土した(第54図299)。

③下層遺構

掘立柱建物S B 0922(第52図) 調査区の東端で検出した(I6-b18・c18区)。建物は東側の調査区外へ展開すると考えられ、建物の西辺のみを検出した。建物の主軸は、北に対して3°西に振る。検出した柱穴は3間分(6.3m)で、柱間寸法は1.9~2.3mである。柱穴の平面形はいずれも方形で、一辺は0.6~1.0m、検出面からの深さは0.5m前後である。柱穴S P 0922には柱根が残存していた。各柱穴からの遺物はほとんどなく、詳細な時期は不明であるが、柱穴が方形であること、建物主軸が正方位に近いことなどから古代の遺構と推定される。

ビットS P 0928(第51図下段左) 調査区西部で検出した(I6-a18区ほか)。周囲に関連するビット等がなく単独で検出した。平面形は長方形を呈し、南北1.0m、東西0.8m、深さ約0.4mである。埋土は1・2層が柱の抜き取り、もしくは再掘削に伴うもの、3~7層が本来の埋土である。埋土から須恵器杯身や黒色土器椀などの破片が出土した(第54図296・297)。須恵器杯身は混入と考えられ、遺構の時期は平安時代中期と考えられる。

井戸S E 0929(第51図下段右) 調査区の西寄りて検出した井戸状の遺構である(I6-a17区)。平面形は円形で、直径0.7m、深さ0.5mである。埋土は大きく5層に分けられる。埋土から土師器皿、黒色土器椀、須恵器鉢、砥石、土錐などの土器が出土した(第53図274~284)。遺構の時期



第52図 F 9区掘立柱建物S B 0922実測図(1/80)

は平安時代中期と考えられる。

井戸 S E 0930 (第51図上段) 調査区の中央で検出した (I6-b17区ほか)。井戸の底に木製の曲物を伴う。掘形は隅丸方形を呈しており、一辺0.8m、深さ0.5mである。曲物は掘形の少し北寄りに据えられており、直径0.5m、深さ0.3mと大型のものである。曲物には底板が残存していた。1層には礫や土器が混じっており、これらは埋没の過程で投棄されたものと考えられる。黒色土器碗や土師器皿などが出土した (第53図285~294)。遺構の時期は平安時代中期と考えられる。

土器溜まり S X 0932 (図版第28-2・3) 調査区東寄りで弥生土器甕が出土した (I6-b16区)。破片となっていたが、ほぼ一個体分がまとまって出土した。明確な掘形は認められなかったが、出土状況からみて原位置を保っていると考えられる。

(岡田健吾・筒井崇史)

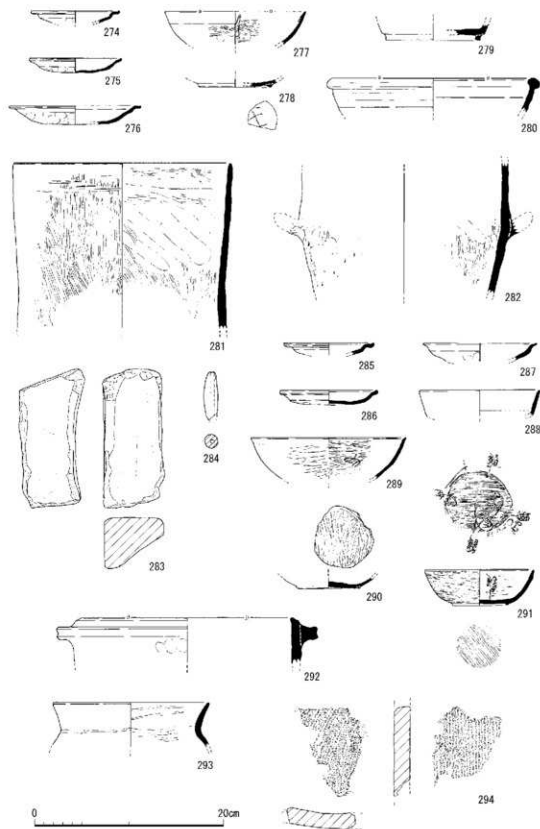
(3) 出土遺物

井戸 S E 0929 (第53図274~284) 274~276はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。274・275は口径9.5cm前後のほぼ同大の小型品である。これに対して276は口径13.9cmで中型品である。277・278は黒色土器碗である。277は口縁部の破片で、内面のみを黒色化する。278は底部の破片で、断面三角形に近い高台を貼り付ける。内外面とも黒色化する。底部外面の高台内側には鋭利な工具等による線刻が認められる。279は須恵器杯Bである。断面がほぼ方形を呈する高台を貼り付ける。280は須恵器鉢で、口縁端部の形状から籐産の鉢と考えられる。281・282は土師器甕である。胎土や色調等が類似することから同一個体の可能性もあるが、接点を見出すことができなかったため別々に図示した。282は把手を有する。283は砥石である。284は土錐である。出土した遺物のうち、274~278・280は平安時代中期のものと考えられる。

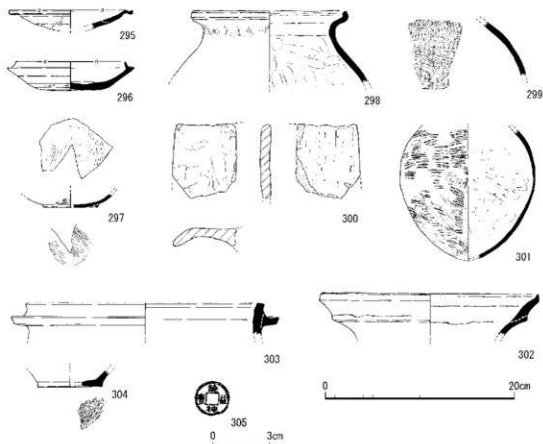
井戸 S E 0930 (第53図285~294) 285~287はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。ただし、287は口縁端部のつまみ上げは摩滅のためあまり目立たない。288は須恵器杯の口縁部である。289~291は黒色土器碗である。289は口縁部の破片で、内面に螺旋状の暗文を施す。290は小さな高台を有する底部である。289・290は内面のみを黒色化する。291はやや小型の碗で、ほぼ全体の形状等を知ることができる。内外面とも黒色化しており、口縁部内面には暗文を4か所に、また、底部内面にも螺旋状の暗文を施している。底部には290と同様、小さな高台を貼り付ける。292は土師器羽釜である。口縁端部は外下方に傾斜する面をもち、その直下に長さ1.8cm程度の鈔が付く。293は甕であるが、内面が全面黒色であることから黒色土器と考えられる。294は平瓦の破片である。端部はいずれの面も認められない。凹面には、粘土板から切り離した際の糸切り痕が明瞭に認められる。また、製作時に伴う調整痕として、内面に布目の圧痕が、外面には平行縄目タタキの痕跡が明瞭に残る。出土した遺物のうち、285~287・289~291は平安時代中期のものと考えられる。

溝 S D 0906 (第54図295) 295はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。外面に板状の工具痕が認められる。平安時代中期以降のものであろう。

柱穴 S P 0928 (第54図296・297) 296は須恵器杯身である。口縁部の形状や底部の調整、法量



第53図 F9区出土遺物実測図1(1/4)



第54図 F9区出土遺物実測図2(1/4・1/2)

などから古墳時代後期末(陶邑編年TK209型式)に位置づけられる。297は黒色土器の底部である。内外面とも黒色化しており、底部外面にはやや小型化した高台を貼り付ける。平安時代中期のものであろう。

土坑S K0904(第54図298) 298は弥生土器壺である。短く立ち上がる受口状の口縁部に緩やかに屈曲する頸部から直線的に肩部に至る。体部外面をほぼ全面的にナデを施す。下層遺構の遺物が混入したものであろう。

土坑S K0921(第54図299) 299は弥生土器壺の肩部から体部中位にかけての破片である。破片の上部から波状文と列点文を施す。調整は外面に密にミガキを施す。

土坑S K0912(第54図300) 300は土師器もしくは土製品と考えられるが、器形等については不明である。横断面形をみると、平坦な面と湾曲した面があり、仮に平坦な面を上面とすると、上面はナデで仕上げているのに対して、下面にはケズリを施す。また、図の上面から左側は斜め下方に延びて端部を丸くおさめる。一方、右側はさらに別のものに接合されていた痕跡が認められる。出土した破片からは全体の形状や用途、時期などは推定できない。

遺物包含層(第54図301~305) 301は土師器甕である。口縁部や底部の先端を欠損するが、いわゆる庄内式甕と推定される。302は土師器二重口縁壺の口縁部である。口縁端部をつまみ上げて外面に面を作る。頸部から大きく外反して口縁部に至る器形と考えられる。303は土師器羽釜

である。ほぼ直立した口縁部の端部直下に長さ1.6cm程度の鈎が付く。鈎の上面はヨコナデによりやや強く凹む。304は須恵器椀の底部と思われる。底部外面に糸切り痕跡が明瞭に残る。305は皇朝十二銭の一つで、饒益神寶(初鋳859年)である。直径1.9cm、重量1.3gである。

(筒井崇史)

11) F10区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

F9区の西側に設定した南北13m、東西14.5mの矩形の調査区である(第55図)。現地表面の標高はおおよそ15.6mである。調査面積は185㎡である。出土した遺物は整理箱7箱である。

基本的な層序は、表土である褐色細砂(1・2層)を除去すると、近現代の素掘り溝(4層)などを確認した。これらの下層に暗灰黄色細砂混じりシルト(5層)や黄灰色細砂混じりシルト(7層)が堆積する。これらは中世から近世にかけての遺物包含層で、瓦器椀や青磁、土師器などが出土した(第60図327~333)。これらを除去すると、厚さ0.4mほどの灰色細砂混じりシルト(8層)が広く調査地内に認められる。中世の遺物包含層で、瓦器椀や土師器皿などが出土した。平安時代の土師器皿も含まれている。この下層で鳥畑110の基盤層となっている灰色シルト層(10層)を検出した(標高14.5m付近)。詳細な時期は不明であるが、中世の鳥畑である10層を除去すると、弥生時代後期の遺構面を形成する灰色粘土(16・17層)を確認した(標高14.2m付近)。また、溝状遺構SD1026の埋土である灰色シルト層(11層)を除去した際に調査地の北東部で溝SD1027を確認した。その埋土は灰オリブ色シルトや灰色粘土である(12~15層)。16・17層の下層であるオリブ灰色粘土(18層)からは弥生時代中期の鉢の破片が出土している(第60図352)。16層以下はおおむね水平に堆積しており、オリブ灰色粘土や灰色粘土などが確認できる。明確に地山と判断される堆積層は確認できていない。19層以下はいずれも遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。なお、15層以下はいずれも自然堆積と考えられる(第56図)。

(2) 検出遺構

① 上層遺構

鳥畑110(第55図上段) 調査区の西半部で検出した(I7-a1区ほか)。南北方向の鳥畑である。検出長9.9m、検出幅4.5m、高さ0.8m前後である。鳥畑上面の標高はおおよそ14.5mである。鳥畑の上面では素掘り溝を2条検出した(SD1001・1009)。鳥畑の上層に堆積する遺物包含層の出土遺物から中世前半の鳥畑と考えられる。

溝状遺構SD1026(第55図上段) 鳥畑110の東側で検出した(I6-a25区ほか)。検出長10.8m、検出幅8.6~10.0m、深さ0.8mである。埋土は灰色シルト(第56図11層)である。

素掘り溝SD1001(第55図上段) 鳥畑110の上面で検出した(I7-a1区ほか)。検出長10.0m、幅0.4m、深さ0.1m前後である。出土遺物には土師器甕や須恵器壺または鉢などがある(第59図306・307)。出土土器から時期は判断しにくい。SD1001は鳥畑に伴う素掘り溝と考えられる。

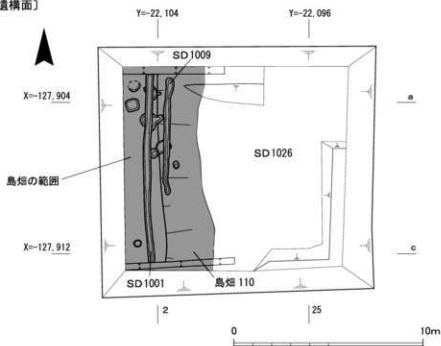
素掘り溝SD1009(第55図上段) 溝SD1001の東側、鳥畑の斜面に相当する位置で検出した(I7-b1区ほか)。検出長6.2m、幅0.4m、深さ0.05m前後である。出土遺物はほとんどない。なお、

素掘り溝 S D 1001・1009と重複して直径0.3～0.6m、深さ0.1m前後の土坑状の遺構を検出した。性格等は不明で、遺物も出土しなかった。

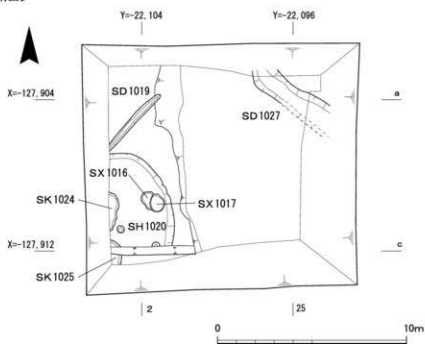
②下層遺構

土器溜まり S X 1016・S X 1017 (第57図) 調査区南西寄りで弥生土器甕2個体が横位の状態で出土した (I7-c区)。両者は後述する竪穴建物 S H 1020が埋没したのちに廃棄された可能性の

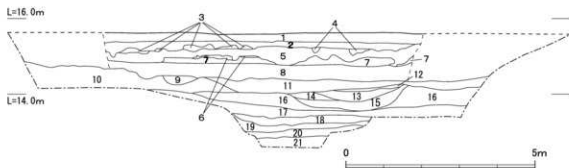
〔上層遺構面〕



〔下層遺構面〕

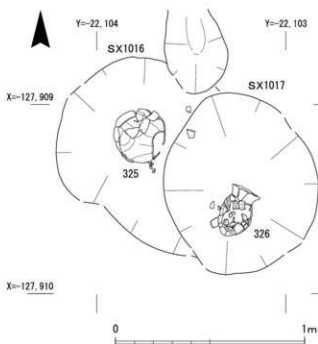


第55図 F 10区遺構配置図(1/200)



- | | |
|--|---|
| 1. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂 (表土) | 12. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト (有機物を含む) |
| 2. 褐灰色 (10YR5/1) 細砂
(にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂が礫状に混じる) | 13. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂混じりシルト (炭化物を含む) |
| 3. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂混じりシルト (炭化物を含む) | 14. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂混じりシルト (炭化物を含む) |
| 4. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂混じりシルト (径5mmの礫を含む) | 15. 灰色 (7.5Y5/1) 粘土 |
| 5. 増黄褐色 (2.5Y5/2) 細砂混じりシルト (径10mmの礫を含む) | 16. 灰色 (10Y5/1) 粘土 (炭化物を含む) |
| 6. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂 (粘土がブロック状に混じる) | 17. 灰色 (10Y4/1) 粘土
(オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘土がブロック状に混じる) |
| 7. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂混じりシルト (炭化物を含む) | 18. オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘土
(オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘土がブロック状に混じる) |
| 8. 灰色 (7.5Y4/1) 細砂混じりシルト
(有機物含む、径1cm以下の礫を含む) | 19. オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘土
(灰色 (10Y5/1) 粘土がブロック状に混じる) |
| 9. 灰色 (10Y4/1) シルト (径4cmの礫を含む、炭化物を含む) | 20. 灰色 (7.5Y5/1) 粘土 |
| 10. 灰色 (7.5Y5/1) シルト
(灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルトがブロック状に混じる) | 21. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘土 (炭化物含む) |
| 11. 灰色 (7.5Y6/1) シルト | |

第56図 F10区北壁土層断面図(1/100)



第57図 F10区土器溜まり S X1016・1017実測図(1/20)

高いものである。周囲を精査した結果、不明確ながら浅い落ち込み状の痕跡を確認した。両者の掘形には重複関係が認められるが、土器の形式から大きな時間差はないと考えられる。また、遺物の出土状況や遺存状況から、二次的に堆積したのではなく原位置を留めていると考えられる。

溝 S D1019 (第55図下段) 調査区の北西部で検出した(17-a1区)。検出長4.0m、幅0.4m、深さ0.1m前後を測る。溝は北に対して44°東に振る。埋土は灰色細砂で、弥生土器の破片などが出土した。

溝 S D1027 (第55図下段) 調査区の北東部で検出した(16-b24・a25・b25区)。北西から南東に向かって延びる溝で、検出した規模は検出長約4.5m、幅約1.4m、深さ約0.5mである。埋土は

第56図12～15層が相当する。遺物は土器の細片が出土したが、時期を断定するには至らなかった。

竪穴建物 S H 1020 (第58図) 調査区の西半部、やや南寄りで検出した (I7-c1区)。平面形は円形を呈するが、竪穴建物の北東部を検出したのみである。南北長5.8m、東西長3.4m、深さ0.15mを測る。外周には幅0.25～0.4m、深さ0.05mの周壁溝がめぐる。復原すると直径8.2mほどの竪穴建物となる。竪穴建物の埋土は灰オリーブ色粘質土、周壁溝の埋土はオリーブ黄色粘性砂質土である。灰オリーブ色粘質土を除去すると、土坑を2基 (S K 1024・1025) 検出した。遺物は埋土や床面上、周壁溝などから壺・甕・高杯・器台などが出土した (第59図308～324)。

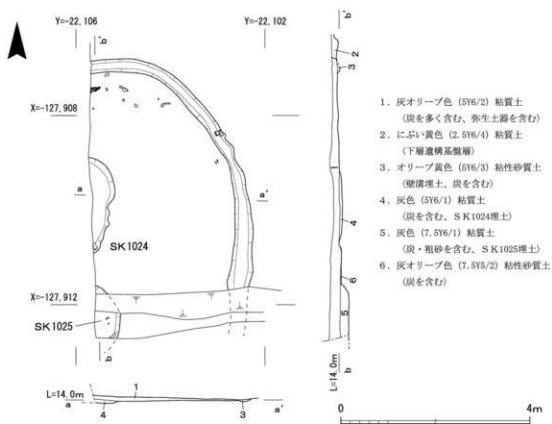
土坑 S K 1024は、S H 1020中央部よりやや北寄りで検出した。土坑の一部は調査区外となるが、南北長2.1m、東西長0.5m分を確認した。深さはわずか0.05mと非常に浅い。埋土は灰色粘質土で、炭を含む。遺物は有孔鉢が出土した (第59図323)。一方、土坑 S K 1025は S H 1020の中央部やや南寄りで検出した。土坑の一部は調査区外となるが、南北長1.1m以上、東西長0.55m以上、深さ0.15mで、S K 1024に比べてやや深い。埋土は灰色粘質土で、炭や粗砂を含む。遺物は器台や甕の底部などが出土した (第59図318・322)。

(岡田健吾・筒井崇史)

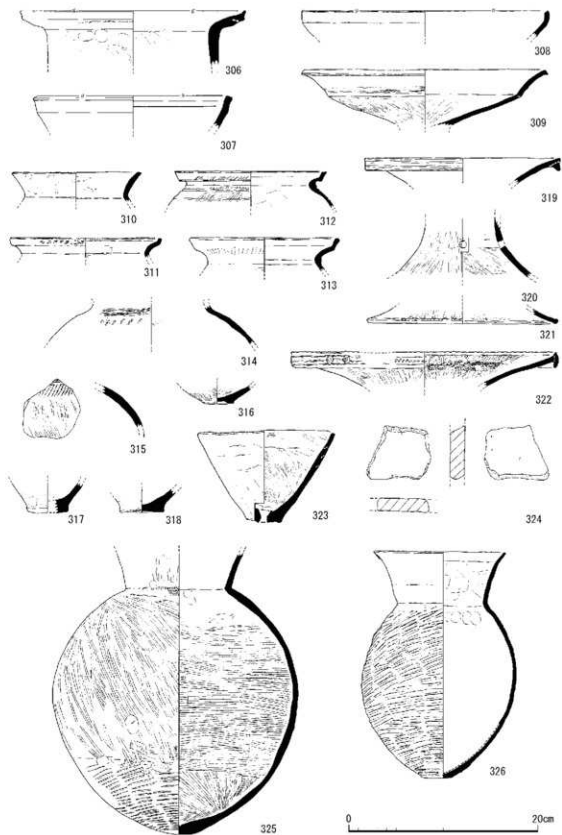
(3) 出土遺物

溝 S D 1001 (第59図306・307) 306は土師器甕である。口縁端部をつまみ上げ、肩部が張らない器形を呈する。307は須恵器壺もしくは鉢の口縁部と推定される。口縁部内面に細い沈線が1条めぐる。どちらも詳細な時期は不明である。

(筒井崇史)



第58図 F10区竪穴建物 S H 1020実測図 (1/80)



第59図 F10区出土遺物実測図1(1/4)

竪穴建物 S H 1020 (第59図308~324) 308~323は弥生土器、324は砥石である。このうち、308・309・315は周壁溝内から、318・319は建物内土坑 S K 1025から、323・324は建物内土坑 S K 1024から、それぞれ出土した。308は高杯の口縁部である。口縁端部を緩やかに上方に立ち上げ、面をなす。309は皿状の杯部をなす有稜高杯である。口縁部は大きく外反し、端部をやや外方に引き出す。杯部内外面はていねいなミガキを施し、口縁部外面下部に1条の直線文を施す。胎土は、径1~2mm大の石英、長石、チャート、堆積岩類に由来する砂粒を混和材とする。杯部に直線文をもつ有稜高杯は在地系土器には見られず、東海地方の山中式の加飾有稜高杯と見られる。色調は灰白色を呈し、搬入土器と推定される。

310~313の甕は、単純「く」字状口縁をなすもの(310)と受口状口縁(311~313)がある。受口状口縁をなす近江系甕は、にぶい黄橙色を呈する。312は口縁部の受け部の屈曲が明瞭で、端部も薄く平坦におさめる。口縁部外面下半に列点文を施す。肩部外面は、粗い斜め縦方向のハケののち間隔をあけて2条以上の沈線を巡らせる。胎土は、石英・長石・黒雲母の花崗岩組成の砂粒のほか、チャート、頁岩等の堆積岩類の径1~2mmの粗粒を多量に含む。口縁部形態や文様構成、断面が全体に黒褐色を呈することから、野洲川流域からの搬入土器とみられる。311・313は、いずれも口縁端部を丸くおさめるが、口縁部外面の列点を、受け部の外面全体に施すもの(311)と受け部下半に施すもの(313)がある。314・315は受口状口縁甕の肩部であり、いずれも直線文と列点文を上下に配した文様をなす。316は外面にミガキを施す窪み底の壺底部、317・318は厚みのある平底をなす甕底部とみられる。

319~322は器台である。319の器台の受け部は、口縁部に粘土帯を貼り付け、外面をナデ調整によって仕上げる。口縁部外面に擬凹線を3条施す。320は器台胴部下半で、4か所のスカシ孔をもつと見られる。321は裾部端部外面にキザミを施す。322は赤彩土器である。受け部から口縁部内外面にかけて赤彩が施される。全体に加飾性が高く、受け部口縁外面には、擬凹線文を施したのち、刺突文を巡らせ、円形浮文を配し、さらに口縁端部には、キザミを巡らせる。受け部内面は、ミガキ調整のち細かな波状文を施す。胎土は良好で、径0.5mm大の石英・長石・チャートを少量含む。色調は灰白色を呈するが、円形浮文のみ明褐色を呈し、器体と異なる粘土素地が用いられている。東海地方からの搬入土器と推定され、おおよそ山中式Ⅱ式2~3段階(段)に属する。324は砥石で、砂岩製である。両面ともに使用痕が認められる。 (高野陽子)

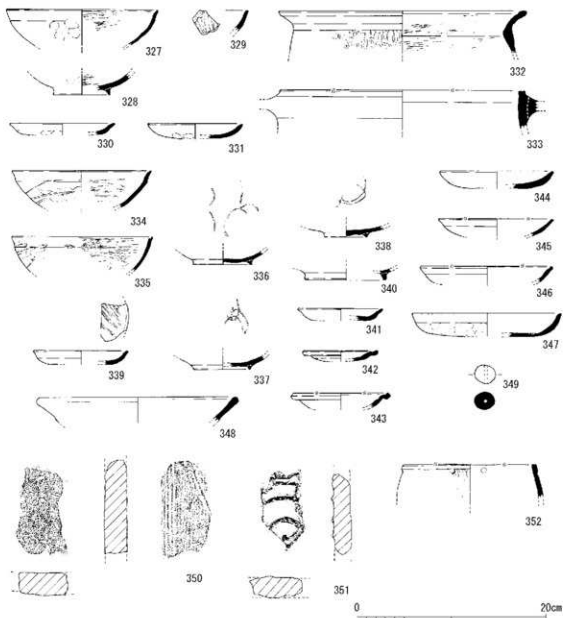
土器瀧まり S X 1016 (第59図325) 325は弥生土器壺であるが、口縁端部を欠損するため、広口壺なのか直口壺なのか判断できない。分割成形のため、内面のハケの痕跡が不連続となる。また、ほぼ同じ位置で、外面調整がタタキからミガキへと変化する。体部外面下半に、幅9.5cm、高5.8cmの焼成後穿孔が認められる。

土器瀧まり S X 1017 (第59図326) 326は弥生土器の広口の直口壺である。口縁部がやや外反気味に広がり、体部外面にタタキを施す。

遺物包含層 (第60図327~第61図374) 遺物包含層出土遺物は、出土層位の明らかなもの(第60図)と重機掘削中や壁面精査など、出土層位の明らかでないもの(第61図)とがある。327~333は

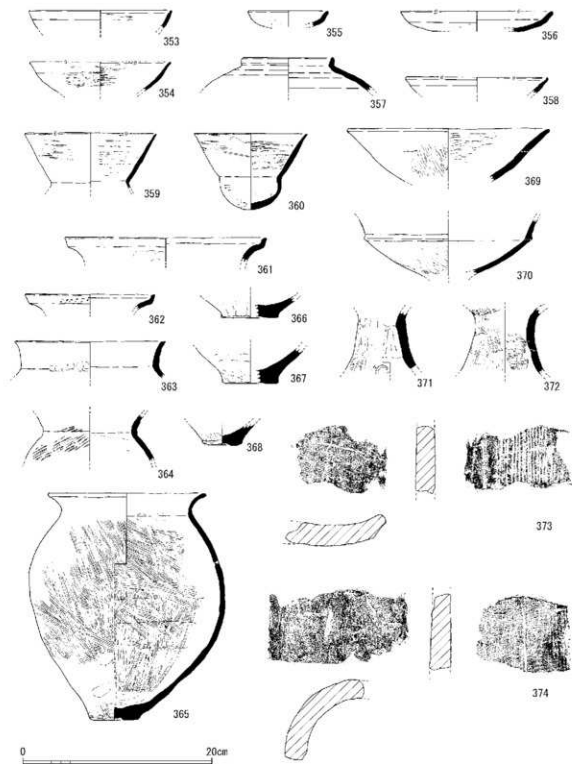
暗灰黄色細砂混じりシルト(第56図5層)から出土したものである。327・328は瓦器椀である。327は口縁端部内面に沈線を施す。楕葉型瓦器椀であろう。328は底部でやや高めの、断面形が三角形状を呈する高台を貼り付ける。329は青磁椀の小破片である。330・331はほぼ同形同大の土師器皿である。332は土師器甕である。口縁端部は水平な面をなし、肩部が張らない器形を呈する。333は土師器羽釜である。鈿を欠損するが、短い口縁部の直下に鈿を貼り付ける。

334~349は灰色細砂混じりシルト(第56図8層)から出土したものである。334~338は瓦器椀である。334・335は楕葉型瓦器椀の口縁部で、口縁端部に沈線を1条施し、内面には密にミガキを施す。体部はユビオサエヤナデで成形した後にわずかにミガキを施す。336~338は底部で、338は断面三角形の高台を貼り付けるが、336・337はやや台形状の高台を貼り付ける。339は瓦器皿



第60図 F10区出土遺物実測図2(1/4)

である。340は黒色土器碗の底部の破片である。瓦器碗に比べるとやや高めで、断面台形状で高台を貼り付ける。341～347は土師器皿であるが、法量や形態に差があり、時期差を想定できる。341は平底気味の底部から口縁部が外反気味に延びる。342・343はいわゆる「て」字状口縁を呈する。344・345は平底、もしくははや丸みを帯びた底部から口縁部がわずかに外反気味に延びる。



第61図 F10区出土遺物実測図3(1/4)

346は外反気味に延びる口縁部の端部がつまみ上げ気味に肥厚する。347は平底の底部から口縁部がわずかに外反気味に延びる。348は須恵器鉢と推定される破片である。口縁端部がやや肥厚気味に丸くおさめられている。349は土玉である。直径0.2cmほどの穴が穿たれている。

350は灰色シルト層(第56図10層)から出土した平瓦の破片である。四辺とも欠損する。凹面に布目痕がみられ、凸面に縄目タタキを施す。

351は灰色粘土(第56図15層)から出土した重圏文軒丸瓦の破片で、中心部と内区の一部が残存する。圏線は少なくとも3重にめぐる。

352はオリーブ灰色シルト層(第56図18層)から出土した弥生土器鉢である。口縁部外面が突帯状に肥厚し、口縁直下に直径0.5cm程度の小孔を穿つ。形態から中期後半のものであろう。

353～374は、出土層位の不確かなものである。353・354は桶葉型瓦器碗であらう。355・356は土師器皿である。355は小型品であるが、やや深手である。356は平底気味の底部から緩やかに口縁部が延びる。357は須恵器壺Aである。口縁部は上方に短く立ち上がる。358は土師器甕の口縁部である。端部を強くつまみ上げていることから庄内式甕の口縁部であらう。359・360は土師器小型丸底壺である。360は外面にケズリの後にナデを施した小さな体部に大きく開く口縁部をもち、359もほぼ同じような器形と考えられる。361・362は受口状口縁を呈する土師器甕もしくは壺の破片である。361の口縁部外面は無文であるが、362の外面には列点文を施す。363～365は口縁部が単純「く」字状を呈する弥生土器甕である。363は口縁端部にほぼ水平な面をもち、口縁部は緩やかに外反する。364は口縁端部を欠損するが、363と同様に口縁部が緩やかに外反する。頸部付近の調整痕から口縁部タタキ出しと推定される。365はほぼ完形に復元することができた甕で、口縁部が大きく外反する。底部外面はわずかに凹む。366は弥生土器壺もしくは甕の底部である。367は弥生土器壺の底部である。368は弥生土器甕の底部である。369は土師器高杯の杯部である。370は口縁端部を欠損するものの弥生土器高杯の杯部である。杯底部外面にミガキを施すが、内面はナデの可能性が高い。371・372は弥生土器高杯の脚部である。371は破片の下部に穿孔を確認できる。373は平瓦である。面取りされた側辺の一部が残存する。凹面の布目の圧痕、凸面に縄タタキの痕跡がそれぞれ遺存する。374は丸瓦である。凸面はナデで仕上げ、凹面に布目の圧痕が認められる。

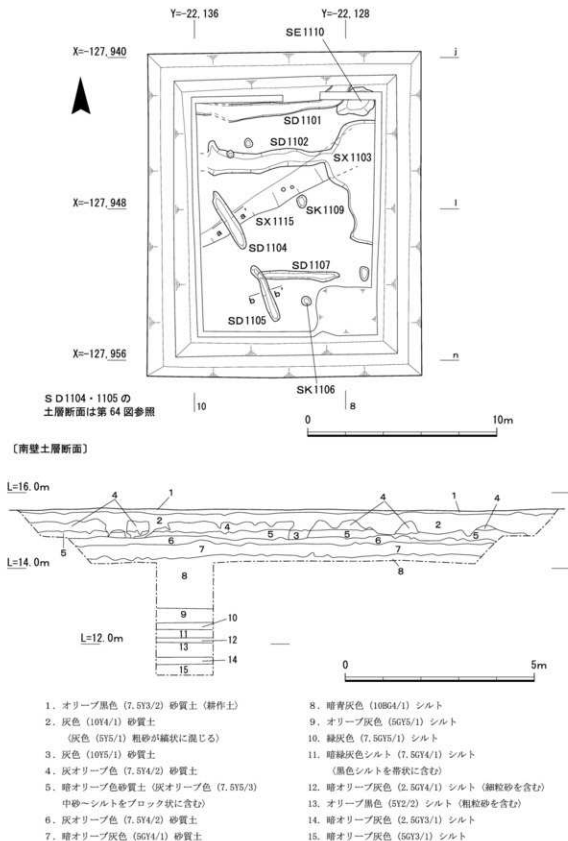
(筒井崇史)

12) F11区の調査

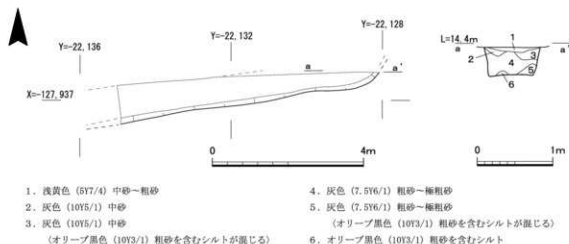
(1) 調査区の概要と基本的な層序

F地区の最も南東に設定した南北17m、東西14.5mの矩形の調査区である(第62図上段)。F12区とともに、今回報告する調査地点の中では、現木津川の流路に最も近い調査区である。現地表面の標高はおよそ15.6mである。調査面積は240㎡である。出土した遺物は整理箱5箱である。

基本的な層序は、現代水田耕作土であるオリーブ黒色砂質土(1層)の下層に、灰色砂質土(2層)、灰オリーブ色砂質土(4層)、暗オリーブ色砂質土(5層)、灰オリーブ色砂質土(6層)、暗オリーブ灰色砂質土(7層)、暗青灰色シルト(8層)が堆積する。2～6層からは近世を中心とする遺物が少量出土している。これらを除去した7層からは瓦器・土師器・白磁などの遺物が多数



第62図 F11区遺構配置図(1/200)・南壁土層断面図(1/100)



第63図 F11区溝 S D 1101実測図(1/100・1/50)

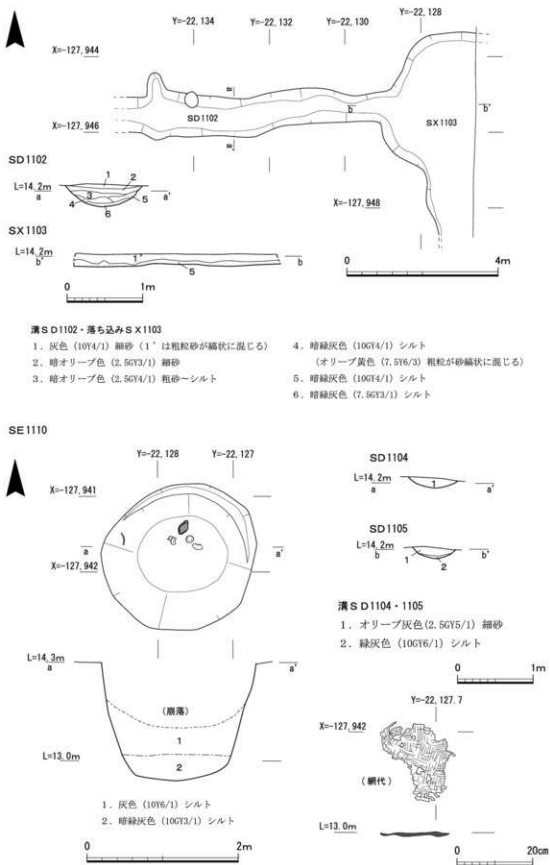
出土しており、中世の遺物包含層であると考えられる。7層を除去すると、弥生時代から中世にかけての遺構を8層上面で検出した(標高14.3m付近)。F11区ではすべての遺構を同一面で検出した。8層の下層は断ち割り調査を行い、標高約129～130mでオリーブ灰色シルト(9層)を確認した。この層位はF12区でもほぼ同様の標高で検出しており、調査地周辺に安定した層位としてほぼ水平に堆積している状況が伺える。さらに下層の標高11.2mまで断ち割り調査を行い、緑灰色シルト、オリーブ黒色シルト層などが厚く堆積することを確認した(10～15層、第62図下段)。

(2) 検出遺構

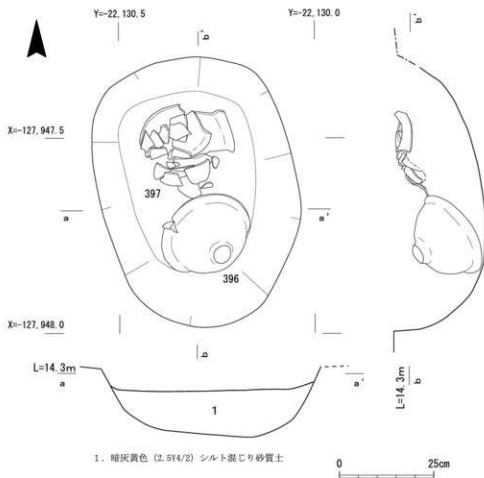
井戸 S E 1110(第64図左下) 調査区の北東隅で検出した(I7-k7-k8区)。井戸枠は認められず、素掘りの井戸である。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形状をなす。直径約2.0m、深さ約1.6mである。湧水が著しく、壁体の一部が崩壊したため、層位は上層の図化に至っていないが、中層に灰色シルト、下層に暗緑灰色シルトが堆積する。埋土からは瓦器碗、土師器皿などが多量に出土した(第66図375～384)。また、井戸の底から20cmほど上層で蔓植物の繊維による網代が出土した(第64図右下)。出土遺物から中世前半(11世紀後半)と推定される。

溝 S D 1102・落ち込み S X 1103(第64図上段) 調査区北半部で検出した(I7-I7区ほか)。S X 1103は、南北5.6m以上、東西2.4m以上、深さ約0.3mの不整形な落ち込みで、東側は調査区外となる。一方、西側は溝 S D 1102と接続する。S D 1102は検出長6.5m、幅0.7～1.1m、深さ0.3mを測る。S D 1102の底面は、東から西へ向けて緩やかに傾斜している。S D 1102はS X 1103から西側に向かって掘削されたと考えられる。遺物は、図示できない瓦器碗の細片が出土しており、中世の遺構と推定される。

溝 S D 1101(第63図) 調査区北辺に沿って検出した(I7-k8区ほか)。東西方向に約8mにわたって検出したが、東端で北東へ屈曲している。幅0.8～1.0m、深さ0.35mを測る。溝の断面形は方形である。埋土は粗砂が主体となることから、洪水によって埋没した可能性がある。遺物は弥生土器や土師器が出土しているが、下層遺構のS X 1115に伴う遺物の混入と見られる。中世前半の遺物包含層(第62図下段7層)を切り込む溝で、中世後半～近世にかけての溝と推定される。



第64図 F11区溝SD1102・井戸SE1110ほか実測図(1/100・1/50・1/40・1/10)



第65図 F11区土坑S K1109実測図(1/10)

土坑S K 1106(第62図上段) 調査区の南半部で検出した(I7-n8区)。ほぼ円形の土坑で、直径約0.5m、深さ約0.1mである。瓦器碗や土師器皿などが出土した(第66図387~393)。

溝S D 1107(第62図上段) 調査区南部で検出した(I7-m8区)。規模は、検出長4.0m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。遺物は出土していないが、検出標高やS D 1102と平行することから、中世と推定される。

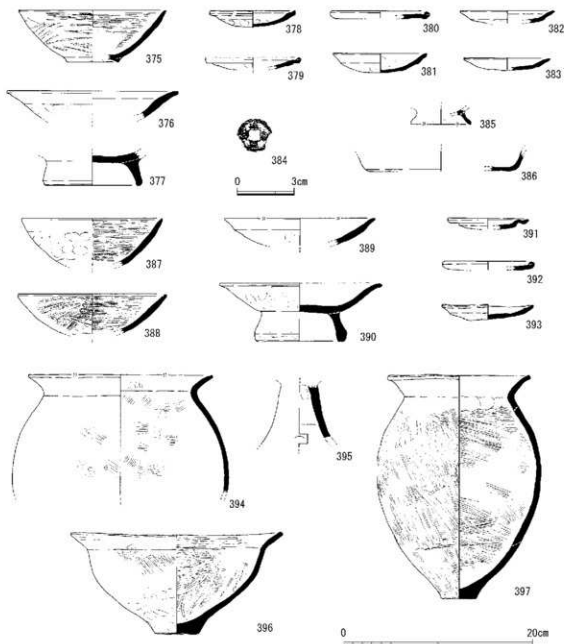
溝S D 1104・S D 1105(第62図上段) 調査区西部で検出した(I7-19区ほか)。S D 1104は全長3.4m、幅約0.7m、深さ0.1mを、S D 1105は全長3.2m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。2条の溝は直線上にあり、本来は同一の溝と推定される。溝底の標高は、S D 1105がやや低く、北西から南東へ掘削されたと考えられる。出土遺物は細片であるが、S D 1104から出土した土器(第66図385・386)から平安時代の溝の可能性はある。

土坑S K 1109(第65図) 調査区のほぼ中央で検出した(I7-l8区)。平面形は不整形な楕円形で、南北0.7m、東西0.5m、深さ0.25mを測る。埋土は、暗灰黄色シルト混じり砂質土の1層で、土坑内からはほぼ完形の弥生土器甕1点と鉢1点が出土した(第66図396・397)。甕は横位で、鉢は反転した状態で出土した。鉢を甕の蓋とした貯蔵器か、あるいは土器棺の可能性はある。出土土器から時期はおおよそ佐山Ⅱ-3式^(B7)に併行する弥生時代後期後葉~末と推定される。

落ち込みS X 1115(第62図上段) 調査区北部の溝S D 1101・1102の下層で確認した(I7-k7区ほか)。南から北へ向けて大きく落ち込み、調査区内で落ち込みの南肩を確認した。北壁付近で落ち込みの底の標高はおよそ13.5mで、深さは約0.7mを測る。S D 1101の埋土からS X 1115に属すると見られる弥生土器が出土しており、土坑S K 1109と同じく、弥生時代後期後葉～末の落ち込みあるいは旧流路の肩の可能性はある。(高野陽子・岡田健吾)

(3)出土遺物

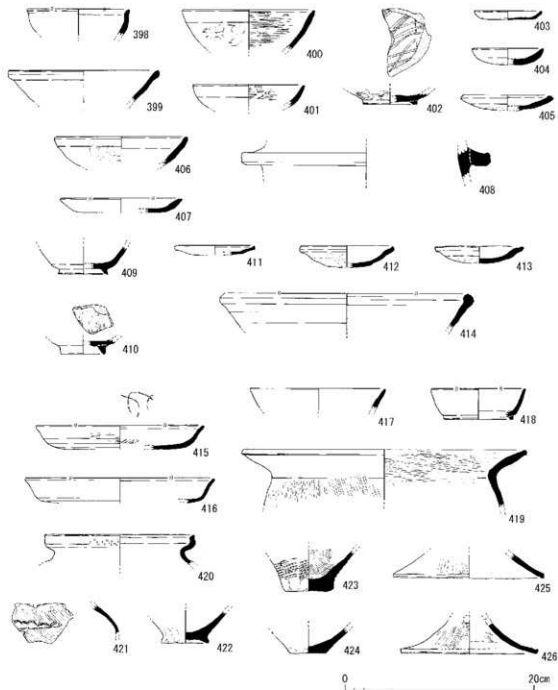
井戸S E 1110(第66図375～383) 375は楠葉型瓦器碗と推定されるが、口縁端部に沈線を施さない。376・377は同一個体の可能性もある土師器脚台付皿である。全体の形状は後述する土坑S



第66図 F11区出土遺物実測図1(1/4・1/2)

K1106出土の390に類似するが、377の高台は390の高台ほど器壁の厚さが変化しない。378・379はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。380はいわゆるコースター形の土師器皿である。381～383は口縁部にヨコナデを施す土師器皿である。384は皇朝十二銭の1つで、延喜通宝(初鋳907年)である。部分的に欠損するため残存値であるが、直径1.8cm、重量1.1gである。

溝SD1104(第66図385・386) 385は黒色土器椀の高台部分である。足高の高台である。平安時代中期のものであろう。386は口縁部を欠損するものの土師器杯もしくは皿である。暗文等は認められないが、平底の底部から口縁部が立ち上がる。器形的には奈良時代後半のものであろう。



第67図 F11区出土遺物実測図2(1/4)

土坑 S K 1106 (第66図387～393) 387・388は桶型瓦器碗であろう。ともに厚手の器壁で、口縁端部に沈線を施すが、外面の調整は大きく異なる。387は外面にナデやエビオサエのみでミガキを施さないのに対して、388は外面にも密にミガキを施す。389は土師器皿である。口縁部はわずかに外反する。390は井戸 S E 1110出土の376・377と同系統の土師器脚台付皿である。口縁部が外反する皿部に、下部がやや分厚くなる高さ3cmほどの高台を貼り付ける。391はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。392はいわゆるコースター形の土師器皿である。393は口縁部にヨコナデを施す土師器皿である。

溝 S D 1101 (第66図394・395) 394は弥生土器甕である。全体に摩滅が著しい。395は土師器もしくは弥生土器高杯の脚柱部である。「ハ」字状に開いて脚基部に至る。脚部にスカシ孔が穿孔されている。

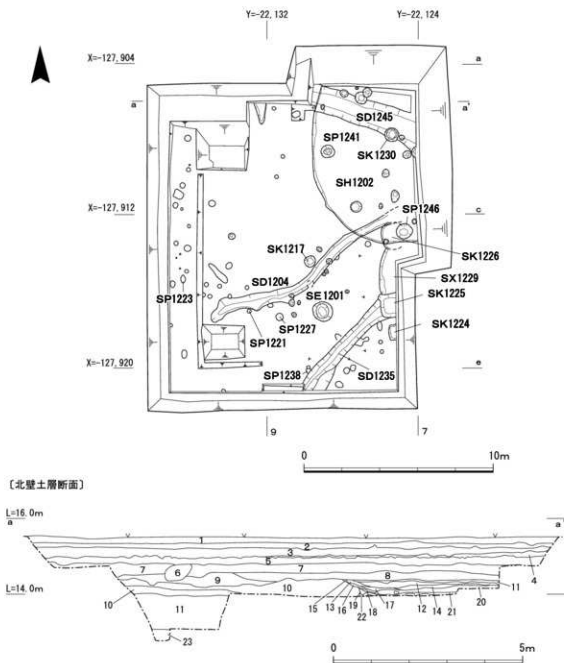
土坑 S K 1109 (第66図396・397) 396は完形の弥生土器鉢である。やや突出気味の底部に内湾気味に立ち上がる体部から口縁部が大きく屈曲して開く。397は単純「く」字状口縁の弥生土器甕である。底部は平底である。

遺物包含層 (第67図398～426) 遺構に伴わないものを一括する。398は天目碗の破片である。内湾する体部にわずかに外反気味の口縁部からなる。399は白磁碗である。口縁部が少し肥厚して玉縁状となる。400～402は瓦器碗である。400・401は内面に密にミガキを施す。401は小型品である。402は底部の破片で、高台は断面台形を呈する。403～405は土師器皿である。405は口縁部内面が肥厚する。406は土師器碗と推定されるが、やや厚手のものである。407は土師器皿である。408は土師器羽釜の鈔の部分である。409は緑釉陶器碗である。410は黒色土器碗の底部である。断面三角形を呈する高台を貼り付ける。411～413は土師器皿である。端部をわずかにつまみ上げる点で共通するが、412・413は中型品、411は小型品である。414は須恵器鉢で、口縁端部が肥厚する。415・416は土師器皿Aである。415の口縁端部は肥厚せずに沈線状を呈する。416は口縁部がわずかに外反して口縁端部内面が肥厚する。暗文等は認められない。417は須恵器杯の口縁部であるが、杯Aか杯Bか判断できない。418は須恵器杯Bである。口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。419は土師器甕である。体部にやや粗めのハケを施す。420～424・426は弥生土器、425は土師器である。420は受口状口縁を呈する甕である。口縁部外面に列点文を施す。421は420のような受口状口縁を呈する甕や壺の肩部の破片であろう。肩部に波状文を施す。422は鉢の底部である。底部の端部をつまみ出して高台状に仕上げている。423・424は甕ないし壺の底部である。425・426は高杯の脚部である。どちらも「ハ」字状に開く。426はスカシ孔を確認することができる。また、脚端上部にキザミを施す。(筒井崇史)

13) F 12区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

F地区の最も北西に設定した調査区である。南北17m、東西14mの矩形の調査区であるが、北東部は壁面の崩落を防ぐため2mほど東へ拡張した(第68図上段)。現地表面の標高はおよそ155mである。調査面積は275㎡である。出土遺物は整理箱14箱である。



1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 (耕作土)
2. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂質土に灰白色 (5Y7/1) 砂が混じる
3. 灰色 (7.5Y4/1) 細粒砂
4. オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質土
5. 暗オリーブ褐色 (5GY4/1) 細粒砂～シルト
6. 暗緑灰色 (10GY4/1) 中粒砂～シルト
7. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細砂～シルト
8. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 極細粒砂～シルト
9. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト
10. オリーブ灰色 (10Y5/2) 細砂～シルト
11. オリーブ灰色 (5GY5/1) 細砂～シルト
12. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 細砂～極細砂
13. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 細砂～極細砂
14. 灰色 (7.5Y5/2) シルト～極細砂
15. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粗砂混じり細砂
16. 褐色 (7.5YR4/4) 木細砂 (炭土・炭化物を含む)
17. オリーブ灰色 (5GY5/1) 極細砂
18. 明褐色 (7.5YR5/6) 極細砂～シルト
19. 灰色 (5Y4/1) シルト
20. 暗赤褐色 (5YR3/2) 細砂 (炭化物・木質含む)
21. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細砂 (炭化物少し含む)
22. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 細砂 (炭化物含む)
23. オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト

第68図 F12区遺構配置図(1/200)・北壁土層断面図(1/100)

基本的な層序は、現代水田耕作土(1層)の下層に、灰オリーブ色砂質土(2層)、灰色砂混じりシルト(3層)、灰色細砂～中砂(4層)、オリーブ黒色砂質土(4層)、暗オリーブ褐色細粒砂～シルト(5層)、暗オリーブ灰色細粒砂～シルト(7層)、暗緑灰色極細粒砂～シルト(8層)、緑灰色シルト(9層)が堆積する。このうち、5層は近世の遺物を、8層は中世の遺物をそれぞれ包含する。また、9・10層上面で弥生時代から平安時代にかけての遺構を検出した(標高14.4m付近)。F11区と同様、上層遺構、下層遺構という区別はなくすべて同一遺構面で検出した。9層の下層については、断ち割り調査を行い、F11区とはほぼ同様の標高13.0m付近で、オリーブ灰色シルト(23層)を検出した。なお、第68図11～17層は溝S D1245の、同じく18～22層は竪穴建物S H1202の埋土である。

(2) 検出遺構

井戸S E1201(第69図下段右) 調査区南東部で検出した(I7-e8区)。平面形は円形を呈し、断面形は上部径に比べて下部径が小さく漏斗状を呈する。直径1.1m、深さ0.7mを測る。埋土は、大きく上層(1～3層)、中層(4層)、下層(5・6層)に分かれる。下層から土師器皿が出土した(第76図427～429)。時期は平安時代後期(11世紀末～12世紀初め)であろう。

土坑S K1224(第69図中段左) 調査区南東部で検出した(I7-e7区)。部分的に確認したもので、東側は調査範囲外となる。平面形はほぼ方形と考えられ、規模は南北長0.9m、深さ0.15mを測る。埋土は暗オリーブ灰色シルトである。出土遺物はわずかながら、図化が困難な土師器小片が出土しており、平安時代以降の古代ないし中世と推定される。

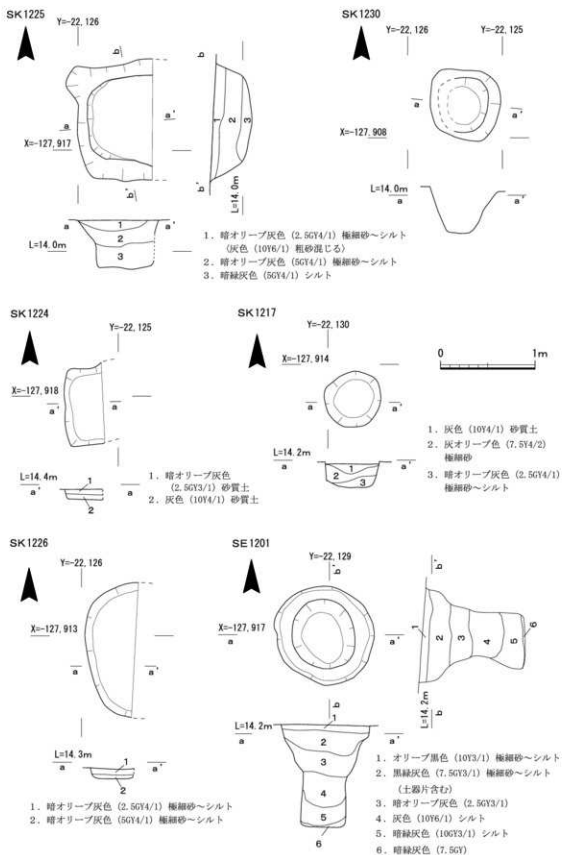
土坑S K1225(第69図上段左) 土坑S K1224の北側で、溝S D1235と重複して検出した(I7-e7区)。遺構の西半部を部分的に検出したもので、規模は南北長1.3m、深さ0.5mを測る。遺物はほとんど出土していない。時期は古墳時代後期の溝S D1235の埋土を掘り込んでいることや、S K1224と同様の埋土であることから、古代から中世と推定される。

土坑S K1226(第69図下段左) 調査区の東辺中央で検出した(I7-d7区)。平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は南北長0.7m、深さ約0.1mを測る。竪穴建物S H1202の埋土上層を削平しており、検出した標高から中世以降の土坑と考えられる。

土坑S K1230(第69図上段右) 調査区の北東部で検出した(I7-b7区)。S K1230は弥生時代のS H1202と古墳時代のS D1245と重複して検出した。平面形は方形を呈し、規模は一辺0.7m、深さ0.5mを測る。内部から石材が出土したことから、石組みによって壁体を補強し、水溜めとして用いられた可能性がある。土坑内から土師器甕、土師器皿などが出土した(第76図430～433)。時期は平安時代中期(10世紀後半頃)と推定される。

土坑S K1217(第69図中段右) 調査区中央で検出した(I7-d8区)。平面形が円形を呈する小型の土坑である。規模は直径0.6m、深さ0.3mを測る。わずかながら土師器片が出土しており、時期は古代～中世と推定される。

落ち込みS X1229(第68図上段) 調査区中央東端で一部を検出した(I7-d7区)。東側は調査区外となり、北端は土坑S K1226と、南端は土坑S K1225と重複する。これらによって埋土の一



第69図 F12区井戸SE1201、土坑SK1225ほか実測図(1/40)

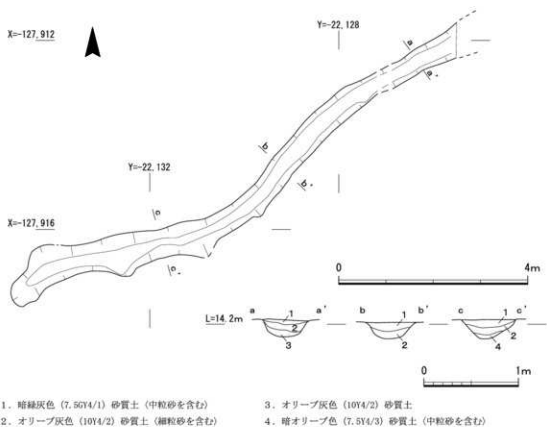
部が削平されている。規模は、南北長2.5m以上を測り、深さは東側に向かって徐々に深くなり、調査区東壁付近で約0.3mを測る。

溝 S D 1204 (第70図) 調査区中央部で検出した (I7-d7・e8・e9区)。検出長約11mで、やや蛇行する。規模は幅約0.65m、深さ0.2mを測る。断面形は「U」字形である。わずかに出土した土器から平安時代中期と推定される。

溝 S D 1235 (第71図) 調査区南東隅で一部を検出した (I7-e7区)。直線的に掘削された溝で、規模は検出長6.5m、幅0.7m、深さ0.35mを測る。断面形は逆台形状で、溝底の標高は北東から南西に向かって傾斜する。遺物は陶器編年 T K 209 型式におおよそ並行する須恵器杯身が出土しており、古墳時代後期末と推定される。

溝 S D 1245 (第71図) 調査区北東隅で検出した (I7-b7・b8区)。後述する弥生時代後期の竪穴建物 S H 1202 と重複しており、切り勝つものである。東西方向に掘削された溝である。規模は検出長5.6m、幅1.8~2.0m、深さ0.25mを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は灰色細砂、オリブ灰色シルト等である。溝内からおもに弥生土器が出土した (第78図491~493・497) が、これらは重複して検出した竪穴建物 S H 1202 に帰属するものと考えられる。時期は、わずかながら土師器甕の体部が確認されたことから、古墳時代と推定される。

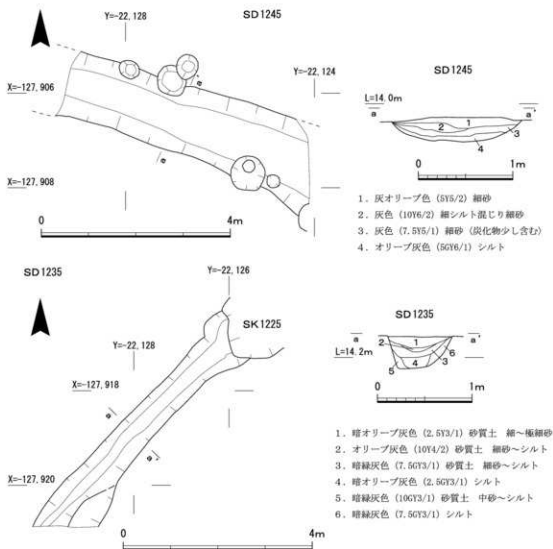
竪穴建物 S H 1202 (第72~75図) 調査区北東部で検出した (I7-b7・b8・c7・c8・d7区)。平面形が円形を呈する竪穴建物を部分的に検出したものである。調査区内で確認される規模は、南



第70図 F12区溝 S D 1204 実測図 (1/80・1/40)

北7.3m以上、東西4.3m以上を測る。床面は、調査区北壁外と東壁外に大きく広がる。埋土に炭化物や焼土の集積する層が認められることから焼失住居と考えられる。竪穴建物の復原規模は、直径10.1mで、床面の面積は約79㎡を測る。埋土中の炭化材や焼土は、床面から約5～10cm上位で検出しており、貼り床に相当する層位が確認できる。また、壁体に沿って、幅0.1m、深さ約0.05mの周壁溝を検出した。

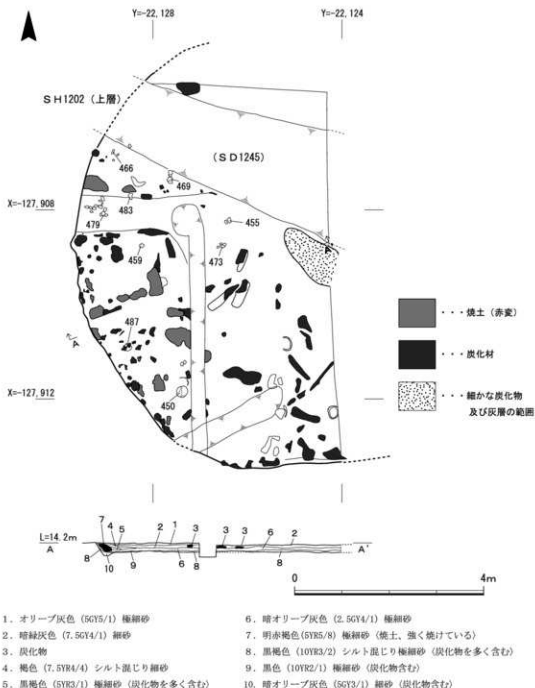
柱穴は、床面中央寄りの部分で深く掘削された2基を検出し、壁体周辺部で円弧状に4基を検出したことから、主柱を中央に配置し、側柱を放射状に配置する柱構成をとるものと考えられる。弥生時代後期後半以降の径9mを超える大型円形住居には、主柱と側柱の構成をとるものがしばしばみられる。本例もこうした大型住居の事例に準じた復原が可能であり、主柱は本来は中央に4基を配し、側柱を放射状に配したものと推定される。検出した主柱の柱間は、2.25mを測り、側柱は3.3～3.7mを測る。柱穴の規模は、主柱は直径0.4m、深さ0.4mを、側柱は直径0.3m、深さ0.25～0.45mを測る。側柱は、柱間8～9本で構成されると推定されるが、竪穴建物の平面形を



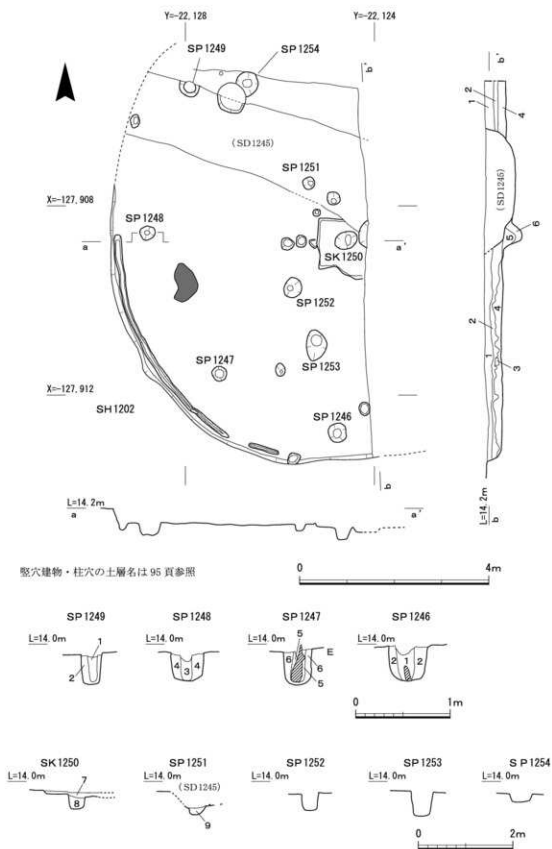
第71図 F12区溝SD1245・1235実測図(1/80・1/40)

ほぼ正円形とすると、柱間3.2~3.5mで、8基の側柱で構成される建物として復原することが可能である(第75図)。また、建物床面中央と推定される位置で、浅い方形土坑(S K1250)を検出した。上層の方形部分は、径1.1m、深さ0.15mを測り、中央部がさらに径0.35m、深さ0.3mの円形土坑状に窪む。埋土上層に多量の炭化物が含まれるが、被熱による明らかな土色変化や、焼土は認められず、土坑内から遺物は出土していない。炭化物が多量に出土していることから、保温機能を備えた、いわゆる灰穴炉に類する土坑と考えられる。

建物床面から出土した遺物はすべて弥生土器であり、甕・高杯・器台などがみられる(第77図



第72図 F12区堅穴建物SH1202実測図1(1/80)



第73図 F12区竪穴建物SH1202実測図2 (1/80・1/40)

S H1202 土層名

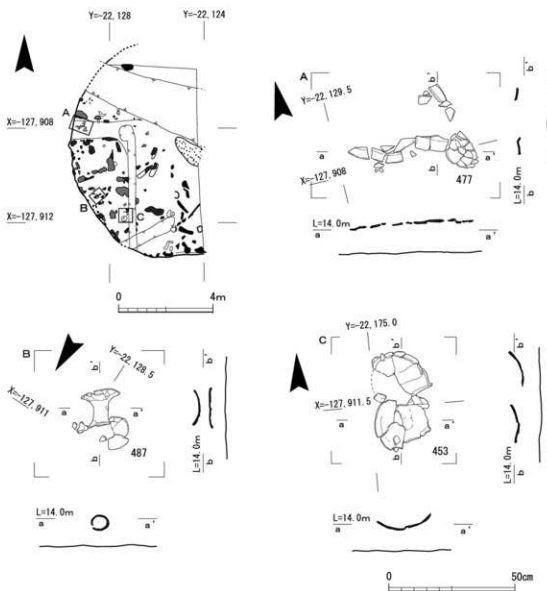
1. オリーブ灰色 (5GY5/1) 細砂混じりシルト
2. 暗緑灰色 (7.5GY5/1) シルト (炭化物含む)
3. オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト混じり細砂

4. 緑灰色 (10GY5/1) 粘土混じりシルト
5. 緑灰色 (10GY5/1) 粘土混じりシルト (炭化物を多く含む)
6. 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト混じり粘土 (炭化物を多く含む)

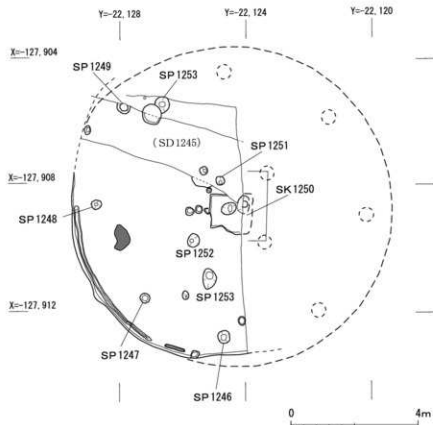
S H1202 柱穴・床面土坑土層名

1. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト (炭化物を少量含む)
2. オリーブ灰色 (5GY6/1) 粘土混じりシルト
3. 灰色 (5Y5/1) 細砂 (炭化物を少し含む)
4. 灰色 (7.5Y6/1) 細砂混じりシルト
5. 灰色 (10Y4/1) 細砂混じりシルト

6. オリーブ灰色 (5Y5/1) シルト
7. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細砂 (炭化物を多量に含む)
8. 灰色 (5Y5/1) 細砂混じりシルト
9. 灰色 (7.5Y6/1) 細砂混じりシルト



第74図 F12区竪穴建物S H1202遺物出土状況図(1/15)



第75図 F12区竪穴建物SH1202復原図(1/120)

450～第78図490)。また、北東部で重複して検出した溝SD1245から出土した弥生土器(第76図491～493・497)も、SH1202に帰属すると考えられることから、前述した器種のほかに壺が含まれる。壺には多様な器形がみられるが、角閃石を多量に含む河内産と推定される大型の壺の体部片が含まれることはとくに注目される。SH1202の時期は、出土土器から、佐山I式1段階^(B3)に併行する弥生時代後期中葉後半と推定される。(高野陽子)

(3) 出土遺物

井戸SE1201(第76図427～429) 3点とも土師器皿である。427はいわゆる「て」字状口縁の皿である。428・429はほぼ同形同大の皿で、口縁部にヨコナデを施す。427は小型、428・429は中型の皿である。

土坑SK1230(第76図430～433) 430・431はいわゆる「て」字状口縁の土師器皿である。おもに中型のもので、431は口縁端部を明瞭につまみ上げる。432は土師器甕である。口縁端部はやや内方につまみ上げる。433は須恵器甕である。口縁端部にほぼ水平な面をもつ。体部外面には平行タタキ痕が、内面にはナデ消されているが、当て具の痕跡が確認できる。

溝SD1235(第76図434～436) 434は土師器高杯の杯部と考えられる。外面にユビオサエ痕が多く認められる。435は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは短く、底部外面がヘラキリ後不調整なので、飛鳥時代以降のものであろう。436は長脚二段スカシの高杯の脚部の破片である。脚部の中位やや上部側に沈線を2条施し、その上部と下部に長方形のスカシを2対ずつ穿孔する。

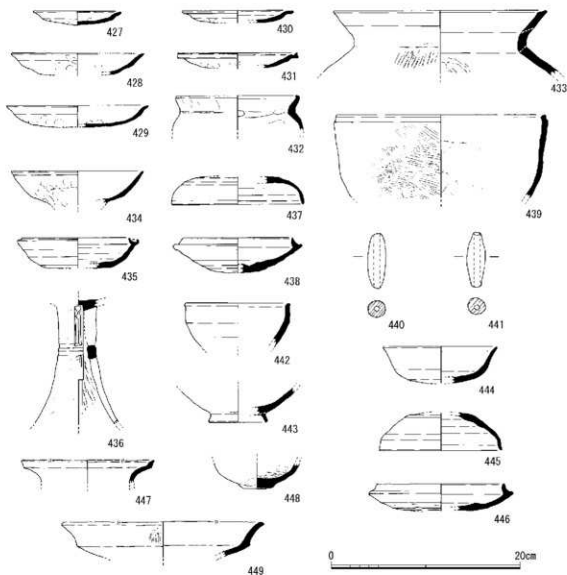
なお、土坑S K1225から出土したものであるが、本来はS D1235に属するものと思われる。

柱穴S P1223(第76図437) 437は須恵器杯蓋である。天井部上面はヘラキリ後不調整なので、飛鳥時代以降のものであろう。

柱穴S P1238(第76図438) 438は須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは短く、底部外面がヘラキリ後ナデであるので、飛鳥時代以降のものであろう。

柱穴S P1221(第76図439~441) 439は大型の土師器鉢である。口縁部はヨコナデによりわずかに内方に屈曲する。口縁端部には面をもつ。440・441は土錐である。

遺物包含層(第76図442~449) 442は天目碗である。443は瓦器碗と推定されるが、色調は灰白色を呈する。器形も瓦器碗とするには高台がしっかりしているため、他の種類の土器である可能性もある。444は須恵器の杯Gもしくは杯Aである。やや丸底気味の底部である点に古相の杯Gである可能性がある。445は須恵器杯蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリを施さないことが



第76図 F12区遺物実測図1(1/4)

ら飛鳥時代以降のものと考えられる。446は須恵器杯身である。底部外面に削り残しがみられるが、回転ヘラケズリを施しており、445よりは少し古く位置づけられ古墳時代後期後半ないし末(陶器編年TK43~TK209型式並行)のものであろう。447~449は弥生土器である。447は受口状口縁を呈する壺ないし甕である。口縁部下半が、緩やかに頸部に至る形状を呈する。448は小型の壺あるいは鉢の体部下半と底部の破片である。底部が突出する。449は高杯の杯部である。

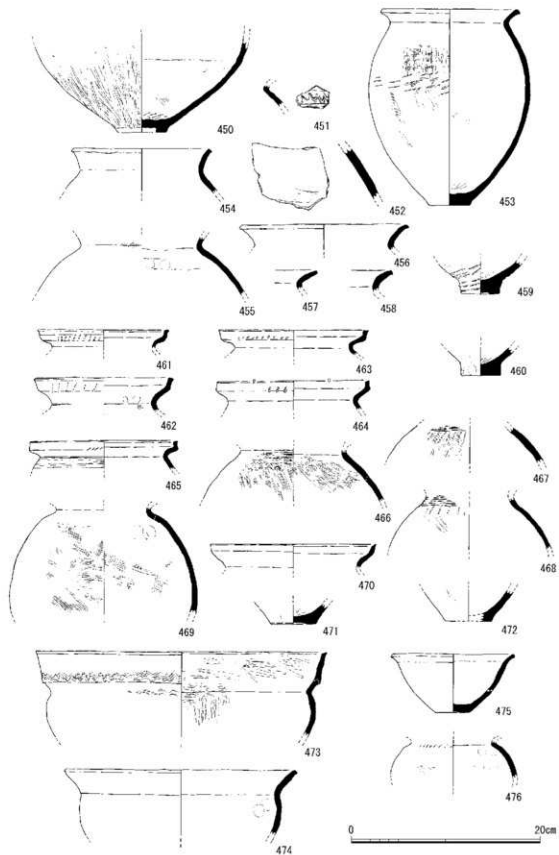
竪穴建物SH1202(第77・78図) 450~490は、いずれもSH1202の床面および埋土から出土した土器群である。また、491~499は、SH1202上面精査中に検出した土器およびSH1202と重複する後世の遺構から出土した土器群であるが、いずれもSH1202に帰属するとみられる資料である。450~490のうち、453・475・477・487はいずれもSH1202床面直上から出土した。

450~452は壺である。450は外面をミガキ調整し、底部は輪台技法によって成形する。451は櫛描波状文を施す壺の肩部の小破片とみられる。波状文は近江系甕の文様要素の一つでもあるが、その場合は頸部最上段に直線文を施すことから、本資料は加飾壺の肩部とみられる。452は角閃石を特徴的に含む胎土から、河内産大型壺の一部と推定される。外面は摩耗が著しいが、内面は斜め方向のナデ調整を施し、色調は暗褐色を呈する。

453~458は、「く」字口縁をなす甕である。453はいわゆる畿内系のタタキ成形甕である。外面は、右上がりのタタキ成形のち、肩部上半にタテ方向のハケを施し、頸部は強いヨコナデによって工具痕をていねいにナデ消している。体部内面は摩耗しているが、ハケのちナデ調整を施し、底部は平底をなす。454・455は、全体に摩耗しているが、外面に一部ハケのちナデ調整を、内面にナデ調整を施す。口頸部は、緩やかに屈曲するもの(454)と、強く外反するもの(455)がある。456・458は端部を外方に引き出す特徴をもつ。459・460は畿内系タタキ成形甕の底部である。459は輪台技法によるとみられる窪み底をなし、460は平底をなす。

461~468は、近江系受口状口縁甕である。近江系甕は、胎土に大きく2種あり、石英・長石を中心とする花崗岩に由来する胎土と、石英・長石に加えて、チャート・頁岩などの堆積岩類を多く含む胎土がある。前者は、径1~2mm大の粗粒を多量に含み、器壁断面の色調は黒褐色を呈しており、湖南の野洲川流域からの搬入品と推定されるものである。

461~465の受口状口縁甕は、口縁部外面全体に列点文を施すものと、口縁部下端に部分的に施すものがある。466~468は、いずれも近江系甕の体部であるが、肩部の文様は2種ある。通常の文様構成である直線文+列点文(467・468)と、直線文+波状文で構成されるもの(466)である。469は口縁部を欠損するが、ややなで肩の体部プローションを呈し、内外面にハケ調整を施す。また、470の受口状口縁甕は、口縁部外面は無文でナデ調整を施す。469・470ともに、近江系甕の変容形式とみられる。471・472は摩耗が著しいが、内外面に一部ハケ調整を施す甕の底部である。471はやや凹み底を呈し、受口状口縁甕の底部と推定される。473は有段口縁をなす大型鉢である。口縁部内面にていねいなミガキを施し、口縁部外面に1条の波状文を施し、頸部にユビオサエに伴う連続した爪痕を残す。口縁部に波状文を施す有段口縁鉢は山城地域では類例をみず、搬入土器の可能性が高いものである。胎土は、径1mm以下の石英・長石、堆積岩類などをこく



第77図 F12区遺物実測図2 (1/4)

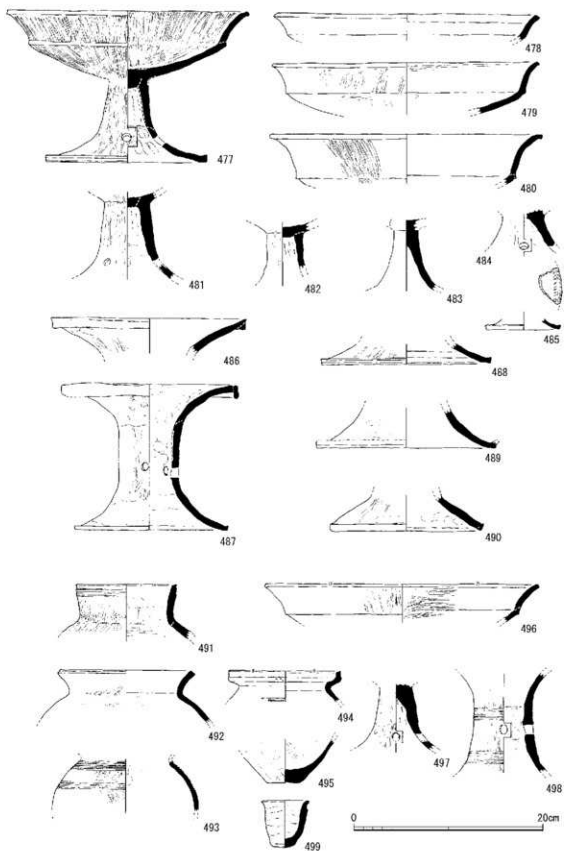
少量含むが、極めて混和材が少ない精良な胎土を特色とし、色調はにぶい黄褐色を呈する。口縁部形態から、近江北部から北陸南部にかけてのものと推定する。474は緩やかに外反する「く」字口縁をなす鉢である。摩耗が著しいが、外面はハケのちナデ調整によるとみられる。475は小型品であるが、474と同様、口縁部が緩やかに外反し、内外面にミガキを施す鉢である。476は肩部が張る鉢の体部とみられるが、肩部上面に刺突文を施すことから、近江系の受口状口縁鉢の系統に属するものと考えられる。

477～485は高杯である。477は、外反口縁をなす杯部をもつ高杯であるが、杯部径に比してやや短い脚部をなし、大きく緩やかに開く裾部を特色とする。こうした形式は、近江に通用にみられる高杯の形式に類する。調整は、杯部の内外面および脚部外面ともに縦方向のていねいな細いミガキを施す。478～480は短く外反する口縁をなし、いずれも口径25cm以上を測る大きな杯部を特徴とする。このうち479は、杯部外面に横方向のミガキを施したのちに、縦方向のミガキを2～3cm幅で、間隔をあけて文様状に施すもので、東海の山中式の影響を受けた高杯とみられる。胎土には、径1～2mm大の石英・長石に加え、チャートや泥岩などの堆積岩類の砂粒を含む。色調は灰白色を呈し、にぶい黄褐色～にぶい橙色を基調とする在土器の色調とは異なることから、搬入土器の可能性が高いものである。481～485は高杯の脚部である。481は477と同様、脚部高が短く、裾部が緩やかに大きく開く脚部をなす。483は外面に縦方向のミガキを施し、一部中実の脚部をなす。484は大きく「ハ」字状に開く東海系高杯の脚部である。485は小型高杯の裾部で、裾部に刺突文を巡らせ、裾部端面にキザミを施す。文様構成から搬入土器と推定される。

486～490は器台である。486は緩やかに大きく外反する受け部をなす器台である。口縁部下端に粘土帯を貼り付け、面を形成する。487は緩やかに大きく外反する受け部と、筒状の胴部、緩やかに大きく開く裾部をなす完形の器台である。受け部口縁部は、端面に粘土帯を貼り付け、垂下口縁をなす。胎土には、0.5mm大の微細な茶褐色斑粒を含み、色調はにぶい橙色を呈する。488・490は、いずれも器台の裾部である。いずれも脚部端面に面をなし、裾部をわずかにつまみあげる。

491～499は、S H1202の上面精査中に出土した土器(492・494～496・498・499)と、S H1202と重複する古墳時代前期前葉と推定される溝S D1245の埋土中から出土した土器(491・493・497)である。いずれもS H1202に伴う土器群とみられる。

491は口縁部を短く立ち上げる短頸壺である。口縁部内外面にていねいなヘラミガキを施し、口縁部外面に擬凹線を3条施す。胎土は、径1～3mm大の赤色斑粒を含み、色調は橙色を呈する。492は「く」字口縁をなす甕である。内外面ともにハケ調整を施し、一部ナデがみられる。493は近江系受口状口縁甕で、体部外面に直線文と列点文を施す。494は近江系受口状口縁甕である。口縁部外面下端に列点文を施す。495は壺の底部である。窪み底をなし、外面はていねいなナデ調整を施す。496の高杯は短く外反する口縁をなし、口縁部外面に縦方向のミガキを施す。内面のミガキの方向が477と異なり、横方向の異なる手法のミガキを施す。胎土は、石英・長石を基調とする花崗岩組成で、色調は浅黄色を呈し、在地で生産された土器とみられる。497は裾部が



第78図 F12区遺物実測図3(1/4)

緩やかに開く高杯脚部である。外面は縦方向のミガキを施す。498は筒状をなす器台の胴部である。外面はていねいな縦方向のミガキのち、2条の直線文を胴部の上下に間隔をあけて施す。胎土は、石英・長石を中心とした花崗岩起源の砂粒に、泥岩などの堆積岩類の粗粒を含み、色調は橙色を呈する。499は手づくね土器の甕である。外面に粘土の輪積み痕を明瞭に残す。

以上、SH1202出土の土器群の帰属時期は、器台は受け部から胴部にかけて稜をもたず、受け部径に比して幅の広い胴部径を保つ一方、高杯には一部中軸となる軸部径の細いタイプ(483)が出現していること、脚部が「ハ」字状に開く東海系高杯(484)が共存していることから、おおよそ佐山I式-2段階に該当するものであり、弥生時代後期後葉に位置づけることができる。

(高野陽子)

6. 総括

本報告は、新名神高速道路整備事業に伴う城陽JCT・IC(仮称)の建設にあたって発掘調査を実施した下水主遺跡の調査成果のうち、第4次調査F地区の成果をまとめたものである。ただ、城陽JCT・IC(仮称)の建設に伴う下水主遺跡ならびに隣接する水主神社東遺跡の調査成果は膨大なものであるため、今後、さらに数冊の報告書を刊行する予定である。

最後に、今回報告したF地区の調査成果について簡単にまとめておきたい。

まず、縄文時代の遺構・遺物は、F5区で晩期の土器片を1点確認したにとどまる。

弥生時代には、前・中期の遺構・遺物は確認されていないものの、F3・F6・F10・F11・F12区で後期後半以降のまとまった土器が出土した。さらにF10・F12区では円形の竪穴建物を検出し、木津川の近くではあるが、集落が展開していたことが明らかになった。各調査区でも出土遺物が多いことから、調査地周辺に広く集落が広がっていたと考えられる。

古墳時代から奈良時代にかけての遺構・遺物はほとんど確認できなかった。ただ、時期は断定できなかったが、F1区で検出した掘立柱建物は飛鳥時代から平安時代にかけての時代に位置づけられる。また、F2区やF3区で須恵器甕が出土しており、古墳時代の活動もうかがえる。

平安時代から中世前半にかけては、F3・F7・F9～F11区で井戸や土坑など、まとまった遺構を確認しており、これらから多数の遺物が出土している。具体的な集落景観等を復原することはできなかったが、木津川に近いところで活動が行われていたと考えられる。

中世後半以降になると、島畑が成立してくると考えられる。ただ、調査区が狭小であったため、島畑の全容等を明らかにできたものはない。島畑は近世を通じて営まれ、その後、現在に見るような水田に変化していったものと考えられる。

以上のように、F地区では、木津川に近いところであるにもかかわらず、まとまった遺構・遺物を確認し、各時代における人々の活動を明らかにすることができた。一連の発掘調査成果についての検討とまとめは、今後報告予定の分と合わせて行うこととしたい。

(筒井崇史)

(2)女谷・荒坂横穴群第14次

1. はじめに

女谷・荒坂横穴群は八幡市の南西部に、京田辺市との市境に位置している。これまでに13回にわたる発掘調査が実施され、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての横穴80基が調査されている。既往の調査を総合的に提案すると推定で総数300基以上の大規模な横穴群であると考えられる。また平成24年度に実施した第13次調査では御毛通古墳群の発掘調査も実施され、横穴が築造されている丘陵の頂部で御毛通2号墳が確認されている。

今回の調査区は、同横穴群の分布範囲の南東部にあたり、第13次調査の南隣に位置する。また、同調査時における御毛通古墳群の調査地の西側に位置している。

本報告の執筆は位置と環境を奈良大学学生米田拓海、近畿大学学生清水麻里奈が担当し、そのほかを石井、竹村、武本、伊賀が分担して行った。

2. 位置と環境

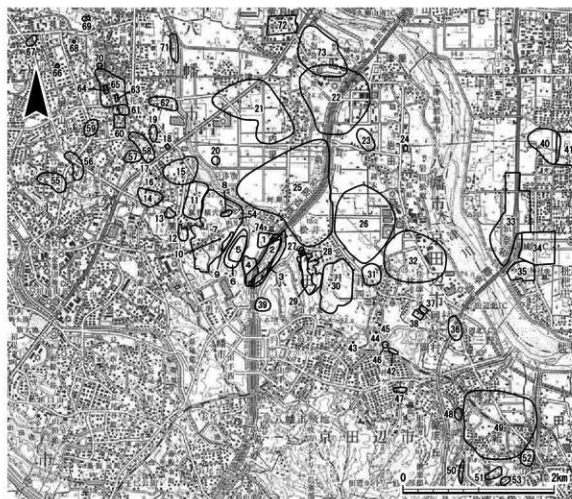
女谷・荒坂横穴群は京都府八幡市美濃山に所在する。八幡市は、京都府の南西部、木津川と宇治川、桂川の合流する付近に位置し、南東に京田辺市、東に城陽市、北東に久御山町、北は京都市と大山崎町、洞ヶ峠を挟んで大阪府枚方市に接している。

女谷・荒坂横穴群(1)周辺に分布する遺跡を第79図に示した。弥生時代から古墳時代にかけての墳墓、集落跡、古代寺院が、八幡市域南西部に位置する丘陵地およびその裾に形成された台地上部に分布している。女谷・荒坂横穴群の近隣に分布している横穴群には狐谷横穴群(8)、美濃山横穴群(9)、松井横穴群(28)、堀切谷横穴群(50)などがある。また市域北東部に位置する平野部においては、木津川旧河道の縁辺に形成された自然堤防を利用して弥生時代から中世にいたる時期の集落跡が広範囲に分布している。以下、丘陵とその周辺部に展開する諸遺跡の動向を概観する。

八幡市内では旧石器・縄文時代の遺跡は、発見例が少ない。八幡市南西部の丘陵地に荒坂遺跡(4)、宮ノ背遺跡(13)、金右衛門垣内遺跡(11)が所在する。荒坂遺跡、宮ノ背遺跡ではナイフ形石器が、金右衛門垣内遺跡ではナイフ形石器に加え、翼状剥片が出土している。

弥生時代に入ると集落は沖積平野に立地している。弥生時代前期から中期にかけての、堅穴建物、水田跡が確認された内里八丁遺跡(22)や丘陵と低地の境界付近に位置する幸水遺跡(15)で方形周溝墓が確認されている。後期になると西ノ口遺跡(14)、宮ノ背遺跡(13)、美濃山廃寺下層遺跡(6)などの小規模集落が低丘陵地に営まれる。また式部谷遺跡(68)では弥生時代後期の突線紐式六区画契捺文銅鐸が出土している。

古墳時代前期から中期にかけては、市域西部から南部にかけて古墳が築造される。市域最大規模の前方後円墳である西車塚古墳(64)(墳長約115m)、東車塚古墳(63)(墳長約94m)、石不動古墳(69)(墳長約75m)、さらに前方後方墳である茶臼山古墳(66)(墳長約70m)がある。さらにヒル



- | | | | |
|-------------------------|----------------------------|-------------|--------------------|
| 1. 女谷・荒坂横穴群 | 19. 山田東遺跡 | 38. 大住南塚古墳 | 57. 南山遺跡 |
| 2. 御毛通古墳群 | 20. 五反田遺跡 | 39. 口仲谷古墳群 | 58. 山田遺跡 |
| 3. 御毛通遺跡 | 21. 内里五丁遺跡 | 40. 塚本遺跡 | 59. 中ノ山遺跡 |
| 4. 荒坂遺跡 | 22. 内里八丁遺跡 | 41. 塚本東遺跡 | 60. 志水庵寺 |
| 5. 美濃山庵寺 | 23. 西岩田遺跡 | 42. 城山古墳群 | 61. 月夜田遺跡 |
| 6. 美濃山庵寺下層遺跡 | 24. 玉造遺跡 | 43. 上西野古墳 | 62. 一ノ坪遺跡 |
| 7. 美濃山遺跡 | 25. 新田遺跡 | 44. 内山古墳 | 63. 東車塚古墳 |
| 8. 狐谷横穴群 | 26. 魚田遺跡 | 45. 月読神社古墳 | 64. 西車塚古墳 |
| 9. 美濃山横穴群 | 27. 天神社古墳群 | 46. 城山遺跡 | 65. 女郎花遺跡 |
| 10. 王塚古墳 | 28. 松井横穴群 | 47. 賣谷古墳群 | 66. 茶臼山古墳 |
| 11. 金右衛門垣内遺跡
(井ノ元遺跡) | 29. 向山遺跡 | 48. 畑山遺跡 | 67. 西山庵寺
(足立寺跡) |
| 12. 宮ノ背西遺跡 | 30. 向谷遺跡 | 49. 薪遺跡 | 68. 式部谷遺跡 |
| 13. 宮ノ背遺跡 | 31. 西村遺跡 | 50. 堀切谷横穴群 | 69. 石不動古墳 |
| 14. 西ノ口遺跡 | 32. 門田遺跡 | 51. 天理山古墳群 | 70. 隅田口遺跡 |
| 15. 幸水遺跡 | 33. 下水主遺跡 | 52. 棚倉孫神社遺跡 | 71. 舞台遺跡 |
| 16. 東二子塚古墳 | 34. 水主神社東遺跡 | 53. 小次古墳群 | 72. 出垣内遺跡 |
| 17. 西二子塚古墳 | 35. 水主神社遺跡 | 54. 柿谷古墳 | 73. 上奈良遺跡 |
| 18. ヒル塚古墳 | 36. 久保田遺跡 | 55. 長谷遺跡 | 74. 内里池南古墳 |
| | 37. 大住車塚古墳
(チコンジ山・智光寺山) | 56. 幣原遺跡 | |

第79図 調査地および周辺遺跡分布図

(国土地理院 1/50,000 京都西南部・京都東南部・大阪東北部・奈良)

塚古墳(18)や王塚古墳(10)、御毛通古墳群(2)などが所在する⁽⁸¹⁰⁾。中期から後期にかけては古墳の築造はあまり活発ではない。京都府南部の古墳時代後期の特徴として、横穴群の築造があげられる。木津川左岸には多くの横穴群が築造され、八幡市南部から京田辺市北部にかけては、八幡市狐谷横穴群8基、美濃山横穴群6基、女谷・荒坂横穴群80基、京田辺市松井横穴群70基、堀切谷横穴群10基が調査されている。

古墳時代の集落は、八幡丘陵の北東域、八幡市域の南東部にあたる木津川の氾濫原を中心に確認されている。内里八丁遺跡(22)では古墳時代中期から後期の竪穴建物が26基確認されている。門田遺跡(32)では後期の竪穴建物が4基、新田遺跡(25)は八幡市から京田辺市にまたがる集落で、古墳時代後期の竪穴建物が10数基確認されている。

奈良時代では、美濃山廃寺(5)、志水廃寺(60)、西山廃寺(67)の三つの古代寺院が確認されている。これらの寺院は市城南～北辺の丘陵地から裾付近に立地している。美濃山廃寺では掘立柱建物30棟以上を検出し、覆鉢形土製品、ひさご形土製品などの特徴的な遺物が出土している。志水廃寺では瓦積基壇を検出し、鬼面文軒丸瓦が出土している。西山廃寺は別名足立寺といわれ、奈良三彩や金箔が残る埴当が出土している。この時期の集落としては、門田遺跡、新田遺跡、内里八丁遺跡で掘立柱建物が検出されている。中でも、内里八丁遺跡では古山陰道との関係が指摘されている道路状遺構や大型の掘立柱建物・木枠をもつ大型の井戸が確認されているほか、墨書土器・石帯・陶枕などが出土していることから、役所的な性格を有する遺跡と考えられている。

平安時代には先に述べた美濃山廃寺隣接地で「西寺」と押圧された平瓦が一点出土しており、北河内との関係が想定される。また、木津川に面した丘陵北側の頂部に石清水八幡宮が創建され、その門前町として発展した市街地部分が現在の八幡市の中心をなしている。また、八幡宮領である市北東部の平野地は耕作地化が進み、現在に至っている。

(米田拓海・清水麻里奈)

3. 調査の経緯

今回の発掘調査は新名神高速道路整備事業に先立ち、埋蔵文化財に影響の及ぶ範囲について実施した。調査対象地周辺は、女谷・荒坂横穴群および御毛通古墳群として周知された埋蔵文化財包蔵地である。発掘調査は、高速道路本体部および調整池・工事用道路設置範囲に調査トレンチを設定して実施した。調査地は丘陵頂部平坦面に5か所、丘陵斜面2か所に設定した(第80図)。丘陵斜面は女谷・荒坂横穴群の範囲に相当し、今回は付表5にあるように、第14次調査に相当する。今回の調査区は、平成24年度に19基の横穴の調査を実施した第13次調査区の南側に隣接しており、横穴群が南西側に広がると予想された。また、今回の対象地内には、八幡市教育委員会の分布調査による荒坂A支群16号横穴が分布しており、それ以外にも横穴の陥没痕らしきものが認められた。

御毛通古墳群は女谷・荒坂横穴群が築造された丘陵頂部に分布する古墳群であり、付表6にあるように平成4年度の第1次調査で確認された古墳群である⁽⁸¹¹⁾。第1次調査では、一辺21.5mを測

る方墳(御毛通1号墳)を検出し、その周溝からは蓋形埴輪や円筒埴輪が出土した。さらに平成24年度の第2次調査では円墳(御毛通2号墳)を検出した。御毛通2号墳の周溝は検出長約16.3mを測り、その周溝内からは家形埴輪や鶏形埴輪が出土した。^(G13)今回は御毛通2号墳の北側に調査区を設定し、2号墳に関連する遺構や新たな埋没古墳の検出が期待された。

古墳の分布が見込まれる丘陵頂部では、高速道路本体および工事用道路新設範囲に、トレンチ調査を5か所で行った(1～5トレンチ)。竹林の表土および造成盛り土を重機により除去した



第80図 女谷・荒坂横穴群の過去の調査と今回の調査地区配置図(1/4,000)

後、人力により遺構の精査

付表5 女谷・荒坂横穴群調査次数一覧

および掘削を行い、必要に応じて調査区を拡張した。また、調査区ごとに検出した順に01から順に遺構番号を付し、遺構図および記録写真の作成を順次実施した。1・2・5トレンチでは顕著な遺構・遺物を検出しなかった。3トレンチでは第13次調査で検出した御毛通2号墳の北西延長部を検出し、周溝から多数の埴輪片が出土した。

次数	報告遺跡	調査期間	調査面積 (㎡)	備考	報告書
1	荒坂横穴群	H57.19～112	1,450	確認調査	京都府報告集 第34冊 2004
2	荒坂横穴群	H121.26～215	100	確認調査	
3	女谷横穴群	H1221～224	1,800	確認調査	
4	荒坂横穴群	H1282～H131.18	2,500	確認調査	
5	女谷横穴群	H1282～H132.27	8,140	横穴15基調査	
6	荒坂横穴群	H134.11～103	3,900	横穴22基調査	
7	女谷横穴群	H134.11～6.28 H121.16～H132.27	1,070	横穴8基調査	
8	女谷横穴群	H144.10～6.27	700	横穴5基調査	
9	荒坂横穴群	H144.15～6.27	1,040	横穴2基調査	
10	女谷・荒坂横穴群	H21.128～2.26	250	確認調査	京都府報告集 第137冊 2010 京都府報告集 第142冊 2011
11	女谷・荒坂横穴群	H21.79～H22.25	2,000	横穴8基調査	
12	女谷・荒坂横穴群	H225.13～6.11	400		
13	女谷・荒坂横穴群	H244.24～H25.227	2,150	横穴20基確認 うち19基調査	

横穴の調査は2か所のトレンチに分けて行った。6トレンチは対象地内の北部にあたる丘陵裾部に設定したもので、調整池設置範囲にあたる。7トレンチは対象地内の南部にあたる道路本体および橋脚部分にあたり、丘陵斜面地から裾部にわたって全面的に調査した。これらのトレンチは、最終的に一続きになり、両調査区を通じて通番で遺構番号を付した。調査の結果、6トレンチでは横穴3基の墓道先端部分のほか、雨水等が流れた痕跡と判断される溝状遺構を検出した。7トレンチでは横穴4基のほか瓦片や須恵器が出土する溝状遺構、雨水等が流れた痕跡と判断される溝状遺構を検出した。調査を進めた結果、第51号横穴の1基を除き、横穴内から遺物は出土しなかった。

なお、実際の横穴の掘削にあたっては、墓道の先端から奥壁に向かって掘削し、随時、縦断および横断面の土層を作成した。結果的に横穴の天井部が遺存しているものはなかったが、掘削を進めていくと天井部崩落による陥没痕からの掘削高が2mを越え、壁面が崩落する危険が生じた。そのため、その掘削高までの墓道部分および玄室を記録したのち、重機により横穴上部を除去して掘削高を減じた上で、安全を確保しつつ横穴下部の調査を行った。

現地発掘調査は平成27年10月19日に開始し、工事の工程より、丘陵頂部の御毛通古墳群の範囲に相当する1～5トレンチから開始した。併行して女谷・荒坂横穴群の丘陵斜面および裾の6・7トレンチの調査を実施し、平成28年2月までに御毛通古墳群の調査を終了した。

付表6 御毛通古墳群調査次数一覧

次数	報告遺跡	調査期間	調査面積 (㎡)	備考	報告書
1	御毛通1号墳	H410.12～H5.225	1,000	埴輪	京都府概報第56冊3. 京都府道路関係遺跡(2) 荒坂遺跡 1994
2	御毛通2号墳	H244.24～H25.227	2,150	埴輪	京都府報告集第157冊(1) 女谷・荒坂横穴群 第13次 2014

平成28年3月4日には、一部の作業を残して6・7トレンチの調査を中断した。平成28年4月5日に調査を再開し、4月16日には地元美濃山区自治会とともに周辺小中学生向けの現地説明会(参加者140名)、同23日には、府民および一般の方々を対象に現地説明会(参加者124名)を開催した。その後、検出遺構の埋め戻し等の作業を行い、5月13日に現地作業を終了した。出土遺物の総量は整理箱30箱である。

4. 御毛通古墳群第3次

1) 1トレンチ(第81図、図版第62(1))

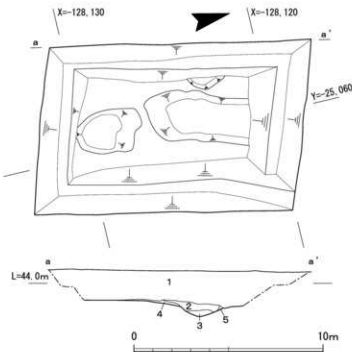
1トレンチは最も北側に設定した調査区である。現在の地表面から2.5m掘削を行ったが、旧表土は確認できず、地山直上までコンクリート片を含む攪乱土が及んでいた。また地山面に重機による掘削の痕跡(2～5層)を確認した。1～5層まで工事用道路造成時の盛り土である。遺構・遺物は検出しなかった。

2) 2トレンチ(第82図、図版第62(2))

1トレンチの南約50m、3トレンチの北西約10mにトレンチを設定し、調査を行った。東西5.4m、南北25.1mである。層序は1～7・9～17層は竹栽培および工事用道路の造成盛り土である。トレンチ北半では、造成盛り土を除去したのち、本来の丘陵の堆積土と考えられる8層上面で遺構の精査に努めたが、遺構は確認できなかった。南半では、8層は確認できず、地山の大阪層群の砂礫層を検出した(第18層)。1トレンチと同様に重機による掘削の痕跡が認められた。遺構・遺物は認められなかった。

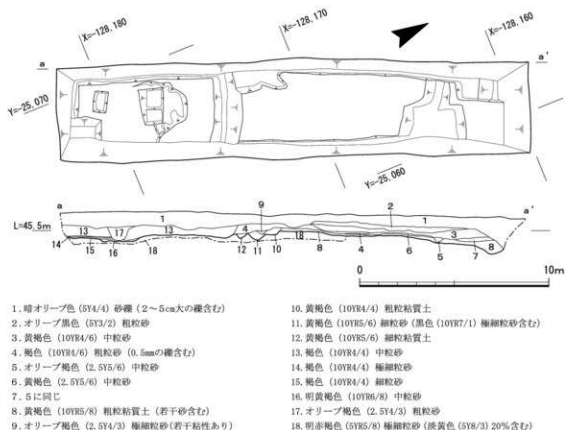
3) 3トレンチ(第83～85図、図版第59～61)

3トレンチは当初東西5.0m、南北30mで調査区を設定し、調査に着手した。調査を進めていくと調査区内に御毛通2号墳の周溝と考えられる溝SD01を検出した。関係機関との協議の結果、工事に影響する範囲に限って調査区の拡張を行った。拡張後の調査区は東西5.0～9.5m、南北31.6mとなった。重機により、表土や造成盛り土を



1. 造成盛り土
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂(3を含む)
3. 褐色(10YR4/4)極細粒砂(竹根多く混じる)
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂(0.5～30cm大の礫混じる)
5. 明赤褐色(5YR5/8)極細粒砂(淡黄色(5YR/3)20%混じる)

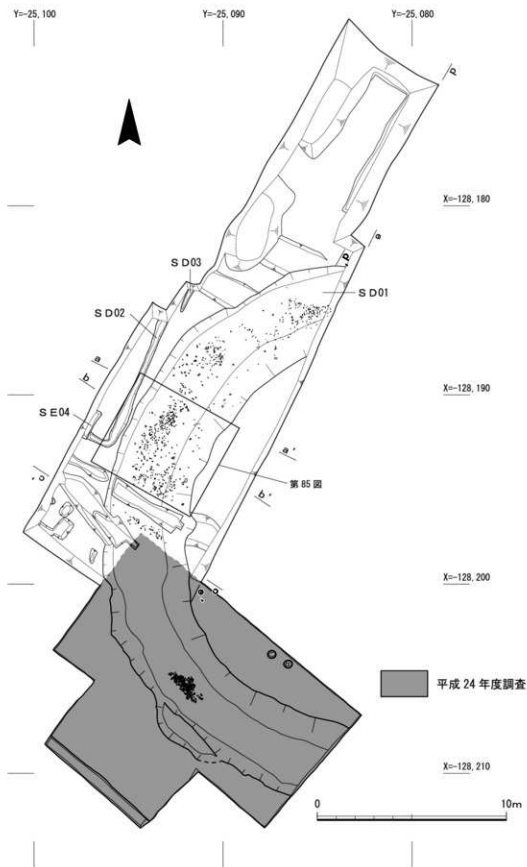
第81図 1トレンチ平面・西壁土層断面図(1/200)



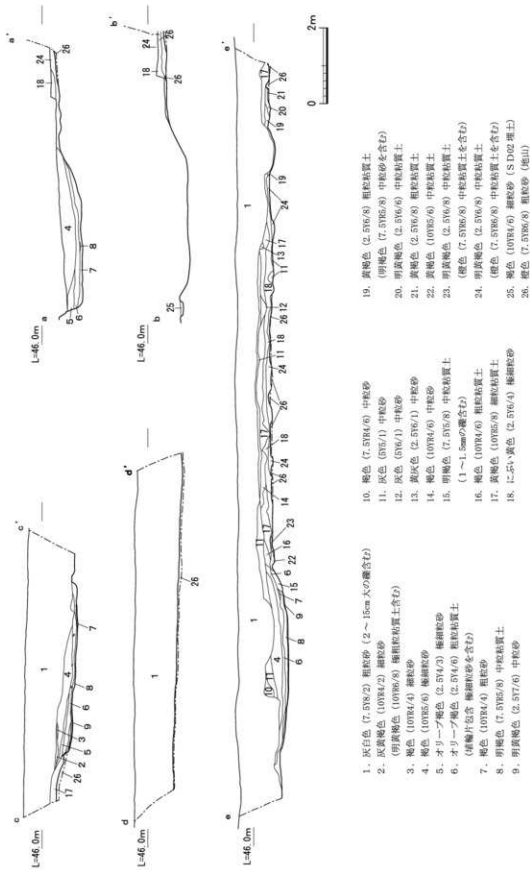
第82図 2トレンチ平面・西壁土層断面図(1/200)

約0.6m除去し、人力により11層を除去したところ、溝(S D01)の埋土である4層を検出し、溝は南から北に向かって円弧を描くように確認できた。南端は平成24年度に調査を実施した第2次調査区に向かって延び、北端は調査区外へ延びていた。さらに溝内からは埴輪片が多数出土したため、これを御毛通2号墳の周溝と判断した。今回検出した溝S D01の検出長は17.0m、幅4.5m、深さ0.5mを測る。第2次調査の成果と合わせると、周溝全体の4割程度を検出したと考えられ、埴輪規模は径22.0mとなる。また、東壁断面(第84図e-e')の観察では、6層内に埴輪片が混じり込んでいることから、これを周溝内の堆積層と判断し、それ以下7~9・15層も周溝内の埋土と判断した。また6・15層が16・22層の上部に堆積していることから、厚さ0.1~0.2mで堆積している9・13・16・18・19・22~24層を埴丘盛り土の流入土と判断した。平面的には0.5~2.4mの幅で埴丘部分を確認したが、埴輪の据え付け穴や埴輪片等は確認できなかった。平成24年度の調査では、周溝外縁部に長さ約1.0m、幅0.4mの平坦面が削り出されていることを確認していたが、今回の調査では、同様の削り出しは検出していない。

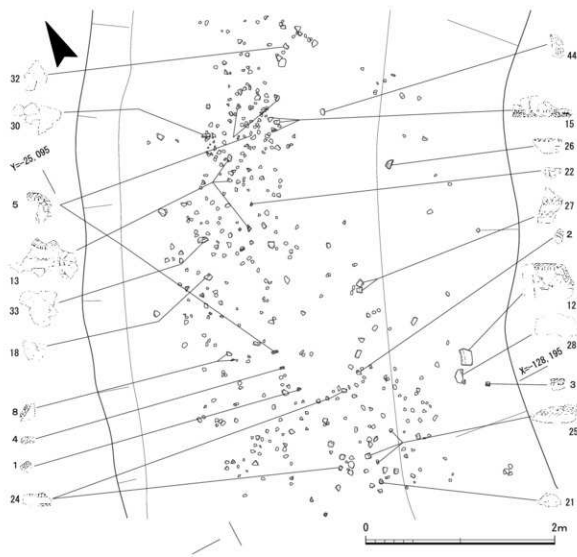
周溝の埋土である6層のオリーブ褐色土内から多量の埴輪片が出土した。また同一層からごく少量の器台を含む須恵器片および石器1点が出土している。埴輪は細片化していたが、周溝内全体から出土している。これらには甲冑形埴輪、家形埴輪、鶏形埴輪、盾形埴輪などの形象埴輪が確認できたが、出土位置には埴輪の種類ごとのまとまりは認められない(第85図)。また、第2次



第83図 3トレンチ御毛通2号墳平面図(1/200)



第84図 3トレンチ土層断面図(1/100)



第85図 3トレンチ植輪出土状況図(1/40)

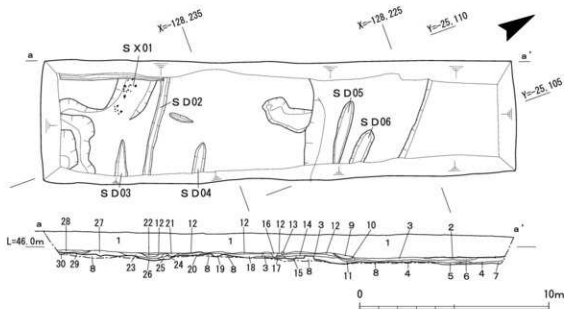
調査の際に出土した鶏形植輪と同一個体の頸部破片が、約12m離れた位置(V23-gVI-W23-aVIII)から出土した。植輪はその特徴から古墳時代前期から中期のものと考えられる。さらに須恵器は古墳時代中期と考えられる。遺物を包含するオリブ褐色土が堆積した時点では、周溝としての機能を有していなかったと考えられる。

周溝(S D01)以外には2条の溝(S D02・03)、井戸(S E04)を検出した。溝S D02は、竹の耕作土下から掘り込まれている。2条ともに南北方向に延びる。溝S D02は、検出長8.4m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。南側で西に折れ、S E04によって切られている。

溝S D03は、溝S D02の北東に位置し、検出長1.4m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。

井戸S E04はS D02の西側に位置している。壁面には漆喰が施されている。ともに遺物は出土していない。

同じ溝(S D01)からの出土遺物には、須恵器器台のほか植輪、石器がある。植輪片は939点が出土しているが、すべて形象植輪で、円筒植輪と断定できる個体は出土していない。



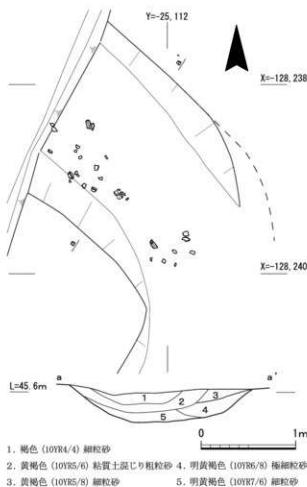
- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1. 黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂 (竹根混じる) | 16. 黄褐色 (10YR5/6) 極細粒砂 |
| 2. 黄褐色 (10YR5/8) 極細粒砂 (1 cm 大の礫含む) | 17. 明褐色 (10YR6/8) 細粒砂 |
| 3. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 (0.5~2 cm 大の礫含む) | 18. 明褐色 (7.5YR5/8) 粗粒砂 |
| 4. 黄褐色 (10YR4/6) 細粒砂 | 19. 褐色 (10YR4/6) 極細粒砂 |
| 5. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 | 20. 明黄褐色 (10YR6/8) 粗粒砂 |
| 6. 明褐色 (7.5YR5/8) 極細粒砂 (9 を 20% 程度含む) | 21. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細粒砂 |
| 7. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂 (4 より粘性あり) | 22. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂 |
| 8. 橙色 (7.5YR6/8) 粘質土
(明褐色 (7.5YR5/8) 粗粒砂が均一に混ざる) | 23. 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土混じり粗粒砂 |
| 9. 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土 | 24. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂 |
| 10. 明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土 | 25. 明黄褐色 (10YR6/8) 極細粒砂 |
| 11. 褐色 (10YR4/6) 中粒砂 | 26. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂 |
| 12. 明褐色 (10YR6/8) 中粒砂 | 27. 黄褐色 (10YR5/8) 粗粒砂 |
| 13. 竹根 | 28. 明黄褐色 (10YR6/8) 細粒砂 |
| 14. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂 | 29. 黄褐色 (10YR5/6) 極細粒砂 |
| 15. 明褐色 (7.5YR5/6) 中粒砂 | 30. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂 (1~2 cm 大の礫層) |

第86図 4トレンチ平面・西壁土層断面図(1/200)

4) 4トレンチ(第86図、図版第63・64)

4トレンチは、3トレンチの南側約20mに設定した調査区で、東西6.5m、南北25mである。現在の地表面から約1.5m下に地山を確認した。1層は造成盛り土である。その下、2・12層は旧表土と考えられる。その層に切り込む形で、16・22層がある。16層は平面的な検出ができなかった。21層はトレンチを東西に横断する溝S D 02の埋土である。溝S D 02以外に溝4条S D 03~06を検出した。これらの溝は北に対し、おおむね西に10~15°と同方位に振ることから、同一の目的に作られた溝と考えられる。遺物が出土していないため、時期は不明であるが、旧表土と考えられる12層から掘られていることから、竹耕作に伴う溝と考えられる。また22~26層は土坑状遺構S X 01の埋土である。8層は地山面である。

溝状遺構S X 01(第87図) 4トレンチ南西部で検出した土坑で、検出長2.5m、幅1.8m、深さ0.3mを測る。平面形は南に折れる「L」字形を呈しているが、北側の掘形が攪乱により明確で



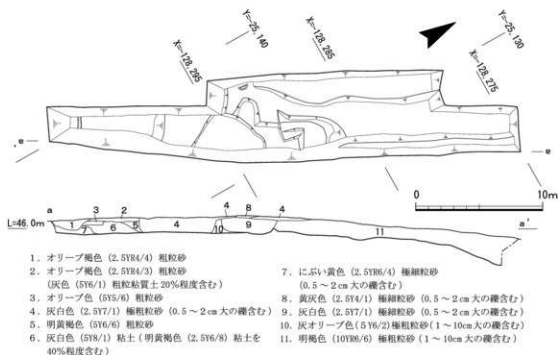
1. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂
2. 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土混じり粗粒砂
3. 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂
4. 明黄褐色 (10YR6/8) 極細粒砂
5. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂

第87図 4トレンチ溝状遺構S X01
平面・土層断面図(1/40)

ないため、正確な形状は不明である。溝状遺構S X01は本来の丘陵地の堆積土と考えられる27層から掘られている。埋土は5層認められ、1層より、須恵器片、埴輪片が出土している。調査区西壁の断面に土坑の埋土が認められることから、調査区外に広がると推定される。3トレンチのS D01(御毛通2号墳)とは約50m離れていることや、別個体と考えられる埴輪片が出土していることから、周辺に古墳が存在した可能性が考えられる。

5) 5トレンチ(第88図、図版第64)

5トレンチは横穴調査地の西にトレンチを設定し、調査を行った。東西2.0~4.5m、南北25mである。トレンチ東側では現在の地表面から約1.0~2.5m下までの掘削を行ったが、大阪層群の直上まで攪乱が及んでいた。一部では旧表土を確認したが、包含層や遺構面は確認できなかった。遺物は出土していない。(竹村亮仁)



- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. オリーブ褐色 (2.5YR4/4) 粗粒砂 2. オリーブ褐色 (2.5YR4/3) 粗粒砂 3. オリーブ色 (5Y5/6) 粗粒砂 4. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂 (0.5~2cm大の礫含む) 5. 明黄褐色 (5Y6/6) 粗粒砂 6. 灰白色 (5Y8/1) 粘土(明黄褐色(2.5Y6/8)粘土を40%程度含む) | <ol style="list-style-type: none"> 7. にぶい黄色 (2.5YR6/4) 極細粒砂 (0.5~2cm大の礫含む) 8. 黄灰色 (2.5Y4/1) 極細粒砂 (0.5~2cm大の礫含む) 9. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細粒砂 (0.5~2cm大の礫含む) 10. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極粗粒砂(1~10cm大の礫含む) 11. 明褐色 (10YR6/6) 極粗粒砂(1~10cm大の礫含む) |
|---|--|

第88図 5トレンチ平面・東壁土層断面図(1/300)

6) 出土遺物

(1) 3 トレンチ S D01 (御毛通 2 号墳) 出土埴輪

御毛通 2 号墳の周溝内からは、整理箱で 10 箱の埴輪が出土している。今回の調査区に南接する平成 24 年度調査区における同古墳周溝からも家形埴輪をはじめ数多くの形象埴輪が出土している。今回の調査では、全体に形象埴輪の占める割合が高いという特徴が認められる。樹立された元位置を留めるものはなく、墳丘面の浸食にともない周溝位置に残された窪地内に流れ落ちた状況を示す。概して埴輪の外表面の風化が著しく、一定期間墳丘に樹立されていたことを示す。

以下、埴輪の種類ごとに解説を加える。

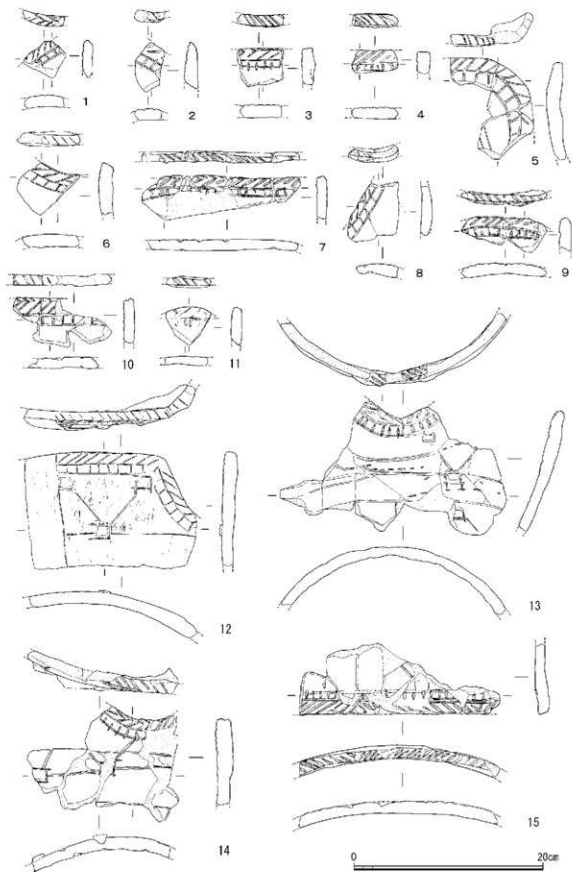
① 甲冑形埴輪 (第 89 図 1～第 90 図 27、図版第 79)

短甲および草摺を模した形象埴輪が認められる。短甲形埴輪は、線刻による三角形の地板の表現および方形に整えられた粘土貼り付けによる縦紐の表現から三角板草綴短甲を模している。ただし、押付板と裾板相当部位にも三角形地板の表現がみられ、実物短甲の全ての特徴を模しているわけではない。上下の端部には線刻による覆輪が表現され、裾板覆輪とみられる個体の存在(第 89 図 15)から、造形上、草摺と一体作りとならない。覆輪は、短甲開口部の外形線に沿って外形線と相似形の並行沈線を 2 条施し、外側の沈線間(外帯)と方頭状に成形された端部口面に線刻による綾杉文を表現する。綾杉文帯に内接して梯子状の文帯が付加される(第 89 図 1～15)。12 は左前胴堅上第 1 段～第 2 段を残す資料で、長い直線沈線で帯金と引合板を表す。押付板相当部位には、斜行する沈線で三角板の地板を表し、その交角部に方形に成形された粘土を貼り付けして草綴を表現する。内面の鉄板表現は省略されている。13・14 は、脇割り部分を残す資料である。脇に回り込む押付板にも草綴表現が認められる。2 条の平行沈線で表現された帯金(長側第 2 段)の幅は 2.8cm を測る。15 は裾部の破片で、端部付近に覆輪表現が施される。資料の左寄りに縦方向の沈線が 4.5cm 間隔で施文された引合板と考えられる。

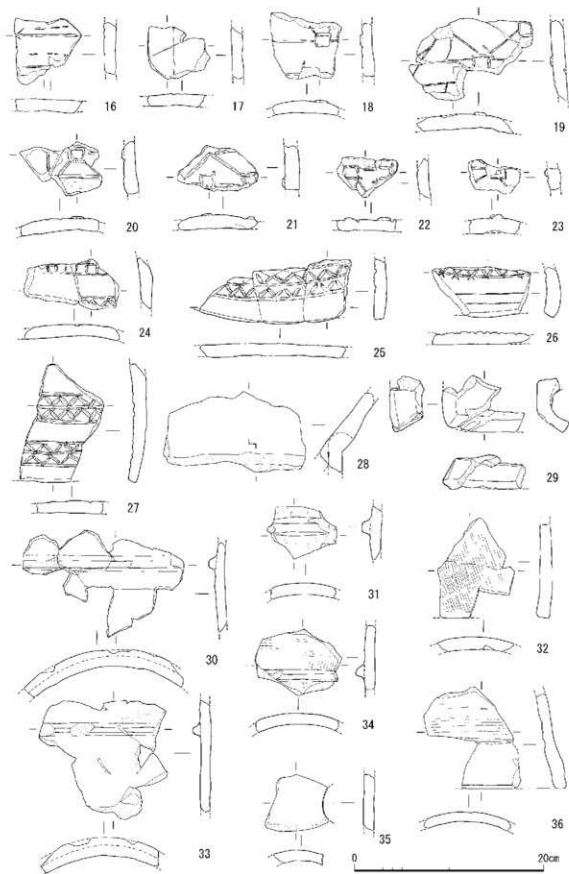
草摺形埴輪は、円筒形の器体外面に線刻により鋸歯文帯が施文された個体から同埴輪片と推定した。底端部は、方頭状に整えられ、肥厚部を調整した痕跡が認められないことから、円筒基部との接合部を持つ個体は認められないものの、円筒部から連続的に形成された草摺上半部に下半部を垂下させるように付加して造形したことが予想される。鋸歯文帯は、3 条の横位平行線の各線間に斜線を鋸歯状に刻み、それを 2 単位重ねたものである。綾杉文帯は 27 のように、多条に施文される。縦方向の区画を示す線刻は認められなかった。

今回の調査では、平成 24 年度調査区でほとんど抽出できなかった円筒形を呈する埴輪片が、豊富な形象埴輪類に混じって一定量出土している(第 90 図 30～36)。円筒の径を正しく復元できる資料は少ないが、概して径の小さな個体が多く、形象埴輪の円筒基部の可能性が残る。

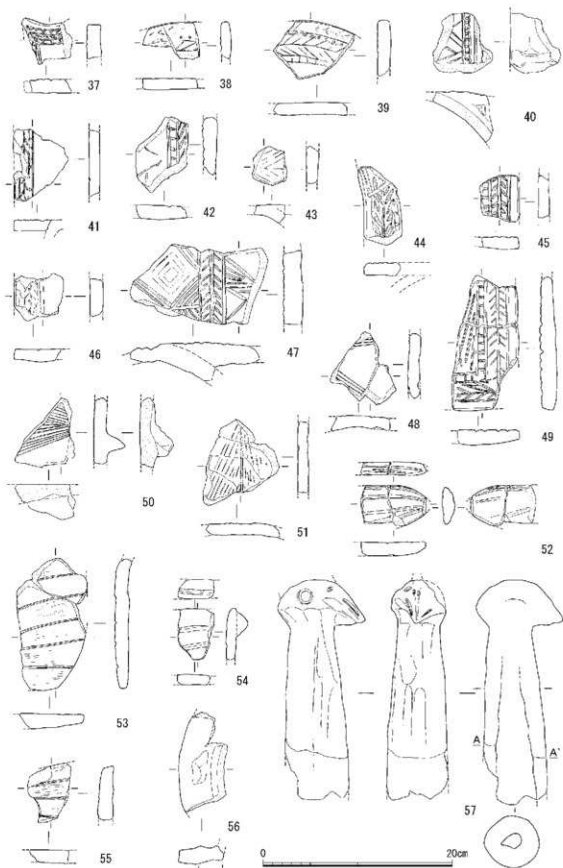
それらの円筒を呈する埴輪片は高さ 3cm 前後の粘土紐を輪積により円筒形に成形し、厚さ 1.0～1.6cm の器壁をつくる。下端の肥厚部は、外面は板、内面はユビによるヨコナデで平滑化する。底部は高さ 4～5cm で、上からみて右回りに接合したものが確認できる。器面調整は、タガ接合以前はタテハケ(1 次調整)、タガ成形後は、タテハケのみと、それにヨコハケを加える個体が



第89図 周溝S D01内出土埴輪実測図1 (1/4)



第90図 周溝 S D01内出土輪実測図2 (1/4)



第91圖 周溝 S D01内出土埴輪実測圖3 (1/4)

ある(2次調整)。ヨコハケが認められる資料は最下段に限られ、底端から5~6cmよりも上位に施行される。相対的に風化を受けていない内面は、ていねいな縦方向のユビナデが観察でき、粘土帯の接合もていねいである。タガを残す個体の中には、タガ位置よりも上位にさらにヨコないしナメのハケ調整を加えるものもある(34)。ハケ工具の原体は、1cmあたり5~6本と粗く、この1種類のみ確認できる。タガは、下幅1.6cm、器面からの突出高0.9cm、上幅0.5~1.0cmの各面が直線的な台形断面を呈する。タガの下縁にハケの工具原体の終端が当たり鋭い屈曲を作るものが多い(30・31・33・34)。復元径約5cmの円形のスカシ孔をもつ破片があり(35)、穿孔位置では内面に横基調のハケメが認められる。焼成は土師質で器表面に黒斑を認めるものがある。外面2次調整のタテハケ、円形スカシ孔、有黒斑の諸要素から前期末~中期前半の通常の円筒埴輪の要素を備えている。

② 盾形埴輪(第91図37~51、図版第80)

盾形埴輪は、盾表面に刻まれた線刻表現やわずかに残る外形線から、山形にカーブして左右両端が反り返る上縁ラインの革盾型(Ⅱ字型)であることが確認できる。外形に沿って盾面を縁取る文様意匠および施工工具の違いにより、少なくとも2個体を認めることができる。

線刻幅0.15cmと太く、外縁の文様帯が内方に梯子状の綾杉文が1条の中軸を挟んで1反転のみ表現されるもの(37・40~42・44・45・47・49)と、線刻幅0.1cm以下と細く外縁文様帯が上記の個体を2単位重ねるもの(38・39・46)に区別できる。後者は、革盾の木枠への緊縛を目的にした綴じに由来するとの観点からみると、装飾性が強調された姿とみることができ。限られた施文幅で細密な線刻を表現するため、梯子状の文様帯の間隔は極端に狭く、橋渡し線は刺突に近いものとなる。

40は、盾面と円筒基部との接点で、円筒基部の両側に粘土板を鱗状に付加して盾面を形成していることが分かる資料である。平面をなす盾面には、幅約0.15cmの棒状工具で線刻が施され、0.6cm間隔で施文された縦位の平行する4条は「Ⅱ字」の内区と外区を分ける縦位の画線帯に相当し、外(右)3条は線間にわずかに斜線が観察できることから綾杉文を、内側2条間は刺突に近い短い線刻で梯子文を施している。内区は器表の風化が激しく不規則な斜め方向の線刻を認めるにすぎない。円筒部と鱗状部の境界には、少量の補充粘土とともに横方向に渡された幅約1.0cmの粘土板が認められる。

42は、外区と内区の境界帯を残す資料だが、背面に円筒部との接合が認められないことから、円筒基部が及ばない盾上半部とみられる。複線帯で構成される境界帯の最も内側の線刻はとりわけ深く約0.3cmと幅広く施文している。内帯の梯子表現は約1.0cm等間隔で刻まれる。

44・45は、盾の側端部である。端部は板状工具により鋭利な方頭状に整形する。44は、その外形線が緩い外向き湾曲を示すことから、上角に近い部位と考えられる。いずれも、外縁から内側に向かい1.0cm等間隔で深く約0.2cmの幅広の平行沈線が刻まれ、外側2区画は1往復の綾杉文、その内側に梯子文を短い線刻でつくり、盾外縁縁取り帯(革盾では皮革を木枠に固定する緊縛を装飾化した文様)を表現する。

50は、正面に向かって右側の盾外縁部で、外向鋸歯文が施文される。幅約0.1cmの棒状工具により鋸歯文の斜辺と垂直二等分線を深く刻み、斜辺に平行する線刻を約0.2~0.25cm間隔で多条に充填する。裏面には円筒基部との接合を補強する目的の粘土板(幅約1.0cm)を横位に入れる。内外ともナデにより最終調整される。

51は、器面の風化が著しいものの、細密な線刻により鋸歯文が平坦な盾面に刻まれた資料である。内面に残る幅約2cmの粘土帯の接合痕跡の方向から上向きに配置された鋸歯文で、外区上縁に相当するものとみられる。斜辺と垂直二等分線、斜辺と平行する多状充填線の線刻幅に区別はなく、ていねいに刺繍装飾を表現している。

③家形埴輪(第90図28・29、図版第80)

平成24年度調査では、全体形が復元できる家形埴輪が複数個体確認されていた。今回の調査でも量的には多くないが、家形埴輪と推定される埴輪片が出土している。

28は、屋根と軸(壁)の接合部で、屋根の流れの外面には線刻や突帯等の造形施文は残さないが、断面観察により、軸部上端から屋根への連続的な粘土帯積み上げの後、軒部にあたる屋根下半部が軸部の上端側に付加される製作工程を知ることができる。29は先端が斜め下方に鈍角に折れる断面形を呈する突帯で、平成24年度調査出土の家形埴輪Aの高床構造の家形埴輪との接合資料である。

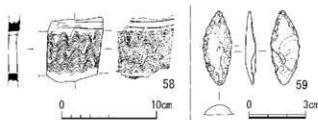
④鶏形埴輪(91図52~57、図版第81)

53~55は、断面が縦横ともに緩く内方にカーブする板状で、外面に平行する線を刻み、鳥の羽を示す資料とみられる。平行沈線は一方に収束し、羽の外縁線に規制されたものと考え。56は小口径の円筒に張り付く罫上の突帯の側面に低い三角錐形の粘土塊が残るもので、宿木と脚の表現と考えられる。57は鶏の頭から頸部で、平成24年度調査で出土した埴輪との接合資料である。新たに確認された頸部(A-A'より下)は、下方に向かい裾が広がる傾向があり、胴部に近い部位と考えられる。

(伊賀高弘)

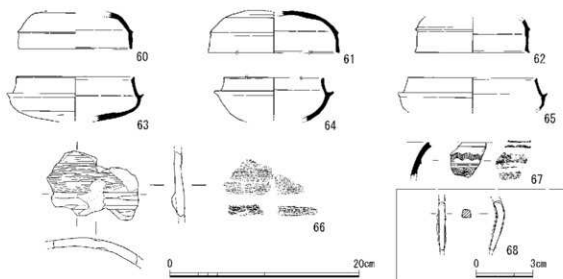
(2)3トレンチS D01その他出土遺物(第92図58・59、図版第82・83)

周溝からは埴輪以外に土器と石鏝が出土している。58は須恵器器台である。小片ではあるが、脚部と考えられる。切り込みの形状から方形スカシと台形スカシが施されたものと思われる。スカシは長辺5cmを測る。スカシの間隔からは5つ以上のスカシが施されていたものと考えられる。スカシの間には8本を単位とする3条の波状文が認められる。波状文は上方から下方へ順に施されている。波状文が施された文様帯の上には、2条の凸線が施され、さらに上にも文様帯があったものと考えられる。59はササカイト製の石鏝である。長さ3.9cm、幅1.6cm、重さ3.6gを測る。



(3)4トレンチS X01出土遺物(第93図60~68、図版第82)

第92図 周溝S D01内出土遺物実測図(1/4・1/2)



第93図 4トレンチSX01出土遺物実測図(1/4・1/2)

須恵器片7点、埴輪片1点、釘1点が出土している。須恵器はTK208並行期からTK47の型式が混在している⁽⁸¹⁵⁾。

60～62は須恵器杯蓋である。60は口縁部が短い。62は口縁部、天井部の境の稜が明瞭である。口縁部は直線的で、口縁端部が若干外に開く。63～65は須恵器杯身である。63は立ち上がりが高く、受け部の溝が明瞭である。64は63・65に比べて小さくおさめる。立ち上がりは低く、口縁部は丸くおさめる。65は全体に扁平な印象である。立ち上がりは、内傾する。66は埴輪片である。円筒植輪または形象埴輪の円筒部と考えられる。外面には条線の密度が1cmあたり7本のハケ工具によるハケメが確認できる。突帯部はナデにより調整されている。67は須恵器甕である。口縁部には波状文が2条施文されている。ともに7～8条からなる波状文が0.8cm幅で施され、間には突帯がめぐる。68は鉄釘である。断面は正方形に近い。両端とも欠損している。

(竹村亮仁)

付表7 女谷・荒坂横穴群検出遺構一覧

調査番号	内 容	備 考
SD 01	溝	近世以降の陶器・ガラス
SX 02	横穴墓道 (45号横穴)	墓道のみ調査
SX 03-1	横穴墓道 (46号横穴)	墓道のみ調査
SX 03-2	横穴墓道 (47号横穴)	墓道のみ調査
SX 04	溝状遺構	
SX 05	溝状遺構	
SX 06	SD 01と同じ	SD 01で報告
SX 07	横穴 (48号横穴)	須恵器
SX 08	横穴 (49号横穴)	遺物等無し
SX 09	自然流路	
SX 10	自然流路	
SX 11	横穴 (50号横穴)	遺物等無し
SX 12	土坑	
SX 13	自然流路	
SX 14	自然流路	
SX 15	横穴 (51号横穴)	人骨・土師器・須恵器

5. 女谷・荒坂横穴群第14次

女谷・荒坂横穴群は、2か所の調査区を設定して調査を実施したが、結果的に一続きの調査区となった。

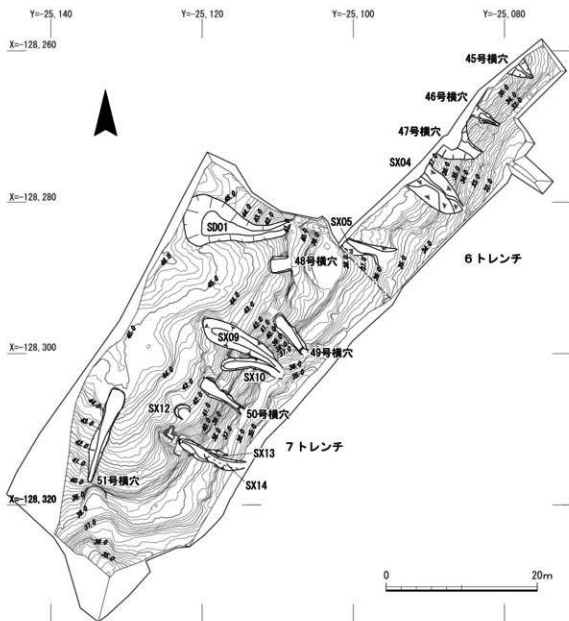
横穴の掘削されている地山は大阪層群と考えられる砂礫と粘土からなる軟弱な地層である。

6トレンチは、丘陵裾部に設けたトレンチで、平成24年度の調査区の南側と近接している。この6トレンチは調整池を設ける位置であり、丘陵裾を部分的に掘削するものである。そのため、当初より横穴の玄室部

分は調査区外にあり、横穴の墓道部分だけが分布するものと予想された。

7トレンチは道路建設予定地内に設定した調査区であり、6トレンチの南側で丘陵の頂部から裾部まで全面の調査を実施した。7トレンチの南斜面の標高40.0m付近には、分布調査により天井部の陥没した荒坂A支群16号横穴の存在が推測されていたが、調査の結果、窪地を確認しただけで、横穴ではないことが明らかとなった。

発掘調査の結果、6トレンチ相当部分では、横穴の墓道と判断される3か所の溝状遺構と自然の水の流れと判断される溝状遺構2か所を検出した。7トレンチ相当部分で検出した遺構は、丘陵上部から裾部に向かって不定形の溝状遺構2か所と丘陵中位から裾部に向かって掘り込まれた溝状遺構2か所と横穴4基を検出した。検出した横穴は7基で、南東方向に開口するものが5基、北東に開口するものが1基、南西に開口するものが1基である。玄室が残存していたすべての横



第94図 女谷・荒坂横穴群 荒坂A支群遺構配置図(1/500)

穴で天井が完全に崩落している状況であった。

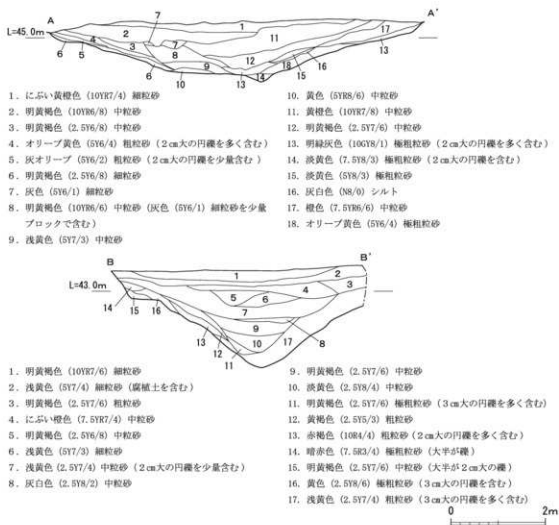
なお、調査時の横穴遺構番号と女谷・荒坂横穴群全体を通した横穴番号は、八幡市教育委員会と協議の上、付表7のように横穴番号を付与した。

1) 検出遺構

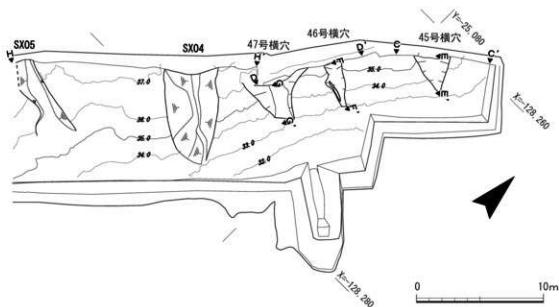
(1) 溝SD01(第95・97図、図版第73)

7トレンチ北部、48号横穴の北西10mに位置している。標高42.0~46.0mで、丘陵頂部から中腹にかけて長さ約18m、深さ1.1~2.0mを測る。検出当初は丘陵頂部に掘り込まれた土坑と判断し、底面の地山の一部が灰白色粘質土であることから、近世の瓦等に使用する粘土採掘穴と考えて調査を進めた。調査を進めると、丘陵裾部では溝状を呈し、SX06としていた溝と繋がるのが判明した。土坑として掘削されて以後、降雨等により自然流路へ変化したものと考えられる。

SD01の埋土は、明黄褐色中粒砂が間層を挟んで堆積しており、頂部横断面(第95図A-A')12層で古墳時代後期の須恵器杯身が1点出土しているものの、その下層では奈良時代の布目瓦のほか、棧瓦や近世以降の陶器・ガラス瓶などが出土している。



第95図 7トレンチSD01土層断面図(1/80)



第96図 6トレンチ平面図(1/300)

(2)45号横穴(第96・98・99図・図版第65・66)

45号横穴は、6トレンチ北東端から南に6.5mの位置で墓道端部のみを検出した。横穴は北西－南東方向に造られている。玄室部は調査区外へと延びていくため、全容は不明である。主軸はN－52°－Wをとる。

墓道の検出長は水平距離で2.6m、斜距離で3.1mを測る。墓道先端部の上面幅は0.5mで、玄室方向に向かってハの字状に広がっている。調査地北東端での墓道上面を検出した標高は35.3m、床面の標高は34.5mで、上面幅は2.8m、墓道底部の幅は0.7m、深さは0.8mを測り、断面形は皿状を呈している。墓道底面の傾斜角は22°程度である。

第98図C－C′の北壁横断面での観察では、23層から35層を墓道内の堆積土と判断した。埋土は大きく3層に分けられ、最下層34・35層では5cm大の円礫を含む明黄褐色の極粗粒砂で硬く締まった層と黄橙色細粒砂が40cm程度あり、その上層26～33層には黄橙色系の粗粒砂で円礫を含む層が20cm程度、さらにその上層23～25層は明黄褐色系の粗粒砂で、中層と同様、円礫を含む層が30cm以上堆積している。第99図E－E′の縦断面では、12層が横断面の最下層34・35層と同じ墓道の埋土である。縦断面5層、14層が横断面の中層26～33層に、3層は上層23～25層に相当し、横穴内の埋土である。

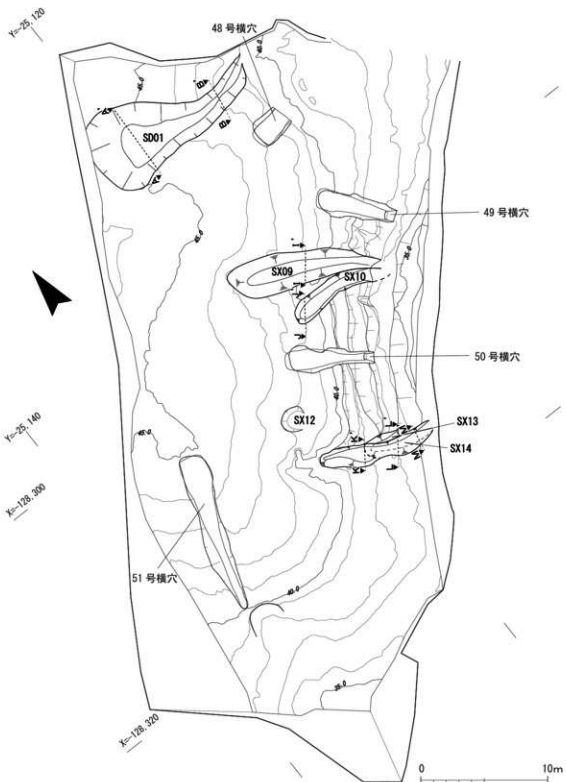
溝の掘削中に上層から須恵器杯身(80)が1点出土したが、横穴に伴うものか、横穴が機能しなくなつて以降に流入したものは明らかでない。また、奈良時代の杯B(82)が出土した。

(3)46号横穴(第96・98・99図・図版第65・67)

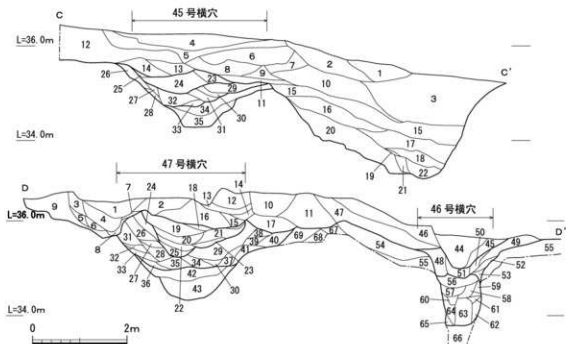
46号横穴は、6トレンチ北東端から西に14.5m、45号横穴の中軸線から約8m西で検出した。横穴は南東方向に開口し、丘陵斜面に直交するように掘り込まれている。45号横穴と同様、墓道端部のみを検出したため、横穴の全容は不明である。主軸はN－58°－Wをとる。北壁から墓道先端までの検出長は3.3mで、上面検出時の標高は35.4m、底面の標高は33.8mである。北壁で確

認できた墓道の上面幅は1.6m、墓道底部の幅は0.5mを測り、墓道先端での幅は0.6mを測る。底面はほぼ水平に整形されており、底面の最深部は2.0mと45号横穴よりも深い。墓道の壁面は水平な底面からはほぼ垂直に立ち上がる「コ」の字を呈する。底面の傾斜角は18°を測る。

第98図D-D'の北壁横断面の観察では、48～53・56～65層が墓道内の堆積土である。溝内の



第97図 7トレンチ平面図(1/300)



C-C' 断面

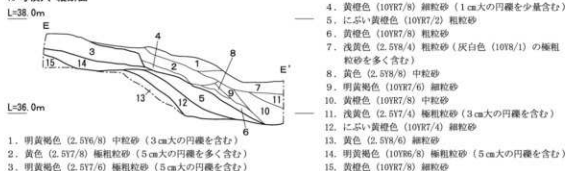
1. 黒褐色 (5YR3/1) 粗粒砂 (腐蝕土)
2. 黄褐色 (7.5YR/8) 中粒砂
3. 黄色 (2.5YR/6) 粗粒砂
4. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粗粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む)
5. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細粒砂
6. 黄色 (2.5YR/6) 細粒砂
7. 黄色 (5Y7/6) 粗粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
8. 黄色 (2.5YR/8) 粗粒砂
9. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂
10. 褐色 (7.5YR6/8) 中粒砂 (3cm 大の円礫を少量含む)
11. 黄褐色 (10YR7/8) 粗粒砂
12. 黄色 (5Y7/6) 粗粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
13. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粗粒砂 (4cm 大の円礫を多く含む)
14. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細粒砂
15. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 細粒砂
16. 明黄褐色 (10YR6/8) 中粒砂
17. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 中粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む)
18. 浅黄色 (2.5Y7/4) 粗粒砂 (2cm 大の円礫を含む)
19. 黄色 (5Y7/6) 粗粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む)
20. 黄色 (2.5YR/8) 粗粒砂
21. 黄色 (2.5Y7/6) 極粗粒砂 (2cm 大の円礫を含む)
22. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
23. 明黄褐色 (10YR6/8) 粗粒砂
24. 明黄褐色 (10YR6/6) 極粗粒砂 (5cm 大の円礫を多く含む)
25. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 極粗粒砂
26. におい黄褐色 (2.5Y6/3) 粗粒砂
27. におい黄褐色 (10YR6/3) 粗粒砂
28. オリーブ黄色 (5Y5/3) 粗粒砂
29. 黄色 (2.5YR/6) 細粒砂
30. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒砂
31. 黄褐色 (10YR7/8) 粗粒砂
32. におい黄褐色 (10YR6/3) 粗粒砂 (5cm 大の円礫を多く含む)
33. 黄褐色 (10YR7/8) 粗粒砂
34. 明黄褐色 (10YR6/6) 極粗粒砂 (5cm 大の円礫を多く含む)
35. 黄褐色 (10YR7/8) 細粒砂

D-D' 断面

1. におい黄褐色 (10YR7/4) 中粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
2. 褐色 (7.5Y7/6) 粗粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む)
3. 黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む)
4. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む)
5. 明黄褐色 (10YR6/6) 極粗粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む)
6. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
7. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 粗粒砂
8. 明褐色 (7.5YR5/6) 極粗粒砂
9. におい褐色 (7.5YR6/4) 極粗粒砂 (3cm 大の円礫を含む)
10. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂
11. 明黄褐色 (10YR7/6) 粗粒砂 (灰白色 (10YR/1) 粗粒砂を多く含む)
12. 褐色 (5YR6/8) 中粒砂
13. 褐色 (5YR7/6) 細粒砂
14. 浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂 (3cm 大の円礫を含む)
15. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂 (2cm 大の円礫を含む)
16. におい褐色 (7.5YR7/4) 極粗粒砂 (5cm 大の円礫を多く含む)
17. 褐色 (5YR6/6) 粗粒砂 (灰白色 (10YR/1) 極粗粒砂を多く含む)
18. におい黄褐色 (10YR7/4) 細粒砂
19. 明黄褐色 (10YR6/8) 中粒砂
20. 褐色 (7.5YR6/6) 粗粒砂
21. におい黄褐色 (10YR6/4) 細粒砂
22. におい褐色 (7.5YR6/4) 中粒砂
23. におい黄褐色 (10YR7/3) 粗粒砂
24. 褐色 (7.5Y6/6) 中粒砂
25. におい褐色 (7.5YR6/3) 細粒砂 (大半が 2cm 大の円礫)
26. におい褐色 (7.5Y7/4) 細粒砂
27. 褐色 (7.5YR6/6) 粗粒砂 (灰白色 (10YR/1) 粗粒砂を多く含む)
28. 黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂
29. 黄褐色 (7.5YR7/8) 細粒砂
30. におい褐色 (7.5YR6/4) 粗粒砂
31. におい褐色 (7.5YR7/4) 中粒砂
32. 浅黄色 (7.5Y7/4) 極粗粒砂
33. 褐色 (7.5YR6/6) 粗粒砂
34. 明褐色 (7.5YR5/6) 中粒砂
35. 黄褐色 (10YR5/8) 中粒砂
36. 褐色 (7.5YR6/6) 粗粒砂
37. 明褐色 (7.5YR5/6) 中粒砂
38. 灰褐色 (5YR6/2) 極粗粒砂
39. におい黄褐色 (10YR5/5) 細粒砂
40. 黄褐色 (10YR7/8) 中粒砂 (4cm 大の円礫を含む)
41. におい黄褐色 (10YR6/3) 粗粒砂
42. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む)
43. 明褐色 (7.5YR5/6) 中粒砂 (2cm 大の円礫を含む)
44. オリーブ黄色 (5Y6/3) 細粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
45. 浅黄色 (5Y7/4) 中粒砂
46. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 中粒砂
47. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂
48. オリーブ黄色 (5Y6/4) 中粒砂
49. 黄色 (5YR/6) 細粒砂
50. 黄色 (5Y7/6) 粗粒砂
51. 浅黄色 (5Y7/3) 細粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
52. 明黄褐色 (5Y7/3) 粗粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
53. 黄色 (2.5YR/6) 細粒砂
54. におい黄色 (2.5Y6/3) 粗粒砂
55. 浅黄色 (5YR/4) 細粒砂
56. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂
57. 明褐色 (5Y7/3) 細粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む)
58. 明褐色 (10YR7/6) 極粗粒砂 (大半が 3cm 大の円礫)
59. 灰白色 (5YR/2) 中粒砂
60. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂
61. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 中粒砂
62. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂
63. 黄色 (5YR/6) 粗粒砂
64. 浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂
65. 明黄褐色 (2.5YR6/2) 粗粒砂 (ブロック状に灰白色 (10YR/1) 中粒砂を含む)
66. 灰白色 (7.5YR/2) 粗粒砂
67. 褐色 (7.5YR/6) 極粗粒砂 (3cm 大の円礫を含む)
68. 褐色 (7.5YR6/6) 粗粒砂 (灰白色 (10YR/1) 粗粒砂を多く含む)
69. 明黄褐色 (10YR6/8) 中粒砂 (5cm 大の円礫を含む)

第98図 6トレンチ45・46・47号横穴土層断面図1 (1/80)

45号横穴 縦断面



46号横穴 縦断面



47号横穴 縦断面



第99図 6トレンチ45・46・47号横穴土層断面図2 (1/80)

埋土は大きくは6層以上に分かれ、最下層56～65層では浅黄色系の細(中)粒砂が1m以上堆積しており、その上層には2cm大の円礫を含む48～53層が0.6m以上堆積しており、その層を切り込むように2cm大の円礫を多く含む断面溝状の落ち込み44・45層が上面幅1m、深さ0.9m程度で堆積している。44～47層は、横穴が完全に埋没した後、その窪みに堆積した旧表土と思われる。第99図F-F'の縦断面では、2・3・6層が横断面の最下層(D-D' 56～65層)に相当する墓道の埋土である。また、5・13・26・27層が横断面48～51層の浅黄色系細粒砂に相当する層で横穴内の埋土である。

墓道内の上層48～52層から須恵器の細片が1点出土したが、墓道が機能しなくなって以降に流入したものと思われる。

(4) 47号横穴(第96・98・99図・図版第65・67)

47号横穴は、6トレンチの北東端から西に17.5m、46号横穴の西4.5m(芯々距離)と近接した位置にある。墓道は南東方向に開口する。46号横穴と同様、墓道の一部と南東側に延びる墓道の先端部分を検出した。検出長20mを測り、主軸はN-58°-Wをとる。

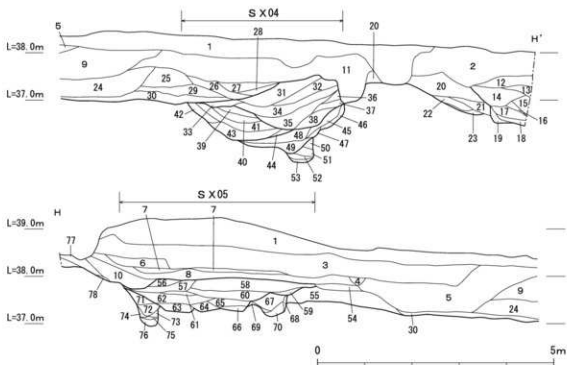
北壁で確認できた墓道の上面幅は2.76m、墓道底部の幅は1.16mで、墓道先端では上面幅が1.35mと狭くなっている。墓道底面の標高は33.5～34.5mで、底面の傾斜角は21°を測る。墓道の先端では、隣接する46号横穴につながる通路が存在するかどうかを確認するために精査をおこなったが、通路と思われる遺構は検出できなかった。

第98図D-D'の北壁横断面の観察によると、墓道の埋土は18～43層が相当し、大きく3層に分かれる。下層の42・43層は明(黄)褐色系で2～3cm大の円礫を多く含む。中層の24・26～41層は橙あるいは褐色系で円礫を含むものが少なく5cm大の円礫を多く含む。その上層の23・25層は横穴埋没後の堆積層である。下層の42・43層は墓道を開削した直後の堆積層であり、墓道床面は46号横穴に比べて幅広で緩い屈曲を呈している。第99図G-G'の縦断面では、3・8・9・10層が下層に、1・2・4層は中層に相当する層で墓道の埋土であり、それより上層の5～7・11～22層は、墓道内が埋没した後の堆積土である。上層直上(G-G' 11層)で土師器高杯の細片が1点出土した。

(5) 溝状遺構S X04(第96・100図)

47号横穴の西7mで検出し、主軸をN-47°-Wにとる。溝は丘陵裾部に向かって延び、その先端はトレンチ南壁付近まで達している。検出長は5m以上で断面は二段に掘り込まれており、上面が台形で底部は「U」字形を呈している。上面幅は3.8m、深さ1.2mで底部の「U」字形を呈する溝は上面幅0.74m、底部幅0.5m、深さ0.4mで東壁から西側に向かって直線的に延びるものではなく、蛇行している。

第100図H-H'の北壁横断面の観察では、31～52層がこの溝内の堆積土である。溝内の埋土は大きくは4層に分かれ、最下層の50～53層は小規模溝の埋土で、黄色系の中粒砂で円礫を含むものである。下層の45～49層は黄褐色系の砂粒で円礫を多く含む。中層の39～43層は下層以上に円礫を多く含む層で、上層の31～38層は礫を含まない細粒砂が厚く堆積している。下層からは土



- | | | |
|---|---|---|
| 1. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗粒砂 (黄色 (2.5Y8/6) 中粒砂がブロック状に入る) | 25. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中粒砂 | 52. 黄色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂 |
| 2. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗粒砂 (黄色 (2.5Y8/6) 中粒砂がブロック状に入る) | 26. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細粒砂 (1cm 大の円礫を含む) | 53. 黒色 (10Y2/1) 粗粒砂 (鉄分が沈殿) |
| 3. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂 (浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂が混ざる) | 27. 灰白色 (10Y8/1) シルト (灰白色 (10Y8/1) シルトがブロック状に混ざる) | 54. 黄色 (2.5Y7/8) 粗粒砂 |
| 4. オリーブ褐色 (2.5Y7/3) 粗粒砂 | 28. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂 | 55. 黄褐色 (10YR7/8) 極粗粒砂 |
| 5. 黄色 (2.5Y6/6) シルト (にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗粒砂が混ざり 3cm 大の円礫を含む) | 29. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂 | 56. 明黄褐色 (10YR6/6) 極粗粒砂 |
| 6. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 極粗粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む) | 30. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂 | 57. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂 (2cm 大の円礫を含む) |
| 7. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 中粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む) | 31. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂 | 58. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 極粗粒砂 |
| 8. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中粒砂 | 32. 浅黄色 (2.5Y7/3) 細粒砂 | 59. 黄色 (2.5Y7/8) 粗粒砂 |
| 9. 明黄褐色 (10YR6/4) 粗粒砂 (黄褐色 (2.5Y5/4) 粗粒砂を含む) | 33. 黄褐色 (2.5Y5/6) 粗粒砂 (4cm 大の円礫を含む) | 60. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中粒砂 (3cm 大の円礫を多く含む) |
| 10. 黄色 (2.5Y7/8) 中粒砂 | 34. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 中粒砂 | 61. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 極粗粒砂 |
| 11. 黄褐色 (2.5Y5/4) 粗粒砂 | 35. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂 (灰白色 (7.5Y8/1) 極粗粒砂を多く含む) | 62. 黄色 (2.5Y8/6) 中粒砂 |
| 12. 黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む) | 36. 黄色 (2.5Y7/8) 中粒砂 | 63. 明黄褐色 (10YR7/8) 極粗粒砂 (5cm 大の円礫を含む) |
| 13. にぶい橙色 (7.5YR6/4) 細粒砂 (2cm 大の円礫を少量含む) | 37. 浅黄色 (5Y7/4) 粗粒砂 | 64. オリーブ色 (5Y6/6) 粗粒砂 |
| 14. 明黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂 | 38. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂 (1cm 大の円礫を多く含む) | 65. 明黄褐色 (10YR6/8) 粗粒砂 (4cm 大の円礫を多く含む) |
| 15. 橙色 (7.5YR6/8) 中粒砂 | 39. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粗粒砂 (5cm 大の円礫を多く含む) | 66. 黄褐色 (10YR7/8) 粗粒砂 (5cm 大の円礫を含む) |
| 16. 橙色 (7.5YR6/6) 粗粒砂 | 40. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 中粒砂 (5cm 大の円礫を多く含む) | 67. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂 (5cm 大の円礫を含む) |
| 17. 橙色 (7.5YR7/6) 極粗粒砂 (3cm 大の円礫を含む) | 41. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中粒砂 (5cm 大の円礫を多く含む) | 68. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂 (5cm 大の円礫を多く含む) |
| 18. 黄褐色 (7.5YR7/8) 極粗粒砂 (2cm 大の円礫を含む) | 42. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗粒砂 (3cm 大の円礫を含む) | 69. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗粒砂 (4cm 大の円礫を多く含む) |
| 19. 橙色 (7.5YR7/6) 極粗粒砂 (3cm 大の円礫を含む) | 43. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粗粒砂 (5cm 大の円礫を含む) | 70. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂 (5cm 大の円礫を少量含む) |
| 20. 黄色 (2.5Y8/6) 中粒砂 (大半が 3cm 大の円礫) | 44. 明黄褐色 (10YR7/6) 中粒砂 | 71. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂 (2cm 大の円礫を少量含む) |
| 21. 明赤褐色 (5YR5/6) 極粗粒砂 (4cm 大の円礫を含む) | 45. 黄色 (5Y7/4) 粗粒砂 | 72. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗粒砂 (3cm 大の円礫を含む) |
| 22. にぶい橙色 (5YR6/4) 粗粒砂 (4cm 大の円礫を含む) | 46. オリーブ黄色 (5Y6/4) 極粗粒砂 | 73. 黄色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂 |
| 23. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 極粗粒砂 | 47. 浅黄色 (5Y7/4) 中粒砂 | 74. 浅黄色 (2.5Y7/3) 粗粒砂 |
| 24. 黄色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂 (にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗粒砂が混ざる) | 48. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂 (5cm 大の円礫を含む) | 75. 灰白色 (2.5Y7/2) 極粗粒砂 |
| | 49. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 中粒砂 (3cm 大の円礫を含む) | 76. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 極粗粒砂 |
| | 50. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細粒砂 | 77. オリーブ黄色 (5Y6/4) 細粒砂 |
| | 51. 黄褐色 (2.5Y5/4) 中粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む) | 78. 灰黄色 (2.5Y6/2) 細粒砂 |

第100図 6 トレンチ S X 04・05土層断面図 (1/80)

師器の細片が出土している。

遺構検出当初は平面輪郭から墓道と認識して調査を進めたが、溝の形状が直線ではないこと、底面の凹凸がみられること、45～47号横穴の墓道端よりも溝先端がトレンチ南端まで延びることから、現状では墓道とは考えにくく、雨水等が流れた痕と判断した。

(6) 溝状遺構 S X 05 (第96・100図)

6 トレンチの南端、S X 04の南西6.3mで検出した。主軸N-70°-Wにとり、北壁から丘陵裾部にまで延びているもので、北西端からの検出長は6.6mである。北壁で確認した溝の上面幅は3.9m、底部幅は2.1m、深さは0.7mを測る。断面が台形を呈する溝状遺構である。溝の北端と南端ではさらに小規模の溝がある。北端での溝の幅は上面0.6m、下面0.4m、深さは0.3mを測る。北小溝はトレンチ東壁から西壁にまで延びているが、東壁から東西方向に直線的に延びるのではなく、北側に曲折するように延びている。南端での小溝の幅は上面0.6m、下面0.4m、深さは0.4mを測る。北溝と同様、丘陵裾部まで西側に曲折しながら延びている。

第100図H-H' 北壁横断面の観察では、56～76層がS X 05の埋土で、北小溝の埋土67～70層は黄褐色系中粒砂で円礫を多く含み、南小溝の埋土71～76層は黄色系極粗粒で円礫をあまり多く含まない。北・南小溝の上層に堆積した埋土56～66層は黄褐色系で円礫を多く含む土である。

溝内堆積土内からは須恵器片が数点出土しているが、上面からの遺物が流入したのと思われる。遺構検出段階では、横穴に伴う墓道を想定して発掘調査を進めたが、溝の形状に加え溝底面が平坦でなく円形の窪みや凹凸が顕著であることから、横穴の墓道とは考えにくく、雨水により軟弱地盤を抉るように削った痕跡と判断した。

(7) 48号横穴 (第97・101図・図版第68～70)

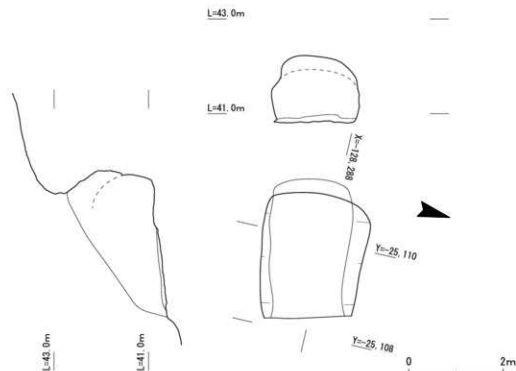
48号横穴は、7 トレンチの丘陵斜面北端で検出した横穴であり、主軸はN-100°-Wをとる。墓道・羨道は後世に削平されて完全に失われており、玄室部だけが遺存していた。天井は崩落していた。斜面を掘り込んだ形状と整地土の存在、古墳時代の遺物の出土から横穴と判断した。床面から側壁の立ち上がりは最大1.1mを測る。検出した玄室長は3.1m、最大幅2.3m、奥壁幅は1.8mである。床面の標高は40.9mである。

現地調査着手前にも丘陵部中腹で開口部が認められ、その開口部には腐植した竹が流入した状況であった。床面直上付近まで後世の攪乱を受けており、玄室床面上に明黄褐色(10YR7/6)中粒砂が厚さ1.0cmでわずかに残っており、玄室埋葬面を造った整地土と判断した。整地土上面での遺物の出土は認められなかった。また整地層の上面には、天井部が崩落する以前の堆積層として灰白色(5Y7/2)・淡黄色(5Y7/3)・にぶい黄橙色(10YR7/4)が0.1～0.15mの厚さで堆積していた。

玄室部床面直上の竹根の腐植土中から寛永通寶(86)が出土したことから、江戸時代以降に床面の大半が削平されたと考えられる。また、横穴に関連した遺物では、床面より15cm上の客土から須恵器の破片(81)が1点出土しただけである。

(8) 49号横穴 (第97・102図・図版第68～71)

49号横穴は、7 トレンチの丘陵東側斜面で検出した横穴である。48号横穴の南7.0mに位置し、



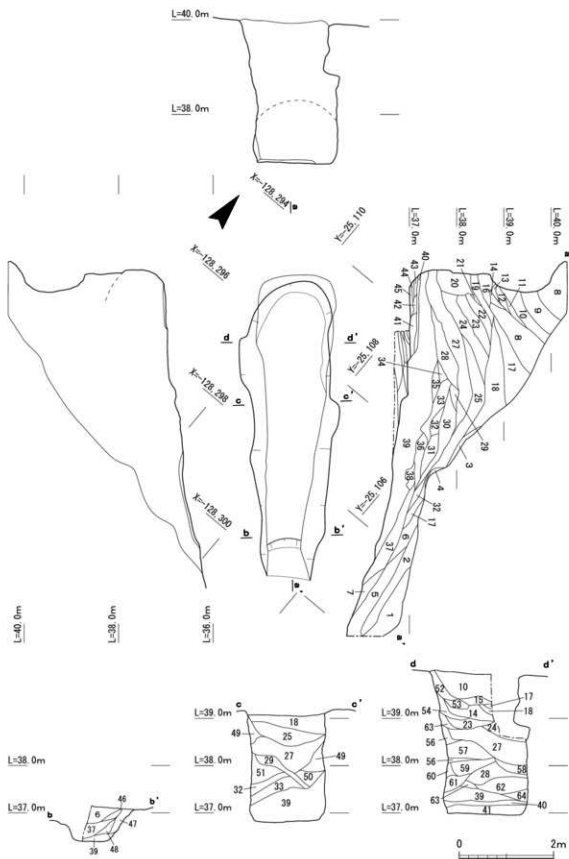
第101図 48号横穴平面・立面図(1/80)

南東方向に開口する。49号横穴は墓道先端が一部削平されているものの、玄室および墓道を確認しており、その全長は6.5mを測り、主軸はN-35°-Wをとる。

墓道は両側壁とも奥壁から東へ4.0mの位置でわずかに内側に屈曲する部分があり、その屈折部分から東に延びる部分を墓道と認識した。墓道の検出長は2.4mを測り、玄室近くでの墓道の上面幅は1.7m、墓道底部の幅は1.0mで、深さは1.2mである。墓道先端の上面幅は0.9mで、床面の標高は36.2mである。墓道先端の外側は、丘陵部斜面がやや急傾斜となって落ち込んでいた。この傾斜面が自然地形であるのか、人為的に削られたものであるのか、判断はできなかった。そのため、墓道先端部付近では、横穴と横穴を繋ぐ明確な通路は確認できなかった。

玄室の平面形は長方形を呈し、玄室長4.0m、奥壁幅1.6m、最大幅1.6mを測る。玄室床面の標高は37.0mで明確な玄門部は確認できなかった。なお、玄室床面から天井の崩落による陥没痕までの深さは最深部で3.3mを測る。天井は崩落しており、その全体の形状は不明であるが、奥壁の観察ではわずかな湾曲が認められ、これを横穴の湾曲とすると、奥壁近くの天井はアーチ状ではなく、やや水平方向の天井を呈し、床面より1.3mの高さであったと想定できる。

墓道の玄室側の地山は礫・砂を中心とした堆積土であるのに対して、玄室内の地山はシルトを中心とした堆積土と明瞭に分かれていた。地山の土質の違いを意識して玄室・墓道を構築した可能性もある。玄室床面付近では、遺物や整地土の有無を確認しながら調査した。縦断面での土層では、玄室の奥壁側で40～45層を確認したが、斜め方向に細かく堆積しているため、整地土とは判断できなかった。天井部が大きく崩落する前に、玄室の空間が埋まる以前の堆積土と判断する。39層は天井崩落に伴う地山の崩落土で、それ以後、22～24層、27・28層などが細かく奥壁に向か



第102図 49号横穴平面・立面・土層断面図(1/80)

49号横穴土層断面土色

- | | | |
|--|--|--|
| 1. 黄色 (2.5Y7/8) 粗粒砂 (客土) | 21. 浅灰色 (2.5Y7/4) 極粗粒砂 | 42. 淡黄 (7.5Y8/4) 極粗粒砂 |
| 2. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粗粒砂 | 22. 明緑灰色 (10GY8/1) シルト | 43. 明オリーブ灰 (5GY7/1) 極粗粒砂 (2cm 大の円礫を含む) |
| 3. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 極粗粒砂 (灰白色 (N8/0) 極粗粒砂を多く含む) | 23. 橙色 (7.5Y7/6) 極粗粒砂 | 44. にぶい黄色 (7.5Y8/4) 極粗粒砂 |
| 4. 灰褐色 (10YR5/1) 極粗粒砂 (表土) | 24. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルトと灰白色 (10Y8/1) 細粒砂が互層に堆積した層 | 45. 明赤褐色 (5YR5/8) 極粗粒砂 (2cm 大の円礫を含む) |
| 5. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 中粒砂 | 25. 明青灰色 (10GB7/1) 粘質土と浅黄褐色 (10Y8/4) 細粒砂が混ざった土 | 46. 黄色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂 |
| 6. 黄色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂 (灰白色 (N8/0) 極粗粒砂を多く含む) | 26. 黄色 (2.5Y8/6) 細粒砂 | 47. 淡黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂 |
| 7. 黄色 (2.5Y8/8) 極粗粒砂 (4cm 大の円礫を多く含む) | 27. 明緑灰色 (10GY8/1) シルト | 48. 黄褐色 (7.5Y7/8) 極粗粒砂 |
| 8. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルトと灰白色 (10Y8/1) 細粒砂が互層に堆積した層 | 28. 灰白色 (10Y8/1) 極粗粒砂 (8cm 大の円礫を多く含む) | 49. 黄色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂 |
| 9. 黄色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂 (灰白色 (2.5Y8/1) 極粗粒砂を多く含む) | 29. 灰白色 (5Y8/1) 極粗粒砂 | 50. 黄色 (2.5Y7/8) 粗粒砂 |
| 10. 淡黄色 (2.5Y8/3) 極粗粒砂 (3cm 大の円礫を含む) | 30. 浅黄色 (5Y8/3) 極粗粒砂 | 51. 灰白色 (N8/0) 極粗粒砂 (黄色 (2.5Y7/8) 粗粒砂を含む) |
| 11. 淡黄色 (5Y8/4) 極粗粒砂 (3cm 大の円礫を少量含む) | 31. 黄色 (2.5Y7/8) 粗粒砂 | 52. 淡黄色 (5Y8/4) 極粗粒砂 |
| 12. 明緑灰色 (10GY8/1) シルト | 32. 黄色 (5Y8/8) 極粗粒砂 | 53. 明緑色 (10GY8/1) シルト |
| 13. 淡黄色 (5Y8/4) 粗粒砂 | 33. 灰白色 (5Y8/2) 極粗粒砂 | 54. 黄色 (2.5Y8/6) 細粒砂 |
| 14. 淡黄色 (5Y7/3) 極粗粒砂 | 34. 浅黄色 (2.5Y8/3) 極粗粒砂 | 55. 灰白色 (5Y8/1) 極粗粒砂 |
| 15. 黄褐色 (7.5Y7/8) 極粗粒砂 | 35. 黄色 (5Y8/8) 極粗粒砂と灰白色 (10Y8/1) 極粗粒砂が互層に堆積した層 | 56. 灰白色 (10GY7/1) 極粗粒砂 (淡黄色 (5Y8/4) 粗粒砂をブロックで含む) |
| 16. 明緑灰色 (10GY8/1) シルト | 36. 灰白色 (7.5Y8/1) 極粗粒砂 (黄色 (5Y8/8) 極粗粒砂を含む) | 57. 明青灰色 (10GB7/1) シルト (浅黄褐色 (10Y8/4) 粗粒砂を含む) |
| 17. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 極粗粒砂 (灰白色 (N8/0) 極粗粒砂を多く含む) | 37. 灰白色 (N8/0) 極粗粒砂 (2cm 大の円礫を多く含む) | 58. 橙色 (7.5Y7/6) 極粗粒砂 |
| 18. 明青灰色 (10GB7/1) 粘質土と浅黄褐色 (10Y8/4) 粗粒砂が混ざった土 | 38. 明緑灰色 (10GY8/1) シルト | 59. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 中粒砂 |
| 19. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 極粗粒砂 | 39. 灰白色 (7.5Y8/1) 極粗粒砂と黄色 (5Y8/8) 極粗粒砂が混ざった堆積土 | 60. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 極粗粒砂 |
| 20. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 極粗粒砂 (明緑灰色 (10GY8/1) シルトが一部混ざる) | 40. 明褐色 (7.5YR5/8) 粗粒砂 (3cm 大の円礫を含む) | 61. 黄色 (2.5Y8/8) 細粒砂 (灰白色 (5Y8/1) 極粗粒砂を含む) |
| | 41. 灰白色 (5Y8/2) 極粗粒砂 | 62. 淡黄色 (5Y8/4) 極粗粒砂 |
| | | 63. 黄色 (2.5Y7/8) 細粒砂 |
| | | 64. 黄色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂 |

って流入している。

玄室および墓道床面とも遺物の検出に努めたが、遺物は出土しなかった。なお墓道先端の南側、旧表土直下より弥生土器の甕が出土しているが、49号横穴に伴う遺物ではない。

(9) 溝状遺構 S X 09 (第97・103図・図版第73・74)

7トレンチの中央部に検出した遺構で、丘陵頂部から裾部に向かって溝状を呈する遺構である。検出長は水平距離で12.4m以上、深さ0.9mで、横断面は台形を呈し、主軸はN-62°-Wにとる。丘陵頂部での上面の最大幅は3m、下面幅は1.2mで、深さ1.0mを測る。

調査では重機掘削により表土を除去した段階で、横穴と考えられる土質・土色の違いを確認し、玄室部分の陥没穴と想定して調査を進めた。その結果、横穴の玄室部と判断した部分で、その底面を想定より浅い位置で確認するとともに、その底面が平坦ではなく凹凸であることがわかり、横穴の玄室ではないと判断せざるを得なかった。また、丘陵斜面から裾部に延びる溝状の土色の違いも横穴の墓道と考えて調査を進めたが、平面的な形状は南側に湾曲しており、横穴とは考えにくい状況となった。

S X 09の溝状遺構の断面観察 (I - I') では、大ききは3回にわたっての流路の堆積があり、下層の5・16~18層は黄色系の極粗粒砂で円礫を多く含むものである。中層の3・4・8~15・21層は黄褐色で、含まれる円礫の大きさは小さく、上層の1・2・7層では円礫を含まなくなる。よって S X 09は、人工による掘削とみるよりも、横穴の造営以後に丘陵頂部に開掘された当初の

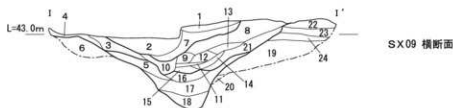
玄室部分の陥没穴と想定した掘り込みの影響により、雨水等によって削り取られてきた自然流路であると考えられる。

なお、SX09の南側に近接する溝状遺構SX10との前後関係は、堆積土の切り合い関係からSX10の一部が埋没した段階でSX09が形成されたことを確認した。

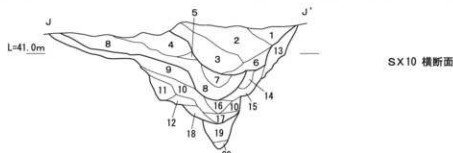
丘陵裾の溝内下層(17・18層相当層)から須恵器器台1点(84)が出土した。

(10)溝状遺構SX10 (第97・103図・図版第73・74)

7トレンチの中央付近丘陵裾部では、SX09の南側に近接して溝状遺構の輪郭を確認したことにより、丘陵中腹、頂部まで精査作業を進めたところ、SX09と交わる部分を確認するとともに、SX09がSX10を切っていることも確認した。SX10もSX09と同様丘陵斜面に築かれた横穴の



- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰白色 (10YR8/2) 細粒砂 2. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 中粒砂 3. 黄褐色 (10YR8/6) 細粒砂 4. 淡黄色 (2.5Y8/4) 粗粒砂 5. 淡黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂 (5cm大の円礫を多く含む) 6. 灰白色 (10Y8/1) 極粗粒砂 (3cm大の円礫を少量含む) 7. 浅黄色 (5Y7/3) 細粒砂 8. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂 9. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂 (3cm大の円礫を多く含む) 10. 黄色 (2.5Y8/6) 細粒砂 11. 浅黄色 (2.5Y7/3) 細粒砂 12. 黄色 (2.5Y8/6) 細粒砂 | <ol style="list-style-type: none"> 13. 黄色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂 (1cm大の円礫を多く含む) 14. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗粒砂 15. 浅黄色 (2.5Y8/4) 細粒砂 16. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 極粗粒砂 (5cm大の円礫を多く含む) 17. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 極粗粒砂 (5cm大の円礫を多く含む) 18. 浅黄色 (2.5Y7/3) 極粗粒砂 (5cm大の円礫を多く含む) 19. 灰白色 (10Y8/1) 粗粒砂 (大半が3cm大の円礫) 20. 黄色 (5Y7/6) 極粗粒砂 21. 浅黄色 (5Y7/3) 粗粒砂 (1cm大の円礫を多く含む) 22. 橙色 (7.5Y6/6) 極粗粒砂 (円礫を含む) 23. 灰白色 (10Y8/1) 粗粒砂 24. 黄褐色 (10YR7/6) 粗粒砂 (大半が2cm大の円礫) |
|--|--|



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黄褐色 (2.5Y5/4) 中粒砂 2. 黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒砂 (灰白色 (N8/0) 細粒砂を少量含む) 3. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂 (5cm大の円礫を多く含む) 4. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂 5. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細粒砂 6. にぶい黄褐色 (10YR7/6) 中粒砂 7. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂 8. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 中粒砂 (3cm大の円礫を少量含む) 9. 黄褐色 (5Y7/6) 中粒砂 (5cm大の円礫を多く含む) 10. にぶい浅黄色 (2.5YR6/3) 極粗粒砂 (2cm大の円礫を少量含む) | <ol style="list-style-type: none"> 11. 浅黄褐色 (10YR8/3) 粗粒砂 (大半が5cm大の円礫) 12. オリーブ色 (5Y6/6) 極粗粒砂 (5cm大の円礫を多く含む) 13. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 中粒砂 (2cm大の円礫を多く含む) 14. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗粒砂 (3cm大の円礫を少量含む) 15. 黄褐色 (10YR5/6) 粗粒砂 (円礫を多く含む) 16. 浅黄色 (2.5Y7/3) 細粒砂 (下層に4cm大の円礫が堆積) 17. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗粒砂 (大半が5cm大の円礫) 18. 浅黄色 (5Y7/4) 粗粒砂 (灰白色 (5Y7/0) の地山崩落土を多く含む) 19. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗粒砂 (4cm大の円礫を多く含む) 20. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極粗粒砂 (円礫を多く含む) |
|--|---|

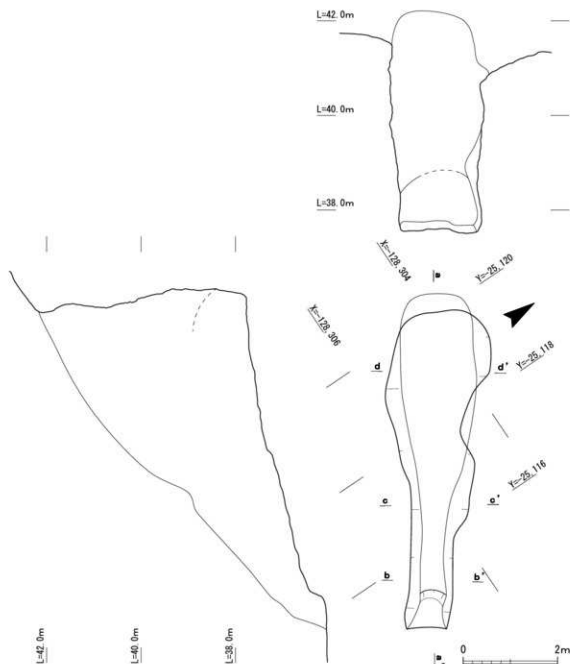


第103図 SX09・10土層断面図(1/80)

墓道と考えて掘削作業を進めた。

掘削の結果、断面が台形を呈する溝状遺構で、検出長8.0m、幅1.4m、最大深さ2.6mを測る。SX10の底部に円礫が多く平坦面がなく凹凸が著しいことから、地山の軟弱部分が雨水などにより削り取られた痕であると判断した。

横断面での土層観察（J-J'）では、大きく4層に分かれ、最下層19・20層は幅0.6mの小規模溝で多くの円礫を含む灰黄色系極粗粒砂、下層9～18層は黄褐色系粗・中粒砂で、最下層と同様円礫を多く含む層、中層4・5・7・8層が円礫をあまり多く含まない黄色系粗・中粒砂で、最上層1～3・6層は黄橙色系中・細粒砂である。



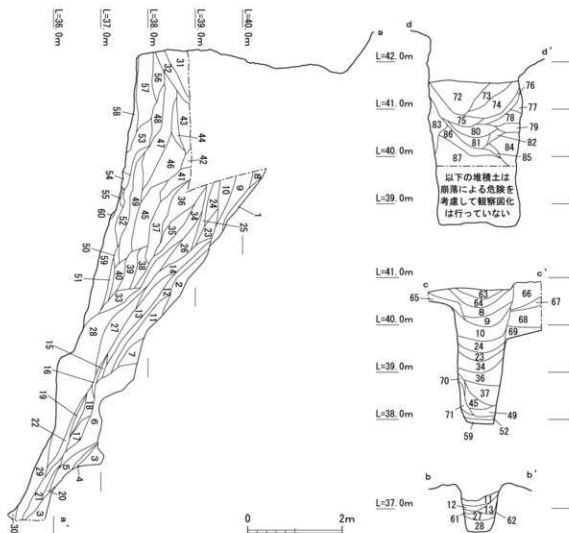
第104図 50号横穴平面・立面図(1/80)

(11)50号横穴(第104・105図・図版第68・69・71・72)

50号横穴は7トレンチ丘陵東側斜面にあり、S X10の南約4.5m、49号横穴の南11.4mの位置で検出した横穴で、南東に開口する。横穴は調査着手前に完全に崩落しており、調査当時開口は認められなかった。検出全長は7.2m、玄室長3.3m、玄室幅1.6m、推定奥壁高1.3m、墓道の検出長は水平距離で3.6m、玄室近くでの墓道の上面幅1.2m、下面幅1.0m、深さ2.0m、墓道先端部での上面幅1.0m、下面幅0.6m、深さ0.6mを測り、主軸はN-45°-Wをとる。

墓道床面の標高は36.5~37.2mで、玄室近辺と墓道先端部分の標高差は1.0mを測る。墓道検出面から床面までの深さが1.76mと深く、床面から直立気味に立ち上がっている。墓道先端から玄室方向に2.4m離れた位置で0.1m程度の段差があり、同位置の側壁もわずかに内側に曲折するか所を確認していることから、漢門部が存在した可能性が考えられるが断定までには至っていない。また49号横穴と50号横穴を繋ぐ通路は平面的には確認できなかったが、幅1.0mで平坦面をなしており、通路となる可能性がある。

50号横穴の玄室の平面形は長方形を呈し、全長4.0m、奥壁幅0.8m、推定玄門幅0.64m、最大



第105図 50号横穴土層断面図(1/80)

50号横穴土層断面図土色

1. 明黄褐色 (10YR6/8) 粗粒砂
2. にぶい橙色 (7.5Y6/4) 粗粒砂
3. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粒砂
(2cm大の円礫を多く含む)
4. にぶい橙色 (7.5Y6/4) 粗粒砂
5. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂 (灰白色
(10YR/1) で1cm大の円礫を多く含む)
6. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粗粒砂
7. にぶい橙色 (7.5Y6/4) 粗粒砂
8. 黄褐色 (10YR8+6) 極粗粒砂 (灰白色
(7.5YR/1) で1cm大の礫を多く含む)
9. 黄褐色 (10YR5/6) 粗粒砂
(5cm大の円礫を多く含む)
10. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂
11. 明黄褐色 (10YR7/6) 中粒砂
12. 灰黄褐色 (10YR5/2) 中粒砂
(4cm大の円礫を多く含む)
13. 黄褐色 (10YR5/6) 中粒砂
(4cm大の円礫を少量含む)
14. 灰白色 (7.5YR/2) 極粗粒砂
15. 明黄褐色 (10YR6/8) 中粒砂
(3cm大の礫を多く含む)
16. 淡黄色 (2.5YR/4) 中粒砂
17. 黄色 (2.5Y7/8) 細粒砂
(2cm大の円礫を少量含む)
18. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 粗粒砂
19. 浅黄色 (5Y7/4) 中粒砂
20. 明褐色 (7.5Y5/6) 中粒砂
(円礫を少量含む)
21. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂
22. 黄色 (5Y7/6) 中粒砂
23. 橙色 (7.5Y6/6) 極粗粒砂
(2cm大の円礫を含む)
24. 黄褐色 (10YR8/8) 粗粒砂
(5cm大の円礫を少量含む)
25. 浅黄色 (2.5Y7/4) 粗粒砂
26. 橙色 (7.5Y6/6) 極粗粒砂
(2cm大の円礫を多く含む)
27. 黄色 (5YR/6) 極粗粒砂
(3cm大の礫を多く含む)
28. 黄色 (2.5YR/8) 中粒砂
(3cm大の円礫を多く含む)
29. オリーブ灰色 (5Y6/2) 極粗粒砂
30. オリーブ黄色 (5Y6/4) 中粒砂
31. 淡黄色 (2.5YR/4) 極粗粒砂
(5cm大の円礫を含む)
32. 灰黄色 (2.5YR/2) 極粗粒砂
(3cm大の円礫を含む)
33. 淡黄色 (2.5YR/4) 極粗粒砂
34. にぶい黄色 (2.5Y6/6) 粗粒砂
(1cm大の円礫を少量含む)
35. 黄褐色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂
(2cm大の円礫を多く含む)
36. 明黄褐色 (10YR7/6) 極粗粒砂
(灰白色 (7.5YR/1) 極粗粒砂を含む)
37. 黄褐色 (10YR8/6) 極粗粒砂
(2cm大の円礫を多く含む)
38. 黄色 (2.5YR/6) 中粒砂
39. 黄色 (2.5Y7/8) 中粒砂
40. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂
41. 淡黄褐色 (10YR/3) 極粗粒砂
42. 橙色 (7.5Y6/6) 粗粒砂
43. 黄色 (2.5YR/6) 極粗粒砂
(3cm大の円礫を多く含む)
44. 黄色 (2.5YR/8) 極粗粒砂
(3cm大の円礫を含む)
45. 淡黄色 (2.5Y7/4) 中粒砂
(3cm大の円礫を多く含む)
46. 明黄褐色 (10YR6/8) 粗粒砂
(3cm大の円礫を多く含む)
47. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂
(4cm大の円礫を多く含む)
48. 黄色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂
49. 黄褐色 (10YR7/8) 極粗粒砂
(灰白色 (7.5YR/1) 極粗粒砂を含む)
50. 灰白色 (7.5YR/1) 中粒砂
(2cm大の円礫を含む)
51. 黄色 (2.5Y7/8) 細粒砂
52. 明褐色 (10YR8/1) 極粗粒砂
53. 灰白色 (10YR/1) 極粗粒砂
54. 明黄褐色 (10YR6/6) 極粗粒砂
55. 灰白色 (N8/0) 粗粒砂
56. 明黄褐色 (10YR7/4) 極粗粒砂
57. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 極粗粒砂
(2cm大の円礫を多く含む)
58. 黄褐色 (10YR7/8) 極粗粒砂
(5cm大の円礫を少量含む)
59. 灰白色 (10YR/1) 粗粒砂
60. 明黄褐色 (10YR7/6) 粗粒砂
(2cm大の円礫を多く含む)
61. 黄色 (5Y7/6) 細粒砂
(2cm大の円礫を多く含む)
62. 灰白色 (7.5Y7/1) 極粗粒砂
63. にぶい橙色 (7.5Y6/4) 粗粒砂
64. 褐色 (10YR/4) 極粗粒砂
65. 淡黄色 (5Y3/4) 粗粒砂
66. 淡黄褐色 (10YR8/3) 粗粒砂
(6cm大の円礫を多く含む)
67. 淡黄色 (2.5YR/4) 極粗粒砂 (灰白色
(2.5YR/1) 極粗粒砂 4cm大の円礫を
多く含む)
68. 黄褐色 (10YR8/8) 極粗粒砂 (灰白色
(10YR/1) 粗粒砂 3cm大の円礫を含む)
69. 灰白色 (2.5YR/4) 極粗粒砂 (黄色
(2.5YR/8) 極粗粒砂を少量、4cm大の
円礫を含む)
70. 灰白色 (10YR/1) 極粗粒砂
(明黄褐色 (2.5Y7/6) 中粒砂を含む)
71. 浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂
72. 黄褐色 (10YR8/4) 極粗粒砂 (灰白色
(7.5YR/1) 1cm大の円礫を多く含む)
73. 黄色 (2.5Y7/8) 中粒砂
(灰白色 (N8/0) 極粗粒砂を少量含む)
74. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 中粒砂
75. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗粒砂
(5cm大の円礫を多く含む)
76. 黄色 (5Y7/8) 極粗粒砂
(4cm大の円礫を少量含む)
77. 黄褐色 (10YR7/8) 極粗粒砂 (灰白色
(10YR/1) 極粗粒砂を少量含む)
78. 浅黄色 (5Y7/4) 極粗粒砂
79. 黄褐色 (10YR7/8) 極粗粒砂
80. 黄褐色 (10YR8/8) 粗粒砂
(5cm大の円礫を少量含む)
81. 淡黄色 (2.5Y7/4) 粗粒砂
82. 淡黄色 (5YR/3) 極粗粒砂
83. 浅黄色 (5YR/4) 極粗粒砂
84. 灰白色 (10YR/1) 極粗粒砂
85. 黄色 (2.5Y7/8) 極粗粒砂
86. 橙色 (5Y6/8) 極粗粒砂
(2cm大の円礫を多く含む)
87. 黄褐色 (7.5Y7/8) 粗粒砂
(灰白色 (N8/0) 粗粒砂を含む)

幅21mを測る。玄室床面の標高は37.6mで床面はほぼ水平である。横穴全体が崩落していることから、天井の断面形は不明である。

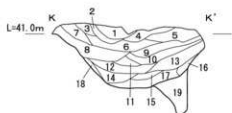
玄室床面は7°程度傾斜しており、58層は玄室機能時の堆積土、それより上層は玄室天井部の崩落により地山土が崩壊・崩落したものである。玄室天井部の崩落以後に墓道部分に地山土が滑り落ちたような28層が堆積し、さらにその上層の8～27層は横穴の墓道内に土が埋まった後に順次地山土が堆積したものである。玄室では49号横穴のような奥壁方向への崩落が少なく墓道および玄室の成形に伴う掘削後早い段階で天井部が崩落したと考えられる。

床面からは、49号横穴と同様、遺物および人骨は確認できなかったが、墓道部上層の埋土であ

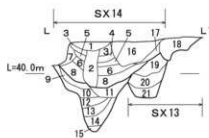
る21層から須恵器甕の破片(83)が1点出土している。

(12) S X 12(第97図)

7トレンチ中央付近の丘陵中腹、50号横穴の支室奥から南へ5mの位置で検出した円形土坑である。S X 12は、直径2.0m、深さ0.5mを測る。検出段階では横穴の陥没痕と認識して調査を進めたが、竹の腐植土を含む埋土であったことから、横穴に伴う陥没痕ではなく現在に近い時期の掘り込みと判断した。

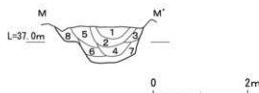


15. 浅黄色(2.5Y7/4)砂礫(灰白色(N8/0)の極粗粒砂を多く含む)
16. 黄褐色(10YR8/8)極粗粒砂(灰白色(7.5YR/1)中粒砂と4cm大の円礫を含む)
17. オリーブ黄色(5Y6/4)粗粒砂(大半が4cm大の円礫)
18. 淡黄色(2.5Y8/3)砂礫
19. 明黄褐色(2.5Y6/6)極粗粒砂(大半が5cm大の礫)



L-L' 断面

1. 灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂(灰色(N8/0)の極粗粒砂を含む)
2. 浅黄色(2.5Y7/4)極粗粒砂(4cm大の礫を多く含む)
3. 黄色(2.5Y8/8)極細粒砂
4. 浅黄色(5Y7/4)細粒砂
5. 浅黄色(2.5Y8/4)細粒砂
6. 明黄褐色(2.5Y7/6)粗粒砂
7. 黄色(5Y8/6)極粗粒砂(2cm大の円礫を多く含む)
8. 黄色(5Y7/6)極粗粒砂(灰色(N8/0)の粗粒砂と2cm大の円礫を多く含む)
9. 黄褐色(10YR7/8)極粗粒砂
10. 明黄褐色(10YR6/8)極粗粒砂(黄色(5Y8/6)極粗粒砂を多く含む)
11. 橙色(7.5Y6/6)極粗粒砂(5cm大の円礫を少量含む)
12. にがい黄褐色(10YR7/4)極粗粒砂(大半が5cm大の円礫)
13. 浅黄褐色(10YR8/3)極粗粒砂(大半が5cm大の円礫)
14. 橙色(7.5YR6/8)極粗粒砂(大半が5cm大の円礫)
15. 灰白色(5Y8/1)極粗粒砂(大半が5cm大の円礫)
16. 明黄褐色(2.5Y7/6)中粒砂(灰色(N8/1)の極粗粒砂を多く含む)
17. 浅黄色(5YR7/3)細粒砂(5cm大の礫を多く含む)
18. 浅黄色(2.5Y7/4)極粗粒砂(4cm大の礫を多く含む)
19. オリーブ黄色(5YR6/3)極粗粒砂
20. 橙色(7.5YR6/6)極粗粒砂(5cm大の円礫を多く含む)
21. 黄色(2.5Y8/8)極粗粒砂(5cm大の円礫を多く含む)



K-K' 断面

1. 浅黄色(2.5Y7/2)粗粒砂(灰白色(7.5Y7/2)中粒砂を少量含む)
2. 浅黄色(2.5Y8/4)極粗粒砂(灰白色(7.5YR/1)中粒砂を少量含む)
3. 淡黄色(2.5Y8/4)中粒砂
4. 黄色(2.5Y8/6)中粗粒砂
5. 明黄褐色(10YR6/8)中粒砂(3cm大の円礫を多く含む)
6. 明黄褐色(2.5Y7/6)粗粒砂
7. 明黄褐色(2.5Y6/6)極粗粒砂(3cm大の円礫を含む)
8. 浅黄色(2.5Y7/4)極粗粒砂(5cm大の円礫を含む)
9. 黄褐色(10YR7/8)中粒砂(3cm大の礫を含む)
10. 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂(3cm大の円礫を少量含む)
11. 明黄褐色(10YR6/8)中粒砂
12. 明黄褐色(2.5Y7/6)極粗粒砂(大半が5cm大の円礫)
13. 黄褐色(7.5Y7/8)中粒砂(3cm大の礫を含む)
14. 明黄褐色(2.5Y6/6)極粗粒砂(大半が5cm大の円礫)

M-M' 断面

1. 明黄褐色(10YR6/6)極粗粒砂(3cm大の円礫を含む)
2. 黄色(2.5Y8/6)極粗粒砂(大半が5cm大の円礫)
3. にがい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂
4. 浅黄色(5Y7/4)粗粒砂(大半が5cm大の円礫)
5. 黄色(5Y7/6)極粗粒砂(5cm大の円礫を含む)
6. 明黄褐色(10YR6/8)極粗粒砂(5cm大の円礫を多く含む)
7. 明黄褐色(2.5Y6/6)極粗粒砂(3cm大の円礫を含む)
8. 黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂

第106図 S X 13・14土層断面図(1/80)

(13) S X 13(第97・106図、図版第74)

S X 13は50号横穴の南約7mにあり、S X 12の南側の丘陵中腹から裾部にかけて検出した溝状遺構で、南にあるS X 14によって削り取られている。断面は台形を呈し、検出長1.5m、幅0.7m、深さ0.8mを測り、主軸はN-72°-Wをとる。

重機による表土掘削の後、溝状遺構の輪郭を確認し、墓道の陥没痕跡と認識して調査を行ったが、その埋土(L-L' 19~21層)が黄あるいは橙系の極粗粒砂で円礫を多く含むもので、丘陵裾部に向かって蛇行するような形状であることから、地山の軟弱部分が雨水などにより削り取られた痕であると判断した。

(14) S X 14(第97・106図、図版第74)

S X 13とほぼ同位置で検出した溝状遺構で、断面が「V」字形を呈し、検出長6.2m、上面幅1.8m、深さ1.8mを測る。主軸はN-69°-Wをとる。

溝内埋土は大きくは2層に分かれ(L-L')、下層の9~15層は黄褐・橙系の極粗粒砂で5cm大の円礫を多く含むもので、上層の3~8層は礫が少なく黄系の細粒砂が堆積している。

検出状況、断面の観察からS X 13と丘陵中腹で合流する墓道と推定し調査を行ったが、玄室部床面を成形したような水平面がなく、埋土に多くの円礫を含むことから、S X 09・S X 10・S X 13と同様、地山の軟弱部分に雨水などにより削り取られた痕であると判断した。

(石井清司)

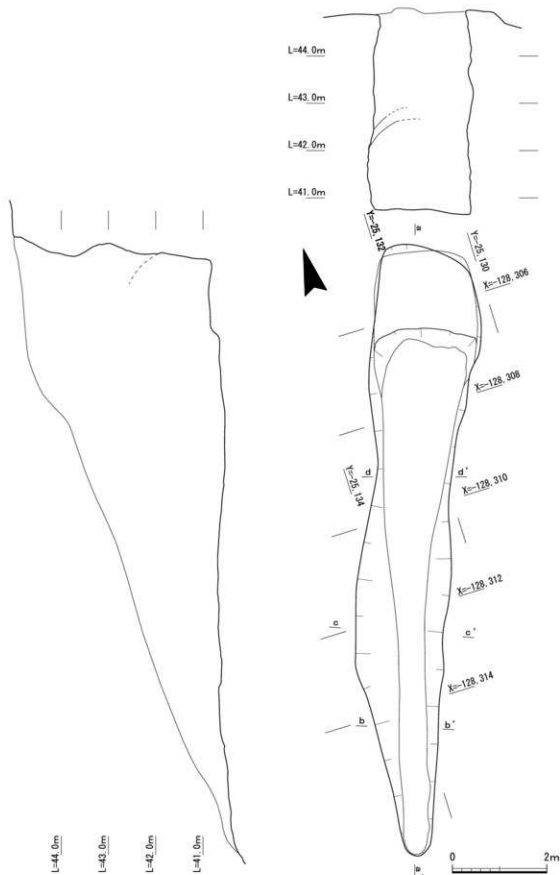
(15) 51号横穴(第107~109図、図版第75~78)

7トレンチ南西端部の丘陵頂部から中腹あたりに位置している。横穴は完全に崩落しており、重機掘削時等には開口は認められなかった。また、荒坂A支群16号横穴と推定される位置にあるが、調査の結果、荒坂A支群16号横穴は横穴ではなく、51号横穴の下方にある窪地と考えられる。

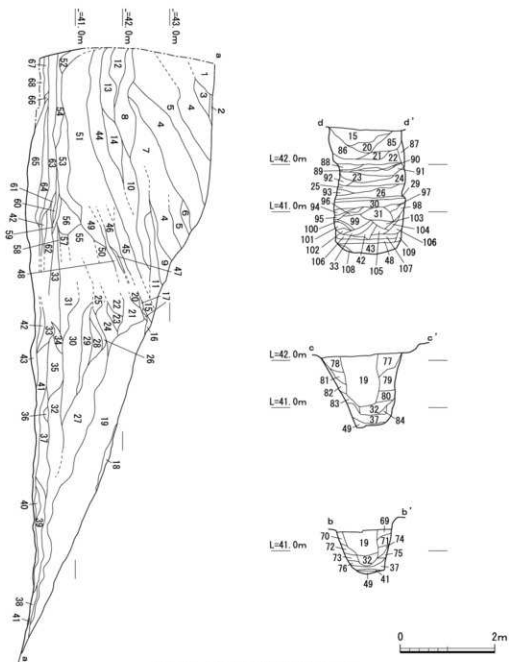
横穴は南西方向に開口する。全長は13.2mを測り、主軸はN-20°-Eをとる。天井部は崩落して確認できなかったが、墓道先端部から奥壁まで平面的に残存している。奥壁から2.9m付近で両側壁が若干広がることからこの付近が玄門と考えられる。また奥壁から4.4m付近では上端にくびれが認められることから、この付近が羨門と考えられる。そのためそれより前方が墓道となる。

墓道の全長は8.0m、上面幅0.7~1.9m、墓道底部の幅は0.5~0.9mを測る。床面の標高は41.2~41.6mである。断面形は上に向かって開く「コ」字形を呈している。27層中から須恵器杯身(87)が出土している。41層は墓道先端付近から羨道との境まで認められることから整地土と考えられる。羨道の全長は2.2m、幅1.2~1.6mを測る。断面観察からはマウンド状の堆積が認められることから、この堆積が閉塞土と推定できる。閉塞土は一部図面ができていないが、初葬に伴う31・33~35・56・57層と追葬時の閉塞に伴う22~24層、26・28~30層が確認できる。このことから初葬以降2回程度横穴内に侵入したものと考えられる。42層からは土師器高杯2点(91・95)が正位で出土している。また羨道内東側壁から土師器高杯2点、土師器長頸壺1点が出土している。

玄室の全長は2.9m、幅2.2mを測る。玄室内の堆積状況は51層から上層はすべて崩落土である。52~54層は天井が崩落するまでの期間に堆積したものと考えられる。63層は埋葬面である。奥壁



第107図 51号横穴平面・立面図(1/80)



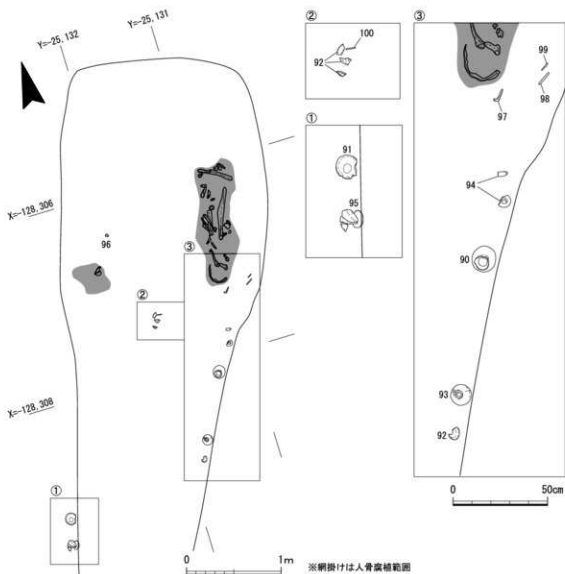
第108図 51号横穴土層断面図(1/80)

から1.6m付近にはなだらかに傾斜する段が認められる。64・65層は初期の整地層と考えられる。奥壁は床面から垂直に立ち上がる形状を呈している。横穴全体が崩落しており、天井の断面形は不明である。

51号横穴から出土した遺物の内訳は、須恵器2点、土師器7点、鉄製品5点、耳環1点、骨製品1点である。埋葬に伴う遺物は第63・64層の上面で出土した。奥壁から4.9mの位置には、左側壁に沿って土師器高杯が出土した。高杯(91)と高杯(95)は正位で側壁に沿って並んでいたことから副葬された原位置を保っていると推測できる。玄室の中央部では土師器高杯の脚部(92)が出土した。玄室右側壁には土師器高杯の杯部と脚部、土師器長頸壺が出土した。墓道に近い位置に

51号横穴土層断面図土色

1. 黄褐色(10YR5/8) 粗粒砂質土
(1~2cm大の礫混じり)
2. 明褐色(10YR6/8) 粗~中粒砂質土
(1~3cm大の礫混じり)
3. 明黄褐色(10YR6/6) 粘質土混じりの細粒砂質土
4. 橙色(7.5YR6/7) 粘質土混じりの中粒砂質土(6が若干混じる)
5. 橙色(7.5YR6/8) 粘質土混じりの粗粒砂質土(1~10cmの円礫混じり)
6. 明褐色(7.5YR5/8) 細粒砂質土
7. 明黄褐色(10YR6/8) 粘質土混じりの粗粒砂質土(1~5cmの礫混じり)
8. 黄褐色(10YR6/8) 粘質土混じりの粗粒砂質土(1~6cmの礫混じり)
9. 明褐色(7.5YR5/7) 細粒砂質土
10. におい黄色(2.5Y6/4) 粗粒砂質土
(2~4cmの円礫混じり)
11. 明褐色(10YR6/6) 細粒砂質土
12. 黄褐色(10YR7/8) 粘質土混じりの粗粒砂質土(1~3cmの円礫混じり)
13. 明黄褐色(10YR6/6) 中粒砂質土
14. 黄色(5YR7/8) 中粒砂質土
(黒褐色(10YR2/3) 細粒砂混じる)
15. 黄褐色(10YR8/8) 粗粒砂質土
(1~2cmの礫混じり)
16. 明黄褐色(10YR6/8) 中粒砂質土
(1~3cmの礫混じり)
17. 黄褐色(10YR7/9) 中粒砂質土
18. 黄褐色(10YR5/6) 粗粒砂質土
19. におい黄色(7.5Y5/4) 中粒砂質土
(1~10cmの円礫混じり)
20. 黄褐色(10YR5/6) 粘質土混じりの中粒砂質土
21. 黄褐色(10YR5/6) 粘質土混じりの中粒砂質土(1~3cmの礫混じり)
22. 明黄褐色(7.5YR5/6) 中粒砂質土
23. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
24. 明黄褐色(7.5YR5/6) 粘質土混じりの中粒砂質土(1~2cmの礫混じり)
25. 明黄褐色(10YR6/7) 粘質土混じりの中粒砂質土
26. 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂質土
27. 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂質土
(1~10cmの円礫混じり)
28. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
29. 褐色(10YR4/6) 粗粒砂質土
30. 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂質土
(1~5cmの礫混じり)
31. 黄褐色(10YR5/8) 中粒砂質土
(1~3cmの礫混じり)
32. 黄褐色(10YR5/6) 粘質土混じりの中粒砂質土(1~3cmの礫混じり)
33. におい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂質土
(1~4cmの礫混じり)
34. 明黄褐色(10YR6/6) 細粒砂質土
35. におい黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
(3~10cmの円礫混じり)
36. 明黄褐色(10YR6/8) 粘質土混じりの細粒砂質土(1~3cmの礫混じり)
37. 褐色(10YR4/6) 細粒砂質土
38. 黄褐色(10YR5/6) 極粗粒砂質土
39. 明褐色(7.5YR5/6) 中粒砂質土
(1~5cmの礫混じり)
40. 明黄褐色(10YR5/8) 中粒砂質土
41. オリーブ色(5Y6/6) 極細粒砂質土
(0.5cmの小石混じり)
42. 褐色(7.5YR4/4) 細粒砂質土
(1~2cmの礫混じり)
43. 褐色(10YR4/4) 中粒砂質土
44. 明黄褐色(10YR6/8) 粗粒砂質土
(2~6cmの円礫混じり)
45. 黄褐色(10YR7/8) 粗粒砂質土
46. 褐色(7.5YR4/6) 中粒砂質土
(1~3cmの礫混じり)
47. 明褐色(7.5YR5/6) 粗粒砂質土
48. 黄褐色(10YR5/6) 粗粒砂質土
49. 明褐色(7.5YR5/6) 中粒砂質土
(1~4cmの礫混じり)
50. 褐色(10YR4/6) 粗粒砂質土
51. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
52. におい黄色(2.5YR6/4) 中粒砂質土
53. 黄褐色(2.5YR5/6) 中粒砂質土
54. 明黄褐色(2.5YR6/6) 中粒砂質土
55. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
56. 明褐色(7.5YR5/6) 中粒砂質土
57. におい黄褐色(10YR5/4) 中粒砂質土
(1~5cmの礫混じり)
58. 褐色(10YR4/6) 中粒砂質土
59. 暗褐色(7.5YR3/4) 粗粒砂質土
(2~4cmの円礫混じり)
60. 明褐色(7.5YR5/6) 中粒砂質土
61. 橙色(7.5YR7/6) 細粒砂質土
62. 暗褐色(7.5YR3/8) 中粒砂質土
(1~7cmの円礫混じり)
63. 黄褐色(10YR5/8) 中粒砂質土
64. 明黄褐色(10YR6/8) 粗粒砂質土
65. 明褐色(7.5YR5/6) 粗粒砂質土
(1~3cmの円礫混じり)
66. 黄褐色(10YR5/6) 粗粒砂質土
67. におい黄褐色(10YR5/4) 粗粒砂質土
(1~5cmの円礫混じり)
68. におい黄褐色(10YR5/4) 粗粒砂質土
(1~10cmの円礫混じり)
69. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
70. 黄褐色(10YR5/8) 中粒砂質土
71. 明黄褐色(10YR6/8) 中粒砂質土
72. 黄褐色(10YR7/6) 細粒砂質土
(1~2cmの礫混じり)
73. 褐色(10YR4/6) 極細粒砂質土
74. 黄褐色(10YR5/6) 粗粒砂質土
(1cm大の円礫混じり)
75. 明褐色(7.5YR4/6) 細粒砂質土
(2cm大の円礫混じり)
76. 褐色(10YR3/3) 中粒砂質土
(0.5~1cmの礫混じり)
77. 明黄褐色(10YR6/6) 細粒砂質土
(1~2cmの礫混じり)
78. 明黄褐色(10YR6/8) 細粒砂質土
79. 明褐色(7.5YR5/6) 細粒砂質土
80. 明褐色(7.5YR5/6) 粘質土混じりの細粒砂質土
81. 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂質土
82. 黄褐色(10YR5/8) 粗粒砂質土
83. 褐色(7.5YR6/8) 中粒砂質土
84. 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂質土
(3~4cmの礫混じり)
85. 黄褐色(10YR5/8) 粗~中粒砂質土
86. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
(2~8cmの礫混じり)
87. 明黄褐色(10YR6/6) 粗粒砂質土
(1~4cmの礫混じり)
88. 明黄褐色(10YR6/8) 中粒砂質土
(2~6cmの円礫混じり)
89. 明褐色(7.5YR5/6) 粗粒砂質土
90. 黄褐色(10YR5/8) 中粒砂質土
91. 橙色(7.5YR6/8) 粗粒砂質土
92. 明黄褐色(10YR6/8) 中粒砂質土
(2cm大の円礫混じり)
93. 黄褐色(10YR5/6) 粗粒砂質土
94. 褐色(10YR4/6) 粗粒砂質土
95. 明黄褐色(10YR6/8) 中粒砂質土
96. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
(0.5~2cmの礫混じり)
97. 黄褐色(10YR5/8) 粗粒砂質土
(2~4cmの円礫混じり)
98. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
(1~3cmの礫混じり)
99. 褐色(10YR4/6) 中粒砂質土
(0.5~8cmの礫混じり)
100. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
(0.5~2cmの礫混じり)
101. 明黄褐色(10YR6/8) 粗粒砂質土
102. 褐色(10YR4/6) 細粒砂質土
103. 褐色(10YR4/4) 中粒砂質土
104. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
105. におい黄褐色(10YR5/4) 中粒砂質土
106. 褐色(10YR4/6) 粗粒砂質土
107. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
108. 黄褐色(10YR5/6) 中粒砂質土
109. 黄褐色(10YR5/8) 中粒砂質土



第109図 51号横穴遺物出土状況図(1/40・1/20)

ある高杯の杯部(92)は横転して出土した。この杯部と玄室中央部の脚部は1.6m離れた位置にあるが同一個体(92)である。高杯杯部(93)は逆位で出土した。その奥壁側には土師器長頸壺(90)が出土している。側壁沿いに正位で出土していることから原位置を保っていると考えられる。さらに奥壁方向には土師器高杯の脚部(94)が逆位で出土した。金属類は耳環と刀子、釘が出土している。耳環(96)は玄室左側の人骨から出土した。釘(97)、鉄鏃(98・99)と刀子(100)は玄室右側の人骨の頭部から右側壁側に集中して出土した。また、崩落土からは須恵器杯蓋(88)と杯身(87)が出土している。また人骨の集骨か所から骨製品(102)が、人骨と混ざる形で出土している。

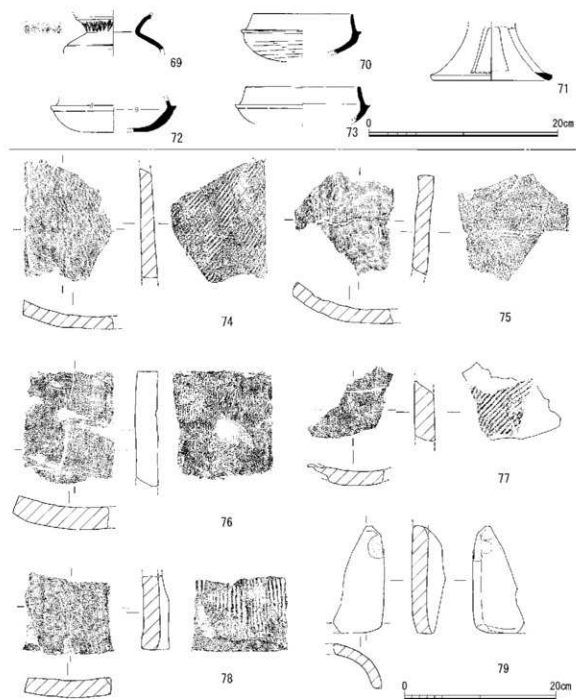
(竹村亮仁・武本典子)

2) 出土遺物(第110図69～第112図102、図版第82・83)

S D01からは、布目を含む平瓦・丸瓦とともに棧瓦やガラス瓶などが出土しており、近世以降に再堆積した土層の中に奈良時代の遺物が混在していたものと考えられる。平瓦74・77、闘斗瓦

78は凸面に平行タタキを有するもので美濃山廃寺出土瓦のB類、75・76は凸面に縄目タタキ痕を有するもので、美濃山廃寺出土瓦のC類である。⁽⁸¹⁷⁾79は丸瓦片である。これらの古代瓦は基盤層である灰白色粘質土を採取した後、その掘り込み部を埋め戻す際に使用された埋土内に混在していたものと判断した。

69は須恵器壺である。頸部には15条からなる波状文が1.0cm幅で施文されている。形状から甕の可能性もある。70は須恵器杯身である。口縁端部は丸くおさめる。71は須恵器高杯脚部である。

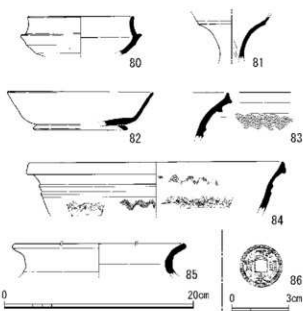


第110図 7トレンチS D01出土遺物実測図(1/4・1/5)

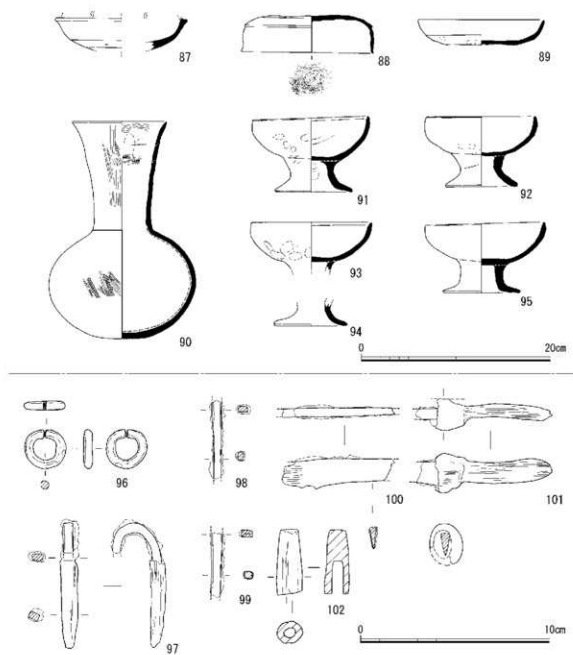
台形スカシが3方に施される。杯部を欠損しているが、高杯の脚部と考えられる。72は須恵器杯身である。体部は分厚く、立ち上がり部・底部は欠損している。73は須恵器杯身である。口縁端部は丸くおさめる。受け部から立ち上がり部にかけて内面が湾曲する。

80は須恵器杯身である。立ち上がり部が高く、口縁部は外湾する。MT15並行期と考えられる。81は須恵器甕である。口縁下部から頸部中央付近まで残存する。頸部には波状文は認められない。82は須恵器杯身である。TK48並行期と考えられる。83は須恵器甕である。頸部には9条の波状文が1.3cmの幅で施文され、口縁端部は三角形を呈している。また波状文が施された文様帯の上下には突帯が認められる。84は須恵器器台である。口縁部のみ残存している。内外面に波状文が施文される。ともに7条からなる波状文が0.6cm幅で施される。同一工具によって施文されたものと考えられる。85は弥生土器である。口縁部から頸部にかけて残存している。口縁部は外湾している。86は寛永通寶である。3期新寛永に属するものである。裏面には背文字はなく、無背銭である。1716年から1740年ごろに铸造されたものと考えられる。

87は須恵器杯身である。墓道埋土内から出土した。立ち上がり部および底部は欠損しており、口径は不明である。89は土師器皿である。玄室内崩落土中から出土した。全体的に摩滅している。口縁端部を丸くおさめる。外面にヨコナデを施す。外面下部にはユビオサエが認められる。88は須恵器杯蓋である。玄室内崩落土中から出土した。頂部外面には回転ヘラケズリを施す。胎土は黒色粒が溶出する。90は土師器長頸壺である。口縁部から頸部の外面には縦方向のハケが施され、内面には横方向のハケを施す。胴部には不定方向のハケが施されている。焼成は甘く、灰白色を呈している。91~93と95は土師器高杯である。いずれも口径12cm程度で、椀形の杯部に短い脚部が付く。外面にはヨコナデが施されている。胎土には雲母を含む。94は同様の高杯の脚部である。93と接合する可能性がある。91~95は、平成24年度報告書の土師器の分類による高杯Aと同器種と考えられる。⁽⁹⁶⁾耳環(96)は幅2.2cm、天地2.09cm、重量5.5gである。断面は円形である。鍔が著しいが、部分的に金が残存していることから、金環と考えられる。98・99は鉄鏝の茎と考えられる。ともに鏝身の刃部はすべて欠損しており、形状は不明である。100・101は刀子である。101は茎である。茎には木質が残存している。100は刀身である。97は釘である。頭部側は大きく屈曲している。先端部側には縦方向の木目が確認できる。木棺に伴うかどづかについては、出土



第111図 6・7トレンチ出土遺物実測図(1/4・1/2)
(45号横穴:80・82 48号横穴:81・86
50号横穴:83 SX 09:84 49号横穴南側:85)



第112図 7トレンチ51号横穴出土遺物実測図(1/4・1/2)

の状況や釘の出土点数からみると不明である。102はニホンジカの骨で作られた骨製品である^(R20)。長さ3.5cm、幅1.4cm、厚さ1.2cmを測る。外面にはタテ方向の加工痕が認められる。穿孔は中心付近まで貫通はしておらず、孔の内面奥には径0.5cmの輪状加工痕が残る。集骨か所から出土していることから副葬品の可能性もあるが、用途等は不明である。

(石井清司・竹村亮仁)

6. 総括

1) 御毛通2号墳出土埴輪について

埴輪の取り上げる際に調査区全体に設定した地区割をもとに取り上げ用の区画を設定して行った。まず、小地区は4m四方のグリッドで、南北を北から順に、A、B、C・・・Yとし、東西を東から順に1、2、3・・・25とした。なお、地区名については、大地区のローマ数字と小地区のアルファベットと数字を組み合わせて、「Ⅱ-A2」等と表記する。

さらに小地区を50cm四方のグリッドに分割し、南北方向を北からa、b、c・・・hと8分割し、東西方向を東からⅠ、Ⅱ、Ⅲ・・・Ⅷと8分割した。埴輪取り上げ時の地区名を「W24-aⅦ」のように表記した(第113図)。

今回の調査では、埴輪片が939点出土している。これらを復元してみると、家、鶏、甲冑、草摺、盾形の埴輪が樹立されていたことが判明した。しかし、多くが細片化しており、器形を推定するのは困難な破片が多い。

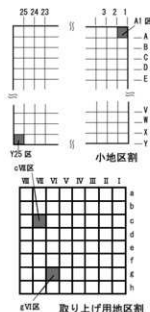
その出土位置や接合関係から器種ごとの分布範囲を復元した結果、周溝全体の埴輪片は、個体ごとのまとまりは持たず、さまざまな器種の破片が分布していることが判明した。以下に器種ごとの分布範囲について述べる(第114図)。

まず甲冑形埴輪であるが、出土位置は5がX24-dⅣ・W24-gⅡ、6はX24-cⅡ、8はX24-cⅤ・X24-dⅤ、10はW24-gⅢ・X24-bⅣ・W24-fⅡ、12がX23-fⅧから出土している。5は約2m、10は約3m離れた位置で出土した破片が接合関係にある。もっとも大きく復元できた13の埴輪は9つに分かれており、W24-gⅡ・W24-gⅣ・X24-aⅤ・W24-fⅡ・W24-hⅡ・X24-bⅤ・W24-hⅢ・W24-dⅠ・X24-aⅢから出土しており、6.5m離れた破片が接合する状態であった。分布範囲はW24およびX24に集中し、各部位の破片が混ざった状態で分布しているといえる。

草摺形埴輪の分布状況であるが、24はX24-eⅢ、27はX24-cⅡから出土している。甲冑形埴輪との接点は不明なことから、甲冑と一連か否かの判断はできない。それぞれの分布点は、25はX24-fⅢ・X24-gⅢ・X24-dⅡ、26はX23-aⅧである。25については、甲冑形埴輪と分布域が重複しており、26は1m程度ではあるが、離れていることがわかる。

鶏形埴輪はV22・V23・W22・W23に散らばるように分布している。第2次調査で出土した頸部の下部の破片(57のA-A'より下部)はV23-gⅥ・W23-aⅧから出土しており、同埴輪の頸部上部とは約12.0mとかなり離れた地点での出土である。

盾形埴輪はV22・V23・W23・W24・X24・Y24と広範囲に分布していることが分かる。また盾形埴輪は先述のように線刻が太く、外縁文様帯が内方に梯子状表現を付設する綾杉文が1条の中軸を挟



第113図 埴輪取り上げ地区割図

んで1反転のみ表現されるもの(第91図37・40～42・44・45・47・49)と、線刻が細く、外縁文様帯が上記図文を2単位重ねるもの(第91図38・39・46)に区別できる。ここでは前者をA群、後者をB群と呼称する。まずA群に属する埴輪片の分布であるが、多くの破片がV22・V23・W23に集中している中、40・45の2点がY24-aⅥ・X24-eⅣから出土している。これら2点から最も離れたものでは、46のV22-bⅢがあるが、40と46の2点間は約15m離れている。B群に属する3点はV22・V23の範囲に分布している。

今回、分布範囲を確認したものは、器種が分かるもののみであり、本来はさらに広範囲に細片化したものが分布していると考えられる。また、鶏形埴輪、盾形埴輪のように10m以上離れた位置で同一個体、または同一個体と推定できるものが出土している。

埴輪片は周溝内の広範囲に分布していること、また細片化しており、完形に復元できた埴輪が皆無であることから、墳丘に樹立されていた埴輪が転落して周溝内に残存していたのではなく、周溝内に投棄・廃棄された可能性もある。

2) 横穴内出土人骨について

今回の調査では、51号横穴から3体の人骨が出土した。しかし、遺存状況は良好ではない。また人骨は51号横穴でのみ出土しており、48・49・50号横穴では出土していない。そのため、今回の調査範囲の中での横穴内における埋葬形態は不明である。51号横穴では2体が玄室右側壁寄り、1体が玄室左側壁寄りで出土した。右側の人骨は解剖学的な位置は留めておらず、追葬時に集骨されたものと考えられる。分析の結果、51号横穴には、玄室右側壁寄りには熟年以降の女性⁽⁹²⁾、小児後半～成年前半程度の男性⁽⁹²⁾、玄室左側壁寄りには成年後半～壮年程度の男性⁽⁹²⁾が埋葬されていることが判明した。今回の分析は形態的特徴による判断であるため、血縁関係の有無については不明である。

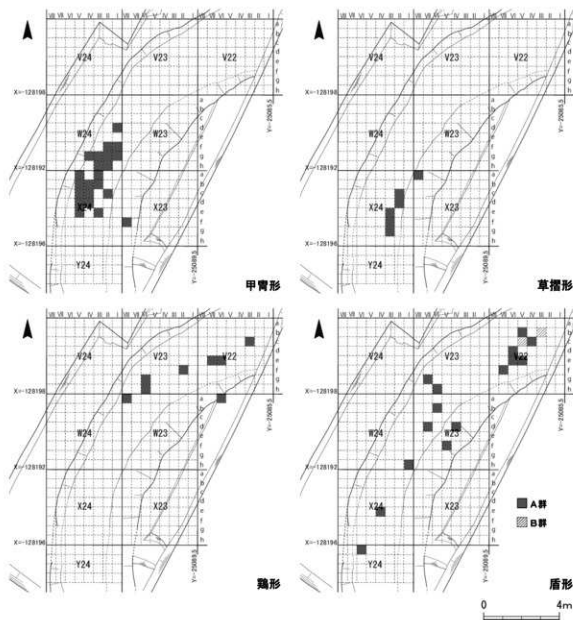
人骨の出土状況であるが、玄室右側壁寄りの人骨は南北1.3m、東西0.4mの範囲にまとまっており、奥壁側には胸椎、肋骨、左上腕骨、左大腿骨、脛骨などが、玄門側に左側頭骨～後頭骨、右側頭骨、後頭骨、下顎骨が出土している。また、下顎骨2点は奥壁側から出土しており、上に熟年以降の女性、下に小児後半～成年前半程度の男性の順で出土している。両者の頭蓋骨は玄門側から出土していることから、集骨時には完全に骨化しており、そのため頭蓋骨と離れた位置で出土したと推定できる。また近くから1点ではあるが木製の付着した釘が出土していることから、木棺等が利用された可能性も否定できない。

玄室左側壁寄りで出土した成年後半～壮年程度の男性は、3体の中でもっとも遺存状況が悪く、頭蓋骨と考えられる骨片が残る程度であり、埋葬時の状況は不明である。

出土状況から、小児後半～成年前半程度の男性、熟年以降の女性が埋葬されたのちに、成年後半～壮年程度の男性が埋葬されたことが確認できる。また集骨状況から最初の被葬者が骨化したのちに、追葬者を横穴内に安置したものと考えられる。

3) 横穴の配置について

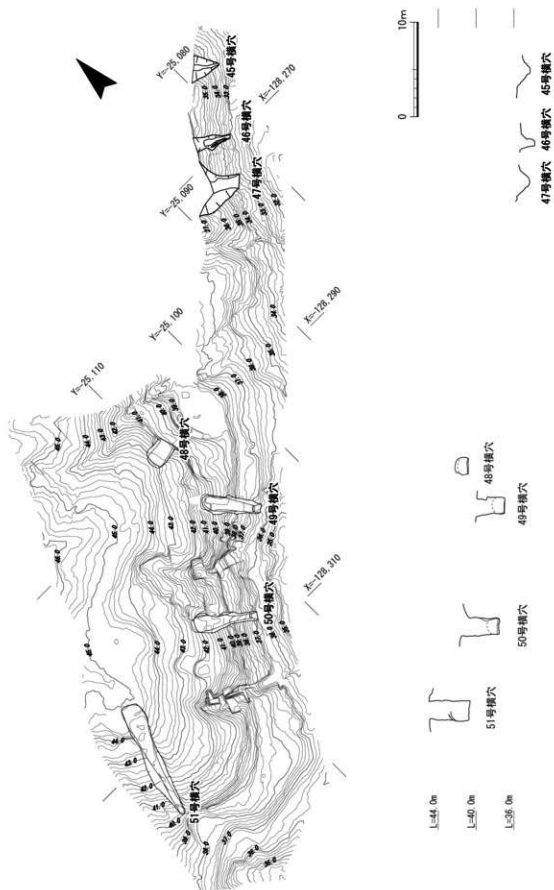
今回の調査では、北に隣接する第13次調査に比べて横穴の分布密度が低く、調査区内に分布す



第114図 埴輪出土分布図(1/200)

る横穴の標高に差異が認められる。

分布密度については、横穴群の築造過程に由来するものと考えられる。両横穴の距離は7～14mで、基軸となる横穴を築き、その間を埋めるように随時、横穴を築造していった可能性が指摘できる。その結果、第13次調査のような大規模な横穴群が形成されたものといえる。また標高の差異についてであるが、今回の調査において、最も高くに位置する51号横穴は、標高41.9mを測り、最も低いものでは49号横穴が37.0mに位置している。第13次調査においては、おおむね標高39.0mに位置しており、ある程度規則性をもって築造されたものと考えられている。今回の調査では、49号横穴と50号横穴はほぼ同じ標高に位置しており、第13次調査において検出した横穴と同様に規則性をもって築造されたものと考えられる。このような分布密度、築造標高の差異については、横穴を築く基盤堆積層が軟弱であったためあえて横穴の掘削位置を変更、あるいは築造の時期が



第115図 横穴配置図(平面・断面)(1/400)

異なっていたと考えられる。しかし出土遺物が少なく、横穴の時期が明らかでないため、明確なことは不明である。(竹村亮仁)

4)おわりに

御毛通古墳第3次調査では、前回確認した御毛通2号墳の規模を追認するとともに、新たに甲冑形・盾形などの形象埴輪の存在が明らかとなった。また出土埴輪の特徴から、当古墳の築造時期は古墳時代前期末～中期前半と考えられる。

女谷・荒坂横穴群第14次調査では、第13次調査のようにほぼ同一等高線に密集して配置された横穴群とは異なり、高低差を持ち、配置密度も低く、これまでの調査成果とは異なる横穴の状況が明らかとなった。第13次調査とは異なった被葬者集団の可能性も考えられるが、基盤層によるものなのか、今後検討を加える必要がある。第6トレンチで検出した横穴の一部は、関係機関の努力により現状保存されることとなった。

(石井清司)

- 注1 下水主遺跡の範囲については、京都府教育委員会が試掘調査を実施され、遺跡の広がりを確認された。福島孝行「下水主遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査報告 平成25年度 京都府教育委員会』2014) 福島孝行「下水主遺跡第7次調査」(『埋蔵文化財発掘調査報告 平成26年度 京都府教育委員会』2015)
- 注2 鳥畑の周囲には鳥畑よりも低く掘り込まれた部分は滞水するものの、流れがあるわけではないので「溝」という表現は適切ではない。しかし、形態的には溝に類似することから、本報告では「溝状遺構」という名称を使用する。
- 注3 当調査研究センター理事増田富士雄先生(同志社大学理工学部教授)のご教示による。
- 注4 おもに古代(飛鳥・奈良・平安時代)の土器の器種名には、奈良文化財研究所が使用しているものを使用する(下記文献を参照)。
 和田龍太郎・巽淳一郎・沢田正昭「土器」(奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XI-第1次大極殿地域の調査-』(『奈良国立文化財研究所学報』第40冊))1981
 神野恵「土器類」(奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XVI-兵部省地区の調査-』(『奈良文化財研究所学報』第70冊))2005
- 注5 古墳時代の須恵器については下記の文献を参照した。
 田辺昭三『陶邑古窯址群1』(平安学園考古学クラブ)1966
 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店)1981
- 注6 赤塚次郎『濃尾平野における弥生時代後期の土器編年』(『八王子遺跡 愛知県埋蔵文化財センター』2002)
- 注7 高野陽子「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」(『佐山遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第33冊) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003
- 注8 注7文献に同じ。
- 注9 森下衛ほか「内里八丁遺跡Ⅱ」(『京都府遺跡調査報告書』第30冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2001
- 注10 有馬伸「前方後円墳集成」2000
- 注11 八幡市教育委員会『八幡市遺跡地図』1990
- 注12 伊賀高弘「京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要(2) 荒坂遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第

- 56冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1994
- 注13 奈良康正ほか「新名神高速道路整備事業関係遺跡1女谷・荒坂横穴群第13次」(「京都府遺跡調査報告集」第157冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2014
- 注14 高橋克壽は、盾形埴輪をその盾面の文様の分割の仕方によって、「目字形」(一類)と「II字形」(二類)に二分した。(高橋克壽「器埴輪の編年と古墳祭祀」(「史林」第71巻第2号 史学研究会)1988)
- 注15 須恵器については注5文献のほか、以下の文献を参照した。
宮崎泰史ほか「年代のものさし-陶邑の須恵器-」(「大阪府立近つ飛鳥博物館図録」40 大阪府近つ飛鳥博物館)2006
- 注16 注11文献
- 注17 「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次」(「京都府遺跡調査報告集」第154冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2013
- 注18 水井久美男編「日本出土銭総覧 1996年版」兵庫埋蔵銭調査会
- 注19 注13文献
- 注20 骨製品については、バリノ・サーヴェイ株式会社による人骨分析の際に見つかったものである。分析によると、ニホンジカの第1肋骨または機骨頭と考えられている。
- 注21 調査地全体を覆う地区割を国土座標系(世界測地系)にもとづいて設定した。調査範囲の丘陵全体を対象として100m四方の大区画を設定した。これにローマ数字による地区名をつけ、I区からVI区とした。この大区画をさらに4m四方のグリッドを設定し、小地区とした。小地区の基準線は、それぞれ国土座標系と一致している。
- 注22 以下、人骨の観察については、バリノ・サーヴェイ株式会社の報告から抜粋。
下顎骨は、右下顎第3大臼歯がみられないが、もともと形成されていないと判断される。右下顎第1大臼歯・第2大臼歯とも象牙質が全面露出し、特に右下顎第1大臼歯の咬耗が顕著であることから、壮年後半以降の年齢の可能性がある。また、歯牙の大きさは、やや女性的である。
前頭骨・左頭頂骨は矢状縫合・冠状縫合の外側が閉じていないが、内側が閉じていることから、熟年以降の年齢と判断される。また、左側頭骨から後頭骨にかけてでは、乳様突起が発達しておらず、女性と判断される。
- 注23 下顎骨は、左右下顎第1大臼歯の象牙質が露出しておらず、右下顎第2大臼歯に咬耗がみられないことから、小児後半～壮年前半程度の年齢の可能性がある。歯牙の大きさは、やや男性的である。右頭頂骨・後頭骨の破片は、骨自身が薄く、また縫合の内側が閉じていないことから壮年よりも若い個体と判断できる。
- 注24 右下顎第3大臼歯は咬耗が確認されることから萌出済みの歯牙である。ただし、右下顎第3大臼歯の咬耗が顕著でなく、また左上顎犬歯・左上顎第2小臼歯も咬耗が顕著に進んでいないことから、本人骨は成年後半～壮年程度の可能性がある。歯牙の大きさは、男性的である。

付表8 下水主遺跡第4次(F地区) 出土土器・土製品観察表

下水主遺跡F1区

番号	器種		出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
	種類	器種	遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径						
1	土器	皿	鳥畑106 SD0101	～0106	106	(1.6)	-	L5/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面: ココナテ、底部内面: ナテ、底部外面: ナテ・ユビオサエ	口縁部に煤付着
2	土器	椀	鳥畑106 SD0101	～0106	9.0	(4.8)	-	L5/12	密	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	堅緻	口縁部・体部内外面: 回転ナテのち施軸	
3	土器	椀	鳥畑106 SD0101	～0106	12.0	(2.4)	-	1/12	密	灰色 (N4/0)	良好	内面: ミガキ、口縁部内外面: ココナテ、体部外面: ユビオサエ	
4	土器	甕	鳥畑106 SD0101	～0106	-	(3.0)	-	1/12以下	密	灰色 (N4/0)	良好	口縁部内外面～体部内外面上半: 回転ナテ	
5	土器	鉢	鳥畑106 SD0101	～0106	-	3.3	-	1/12	密	灰色 (N6/0)	堅緻	口縁部内外面: 回転ナテ	いわゆる東播系
6	土器	甕	SD0139	-	-	(3.9)	-	頭L5/12	密	灰色 (N6/0)	堅緻	頸部内外面: 回転ナテ、体部内面: 強いナテ、体部外面: タタキ	
7	土器	椀	SD0139	-	-	(2.4)	-	1/12	密	軸: 灰白色 (2.5GY8/1)	堅緻	内外面: 回転ナテのち施軸	V類
8	土器	皿	鳥畑106	断ち割り	9.0	(1.7)	-	1/12	密	灰白色 (2.5Y8/2)	良好	口縁部内外面: ココナテ、底部外面: ナテ・ユビオサエ	
9	土器	杯蓋	SD0139	-	-	(0.9)	-	1/12以下	密	灰色 (N6/0)	堅緻	口縁部内外面～頂部内面: 回転ナテ、頂部外面: ヘラカリのち不調整	
10	土器	杯身	I5-n19 区はか	下層 遺構面 精査	▼13.4	(3.1)	-	L5/12	密	灰色 (N5/0)	堅緻	内面・口縁部内外面・体部外面上半: 回転ナテ	
11	土器	杯身	I5-n19 区はか	下層 遺構面 精査	▼12.8	(3.7)	-	2/12	密	灰白色 (7.5Y7/1)	やや軟	内面・口縁部内外面・体部外面上半: 回転ナテ、底部外面: 回転ヘラケズリ	
12	土器	甕/ 葉	I5-n19 区はか	下層 遺構面 精査	-	(1.6)	-	底12/12	密	灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	底部内面: 板ナテ、底部外面: ナテ、底部外面: ケズリ	

下水主遺跡F2区

番号	器種		出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
	種類	器種	遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径						
13	土器	皿	I6-n3・ n4区	西壁 15・16 層付近	-	(12.6)	-	体部 完存	密	灰色 (N5/0)	堅緻	体部外面上半～頸部内外面～体部内面: 回転ナテ、体部外面下半: 回転ヘラケズリ	

下水主遺跡F3区

番号	器種		出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
	種類	器種	遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径						
14	土器	椀	SK0301	-	-	(2.6)	6.6	底6/12	精良	軸: 灰白色 (2.5Y8/2)、素 染: 灰白色 (5Y8/2)	堅緻	内外面: 回転ナテのち施軸、高台: ケズリ出し	
15	土器	甕	SK0301	-	12.8	(3.9)	-	2/12	密	黄灰色 (2.5Y5/1)	堅緻	口縁部内外面: 回転ナテ	
16	土器	甕	SH0309	-	-	(3.4)	5.0	底5/12	やや粗	外面: 褐色 (2.5YR6/6)、 内面: にぶ い黄褐色 (10YR6/3)	良好	内面・底部外面: ナテ、外面: ミガキ、	底部外面付近に黒斑
17	土器	皿	SK0303	-	8.5	1.4	-	6/12	密	浅黄褐色 (10YR8/3)	良好	口縁部内外面: ココナテ、内面: ナテ、外面: ユビオサエ・ナテ	
18	土器	椀	SK0303	-	15.4	5.3	6.4	底2/12	密	灰色 (N5/0) ～灰白色 (N7/0)	良好	口縁部内外面: ココナテ、内面: ナテのちミガキ、外面: ナテ (わずかにミガキあり)、高台貼り付け時: ココナテ	底部内面に螺旋状暗文
19	土器	椀	SK0304	-	15.2	(4.7)	-	2/12	密	灰色 (N5/0)	良好	口縁部内外面: ココナテ、内面: ミガキ、外面: ユビオサエ・ナテのち一部にミガキ	
20	土器	皿	SK0305	-	13.8	2.5	-	10/12	やや粗	淡褐色 (5YR8/4)	やや軟	口縁部内外面: ココナテ、内面: 摩滅不明、外面: ユビオサエ・ナテ	

21	瓦器	椀	SK0005	-	148	5.2	-	1/12	密	灰色 (N4/0)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ユビオサエ・ナデ (一部ミガキあり)、高台貼り付け時:ヨコナデ	底部内面に螺旋状暗文
22	土師器	皿	SD0007	-	103	(1.7)	-	1/12	密	灰黄色 (25Y7/2) ~ 浅黄色 (2.5Y7/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ユビオサエのちナデ	口縁部に盛りあり
23	土師器	皿	SE0308	下層	134	(1.8)	-	1/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ユビオサエ・ナデ	
24	土師器	皿	SE0308	上層	128	(2.3)	-	2/12	密	浅黄褐色 (10YR8/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内外面:ユビオサエ・ナデ	
25	土師器	皿	SE0308	上層	149	3.0	-	2/12	密	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ユビオサエ・ナデ	
26	土師器	椀	SE0308	上層	136	(3.0)	-	2/12	密	にぶい黄褐色 (10YR8/3) ~ 灰黄褐色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内外面:ユビオサエのちナデ	
27	土師器	皿	SE0308	下層	96	0.9	-	2/12	密	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内外面:ユビオサエのちナデ	
28	土師器	皿	SE0308	下層	88	1.3	-	6/12	密	灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内外面:ユビオサエのちナデ	
29	土師器	皿	SE0308	下層	106	(1.2)	-	3/12	密	浅黄褐色 (10YR8/3) ~ 橙色 (5YR7/6)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ユビオサエのちナデ	
30	土師器	皿	SE0308	下層	84	1.6	-	11/12	密	灰白色 (10YR8/1)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内外面:ユビオサエのちナデ	
31	土師器	皿	SE0308	下層	87	(1.6)	-	2/12	密	灰白色 (2.5Y8/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ユビオサエのちナデ、外面:ナデ	
32	土師器	皿	SE0308	下層	123	(1.7)	-	2/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ユビオサエ・ナデ	
33	瓦器	椀	SE0308	上層	14.0	5.1	4.4	3/12	密	灰色 (N5/0)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ユビオサエ・ナデ (口縁部外面にミガキあり)、高台貼り付け時:ヨコナデ	底部内面に同心円状暗文
34	瓦器	椀	SE0308	上層	15.0	(3.9)	-	2/12	密	オリーブ黒色 (5Y3/1)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ナデのちミガキ	
35	瓦器	椀	SE0308	下層	13.8	5.4	(3.8)	3/12	密	オリーブ黒色 (5Y3/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ユビオサエ・ナデ、高台貼り付け時:ヨコナデ	底部内面に同心円状暗文
36	瓦器	椀	SE0308	下層	13.7	4.9	5.0	6/12	密	暗灰黄色 (2.5Y5/2) ~ 黒色 (N2/0)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ユビオサエ・ナデ、高台貼り付け時:ヨコナデ	底部内面に螺旋状暗文、高台内側に「×」の縦刺
37	瓦器	椀	SE0308	下層	14.4	4.5	6.0	2/12	密	暗灰色 (N3/0)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ユビオサエのちナデ	底部内面に螺旋状暗文
38	瓦器	椀	SE0308	下層	14.7	5.4	5.2	6/12	密	灰色 (N5/0) ~ 黒色 (N1.5/0)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ユビオサエ・ナデ (一部ミガキあり)、高台貼り付け時:ヨコナデ	底部内面に螺旋状暗文、高台内側に「×」の縦刺
39	瓦器	椀	SE0308	上層	-	(1.3)	4.6	9/12	密	灰色 (N4/0)	良好	内面:ナデ、外面:ナデ、高台貼り付け時:ヨコナデ	底部内面に螺旋状暗文
40	瓦器	皿	SE0308	下層	9.8	2.2	-	4.5/12	密	灰色 (N4/0) ~ 灰白色 (2.5Y8/1)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ユビオサエのちナデ	底部内面に平行線状暗文
41	瓦器	皿	SE0308	上層	8.8	1.6	-	2/12	密	灰色 (N4/0 ~ N5/0)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ユビオサエ・ナデ	底部内面に平行線状暗文
42	須恵器	皿	SE0308	上層	体部最大径 100	(6.4)	-	体部径 3/12	密	灰白色 (N7/0 ~ 2.5Y7/1)	堅緻	体部内面・体部外面上半:回転ナデ、体部外面下半:回転ヘラケズリ	
43	土師器	羽釜	SE0308	下層	24.8	(5.2)	-	4/12	密	灰白色 (2.5Y8/1)	良好	口縁部・費貼り付け時:ヨコナデ、内外面:ナデ	
51	黒色土器	椀	SE0311	4層	15.2	5.3	7.1	5/12	密	黒色 (N2/0)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内外面:ミガキ、高台貼り付け時:ヨコナデ	両黒釉
52	黒色土器	椀	SE0311	-	-	(2.1)	8.4	底 3/12	密	黒色 (2.5Y2/1)	良好	内面:ナデのちミガキ、外面:ユビオサエ・ナデのちミガキ、高台貼り付け時:ヨコナデ	両黒釉
53	土師器	皿	SE0311	-	11.4	(0.9)	-	1.5/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ユビオサエのちナデ	

54	土師器	皿	SE0311	-	9.8	0.9	-	完形	密	灰白色 (10YR8/2)~ 浅黄褐色 (10YR8/4)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内外面：ユビオサエのちナデ	
55	土師器	碗小	SE0311	1~4層	-	(1.8)	66	底	密	外面：にぶ い黄褐色 (10YR7/2)、 内面：褐灰色 (10YR6/1)	良好	内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ、 高台貼り付け時：ココナデ	
56	土師器	羽釜	SE0311	-	22.6	(5.1)	-	1.5/12	やや粗	灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	口縁部外・髷貼り付け時：ココナデ、 内外面：ナデ	内面に備付着
57	土師器	羽釜	SE0311	-	24.1	(5.4)	-	1.5/12	粗	灰褐色 (10YR4/2)	良好	口縁部外・髷貼り付け時：ココナデ、 内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ハケ のちナデ	
58	須恵器	杯B蓋	SE0311	1~4層	*180	(1.4)	-	1/12 以下	密	灰白色 (5Y7/1)	堅細	口縁部内外面：回転ナデ	
59	須恵器	甕	SE0311	-	21.0	(6.2)	-	3/12	やや粗	灰色 (5Y6/1)	堅細	口縁部内外面：回転ナデ、体部外面： タタキ、体部内面：当て具痕	
60	瓦器	碗	16-n11 区はか	-	13.8	(4.4)	-	1/12	密	灰色 (N4/0)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内面：ミガキ、 外面：ユビオサエ・ナデ	
61	瓦器	碗	16-n11 区はか	-	14.0	(4.6)	-	1.5/12	密	灰色 (N4/0)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内面：ミガキ、 外面：ユビオサエのちナデ	
62	瓦器	碗	16-n11 区はか	-	-	(1.4)	5.0	底 12/12	密	灰白色 (5YR8/1)~浅 褐色 (5YR8/4)	やや軟	内面：ミガキ、底部内面：ナデ、外面： ナデ、高台貼り付け時：ココナデ	底部内面に髷 痕状暗文、高 台内側に「×」 の模刻
63	土師器	羽釜	16-n10 区はか	5~9層	29.2	(7.2)	-	3/12	やや粗	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	良好	口縁部内外面・髷貼り付け時：ココナ デ（髷下面にユビオサエ）、体部内外面： ナデ	髷下面以下に 備付着
64	土師器	羽釜	16-o9区 はか	精査	24.0	(7.7)	-	1/12	やや粗	外面：浅黄褐色 (10YR8/3)、 内面：にぶ い黄褐色 (10YR5/3)	良好	口縁部外・髷貼り付け時：ココナデ、 内面：ナデ、外面：ハケのちナデ	
65	緑釉陶器	碗	16-n10 区はか	5~9層	-	(2.0)	7.7	底 2/12	密	釉：灰白色 (10YR8/2)、素 地：浅黄褐色 (10YR8/3)	堅細	内外面：回転ナデ、高台：削り出し	
66	須恵器	密M	16-n10 区はか	5~9層	6.0	(2.2)	-	2/12	密	紫灰色 (5P6/1)	堅細	口縁部内外面：回転ナデ	口縁部内面に 自然輪付着
67	須恵器	鉢	16-n11 区はか	-	-	(4.7)	9.4	底 6/12	密	灰色 (N6/0)	堅細	内外面：回転ナデ、底部外面：不定方 向へラケズリ	
68	須恵器	鉢	16-n11 区はか	-	*19.8	(5.3)	-	1/12 以下	密	灰白色 (N7/0)~ 灰色 (N4/0)	堅細	口縁部内外面：回転ナデ、内外面：ナ デ	
69	須恵器	杯B蓋	16-o9区 はか	精査	18.0	(0.9)	-	1.5/12	密	灰色 (10Y6/1)	堅細	口縁部内外面：回転ナデ	
70	須恵器	密/甕	16-o9区 はか	精査	17.8	(3.3)	-	1/12	密	オリーブ黄色 (5Y6/3)	堅細	口縁部内外面：回転ナデ	
71	須恵器	杯身	16-n10 区はか	5~9層	▼13.0	(4.6)	-	1/12 以下	やや粗	灰白色 (5Y8/1)	軟	内外面：回転ナデ、底部外面：回転ハ ラケズリ	
72	瓦	瓦丸	16-n11 区はか	下層 遺構面	(長 9.8)	(幅 12.4)	(厚 2.1)	-	やや粗	灰黄色 (2.5Y7/2)	やや軟	摩滅著しく不明	
73	瓦	平瓦	16-n10 区	-	(長 5.9)	(幅 15.1)	(厚 1.6~ 1.8)	-	やや粗	灰色 (10Y6/1)	堅細	凹面：布目疝あり、凸面：縄目タタ キ	
75	弥生土器	広口 甕	SK0309	-	-	12.8	4.3	6/12	密	灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面：ココナデ、頸部内面ナデ、 体部外面：ミガキ、体部内面：ユビオ サエ・ナデのちハケ	口縁部・頸部 に加飾、体部 外面に備付着
76	弥生土器	甕	SK0309	-	-	(6.3)	4.5	底 12/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	内面：ハケ、外面ミガキ、底部外面（周 壁）：ケズリのちナデ、底部外面：ナデ	体部外面に黒 漆
77	弥生土器	甕	SK0309	-	16.0	13.6	4.5	ほぼ 完形	やや粗	外面： 2.5YR7/8~ 5YR7/8)	良好	口縁部内外面：ココナデ、体部内面上半： ハケ、体部内面下半：板ナデ、体部外面： タタキ（頸部近くにはケ）	口縁部外面に 備付着
78	弥生土器	甕	SK0309	-	-	(4.9)	5.3	底 12/12	密	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	良好	外面：タタキ、内面・底部外面：ナデ	
79	弥生土器	甕	SK0309	-	11.4	(15.1)	-	2.5/12	やや粗	外面：灰白色 (10YR8/2)、内 面：にぶい橙 色 (5YR7/4)	やや軟	口縁部内面：ココナデ、口縁部外：面 ハケのちココナデ、体部内外面：ユビ オサエ・ナデ・ハケ	体部内外面に 備付着

80	弥生土器	壺	SK0009	-	164	(30)	-	4.5/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/2~7/3)	やや軟	口縁部内外面: ココナデ、体部内面: ナデ	口縁部外面に煤付着
81	弥生土器	壺	SK0009	-	188	(40)	-	1/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/4)	良好	口縁部内外面: ココナデ、口縁部・体部内面: ハケのちナデ、体部外面: ナデ	体部内面に直線文
82	弥生土器	壺	SK0009	-	-	(39)	-	胴3/12	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/2)	やや軟	口縁部内外面: ココナデ、体部内面: ハケ、体部外面: 摩滅不明	肩部に直線文
83	弥生土器	壺	SK0009	-	-	(22)	-	1/12以下	密	灰白色(10YR8/2)	良好	口縁部内外面: ココナデ	口縁部外面に列点文
84	弥生土器	壺	SK0009	-	-	(16)	-	1/12以下	密	暗灰黄色(2.5Y4/2)	良好	口縁部内外面: ココナデ	口縁部外面に列点文
85	弥生土器	高杯	SK0009	-	204	(65)	-	6/12	密	外面: 灰褐色(5YR5/2)、内面: 褐灰色(5YR4/1)	良好	杯口縁部内外面: エビオサエ・ココナデのちミガキ、杯部内外面: ナデのちミガキ	杯部内外面に黒塗
86	弥生土器	高杯	SK0009	-	-	(94)	-	脚柱12/12	やや粗	灰白色(10YR8/2~7.5YR8/2)	良好	杯部内面: ナデ、杯部外面・脚柱部内外面: 摩滅不明	脚柱部にスカシ孔3個、脚柱部内面に粘土シボり痕
87	弥生土器	高杯	SK0009	-	-	(33)	120	4/12	密	にぶい赤褐色(5YR4/4)	良好	脚部内外面: ココナデ、脚部内外面: ハケ	スカシ孔1個(孔数不明)
88	弥生土器	高杯	SK0009	-	-	(37)	186	2/12	密	浅黄褐色(7.5YR8/3)	やや軟	脚部内外面: ココナデ、脚部内外面: ナデ	脚部内にキザミ、スカシ孔1個
89	弥生土器	器台	SK0009	-	274	(33)	-	1/12	やや粗	にぶい褐色(7.5YR7/3)	やや軟	口縁部外面・垂下口縁部: ココナデ、内面: 摩滅不明、外面: ミガキか	口縁部外面に加刷
90	弥生土器	鉢	SK0009	-	140	(49)	-	2/12	粗	にぶい黄褐色(10YR7/3)	やや軟	口縁部内外面: ココナデ、体部内外面: ハケのちナデ	口縁部・肩部外面に列点文
91	弥生土器	壺	16-m11区	-	-	(82)	44	底12/12	やや粗	外面: 赤褐色(5YR5/6)、内面: にぶい赤褐色(5YR4/4)	良好	体部内面上半: エビオサエ・ナデ、体部外面上半: ナデ、体部内外面下半: ハケ、底部外面(裏面): エビオサエ、底部外面: ナデ	体部外面に煤付着
92	弥生土器	壺	16-o12区	-	-	(52)	20	底12/12	粗	外面: 浅黄褐色(10YR8/3)、内面: 暗灰色(N3-0)	良好	内面: ハケ、外面ミガキ、底部外面(裏面): ケズリのちミガキ、底部外面: ナデ	外面に黒塗あり
93	弥生土器	壺	16-n12区	-	77	107	27	6/12	やや粗	外面: 浅黄褐色(10YR8/3)、内面: 灰白色(10YR8/2)	良好	口縁部内外面: ココナデ、体部内面上半: ナデ、体部内面下半: ハケ、体部外面: タタキのちハケ	
94	弥生土器	手形土器	16-o12区	-	鉢頸径141	(133)	-	鉢頸径9/12	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	覆い部外面: ハケ、覆い部内面: ハケのち板ナデ、鉢口縁付近外面: エビオサエ・ナデ、鉢部外面: ハケ、鉢部内面: ハケのち板ナデ	覆い部外面・鉢部外面に黒塗
95	弥生土器	鉢	16-m11区	-	267	(60)	-	2/12	やや粗	外面: 浅黄色(2.5Y7/3)、内面: 灰黄色(2.5Y7/2)	良好	口縁部内外面: ココナデのちミガキ、内面: ミガキ、外面: 摩滅不明	内面に煤付着
96	弥生土器	広口壺	16-p9区14分	断ち割り	200	(36)	-	1.5/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/2~7/3)	良好	口縁部: ココナデ、内面: ミガキ、外面: ハケ	口縁部内外面に加刷
97	弥生土器	壺	16-p9区14分	断ち割り	114	121	47	6/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	口縁部内外面: ココナデ・板ナデ、体部外面: タタキのち板ナデ、体部内面上半: エビオサエ・ナデ、体部内面下半: 板ナデ、底部外面: ナデ	口縁部外面・体部外面に黒塗
98	弥生土器	壺	16-p9区14分	断ち割り	176	(82)	-	1/12以下	やや粗	にぶい黄褐色(10YR8/3)	良好	口縁部内外面: ココナデ、口縁部・体部内面: ハケのちナデ、体部外面: タタキ	口縁部外面に黒塗
99	弥生土器	壺	16-p9区14分	断ち割り	125	(69)	-	4/12	やや粗	灰褐色(7.5YR6/2)	良好	口縁部外面: ココナデ、口縁部内面: ハケ、体部外面: タタキ、体部内面: 板ナデ	外面に煤付着
100	弥生土器	壺	16-p9区14分	断ち割り	-	(35)	37	底12/12	やや粗	外面: 赤灰色(2.5Y6/1)、内面: にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	内面: 板ナデ、外面: ナデ、底部内外面: エビオサエ・ナデ	
101	弥生土器	壺/美	16-p9区14分	重機掘削	-	(44)	-	肩部破片	やや粗	にぶい黄褐色(10YR5/3)	良好	外面: ミガキか、内面: ハケ・ナデ	肩部に列点文・直線文・竹管文
102	弥生土器	長頸壺	16-p9区14分	断ち割り	100	(56)	-	2/12	やや粗	褐灰色(10YR4/1)	良好	口縁部内外面: ココナデ、頸部内面: ハケのちナデ、頸部外面: エビオサエのちナデ	

下水主道跡 F5 区

番号	器種		出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
	種類	器種	遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径						
103	縄文土器	深鉢	H5・y23 区11か	14層 直上	-	(92)	-	1/12 以下	やや粗	外面：褐色 (10YR4/4) 内面：暗褐色 (10YR4/6)	良好	内外面：ナデ、突帯：ヨコナデ	

下水主道跡 F6 区

番号	器種		出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考	
	種類	器種	遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径							
104	土器	皿	SD0604	-	11.0	(1.7)	-	1/12	やや粗	灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、底部内外面：ナデ	内面摩滅気味	
105	土器	皿	SD0605	下層	-	(1.8)	-	1/12 以下	密	外面：浅黄褐色 (7.5YR8/3)、 内面：にぶい褐色 (7.5YR7/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、底部内面：ナデ、底部外面：ナデ・ユビオサエ		
106	土器	皿	SD0607	-	9.0	(1.2)	-	1/12	密	外面：褐色 (5YR7/6)、内 面：浅黄褐色 (7.5YR8/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、底部外面：ナデ・ユビオサエ	口縁部に煤付着 (灯火器と推定)	
107	土器	皿	SD0603	-	-	(1.4)	-	1/12 以下	密	灰白色 (10YR8/2)	良好	内外面：ヨコナデ		
108	土器	碗	SD0606	-	-	(2.5)	-	1/12 以下	密	浅黄褐色 (10YR8/4)	良好	口縁部外面：ヨコナデ、体部内外面：ナデ・ユビオサエ		
109	瓦器	碗	H6・b8区 11か	上層 遺構面 精査	15.0	(3.4)	-	1/12	密	灰色 (N5/0)	良好	体部内面：ミガキ、口縁部内外面：ヨコナデ、体部外面：ミガキか	全体に摩滅気味	
110	瓦器	碗	H6・b8区 11か	上層 遺構面 精査	-	(2.3)	-	1/12 以下	密	暗灰色 (N3/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ミガキ、外面：ナデ・ユビオサエ	摩滅気味	
111	土器	羽釜	SD0612	-	-	(1.7)	-	1/12 以下	密	外面：褐色 (10YR5/1)、 内面：灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内面：ナデ		
112	瓦質土器	深鉢	SD0602	-	-	(4.2)	-	1/12 以下	密	外面：灰色 (N6/0)、内面： 灰白色 (5Y8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ナデ	内面に煤目	
113	土器	羽釜	SD0605	下層	25.6	(5.8)	-	3/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	良好	口縁部内外面～踵：ヨコナデ、体部内面：ナデ、体部外面：ハケ	外面に煤付着	
114	瓦	平瓦	H6・a8区 11か	-	(長 9.2)	(幅 9.4)	(厚 2.2)	/	密	凹面：にぶ い黄褐色 (10YR7/2)、 凸面：灰白色 (2.5YR7/1)	良好	凹面：布目圧痕あり、凸面：縄目タタキ		
115	須恵器	甕	SX0611	-	11.4	(4.9)	-	3/12	精良	灰 (N6/0)	堅靱	口縁部内外面：回転ナデ		
116	須恵器	提瓶	H6・b8区 11か	15～18 層	-	(9.0)	-		頸部 ～ 体部 上手	密	灰色 (N7/0)	堅靱	体部内面～頸部内面：回転ナデ；体部外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ	
117	弥生土器	甕	SD0605	下層	-	(2.5)	-	底 3/12	やや粗	外面：灰白色 (10YR7/1)、内 面：灰色 (N4/0)	良好	内外面：ナデ		
118	弥生土器	甕	H6・a8区 11か	断ち割り	-	(2.7)	-	1/12 以下	密	灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ		
119	弥生土器	甕	SD0601	護岸材 検出	-	(4.2)	-	1/12 以下	やや粗	灰白色 (2.5Y7/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外部外面：横ハケか、体部内外面：ナデ		
120	弥生土器	鉢	SD0601	護岸材 検出	14.0	(5.0)	-	2/12	密	灰 (5Y6/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内面：ナデ、体部外面上半：タタキか、体部外面下半：ケズリ	外面に黒煤	
121	弥生土器	鉢/手焙	SD0601	-	/	(6.7)	-	体 2/12	やや粗	外面：浅黄色 (2.5Y7/3)、内 面：にぶい黄褐色 (10YR6/3)	良好	皿部上半：ハケ、体部外面下半：ミガキ、体部内面、ナデ（一部ハケ）	層部に直線文・列点文、体部に取ったい・キギミ	

下水主溝跡F7区

番号	器種		出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
	種類	器種	遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径						
122	土器	皿	SE0704	掘形	9.9	(1.3)	-	1/12以下	密	浅黄色 (2.5Y7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ナデ	
123	土器	皿	SE0704	最上層	140	(1.5)	-	1/12	密	外面：橙色 (7.5YR7/6)、 内面：明黄褐色 (10YR7/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：エビオサエ・ナデ	
124	土器	皿	SE0704	4層	-	1.5	-	1/12以下	密	灰色 (N6/0)	堅緻	内面・口縁部内外面：回転ナデ、底部外面：ハラキリのちナデ	
125	土器	碗/杯	SE0704	5層	160	(3.1)	-	1/12	精良	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
126	土器	皿	SE0704	掘削中	180	(1.9)	-	1/12	精良	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
127	土器	皿	SE0704	掘削中	178	(2.7)	-	1/12以下	密	灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、底部外面ケズリか	
128	黒色土器	碗	SE0704	水溜め	162	(3.0)	-	1/12以下	密	外面：にぶい黄色 (2.5Y6/3)、 内面：黒色 (2.5Y2/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデのちミガキ、外面：ナデ	内黒碗
129	黒色土器	碗	SE0704	最上層	-	(1.1)	8.0	2/12	密	外面：灰白色 (10YR8/2)、 内面：暗灰色 (N3/0)	やや軟	内面：ミガキ、外面：摩滅不明、高台貼り付け時：ヨコナデ	内黒碗
130	黒色土器	碗	SE0704	特内	-	(2.2)	6.5	2/12	密	外面：灰黄色 (2.5Y7/2)、内 面：暗灰黄色 (N3/0)	良好	内面：ミガキ、外面：ナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	内黒碗、外面に煤付着
131	須恵器	密M	SE0704	8層	-	(8.7)	4.4		実測範囲完存	灰白色 (5Y7/1)	堅緻	内外面：回転ナデ、底部外面：糸切り	
132	須恵器	杯	SE0704	掘形	18.4	(5.6)	-	1/12以下	密	灰色 (N5/0~6/0)	堅緻	口縁部内外面：回転ナデ	
133	緑釉陶器	碗/皿	SE0704	最上層	-	(1.7)	6.0	2/12	密	釉：オリーブ黒色 (7.5Y3/2)	堅緻	内外面：回転ナデ、高台：削り出し	
134	灰釉陶器	碗	SE0704	掘削中	-	(1.8)	6.6	3/12	密	釉：灰白色 (2.5Y7/1)	堅緻	内外面：回転ナデのち施釉、高台貼り付け時：回転ナデ	
135	土器	-	SE0704	上層	(径4.9)	(径2.6~2.8)	-	-	ほぼ完形	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	良好	全面：ナデ	直径5mmほどの網通し孔
136	土器	杯	SE0704	竪敷直上	16.6	(3.2)	-	2.5/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：エビオサエ・ナデ	
137	土器	杯	SE0704	竪敷除去時	18.0	(2.9)	-	1/12以下	密	外面：橙色 (7.5YR6/6)、 内面：にぶい橙色 (7.5YR6/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ	
138	灰土器	-	SE0704	竪敷除去時	-	(4.5)	-	-	不明	にぶい橙色 (7.5YR6/4~7/4)	良好	口縁部内外面：エビオサエ・ナデ	
139	土器	碗/杯	SE0704	掘形	130	3.0	-	2/12	密	明赤褐色 (5YR5/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、底部内面：ナデ、外面：ケズリ	
140	土器	碗/杯	SE0704	掘形	14.0	(2.5)	-	1/12	密	橙色 (5YR6/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ	
141	土器	皿	SE0704	掘形	16.4	(2.1)	-	1/12以下	密	橙色 (5YR6/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ	
142	土器	皿	SE0704	掘形	16.0	(2.5)	-	1/12以下	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ	
143	土器	杯/皿	SE0704	掘形	14.2	(2.4)	-	1/12以下	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
144	土器	皿	SE0704	掘形	16.9	(2.2)	-	1/12以下	密	灰白色 (2.5Y8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデか	
145	土器	皿	SE0704	掘形	17.0	(2.4)	-	1/12以下	密	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ	

新名神高速道路関係遺跡発掘調査報告

146	土師器	皿	SE0704	楕円形	*200	(22)	-	1/12	密	外面：にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面：にぶい橙褐色(7.5YR6/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、側部外面：ミガキ	内面に1段放射状暗文
147	土師器	杯/碗	SE0704	楕円形	*160	(23)	-	1/12以下	密	にぶい橙褐色(7.5YR5/4~6/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデのちミガキ	内面に1段放射状暗文
148	土師器	杯	SE0704	楕円形	-	(12)	-	底部のみ	密	外面：明褐色(7.5YR5/6)、内面：にぶい橙褐色(7.5YR6/4)	良好	底部内面：ナデ、底部外面：ケズリ	内面に螺旋状暗文・放射状暗文あり
149	土師器	羹	SE0704	楕円形	150	(31)	-	1/12以下	やや粗	にぶい橙褐色(7.5YR7/3~7/2)	良好	口縁部内面：ハケのちヨコナデ、口縁部外面：ヨコナデ、底部内外面：ハケ	
150	須恵器	杯	SE0704	楕円形	160	(49)	-	1/12	密	外面：灰色(7.5Y6/1)、内面：灰黄色(2.5Y6/2)	堅緻	口縁部内外面：回転ナデ	
151	須恵器	杯	SE0704	楕円形	142	(39)	-	1/12	密	外面：灰色(N5/0)、内面：灰色(N6/0)	堅緻	口縁部内外面：回転ナデ	
152	須恵器	杯B	SE0704	楕円形	-	(13)	89	1/12	密	灰色(N5/0~6/0)	堅緻	内外面・高台貼り付け時：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ	転用説か(底部高台内側)
153	須恵器	皿/碗	SE0704	楕円形	*132	(18)	-	1/12以下	密	灰色(5Y6/1)	堅緻	口縁部内外面：回転ナデ	
154	土師器	杯/碗	SE0704	検出時	141	(21)	-	1/12	密	橙褐色(5YR6/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ	
155	土師器	杯Aか	SE0704	検出時	163	(24)	-	1/12	密	外面：黄灰色(2.5Y5/1)、内面：灰白色(2.5Y8/2)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ(摩滅著しい)	
156	土師器	羹	SE0704	検出時	141	(21)	-	1/12	密	にぶい橙褐色(7.5YR7/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外面ミガキ	
230	瓦器	碗	SD0703	-	-	(18)	6.0	2/12	密	灰色(N5/0)	良好	内面：摩滅不明、外面ナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	暗文の有無不明
231	土師器	皿	SE0705	3・4層	11.2	0.8	-	1/12	密	外面：黄灰色(2.5Y5/1)、内面：灰黄色(2.5Y7/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ・ユビオサエ	
232	土師器	皿	SE0705	3・4層	9.4	1.4	-	4/12	密	外面：浅灰色(2.5Y7/3)、内面：橙褐色(2.5YR7/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ・ユビオサエ	
233	瓦器	皿	16-n18区14か	-	*98	(19)	-	1/12	密	灰色(N4/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	底部内面に平行線状暗文
234	土師器	皿	16-n18区14か	-	*118	(21)	-	1/12以下	密	にぶい橙褐色(7.5YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外面：ナデ	
235	土師器	羹	16-n18区14か	緑灰色シルト	17.4	(35)	-	1/12	やや粗	外面：にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面：浅黄2.5Y色(10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、底部内面：ナデ、底部外面：粗いハケ	底部内面に工具痕あり
236	須恵器	杯B蓋	16-n18区14か	-	*14.0	(1.0)	-	1/12以下	密	灰色(N6/0)	堅緻	頂部外面：ヘラキリのち不調整、口縁部外面・内面：回転ナデ	
237	須恵器	皿B	16-n17区017区	壁面精査	18.4	3.6	14.6	1/12	密	灰色(N5/0~6/0)	堅緻	内面・口縁部内外面：回転ナデ、底部外面：ヘラキリのちナデ、高台貼り付け時：回転ナデ	
238	須恵器	杯/碗	16-n17区017区	掘削中	12.0	(3.2)	-	1/12	密	灰白色(N7/0)	堅緻	口縁部内外面：回転ナデ	
239	須恵器	碗	16-n18区14か	緑灰色シルト	-	(5.5)	-	頸6/12	密	外面：灰色(N5/0)、内面：灰色(10YR6/1)	堅緻	口縁部内外面・底部内外面：回転ナデ	頸部内面にシボリ痕あり
240	須恵器	提瓶	16-n17区017区	壁面整形	-	(5.0)	-	不明	密	外面：灰色(N4/0)、内面：灰色(N6/0)	堅緻	内面・頸部外面：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ	外面に灰被る、焼け歪み著しい
241	須恵器	杯身	16-n18区14か	-	▼15.0	(27)	-	1/12以下	密	灰色(N6/0)	良好	内外面：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ	

242	須恵器	杯身	16-n18区はか	-	▼120	(21)	-	1/12	密	外面：灰色(N5/0)、内面：暗紫灰色(5RP4/1)	彫刻	内外面：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリか	
243	弥生土器	甕	16-m17区はか	遺構面精査	-	(47)	-	不明	密	外面：灰白色(2.5Y7/1)、内面：黄灰色(2.5Y5/1)	良好	外面：ハケ、内面ユビオサエ・ナデ	
244	瓦	軒丸瓦	SE0704	最上層	(高11.8)	(幅18.7)	瓦当厚2.9	-	密	灰白色(N7/0)	良好	丸瓦部凸面：ケズリのちナデ	
245	瓦	平瓦	SE0704	-	(長11.6)	(幅12.3)	厚2.0	-	やや粗	凹面：灰白色(N7/0)、凸面：灰色(N4/0)	良好	凹面：布目圧痕あり、凸面：襷目タタキ、傾斜：ケズリ	隅切りされている

下水道跡 F B 区

番号	器種		出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
	種類	器種	遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径						
246	須恵器	杯蓋	SD0801	-	120	(2.6)	-	1.5/12	密	灰白色(7.5Y8/1)	やや軟	口縁部内外面：回転ナデ	
247	須恵器	杯身	SD0801	-	▼14.3	(2.3)	-	1/12	密	灰色(N6/0)	彫刻	内外面：回転ナデ	
248	須恵器	提取か	SD0801	-	5.8	(3.5)	-	3/12	密	灰白色(N7/0)	彫刻	口縁部内外面：回転ナデ	
249	弥生土器	甕	SD0801	-	-	(3.9)	4.6	12/12	粗	灰青色(2.5Y7/2)	良好	内面：ナデ・ハケ、外面：ハケ、底部外面：ナデ	
250	土師器	甕	SP0805	-	*16.0	(2.5)	-	1/12以下	密	浅黄褐色(2.5Y7/3)	良好	口縁部内外面：ココナデ	
251	弥生土器	鉢/甕	SX0803	上層	14.0	(5.2)	-	1/12	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	口縁部内外面ココナデ、頸部内面・体部内面：ナデ、頸部外面・体部外面：ハケ	口縁部外面に縦凹線2条
252	土師器	甕	SX0803	上層	*11.6	(6.4)	-	1/12以下	密	にぶい黄褐色(10YR6/4)	良好	口縁部内外面：ココナデ、体部内外面：ナデ	
253	弥生土器	甕	SX0803	上層	18.0	(2.2)	-	1/12	粗	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ココナデ、頸部内面：ナデ	口縁部外面に列点文
254	弥生土器	甕/鉢	SX0803	-	14.0	(7.9)	-	3/12	やや粗	外面：灰黄褐色(10YR6/2)、内面：褐灰色(10YR4/2)	良好	口縁部内外面：ココナデか、体部内外面：ナデか	全体に摩滅著しく、調整不明
255	弥生土器	甕	SX0803	-	*13.1	(8.7)	-	1/12以下	やや粗	外面：にぶい黄褐色(10YR7/3)、内面：にぶい褐色(7.5YR7/3)	やや軟	体部下外面：ハケ体部内面：ナデか、それ以外摩滅著しく調整不明	体部外面に黒斑
256	弥生土器	甕	SX0803	-	*20.8	(3.6)	-	1/12以下	やや粗	浅黄褐色(2.5Y7/3)	良好	口縁部内外面：ココナデ、頸部内外面：ミガキか	
257	弥生土器	甕	SX0803	-	15.6	(4.1)	-	6/12	粗	浅黄褐色(7.5YR6/4)	良好	口縁部内外面：ココナデ、体部内面：ナデか、体部外面：調整不明	肩部に刺突文、全体に摩滅が著しい
258	弥生土器	甕	SX0803	-	13.1	(2.2)	-	1/12	密	灰黄褐色(10YR5/2)	良好	口縁部内外面：ココナデ	口縁部外面に列点文、窯付着
259	弥生土器	甕/甕	SX0803	-	-	(3.8)	3.8	12/12	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	内外面：ハケ、底部外面：ナデ	内面摩滅著しい
260	弥生土器	甕/甕	SX0803	-	-	(3.3)	4.5	底7/12	やや粗	灰黄褐色(10YR6/2)	良好	内面：ナデ、外面：粗いハケ・細かいハケ、底部外面：ナデ(板状工具による)	
261	土師器	羽釜	17-n1区はか	-	*25.0	(4.7)	-	1/12以下	粗	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	口縁部内外面・頸貼り付時：ココナデ、体部内外面：ナデ	口縁部外面・頸下半面に窯付着
262	土師器	甕	16-n25区はか	-	9.9	(2.1)	-	5/12	密	浅黄褐色(2.5Y7/3)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
263	土師器	杯/碗	16-n25区はか	-	13.9	(3.9)	-	1.5/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/4)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	外面摩滅気味
264	白磁	碗	17-n2区はか	西壁精査	-	(1.6)	7.4	底3/12	密	釉：灰白色(7.5Y7/2)、素地：灰白色(5Y8/1)	彫刻	底部内面：回転ナデのち輪軸、底部外面：ケズリ	高台はケズリ出し
265	土師器	甕	16-n25区はか	-	18.0	(1.2)	-	1/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/4)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内面：摩滅不明、外面：ユビオサエ・ナデ	全体に摩滅

366	土師器	瓶か	16-n25区は1か	遺構面精査	170	(3.0)	-	1/12以下	密	にぶい橙色(75YR7/3)	良好	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ	
367	土師器	甕	16-n25区は1か	遺構面精査	160	(3.9)	-	1/12以下	密	灰白色(10YR8/2)	良好	口縁部内外面・口縁部外面:ヨコナデ、口縁部内面:ハケ	
368	須恵器	杯B蓋	16-n25区は1か	重機掘削	149	(2.0)	-	1/12	密	灰白色(5Y7/1)	堅靱	頂部外面:ヘラキリのち不調整、口縁部外面・内面:回転ナデ	
369	須恵器	杯Aか	16-n25区は1か	壁面精査	129	3.2	-	1/12	密	灰色(5Y6/1)	堅靱	内外面:回転ナデ、底部外面:ヘラキリのち不調整	
270	弥生土器	甕	16-n25区は1か	断ち割り	130	(7.2)	-	4/12	やや粗	浅黄褐色(10YR8/3)~にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	口縁部内・口縁部外面:ヨコナデ、口縁部内面:ハケ、底部内面:ナデ、底部外面:ハケ	口縁部外面に横紋2条
271	土師器	甕	16-n25区は1か	南壁整形	250	(3.0)	-	1/12	やや粗	灰黄色(25Y7/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、口縁部外面:ハケのちヨコナデ、口縁部内面:壁減不明	
272	瓦	軒丸瓦	16-n25区は1か	-	(高4.6)	(元当幅7.0)	(厚2.2)	不明	密	灰色(N5/0)	良好	(瓦当面の破片のみ)	
273	瓦	丸瓦	16-n25区は1か	-	(長10.8)	(幅6.9)	(厚さ1.7~2.3)	不明	密	外面:灰色(N6/0)、内面:灰白色(7.5Y7/1)	良好	凸面ナデ、凹面:春日庄痕あり、縁縁:ケズリ	

下水主溝跡F9区

番号	器種	器種	出土遺構・地区	遺構名・地区名	層位・状況	法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
						口径	器高	底径						
274	土師器	皿	SE0929	一段下げ	-	9.3	(1.3)	-	1/12	密	灰黄色(25Y7/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ナデ・ユビオサエ	
275	土師器	皿	SE0929	-	-	9.6	1.5	-	1.5/12	密	灰白色(25Y8/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ナデ・ユビオサエ	
276	土師器	皿	SE0929	-	-	13.9	2.0	-	3/12	密	浅黄色(25Y7/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ナデ・ユビオサエ	黒底あり
277	黒色土器	碗	SE0929	-	-	-	(3.5)	-	1/12以下	密	外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面:黒色(N2/0)	良好	口縁部内外面ヨコナデ、内面:ミガキ、外面:ミガキ・ユビオサエ	内黒碗
278	黒色土器	碗	SE0929	-	-	-	(0.6)	7.5	1.5/12	密	外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)、内面:黒色(N2/0)	良好	底部内面:ミガキ、高台貼り付け時:ヨコナデ	内黒碗、高台内側に縦筋
279	須恵器	杯B	SE0929	手載	-	(1.8)	10.0	2/12	密	灰色(N5/0)	堅靱	内面:回転ナデのち不定方向ナデ、外面:回転ナデ、底部外面:ヘラキリのちナデ、高台貼り付け時:回転ナデ		
280	須恵器	鉢	SE0929	一段下げ	-	(3.3)	-	1/12以下	密	灰白色(5Y7/1)	堅靱	口縁部内外面:回転ナデ	いわゆる雑産	
281	土師器	瓶	SE0929	手載	230	(17.6)	-	8/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	口縁部:ヨコナデ、内面:ハケのちナデ、外面:粗いハケ	282と同一個体か	
282	土師器	瓶	SE0929	手載	-	(13.5)	-	体2/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	内面:ハケのちナデ、外面上半:ハケ、外面下半:ケズリのちナデ	281と同一個体か	
284	土師	-	SE0929	-	径1.5	長5.2	-	一部欠損	密	浅黄色(25Y7/3)	良好	全面:ナデ	直径0.4cmの網通し孔	
285	土師器	皿	SE0930	-	9.6	1.3	-	1/12	密	灰黄色(25Y7/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内外面:ナデ		
286	土師器	皿	SE0930	-	10.2	1.6	-	3/12	密	浅黄色(25Y8/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ナデ・ユビオサエ		
287	土師器	皿	SE0930	-	12.2	(2.0)	-	1.5/12	密	灰白色(10YR7/1)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ナデ・ユビオサエ		
288	須恵器	杯	SE0930	手載	127	(2.8)	-	1.5/12	密	灰白色(N7/0)	堅靱	口縁部内外面:回転ナデ		
289	黒色土器	碗	SE0930	-	15.4	(4.5)	-	1.5/12	密	外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面:暗灰色(N3/0)	良好	口縁部内外面ヨコナデ、内外面:ミガキ	口縁部に沈線	
290	黒色土器	碗	SE0930	-	-	(1.1)	6.4	4/12	密	外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面:黒色(N2/0)	良好	底部内面:ミガキ、底部外面:ナデ・ユビオサエ、貼り付け高台:ヨコナデ	内黒碗	

291	黒色土器	碗	SE0900	曲物北肩	11.6	3.8	5.9	9.5/12	密	黒色 (N5/0)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内外面・底部外面:ミガキ、高台貼り付け時:ヨコナデ	両黒碗
292	土器	羽釜	SE0900	曲物北肩	-	(5.0)	-	1/12	やや粗	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ハケ、胴:ヨコナデ	
293	黒色土器	甕	SE0900	-	16.3	(4.8)	-	1.5/12	密	外面:にぶい橙色 (7.5YR6/3)、内面:暗灰色 (N3/0)	良好	口縁部内面:ミガキか、口縁部外面:ヨコナデ、体部内面:ケズリか、体部外面:ナデか	
294	瓦	平瓦	SE0900	-	(長 9.5)	(幅 6.7)	(厚 1.6)	-	密	凹面:灰色 (5Y6/1)、凸面:灰色 (7.5Y6/1)	良好	凹面:布目瓦痕あり、凸面:縄目タタキ	粘土板の糸切り痕あり
295	土器	皿	SD0906	-	-	(2.0)	-	1/12以下	密	にぶい橙色 (2.5YR7/4)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ナデ・ユビオサエ	
296	須恵器	杯身	SP0928	-	-	(3.1)	-	1/12以下	密	灰色 (5Y6/1)	堅緻	内面・口縁部内外面・体部外面上半:回転ナデ、底部外面:回転ヘラケズリ	底部外面にケズリ残しあり
297	黒色土器	碗	SP0928	-	-	(1.5)	5.6	9/12	密	暗灰色 (N3/0)	やや軟	内外面:ミガキ、高台貼り付け時:ヨコナデ	両黒碗
298	生土器	壺	SK0904	-	17.2	(7.6)	-	4/12	粗	外面:にぶい橙色 (7.5YR7/4)、内面:灰白色 (2.5Y7/1)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、体部内面:ナデ、頸部外面:ハケ、体部外面:ハケのちナデ	口縁部外面に煤付着
299	生土器	壺	SK0921	-	-	-	-	-	肩部破片	外面:にぶい黄橙色 (10YR7/4)、内面:灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	体部外面:ミガキ、体部内面:ナデ・ユビオサエ	肩部に波状文・列点文
300	不明	不明	SK0912	-	(長 7.5)	(幅 6.8)	(厚 1.9)	不明	密	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良好	上面:ユビオサエ・ナデ、下面:ケズリ	用途不明品
301	土器	甕	16-a16区はか	重機掘削	-	(13.7)	-	体 4/12	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/2) ~ 灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	体部外面:タタキのちハケ (ハケは部分的)、体部内面:ヘラケズリ	体部外面に煤付着
302	土器	二重口縁壺	16-a16区はか	重機掘削	22.8	(4.4)	-	4/12	やや粗	外面:橙色 (7.5YR7/6)、内面:にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ	
303	土器	羽釜	16-a16区はか	精査	24.8	(3.5)	-	1.5/12	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、内面:ナデか、胴:ヨコナデ	内面に煤付着
304	須恵器	碗小	16-a16区はか	-	-	(1.8)	6.8	3/12	密	灰色 (N6/0)	堅緻	内外面:回転ナデ、底部外面:糸切り痕あり	

下水主導跡 F 10 区

番号	器種	器種	出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
			遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径						
306	土器	甕	SD1001	-	-	(5.9)	-	1/12以下	やや粗	外面:にぶい橙色 (7.5YR7/3)、内面:浅黄褐色 (7.5YR7/4)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、体部内面:ナデ、頸部外面:ユビオサエ、体部外面:ハケ	
307	須恵器	壺/鉢	SD1001	-	-	(3.5)	-	1/12以下	密	灰色 (N4/0 ~ 5/0)	堅緻	口縁部内外面:回転ナデ	
308	生土器	高杯	SH1020	東側固壁溝・床面	*26.0	(2.8)	-	1/12以下	密	明赤褐色 (5YR5/8) ~ にぶい黄褐色 (10YR7/2)	良好	口縁部外面:ヨコナデ、杯部内面:ミガキ、杯口縁部外面:ミガキ、杯部外面:ナデ	
309	生土器	高杯	SH1020	東側固壁溝	25.4	(5.8)	-	-	やや粗	灰白色 (2.5Y8/2)	やや軟	口縁部内外面:ヨコナデ、杯部内外面:ミガキ	
310	生土器	甕	SH1020	-	13.1	(3.2)	-	3/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面:ハケのちヨコナデ、体部内面:ケズリか	口縁部外面に煤付着
311	生土器	甕	SH1020	-	18.0	(2.1)	-	1/12	密	外面:にぶい黄褐色 (10YR5/3)、内面:にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、頸部内面:ハケのちナデ、頸部外面:ナデ	口縁部外面に列点文
312	生土器	甕	SH1020	-	16.0	(3.8)	-	3/12	やや粗	外面:にぶい褐色 (7.5YR6/3)、内面:浅黄褐色 (7.5YR8/3)	良好	口縁部内外面:ヨコナデ、体部内面:ナデ (工具使用)、体部外面:ハケ	口縁部外面に列点文

新名神高速道路関係遺跡発掘調査報告

313	養生土器	壺	SH1020	-	15.7	(3.6)	-	1.5/12	密	外面：暗灰黄色 (2.5Y4/2)、内面：黄灰色 (2.5Y5/1)	良好	口縁部内外面：ココナデ、体部内面：ケズリカ	口縁部外面に列点文、口縁部外面に縦付着
314	養生土器	壺	SH1020	-	-	(4.3)	-		肩部破片 やや粗	外面：浅黄灰色 (2.5Y7/3)、内面：灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	体部外面：ハケのちナデ、体部内面：ハケ (摩滅著しい)	肩部外面に直線文・列点文、肩部外面に黒斑
315	養生土器	壺	SH1020	家型 周壁溝	-	-	-		肩部破片	外面：褐色 (10YR4/4)、内面：褐灰色 (10YR6/1)	良好	体部外面：ミガキ、体部内面：ハケ	肩部外面に直線文・列点文、内面は摩滅著しい
316	養生土器	壺	SH1020	-	-	(20)	3.1	底 12/12	密	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	体部外面：ミガキ、体部内面：ミガキか、底部外面：ナデ	
317	養生土器	壺/窓	SH1020	-	-	(3.2)	3.8	底 3/12	やや粗	外面：暗灰黄色 (2.5Y4/2)、内面：黒褐色 (2.5Y3/1)	良好	体部内外面・底部外面：ナデ	
318	養生土器	壺	SH1020	SK1025	-	(2.5)	4.8	12/12	やや粗	外面：にぶい橙色 (5YR7/3)、内面：にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良好	内面：ナデ (工具使用)、外面：ユビオサエ・ナデ、底部外面：ナデ	
319	養生土器	器台	SH1020	SK1025	20.7	(2.8)	-	3/12	やや粗	浅黄橙色 (10YR8/3)	良好	垂下口縁部貼り付け部外面のみ：ココナデ	摩滅が著しく調整不明
320	養生土器	器台	SH1020	-	-	(6.5)	-	筒 2/12	密	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	筒部・頸部外面：ミガキ、筒部内面ナデ、頸部外面：ハケ	筒部外面に赤色顔料を塗布、321と同一個体か
321	養生土器	器台か	SH1020	-	-	(1.6)	20.0	脚 1.5/12	密	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	頸部外面：ミガキ、頸部内外面：ココナデ、頸部内面：ハケ	頸部の一部に赤色顔料付着、320と同一個体か
322	養生土器	器台	SH1020	床面	28.0	(3.7)	-	3/12	密	灰白色 (10YR8/2)、赤色顔料：橙色 (2.5YR6/6)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内外面：ミガキ	口縁部内外面に加飾
323	養生土器	有孔鉢	SH1020	SK1024	14.1	9.6	3.7	底 12/12	やや粗	灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	内面：ナデ、外面：ハケ、底部外面：ナデ	外面から内面の一部に黒斑
325	養生土器	壺	SX1016	-	-	(29.7)	-	頸 6/12	密	にぶい橙色 (7.5YR7/4) ~ 褐色 (2.5YR6/8)	やや軟	頸部・体部外面：ミガキ、底部外面：タタキ、頸部内面：ナデ、頸部内面：ユビオサエ・ナデ、体部内面・底部：ハケ	体部外面下半に黒斑
326	養生土器	壺	SX1017	-	13.8	24.1	3.3	9/12	密	橙色 (5YR6/6)	良好	口縁部内外面：ココナデ、頸部内面：ハケ、頸部外面：ハケのちナデ、体部外面：タタキ、体部内面：ユビオサエ・ナデ	体部外面下半に黒斑
327	瓦器	椀	16-a25区はか	暗灰黄色細砂混じりシルト	16.0	(3.8)	-	1/12以下	密	暗灰色 (N3/0)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内面：ミガキ、外面：ユビオサエ・ナデ	口縁部内面に沈線
328	瓦器	椀	16-a25区はか	暗灰黄色細砂混じりシルト	-	(2.2)	5.9	底 3/12	密	外面：灰色 (N4/0)、内面：灰色 (N6/0)	良好	内面：ミガキ、外面：ユビオサエ・ナデ、高台貼り付け時：ココナデ	
329	青磁	椀	16-a25区はか	暗灰黄色細砂混じりシルト	-	(2.2)	-	1/12以下	密	輪：オリーブ灰色 (5GY6/1)、素地：灰白色 (5Y7/1)	堅緻	口縁部内外面：回転ナデのち施輪	
330	土師器	皿	16-a25区はか	暗灰黄色細砂混じりシルト	11.0	(1.2)	-	1/12	密	淡褐色 (5YR8/4)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	内面摩滅気味
331	土師器	皿	16-a25区はか	暗灰黄色細砂混じりシルト	10.0	(1.6)	-	1/12	やや粗	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	良好	口縁部内外面：ココナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
332	土師器	壺	16-a25区はか	暗灰黄色細砂混じりシルト	26.0	(4.5)	-	1/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	良好	口縁部内外面：ココナデ、口縁部内面：ハケのちココナデ、頸部外面：ユビオサエ・ココナデ、体部内面：ハケのちナデ、体部外面：粗いハケ	

333	土器	羽釜	16-a25区はか	暗灰黄色細砂混じりシルト	*26.0	(4.0)	-	1/12以下	やや粗	外面：暗灰黄色(2.5Y5/2)、内面：灰黄褐色(10YR5/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、鈎貼り付け時：ヨコナデ	
334	瓦器	椀	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	*14.8	(3.9)	/	1/12	密	灰色(N5/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ミガキ、外面：ユビオサエ・ナデのちミガキ	口縁部内面に沈線
335	瓦器	椀	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	14.9	(3.7)	-	2/12	密	灰色(N5/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデのちミガキ、外面：ユビオサエ・ミガキ	口縁部内面に沈線
336	瓦器	椀	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	-	(1.5)	6.2	底7/12	密	灰色(N5/0)	良好	内外面：ナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	底部内面に螺旋状暗文あり
337	瓦器	椀	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	-	(1.5)	6.0	底3/12	密	灰色(N5/0)	良好	内面：ナデ・ミガキ、外面：ナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	底部内面に螺旋状暗文あり
338	瓦器	椀	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	-	(1.2)	4.4	底6/12	密	灰色(N4.0~5/0)	良好	内外面：ナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	底部内面に螺旋状暗文あり
339	瓦器	皿	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	9.9	(1.5)	-	1/12	密	灰色(N5/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	底部内面に平行線状暗文あり
340	黒色土器	椀	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	-	(0.9)	8.4	1/12	密	外面：にぶい黄褐色(10YR5/4)、内面：黒色(N2/0)	良好	内面：ナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	内黒椀
341	土器	皿	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	8.8	(1.3)	-	2.5/12	密	淡黄色(2.5Y8/3)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
342	土器	皿	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	7.9	(1.1)	-	1.5/12	密	灰白色(10YR8/2)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
343	土器	皿	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	*10.0	(1.6)	-	1/12以下	密	灰白色(10YR8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
344	土器	皿	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	12.0	1.8	-	1/12	密	にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：不明	摩滅著しい
345	土器	皿	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	*12.0	(1.8)	-	1/12	密	橙色(7.5YR6/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
346	土器	皿	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	*13.9	(1.7)	-	1/12以下	密	橙色(5YR6/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
347	土器	皿	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	15.6	2.6	-	2/12	密	浅黄褐色(7.5YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
348	須恵器	鉢	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	30.8	(2.7)	-	1/12	密	灰白色(N7/0)	堅緻	口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部に自然釉が付着
349	土製品	土玉	16-a25区はか	灰色細砂混じりシルト	径22~23	重97g	-	定形	密	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	全面：ナデ	
350	瓦	平瓦	16-a25区はか	灰色シルト	(長11.2)	(幅5.7)	厚2.4	-	やや粗	灰白色(7.5Y7/1)	良好	凹面：布目庄痕あり、凸面：縄目タタキ	粘土板の余切り痕あり
351	瓦	軒丸瓦	16-a25区はか	灰色粘土	(長9.0)	(幅6.0)	(厚2.2)	-	密	灰白色(7.5Y8/1)	良好	(瓦当面の破片のみ)	
352	養生土器	鉢	16-a25区はか	オリープ灰色シルト	*14.0	(3.8)	-	1/12以下	やや粗	にぶい黄褐色(10YR6/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ミガキ	外面に黒度あり
353	瓦器	椀	17-b2区はか	西壁整形	15.0	(2.1)	-	1/12	密	灰色(N5/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ミガキ、外面：ナデ	口縁部内面に沈線
354	瓦器	椀	16-a25区はか	北壁精査	*14.8	(3.2)	-	1/12以下	密	灰色(N4/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ミガキ、外面：ユビオサエ・ミガキ	口縁部内面に沈線あり
355	土器	皿	16-a25区はか	-	8.4	(1.7)	-	1/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
356	土器	皿	17-b2区はか	西壁整形	*16.0	(2.1)	-	1/12以下	密	灰白色(2.5Y8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ・ユビオサエ	
357	須恵器	蓋A	出土地点不明	精査	9.5	(3.7)	-	1.5/12	密	灰白色(N7/0)	堅緻	口縁部内外面・体部内外面：回転ナデ	

358	土器 器	葵 17-b2区 はか	西壁整形	150	(1.7)	-	1/12 以下	密	橙色 (7.5YR6/6)	良好	口縁部内外面: ココナテ		
359	土器 器	小型 丸底 甕	16-a25 区はか	断ち割り	140	(5.7)	-	1/12 以下	密	橙色 (5YR6/6)	良好	口縁部内外面: ミガキ	
360	土器 器	小型 丸底 甕	16-a25 区はか	断ち割り	119	8.1	-	1.5/12	密	橙色 (5YR6/6)	良好	口縁部内外面: ミガキ, 体部内面: ナテ, 体部外面: ケズリのうちナテ	
361	土器 器	甕/ 甕	16-a25 区はか	-	21.2	(2.5)	-	1/12	密	灰青色 (2.5Y7/2)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 頸部内外面: ナテ	
362	土器 器	甕/ 甕	16-a25 区はか	-	13.8	(1.7)	-	1/12	密	浅黄褐色 (10YR8/3)	やや 軟	口縁部内外面: ココナテ	口縁部外面に 列点文
363	弥生 土器	甕	16-d25 区はか	断ち割り	160	(4.0)	-	1/12	密	外面: 灰青色 (2.5Y7/2), 内 面: 浅黄色 (2.5Y7/3)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 体部内面: ナテ, 頸部外面: エビオサエ	
364	弥生 土器	甕	16-d25 区はか	断ち割り	-	(5.1)	-	頸 2/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 体部内面: ナテ, 体部外面: タタキ	
365	弥生 土器	甕	16-a25 区はか	重機掘削	164	24.0	5.2	2/12	やや 粗	灰白色 (2.5Y8/2) ~ にぶい黄褐色 (10YR7/2)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 体部内外面 エビオサエ・ハケ, 底部外面: ナテ	
366	弥生 土器	甕/ 甕	16-a25 区はか	精査	-	(2.3)	6.0	3.5/12	密	灰青色 (2.5Y7/2)	良好	内面: ハケのうちナテ, 外面: エビオサエ・ ナテ, 底部外面: ナテ	
367	弥生 土器	甕	16-a25 区はか	-	-	(3.8)	5.7	底 3/12	やや 粗	外面: 黄灰色 (2.5Y4/1), 内 面: 灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	内面: ナテ (工具使用), 外面: エビオ サエ・ナテ, 底部外面: ナテ	内面に黒灰
368	弥生 土器	甕	16-a25 区はか	-	-	(2.3)	4.2	底 8/12	密	灰色 (5Y5/1)	良好	内面・底部外面: ナテ, 外面: ハケ	
369	土器 器	高杯	16-a25 区はか	精査	21.3	(5.6)	-	1/12	やや 粗	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	良好	口縁部: ココナテ, 杯部内面: ミガキ, 杯部外面: ミガキ	
370	弥生 土器	高杯	17-d2区 はか	精査	-	(5.8)	-	杯 2/12	やや 粗	外面: にぶ い黄褐色 (10YR7/2), 灰 黄褐色 (10YR6/2)	良好	杯口縁部内外面: ココナテ, 杯部内面: ナテ (ミガキか), 杯部外面: エビオサエ ・ナテのうちミガキ	
371	弥生 土器	高杯	16-a24 区はか	北東壁 整形	-	(6.3)	-	脚 3/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/2 ~ 7/3)	良好	脚柱部外面: ミガキ (先行するハケあ り), 脚柱部内面: ナテ (一部不調整)	スカシ孔は3 個と推定
372	弥生 土器	高杯	16-a25 区はか	-	(前部 径6.3)	(7.1)	-	前部 12/12	やや 粗	灰白色 (2.5Y8/2)	良好	前部外面: ハケ, 前部内面上半: ナテ, 前部内面下半: ハケ	
373	瓦 器	平瓦	16-a25 区はか	北東壁 整形	(長 7.5)	(幅 10.5)	厚22	-	やや 粗	灰色 (7.5Y5/1)	良好	凹面: 布目圧痕あり, 凸面: 縄目タタキ, 側縁: ケズリ	
374	瓦 器	丸瓦	16-a25 区はか	精査	(高 8.0)	(幅 8.3)	厚20 ~23	-	密	灰白色 (7.5Y7/1)	良好	凸面: ナテ, 凹面: 布目圧痕あり, 側縁: ケズリ	

下水主溝跡 F 1 区

番号	器種	器種	出土遺構・地区		法 量			残存 率	胎土	色 調	焼成	技法上の特徴	備 考
			遺構名・ 地区名	層位・ 状況	口径	器高	底径						
375	瓦器	椀	SE1110	-	160	5.5	5.3	4/12	密	黒色 (N2/0)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 内面: ミガ キ, 外面: エビオサエ・ナテのうちミガキ, 高台貼り付け時: ココナテ	底部内面に螺 旋状筋文, 2 次焼成の痕跡
376	土器	皿小	SE1110	-	18.2	(2.9)	-	4/12	密	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 皿部内面: ナテ, 皿部外面: エビオサエ・ナテ	内面に煤付着
377	土器	脚台 付皿	SE1110	下層	-	(3.7)	10.2	3/12	やや 粗	灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	皿部内面: ナテ, 皿部外面: エビオサエ・ ナテ, 脚台部: ココナテ	
378	土器	皿	SE1110	-	8.9	1.7	-	完形	密	浅黄褐色 (10YR8/3)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 内外面: エ ビオサエ・ナテ	内面に煤付着
379	土器	皿	SE1110	下層	100	(1.2)	-	1/12	やや 粗	浅黄褐色 (10YR8/3)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 内面: ナテ, 外面: エビオサエ・ナテ	
380	土器	皿	SE1110	下層	100	0.9	-	2/12	密	灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 内面: ナテ, 外面: エビオサエ・ナテ	
381	土器	皿	SE1110	-	9.9	2.0	-	9/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3 ~ 6/4)	良好	口縁部内外面: ココナテ, 内面: ナテ, 外面: エビオサエ・ナテ	全体に2次焼 成の痕跡, 外 面に煤付着

382	土師器	皿	SE1110	下層	100	(1.3)	-	3/12	密	外面：にぶい褐色(7.5YR6/3)、内面：褐色(2.5YR7/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
383	土師器	皿	SE1110	下層	9.4	1.3	-	1/12	密	灰白色(10YR8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
385	黒色土師器	椀	SD1104	-	-	(1.5)	6.4	1/12	密	黒色(10YR1/1)	良好	内面：ナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	
386	土師器	杯/皿	SD1104	-	-	(2.3)	-	底2/12	密	褐色(5YR6/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	内面に暗文なし
387	瓦器	椀	SK1106	下層	14.8	(5.0)	-	3/12	密	黒色(N2/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ミガキ、外面：ユビオサエ・ナデ	口縁部内面に沈線
388	瓦器	椀	SK1106	上層	15.8	(4.2)	-	2/12	密	黒色(N2/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ミガキ、外面：ユビオサエ・ナデのちミガキ	口縁部内面に沈線
389	土師器	皿	SK1106	下層	15.8	(2.8)	-	1/12以下	密	灰白色(7.5YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
390	土師器	脚台付皿	SK1106	上層	17.0	6.2	9.2	5/12	やや粗	灰白色(7.5YR8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、皿部内面：ナデ、皿部外面：ユビオサエ・ナデ、脚台部：ヨコナデ	外面に縞むずかば付着
391	土師器	皿	SK1106	上層	8.4	(1.1)	-	2/12	密	灰白色(2.5YR8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
392	土師器	皿	SK1106	上層	9.2	0.9	-	2/12	密	浅黄褐色(10YR8/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
393	土師器	皿	SK1106	下層	9.6	1.8	-	11/12	密	灰白色(10YR8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
394	弥生土器	葉	SD1101	-	19.4	(12.6)	-	1/12以下	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/2)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ハケ	全体に摩滅著しい
395	土師器/弥生土器	高杯	SD1101	オリーブ黒色シルト	-	(6.5)	-	脚柱7/12	やや粗	外面：明褐色(7.5YR7/2)、内面：にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	外面：摩滅不明、内面：ユビオサエ・ナデ	スカシ孔2か所確認できる
396	弥生土器	鉢	SK1109	-	21.9 ~ 23.0	10.9	4.8	11/12	やや粗	外面：にぶい褐色(7.5YR7/6)、内面：にぶい黄褐色(10YR7/4)	良好	口縁部外面：ヨコナデ、口縁部内面：ミガキ、体部内面：ハケのちミガキ、体部外面ユビオサエ・ハケのちナデ	器形はややいびつ、黒斑あり
397	弥生土器	葉	SK1109	-	14.9	23.6	3.8	3/12	粗	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ハケ、底部外面：ハケ	内外面に黒斑あり、体部外面に葉付着
398	天目	椀	17-k8区14か	北側側溝	9.8	(2.8)	-	1/12以下	密	釉：暗褐色(10YR3/4) - 黒色(10YR2/1)	良好	口縁部内外面：回転ナデのち施釉	
399	白磁	椀	17-k8区14か	-	17.0	(3.0)	-	1/12	精良	灰白色(7.5YR8/1)	堅緻	口縁部内外面：回転ナデのち施釉	
400	瓦器	椀	17-k8区14か	精査	14.8	(4.2)	-	2/12	密	灰色(N4/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ミガキ、外面：ユビオサエ・ナデ(ミガキありか)	
401	瓦器	椀	17-k8区14か	精査	11.6	(2.4)	-	1/12	密	灰色(N4/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ミガキ、外面：ナデ	
402	瓦器	椀	17-k8区14か	北側側溝	-	(2.7)	5.7	6/12	密	灰白色(2.5YR8/1)	良好	内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデのちミガキ、高台貼り付け時：ヨコナデ	底部内面に螺旋状暗文あり
403	土師器	皿	17-17区12か	東側側溝	7.0	0.9	-	1/12	密	浅黄褐色(10YR8/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
404	土師器	皿	17-17区12か	東側側溝	7.6	1.7	-	-	密	浅黄褐色(10YR8/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
405	土師器	皿	17-k8区14か	北側側溝	9.0	(1.6)	-	3/12+1/12	密	灰白色(10YR8/2) - 淡褐色(5YR8/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
406	土師器	椀	17-k8区14か	北側側溝	13.8	(3.1)	-	1/12	密	灰白色(10YR7/1 ~ 8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ユビオサエ・ナデ	
407	土師器	皿	17-k8区14か	重複掘削	6.8	1.5	-	1/12以下	密	外面：灰白色(7.5YR8/2)、内面：にぶい黄褐色(10YR6/4)	良好	摩滅のため調整不明	

408	土師器	羽釜	17-k7-k8区	-	-	(3.5)	-	1/12	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/4~6/3)	良好	内面：ナデ、髷貼り付け時：ヨコナデ	
409	磁胎陶器	椀	17-k8区はか	北側側溝	-	(3.1)	5.4	3/12	精良	軸：オリーブ灰色(10Y4/2)、素地：にぶい黄褐色(10YR6/2)	堅韌	内外面：回転ナデのち施軸、高台貼付け時：回転ナデ	
410	黒色土師器	椀	17-k8区はか	精査	-	(1.4)	4.6	1/12	密	外面：にぶい黄褐色(10YR6/4)、内面：黒色(N2/0)	良好	内外面：ナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	内黒底、底部内面に平行線状刷文
411	土師器	皿	17-k7-k8区	-	8.4	(1.0)	-	2/12	密	灰白色(10YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ナデ	
412	土師器	皿	17-k8区はか	北側側溝	9.7	2.2	-	2/12	密	灰白色(2.5YR/1)～淡赤褐色(2.5YR7/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：エビオサエ・ナデ	
413	土師器	皿	17-k8区はか	北側側溝	9.1	1.9	-	3/12	密	灰白色(10YR8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：エビオサエ・ナデ	内面に広く保付着
414	須恵器	鉢	17-k8区はか	-	*25.5	(3.7)	-	1/12以下	密	灰白色(N7/0)	堅韌	口縁部内外面：回転ナデ	いわゆる露産鉢か
415	土師器	皿A	17-n7区	南東側溝	*17.7	(2.5)	-	1/12以下	密	褐色(7.5YR6/6)	良好	口縁部内面：ヨコナデ、口縁部外面：ヨコナデのちミガキ、底部内面：ナデ、底部外面：ケズリ	内面に1段放射状刷文・螺旋状刷文
416	土師器	皿A	17-n7区	南東側溝	*20.0	(2.6)	-	1/12以下	密	褐色(5YR7/8)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、底部内面：ナデ、底部外面：ケズリ	
417	須恵器	杯	17-k8区はか	重機掘削	14.2	(2.2)	-	1/12	密	灰色(5Y6/1)	堅韌	口縁部内外面：回転ナデ	
418	須恵器	杯B	17-k8区はか	精査	*9.9	3.3	7.4	1/12以下	密	青灰色(5PB5/1)	堅韌	口縁部内外面・高台貼り付け時：回転ナデ	
419	土師器	甕	17-n7区	南東側溝	30.0	(6.0)	-	3/12	やや粗	にぶい黄褐色(7.5YR7/4)	良好	口縁部外面：ヨコナデ、口縁部内面ハケ、体部内面ナデ、体部外面ハケ	体部内面に保付着
420	弥生土器	甕/壺	17-k8区はか	精査	15.8	(2.9)	-	1/12	やや粗	外面：浅黄褐色(10YR8/3)、内面：にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ナデ	口縁部外面に列点文
421	弥生土器	甕/壺	17-k8区はか	-	-	(3.5)	-	肩部破片	やや粗	外面：灰白色(10YR8/1)、内面：灰黄褐色(10YR6/2)	良好	体部外面：ハケのちナデ、体部内面：ナデ	肩部外面に波状文
422	弥生土器	鉢か	17-k8区はか	北側側溝	-	(3.4)	4.8	底12/12	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/2~7/3)	良好	内外面：ナデ、底部外面：エビオサエ・ナデ	
423	弥生土器	甕	17-k7-k8区	-	-	(4.5)	5.3	底12/12	やや粗	外面：にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面：にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	内面：ハケ、外面：タタキ、底部外面：エビオサエ・ナデ	
424	弥生土器	壺か	17-k7-k8区	-	-	(4.0)	4.2	底12/12	粗	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	内外面：ナデ、底部外面：エビオサエ・ナデ	
425	土師器	高杯	17-k8区はか	精査	-	(2.5)	15.8	1/12	やや粗	暗灰色(N3/0)	良好	脚部外面：ミガキ、脚端部内外面：ヨコナデ、脚部内面：ナデ	
426	弥生土器	高杯	17-k8区はか	北側側溝	-	(3.7)	14.5	1/12	やや粗	外面：にぶい黄褐色(10YR7/4)、内面：浅黄褐色(10YR8/3)	良好	脚部外面：ミガキ、脚端部内外面：ヨコナデ、脚部内面：ハケ	脚部にスキャン孔1個

下水主通跡 F 12 区

番号	器種		出土遺構・地区		法量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備考
	種類	器種	遺構名・地区名	層位・状況	口径	器高	底径						
427	土師器	皿	SE1201	下層	9.2	1.5	-	4.5/12	密	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：エビオサエのちナデ	
428	土師器	皿	SE1201	下層	14.0	(2.3)	-	2/12	密	浅黄褐色(7.5YR8/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：エビオサエのちナデ	

429	土師器	皿	SE1201	下層	15.0	2.3	-	2/12	密	灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ。内面: ナデ、外面: ユビオサエのちナデ	
430	土師器	皿	SK1230	-	11.4	(1.3)	-	2/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ。内外面: ユビオサエのちナデ	
431	土師器	皿	SK1230	-	12.6	(1.6)	-	1/12	密	灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ。内外面: ユビオサエのちナデ	
432	土師器	甕	SK1230	-	13.0	(3.7)	-	3/12	密	外面: 赤褐色 (5YR5/3)、内面: 黒 (2.5YR2/1)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ。体部内面: ケズリか、体部外面: ナデ	
433	須恵器	甕	SK1230	-	22.6	(6.8)	-	1/12	やや粗	暗灰色 (N3.0) ~ 灰色 (N5.0)	堅緻	口縁部内外面: 回転ナデ。体部外面: タタキ、体部内面: 高てい直ナデ消し	口縁部内面、体部外面に灰被る
434	土師器	高杯か	SD1235	-	13.9	(3.6)	-	2/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/3) ~ 淡赤褐色 (2.5YR7/4)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ。杯部内面: ナデ、杯部外面: ユビオサエ・ナデ	
435	須恵器	杯身	SD1235	-	▼120	(3.3)	-	2/12	やや粗	灰色 (N6/0)	堅緻	内外面: 回転ナデ、底部外面へラキリのちナデ	
436	須恵器	高杯	SK1225	-	-	(13.1)	-	脚12/12	密	灰色 (N6/0)	堅緻	脚部外面・脚部内面下半: 回転ナデ。脚部内面上半: 不調整 (シボり痕あり)	スカシ孔上下2か所ずつ、合計4か所あり
437	須恵器	杯蓋	SP1223	-	13.8	(3.0)	-	2/12	密	灰色 (N6/0)	堅緻	内外面: 回転ナデ、頂部外面へラキリのち不調整	
438	須恵器	杯身	SP1238	-	▼130	3.7	-	4/12	密	外面: 灰色 (N6/0)、内面: 灰白色 (N7.0)	堅緻	内外面: 回転ナデ、底部外面へラキリのちナデ (いわゆる補助ケズリあり)	
439	土師器	鉢小	SP1221	-	*2.0 (長5.9)	(8.8)	-	1/12以下	密	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ。内面: ナデ、外面: ハケ	
440	土師器	SP1221	-	(長5.4)	(径2.0)	-	ほぼ完形	やや粗	灰白色 (10YR8/2)	良好	全面: ナデ	直径7mmほどの縦通し孔	
441	土師器	SP1221	-	(長5.4)	(径1.9)	-	完形	やや粗	灰白色 (10YR8/1)	良好	全面: ナデ	直径6mmほどの縦通し孔	
442	天目	腕	I7-b7区ほか	-	11.0	(4.7)	-	2/12	密	軸: 暗灰色 (5YR4/1)	堅緻	口縁部内外面: 回転ナデのち軸	
443	須恵器	腕	I7-d7区ほか	南壁整形	-	(3.6)	*6.0	底1/12以下	密	灰白色 (2.5Y8/1)	良好	内外面・高台貼り付け時: 回転ナデ	
444	須恵器	杯G/A鉢	I7-d8区ほか	精査	12.0	(3.9)	-	3/12	密	灰白色 (7.5Y7/1)	堅緻	内面・口縁部内外面: 回転ナデ、底部外面: へラキリのちナデ	転用便小
445	須恵器	杯蓋	I7-e8区ほか	精査	12.8	(4.0)	-	2/12	密	灰色 (N6/0)	堅緻	内外面: 回転ナデ、頂部外面へラキリのちナデ	
446	須恵器	杯身	I7-e8区	-	▼14.4	2.9	-	2/12	やや粗	灰色 (N6/0)	堅緻	内外面: 回転ナデ、底部外面: 回転へラズリ (ケズリ残しあり)	
447	弥生土器	壺/葉	I7-b7区ほか	7層か	*14.0	(2.5)	-	1/12以下	やや粗	外面: にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)、内面: にぶい黄褐色 (10YR7/4)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ。頂部内外面: ナデ	口縁部外面に煤付着
448	弥生土器	壺/鉢	I7-b7区ほか	北東区包含層	-	(2.6)	3.0	底6/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	やや軟	体部外面・底部外面: ナデ、体部内面: ハケ (工具によるナデか)	体部内面に黒炭あり
449	弥生土器	高杯	I7-b7区ほか	重機掘削	*21.0	(3.7)	-	1/12以下	やや粗	外面: 明赤褐色 (2.5YR5/6)、内面: 淡赤褐色 (2.5YR7/4)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ、杯部内面: 摩滅不明、杯部外面上半: ナデのちミガキ、杯部外面下半: ナデ、杯部曲面: ヨコナデ	
450	弥生土器	壺	SH1202	床面	-	(10.3)	5.2	6/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	良好	体部外面: ミガキ、体部内面: ユビオサエ・ナデ、底部外面: ナデ、底部内面: ユビオサエ・ナデ	
451	弥生土器	壺	SH1202	-	-	(2.3)	-	1/12以下	密	灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	体部外面: ミガキ、体部内面: ナデ	肩部に波状文
452	弥生土器	壺	SH1202	-	-	(5.3)	-	肩部破片	やや粗	褐色 (7.5YR4/1 ~ 4/2)	良好	体部外面: ミガキか (摩滅)、体部内面: ハケか (摩滅)	胎土に角閃石を含む
453	弥生土器	甕	SH1202	床面	14.2	20.8	4.5	6/12	やや粗	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	良好	口縁部内外面: ヨコナデ、体部外面上半: タタキのちハケ、体部外面下半: ハケ (摩滅)、体部内面上半: ナデか (摩滅)、体部内面下半: ハケか (摩滅著しい)	
454	弥生土器	甕	SH1202	-	14.4	(4.8)	-	2/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	良好	体部外面: ハケ後ナデ、体部内面: ナデか (摩滅)	

455	養生土器	甕	SH1202	床面	-	(60)	-	2/12	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	良好	胴部外面：ハケのちナデか、体部外面：摩滅不明、体部内面：ユビオサエ・ナデ	
456	養生土器	甕	SH1202	-	*174	(27)	-	1/12	やや粗	浅黄色 (2.5Y7/4)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ	
457	養生土器	甕	SH1202	-	-	(20)	-	1/12以下	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ	
458	養生土器	甕	SH1202	-	-	(22)	-	1/12以下	やや粗	浅黄色 (2.5Y7/4)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ	
459	養生土器	甕	SH1202	床面	-	(35)	40	底12/12	密	赤褐色 (5YR4/6)	良好	体部外面：タタキ、体部内面：ハケか底面外面：ナデ	
460	養生土器	甕	SH1202	-	-	(30)	40	3/12	密	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良好	底面外面：タタキのちナデ、底面内面：ハケか	
461	養生土器	甕	SH1202	床面	140	(20)	-	1/12以下	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部外面に列点文
462	養生土器	甕	SH1202	-	140	(35)	-	3/12	密	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部外面に列点文
463	養生土器	甕	SH1202	床面	160	(26)	-	2/12	やや粗	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部外面に列点文、口縁部外面に波状文
464	養生土器	甕	SH1202	-	-	(30)	-	1/12以下	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ（一部にハケあり）	口縁部外面に列点文
465	養生土器	甕	SH1202	-	156	(31)	-	1/12	やや粗	灰白色 (7.5YR8/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部外面：粗いハケ、体部内面：摩滅不明	口縁部外面に列点文
466	養生土器	壺 / 甕	SH1202	床面	-	(57)	-	3/12	密	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	体部内外面：ハケ	肩部に直線文・波状文
467	養生土器	壺	SH1202	-	-	(38)	-	1/12	密	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	体部外面：ミガキ、体部内面：ナデ	肩部に直線文・列点文
468	養生土器	壺	SH1202	-	-	(50)	-	2/12	密	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	体部外面：ミガキ、体部内面：ナデ・ハケ	肩部に直線文・列点文
469	養生土器	甕	SH1202	床面	-	(103)	-	4/12	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良好	胴部内外面：ナデ、体部外面：ハケ、体部内面上半：ユビオサエ・ナデ、体部内面下半：ハケ	体部外面に黒塗
470	養生土器	甕	SH1202	-	176	(25)	-	2/12	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ	
471	養生土器	甕	SH1202	-	-	(21)	-	6/12	やや粗	褐色 (7.5YR4/1)	良好	外面：ケズリか、内面：ケズリのちナデか	
472	養生土器	甕	SH1202	床面	-	(33)	-	2/12	やや粗	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	良好	体部外面：ハケ（摩滅）、体部内面：ナデ	
473	養生土器	鉢	SH1202	床面	31.0	(9.0)	-	6/12	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良好	外面：ミガキ、口縁部内面：ヨコナデのちミガキ、体部内面：ミガキ	口縁部外面・肩部外面に波状文
474	養生土器	鉢	SH1202	-	24.4	(7.0)	-	2/12	やや粗	にぶい橙色 (5YR6/4)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ、体部外面：ナデか、体部内面：ユビオサエ・ナデ	口縁部内外面に列点文
475	養生土器	鉢	SH1202	-	130	6.2	3.6	6/12	やや粗	灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	内外面：摩滅不明（体部外面：ミガキか）	
476	養生土器	鉢	SH1202	-	-	(46)	-	3/12	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	体部外面：ハケ、体部内面：ナデ	肩部に刺突文
477	養生土器	高杯	SH1202	床面	256	160	17.1	6/12	やや粗	灰白色 (7.5YR8/2)	良好	口縁部：ヨコナデ、杯部内外面：ミガキ 脚部外面：ミガキ、脚部内面：ヨコナデ、脚部内面：ハケ後ナデ	脚柱部にスカシ孔4個
478	養生土器	高杯	SH1202	下層	276	(28)	-	3/12	やや粗	灰黄色 (2.5Y6/2)	何	杯部外面：ミガキ、杯部内面：摩滅不明	
479	養生土器	高杯	SH1202	床面	281	(55)	-	4/12	密	灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	杯部外面：ナデのちミガキ（間隔空けて縦に施文）、杯部内面：ミガキ（摩滅著しい）	東海系か
480	養生土器	高杯	SH1202	下層	288	(53)	-	2/12	やや粗	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良好	杯口縁部：ヨコナデ、杯口縁部外面：ナデのちミガキ、杯口縁部内面：摩滅不明	

481	弥生土器	高杯	SH1202	-	-	(8.1)	-	脚柱 8/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	脚柱部外面：摩滅不明、脚柱部内面上半：シボリのち不調整、脚柱部内面下半：ナデ	杯底部に充填痕あり、スカシ孔は3個と推定
482	弥生土器	高杯	SH1202	床面	-	5.9	-	脚柱 12/12	粗	浅黄色 (2.5Y7/3)	良好	脚柱部外面：ミガキ、脚柱部内面上半：シボリのち不調整、脚柱部内面下半：ナデか	
483	弥生土器	高杯	SH1202	床面	-	(7.6)	-	脚柱 6/12	粗	にぶい褐色 (5YR6/4)	やや軟	杯底部内面：ミガキ、脚柱部外面：摩滅不明、脚柱部内面：ナデ	
484	弥生土器	高杯	SH1202	-	-	(4.5)	-		やや粗	赤赤褐色 (2.5YR7/4)	軟	脚柱部外面：粗いミガキ、脚柱部内面：ナデ	スカシ孔は4個と推定
485	弥生土器	高杯	SH1202	-	-	(1.2)	-	裾 2/12	密	灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	脚部内外面：ヨコナデ	脚部部に刺突文・キザミ
486	弥生土器	器台	SH1202	-	20.7	(3.7)	-	3/12	良好	灰白色 (10YR8/2)	良好	垂下口縁部：ヨコナデ、口縁部内面：摩滅不明、口縁部外面上半：ヨコナデ、口縁部外面下半：ミガキ	
487	弥生土器	器台	SH1202	床面	18.7	15.5	-	8/12	やや粗	にぶい褐色 (7.5YR7/3)	やや軟	垂下口縁部：ヨコナデ、口縁部内面：ユビオサエ・ナデ、口縁部外面：ハケナデ、筒部内面：ナデ、脚部内外面：ヨコナデ	スカシ孔は3段に不規則に配される
488	弥生土器	器台	SH1202	-	-	(3.1)	17.9	1.5/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	良好	脚部外面：ミガキ、脚部内面：ヨコナデ	
489	弥生土器	器台	SH1202	床面	-	(4.1)	19.3	4/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	やや軟	脚部外面：ハケのちナデ、脚部内面：ナデ	
490	弥生土器	器台	SH1202	下層	-	(3.8)	15.8	3/12	やや粗	灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	脚部外面：ミガキ、脚部内面：ヨコナデ、脚部内面：ユビオサエ・ナデ（一部にハケ）	
491	弥生土器	遊	SD1245 SH1202 重複	10.6	(5.8)	-	4/12	密	外面：褐色 (7.5YR7/6)、 内面：灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、胴部～体部内外面：ミガキ	口縁部外面に縦凹線3条	
492	弥生土器	甕	SD1245 SH1202 重複	14.0	(5.3)	-	1.5/12	密	灰白色 (2.5Y8/1～ 8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部外面：ハケのちナデ、体部内面：ユビオサエ・ナデ	口縁部外面に列点文、口縁部～体部外面に黒斑	
493	弥生土器	甕	SD1245 SH1202 重複	-	(5.4)	-	1/12	密	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	良好	体部外面：ハケのちナデ、体部内面：ユビオサエのちナデ	口縁部外面に列点文	
494	弥生土器	甕	I7-b7-c7区 SH1202 上層	*11.8	(3.2)	-	1/12 以下	密	浅黄褐色 (10YR8/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ナデ		
495	弥生土器	甕か	I7-b7-c7区 SH1202 上層	-	(4.7)	3.8	底 12/12	密	外面：褐灰色 (7.5YR4/1)、 内面：にぶい黄褐色 (10YR6/3)	良好	体部外面：ハケのちナデ、体部内面：ハケ、底部外面：ナデ	体部外面に保付着	
496	弥生土器	高杯	I7-b7-c7区 SH1202 重複	*29.0	(4.0)	-	1/12 以下	密	にぶい黄褐色 (10YR7/2～ 7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、杯口縁部内外面ミガキ、杯底部外面ナデ	口縁部外面に黒斑	
497	弥生土器	高杯	SD1245 SH1202 重複	-	(7.0)	-	脚柱 12/12	密	淡褐色 (2.5YR8/4)	良好	脚柱部外面上半：ミガキ、脚柱部外面下半：ハケ、脚柱部内面下半：ナデ	脚柱部内面上半にシボリ痕あり、スカシ孔を1個確認できる	
498	弥生土器	器台	I7-b7-c7区 SH1202 上層	-	(10.4)	-	筒部 4/12	やや粗	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	良好	筒部外面：ミガキ、筒部内面：ユビオサエのちナデ	スカシ孔1個確認できる	
499	弥生土器	手づくね土器	I7-b7-c7区 SH1202 上層	4.8	5.0	-	底 12/12	粗	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ユビオサエ・ナデ、底部外面：ナデ		

(凡例)

*：口径欄の記号 *：推定値。

▼：古墳時代杯身の口径は杯蓋が受け部に接するところで計測したことを示す

○：器高欄の記号 ()：残存高

-：該当部位なし、または測定不能

付表9 下水主道跡第4次(F地区) 出土木製品一覧表

報告 番号	器 種		遺構名	流量 (cm) いずれも最大値			樹種
	種類	器種		長さ	幅/径	厚さ	
44	木製品	曲物	SE0308	(260)	-	10	ヒノキ科アスナロ属
45	木製品	曲物	SE0308	(290)	-	0.4 ~ 0.7	ヒノキ科アスナロ属
46	木製品	曲物	SE0308	(184)	-	0.8 ~ 1.1	ヒノキ科アスナロ属
47	木製品	曲物	SE0308	31.25	6.65	0.35	スギ科スギ属
48	木製品	不明木材	SE0308	40.5	3.15	0.5	スギ科スギ属
49	木製品	不明	SE0308	7.6	2.6	不明	マツ科マツ属
50	木製品	板材	SE0308	26.6	3.3	0.55 ~ 0.85	ヒノキ科アスナロ属
157	井戸枠材	横棧	SE0704	103.2	7.0	5.6	ヒノキ科ヒノキ属
158	井戸枠材	横棧	SE0704	107.6	7.2	7.6	ヒノキ科ヒノキ属
159	井戸枠材	横棧	SE0704	99.0	6.0	4.0	スギ科スギ属
160	井戸枠材	横棧	SE0704	106.0	8.0	7.0	スギ科スギ属
161	井戸枠材	横棧	SE0704	99.8	7.4	7.0	ヒノキ科アスナロ属
162	井戸枠材	横棧	SE0704	104.8	8.6	7.6	ヒノキ科アスナロ属
163	井戸枠材	横棧	SE0704	99.2	6.4	4.2	スギ科スギ属
164	井戸部材	当て板	SE0704	105.0	7.5	1.5	スギ科スギ属
165	井戸枠材	横棧	SE0704	108.0	9.2	7.2	スギ科スギ属
166	井戸枠材	隅柱	SE0704	162.8	17.6	-	未同定
167	井戸枠材	隅柱	SE0704	161.0	16.7	-	未同定
168	井戸枠材	隅柱	SE0704	148.2	17.3	-	未同定
169	井戸枠材	隅柱	SE0704	178.0	18.8	-	未同定
170	井戸枠材	横板	SE0704	89.6	6.4	4.4	スギ科スギ属
171	井戸枠材	横板	SE0704	80.0	4.0	1.3	スギ科スギ属
172	井戸枠材	横板	SE0704	108.8	8.2	4.3	スギ科スギ属
173	井戸枠材	横板	SE0704	109.8	8.0	5.2	スギ科スギ属
174	井戸枠材	横板	SE0704	112.8	9.0	6.0	スギ科スギ属
175	井戸枠材	横板	SE0704	116.8	13.6	6.0	スギ科スギ属
176	井戸枠材	横板	SE0704	112.8	15.6	7.20	スギ科スギ属
177	井戸枠材	大型横板	SE0704	114.5	76.5	9.20	未同定
178	井戸枠材	横板	SE0704	103.0	7.8	5.2	スギ科スギ属
179	井戸枠材	横板	SE0704	97.2	9.2	4.5	スギ科スギ属
180	井戸枠材	横板	SE0704	116.5	13.4	5.4	スギ科スギ属
181	井戸枠材	横棧	SE0704	109.6	11.2	6.4	スギ科スギ属
182	井戸枠材	横板	SE0704	102.8	7.5-8.0	5.5	スギ科スギ属
183	井戸枠材	横板	SE0704	115.6	9.6	5.6	スギ科スギ属
184	井戸枠材	大型横板	SE0704	114.0	70.8	10.6	未同定
185	井戸枠材	横板?	SE0704	106.5	9.6	4.8	スギ科スギ属
186	井戸枠材	横板	SE0704	111.0	10.6	6.0	スギ科スギ属
187	井戸枠材	横板	SE0704	112.0	7.2	5.6	スギ科スギ属
188	井戸枠材	横板	SE0704	118.4	13.6	5.0	スギ科スギ属
189	井戸枠材	大型横板	SE0704	115.2	72.0	9.6	未同定

報告 番号	器 種		遺構名	法量 (cm) いずれも最大値			樹種
	種類	器種		長さ	幅/径	厚さ	
190	井戸枠材	横板	SE0704	75.2	7.8	7.2	スギ科スギ属
191	井戸枠材	横板	SE0704	1130	9.8	5.8	スギ科スギ属
192	井戸枠材	横板	SE0704	1132	12.8	5.2	スギ科スギ属
193	井戸枠材	横板	SE0704	1152	14.8	6.8	スギ科スギ属
194	井戸枠材	大型横板	SE0704	1132	78.0	11.2	未同定
195	井戸枠材	内枠材	SE0704	82.8	27.2	6.8	ヒノキ科アスナロ属
196	井戸枠材	内枠材	SE0704	83.5	24.8	5.2	ヒノキ科アスナロ属
197	井戸枠材	内枠材	SE0704	82.8	28.8	7.2	ヒノキ科アスナロ属
198	井戸枠材	内枠材	SE0704	83.6	23.6	6.8	ヒノキ科アスナロ属
199	井戸部材	礎板	SE0704	34.0	23.6	5.6	ヒノキ科アスナロ属
200	井戸部材	礎板	SE0704	38.4	13.6	6.8	ヒノキ科アスナロ属
201	井戸部材	礎板	SE0704	33.2	11.8	4.4	ヒノキ科アスナロ属
202	井戸部材	礎板	SE0704	33.0	13.0	4.6	ヒノキ科アスナロ属
203	井戸部材	礎板	SE0704	43.0	14.7	1.3	スギ科スギ属
204	井戸部材	礎板	SE0704	14.7	3.8	1.0	スギ科スギ属
205	井戸部材	礎板	SE0704	56.8	4.6	1.2	ヒノキ科アスナロ属
206	井戸部材	礎板	SE0704	105.2	8.8	2.4	ヒノキ科ヒノキ属
207	井戸部材	礎板	SE0704	109.0	11.2	2.4	ヒノキ科アスナロ属
208	井戸部材	礎板	SE0704	105.6	19.0	4.4	ヒノキ科アスナロ属
209	井戸部材	礎板	SE0704	104.0	8.0	1.3	スギ科スギ属
210	井戸部材	礎板	SE0704	108.4	6.2	1.3	スギ科スギ属
211	井戸部材	礎板	SE0704	109.3	10.3	1.5	スギ科スギ属
212	井戸部材	礎板	SE0704	102.0	48 ~ 16.0	3.6	ヒノキ科アスナロ属
213	井戸部材	板材	SE0704	102.8	14.4	2.4 ~ 4.2	未同定
214	井戸部材	板材	SE0704	113.6	11.6 ~ 14.4	6.8	未同定
215	井戸部材	板材	SE0704	69.2	16.4	0.9	スギ科スギ属
216	井戸部材	板材	SE0704	78.0	13.2	1.2	スギ科スギ属
217	井戸部材	板材	SE0704	96.3以上	15.4 ~ 15.9	0.8	未同定
218	木製品	皿 (浅き物)	SE0704	16.6	-	1.0	スギ科スギ属
219	木製品	横櫓	SE0704	7.5	4.1	1.0	マンサク科イヌノキ属
220	木製品	横櫓	SE0704	2.1+6.2	3.7	0.9	マンサク科イヌノキ属
221	木製品	斎串	SE0704	16.6	2.0	0.15	ヒノキ科アスナロ属
222	木製品	斎串	SE0704	16.1	1.75	0.1	ヒノキ科アスナロ属
223	木製品	曲物	SE0704	15.6	5.8	-	ヒノキ科アスナロ属
224	木製品	曲物	SE0704	23.3	20.8	1.0	ヒノキ科アスナロ属
225	井戸部材	曲物	SE0704	(29.5)	-	1.0	ヒノキ科アスナロ属
226	木製品	曲物	SE0704	32.85	3.5	0.35	ヒノキ科アスナロ属
227	木製品	柄杓	SE0704	21.5	11.7	9.0	本体：ウリ科ユウガキ属 柄：マツ科モミ属
228	木製品	柄杓	SE0704	51.6	11.4	5.4	本体：ウリ科ユウガキ属 柄：アナ科コナラ属
229	木製品	杓	SE0704	23.2	0.8	-	ツバキ科サカエ属

付表10 女谷・荒坂横穴群第14次 出土埴輪観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	タテ (cm)	ヨコ (cm)	厚さ (cm)	色調	胎土	焼成	調整・備考
1	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-d IV)	(4.0)	(4.2)	1.2	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	外面：ナデ
2	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-c III)	(5.3)	(3.2)	1.4	明黄褐 10YR7/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
3	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X23-f VII)	(4.0)	(4.9)	1.4	明黄褐 10YR7/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
4	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-b IV)	(1.4)	(4.9)	1.4	(外) 黄褐 10YR5/6 (内) 褐 10YR4/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
5	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24.X24-d IV .W24-g II)	(10.8)	(8.8)	1.5	橙 7.5YR6/6	やや粗	良好	内外面：摩滅
6	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-c II)	(5.5)	(6.6)	1.4	黄橙 10YR8/6	やや粗	良好	内外面：摩滅
7	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-e V .W24-f II .W24-g II .W24-h II)	(4.5)	(15.8)	1.1	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	外面：ナデか
8	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-c V .X24-d V)	(5.5)	(5.2)	1.1	(外) 明黄褐 10YR7/6 (内) 灰黄褐 10YR5/2	やや粗	やや軟	外面：ナデか
9	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-c IV .X24-b V)	(3.5)	(9.1)	1.2	明黄褐 10YR7/6～ 6/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
10	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-g III .W24- f II .X24-b IV)	(5.0)	(8.0)	1.1	褐灰 10YR4/1	やや粗	やや軟	外面：ナデ
11	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24)	(4.0)	(4.8)	1.1	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
12	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X23-f VII)	(12.0)	(17.8)	1.3	明黄褐 10YR7/6	やや粗	やや軟	外面：タテハケ後ナデ 内面：ヨコナデ成形か (摩滅)
13	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-g II .W24-g IV .W24-f II .W24-b II .W24-d I .X24-a V .X24-b V .X24-a III .W24-h III)	(13.7)	(23.9)	1.3	橙 5YR7/8	やや粗	良好	外面：ナデ 内面：タテ基調のナデ 成形
14	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-f I .W24-f II .W24-g II .W24-d I)	(11.7)	(15.6)	1.6	明黄褐 10YR6/6	やや粗	良好	外面：タテハケ後ナデ 内面：ナデ成形
15	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-g II .W24-d I .W24-f II)	(7.5)	(20.2)	1.3	橙 7.5YR7/6	やや粗	良好	外面：ナデ仕上げか(摩 滅) 内面：強いナメナデ 成形
16	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-g III .W24-h III)	(7.1)	(7.2)	1.5	明黄褐 10YR6/6	やや粗	良好	内外面：ナデ
17	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-g I)	(5.5)	(6.6)	1.3	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	外面：ナデ
18	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-a V)	(7.1)	(7.5)	1.3	明黄褐 10YR6/6	やや粗	良好	内外面：ナデ
19	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-g III .W24- f II .W24-g II)	(8.5)	(11.1)	1.5	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	内外面：ナデか
20	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-g II)	(5.7)	(8.7)	1.4	橙 7.5YR6/6	やや粗	良好	内外面：ナデ
21	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-b III)	(4.6)	(8.5)	1.5	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	外面：ナデか
22	短甲形	3 トレンチ	SD01 (X24-b III .X24-a III)	(4.2)	(6.4)	1.2	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	内外面：ナデか
23	短甲形	3 トレンチ	SD01 (W24-g II)	(3.1)	(5.5)	1.4	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	外面：ナデ
24	草摺形	3 トレンチ	SD01 (X24-c III)	(5.4)	(10.0)	1.3	(外) 褐灰 10YR5/1 (内) 黄橙 10YR8/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
25	草摺形	3 トレンチ	SD01 (X24-f III .X24-g III .X24-d II)	(6.9)	(16.0)	1.3	黄橙 10YR7/8	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
26	草摺形	3 トレンチ	SD01 (X23-a VII)	(5.3)	(8.4)	1.4	明黄褐 10YR7/6	やや粗	良好	内外面：摩滅
27	草摺形	3 トレンチ	SD01 (X24-c II)	(12.6)	(8.9)	1.5	黄橙 10YR7/8	やや粗	良好	外面：ナデ
28	家形	3 トレンチ	SD01 (X24-f I)	(8.3)	(5.6)	2.0	橙 7.5YR7/6	やや粗	良好	内外面：摩滅
29	家形	3 トレンチ	重機掘削箇所南鄙	(6.0)	(8.8)	2.8	橙 7.5YR6/8	やや粗	良好	内外面：ナデ

報告 番号	種類	地区名	出土地点	タテ (cm)	ヨコ (cm)	厚さ (cm)	色調	胎土	焼成	調整・備考
30	円筒	3トレンチ	SD01 (W24-h IV .W24-g III .W24-g II)	(11.3)	(17.0)	1.0	橙 5YR6/8	やや粗	良好	外面：タテハケ類 内面：ナデ
31	円筒	3トレンチ	SD01 (W24-b II)	(5.5)	(7.3)	1.2	褐灰 10YR5/1	やや粗	やや軟	外面：タテハケ
32	円筒	3トレンチ	SD01 (W23f VII)	(10.7)	(8.2)	1.4	橙 5YR6/6	やや粗	良好	外面：ナナメ方向の ハケ
33	円筒	3トレンチ	SD01 (X24-a IV)	(12.6)	(13.6)	1.1	橙 5YR6/8	やや粗	良好	外面：タテハケ 内面：ヨコハケ
34	円筒	3トレンチ	SD01 (W24-h V)	(7.0)	(9.1)	1.1	橙 5YR6/8	やや粗	良好	外面：1次調整タテ ハケ、2次調整ヨコ ハケ
35	円筒	3トレンチ	SD01 (Y24-c IV)	(6.1)	(6.8)	1.1	橙 5YR6/8	やや粗	良好	外面：ヨコ方向のハ ケ
36	円筒	3トレンチ	SD01 (Y24-c V .Y24-d III)	(10.8)	(10.3)	1.5	橙 7.5YR6/6	やや粗	良好	外面：ヨコハケ
37	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-e V)	(5.0)	(5.4)	1.5	橙 7.5YR6/6	やや粗	良好	外面：ナデ
38	盾形	3トレンチ	SD01 (V23-f II)	(4.0)	(6.0)	1.1	橙 7.5YR7/6	やや粗	良好	外面：ナデ
39	盾形	3トレンチ	SD01 (V23-h VI)	(6.0)	(7.2)	1.3	明黄褐 10YR7/6	やや粗	やや軟	外面：ナデ
40	盾形	3トレンチ	SD01 (Y24-a VI)	(6.3)	(6.3)	4.9	明赤褐 5YR5/8	やや粗	良好	内外面：摩滅
41	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-c IV)	(7.6)	(5.8)	1.1	橙 7.5YR6/6	やや粗	良好	外面：ナデ
42	盾形	3トレンチ	SD01 (W23-d VII)	(6.1)	(5.4)	1.5	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
43	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-e VI)	(4.1)	(3.7)	1.3	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
44	盾形	3トレンチ	SD01 (W24-h I)	(8.3)	(4.6)	1.4	黄橙 10YR7/8	やや粗	良好	外面：ナデ
45	盾形	3トレンチ	SD01 (X24-e IV)	(5.0)	(4.2)	1.3	黄橙 10YR7/8	やや粗	良好	外面：ナデ
46	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-c V .V22-b III)	(4.5)	(5.1)	1.4	明黄褐 10YR6/6	やや粗	良好	内外面：摩滅
47	盾形	3トレンチ	SD01 (W23-f V .V23-g VII .V23-h VI)	(8.6)	(14.6)	4.0	黄橙 7.5YR7/8	やや粗	良好	内外面：激しく摩滅
48	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-e VI .V22-d VI)	(6.9)	(6.6)	1.4	黄褐 10YR5/6	やや粗	やや軟	外面：ナデ
49	盾形	3トレンチ	SD01 (W23-d IV .W23-b VI .W23)	(14.3)	(6.1)	1.8	明黄褐 10YR7/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
50	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-b V)	(7.3)	(6.3)	3.5	にぶい黄橙 10YR6/4	やや粗	良好	外面：ナデ
51	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-d VI .V22- e V . V 22-f VII)	(9.2)	(8.1)	1.1	黄橙 10YR7/8	やや粗	良好	内外面：ナデ
52	盾形	3トレンチ	SD01 (V23-h VI)	(5.3)	(6.9)	1.4	明黄褐 10YR7/6	やや粗	良好	内外面：摩滅
53	盾形	3トレンチ	SD01 (V22.W22-a VI)	(13.8)	(7.4)	1.5	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	外面：ハケ
54	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-e VI .V22-e VI)	(5.5)	(3.5)	1.1	橙 7.5YR6/6	やや粗	良好	内外面：摩滅
55	盾形	3トレンチ	SD01 (V22-c III)	(5.7)	(4.4)	1.4	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	内外面：ハケ
56	盾形	3トレンチ	SD01 (V23-f II)	(9.8)	(4.7)	1.5	明黄褐 10YR6/6	やや粗	やや軟	内外面：摩滅
57	盾形	3トレンチ	SD01 (W23a- VII .V23-g VI)	(23.8)	(9.4)	2.2	橙 5YR6/6	粗	良好	平成24年度調査出土 S84と採合
66	円筒	4トレンチ	SX01	(7.3)	(9.7)	1.3	橙 5YR6/6	密	良好	外面：ヨコハケ

付表11 女谷・荒坂横穴群第14次 出土土器観察表

報告番号	器種	器形	地区名	出土地点	法量			残存率	色調	胎土	焼成	調整・備考
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)					
58	須恵器	器台	3トレンチ	SD01 (W23-d VII)	-	(61)	-	/	灰 NS/0	密	堅緻	内面：回転ナデ、ユビオサエ。外面：回転ナデ
60	須恵器	杯蓋	4トレンチ	SX01-22	118	(39)	-	2/12	灰 N6/0	密	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部外面：回転ヘラケズリ
61	須恵器	杯蓋	4トレンチ	SX01-26	139	4.5	-	1/12	灰 NS/0	密	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、頂部外面：回転ヘラケズリ
62	須恵器	杯蓋	4トレンチ	SX01-1の下	120	(35)	-	2/12	灰 10Y6/1	密	堅緻	内外面：回転ナデ
63	須恵器	杯身	4トレンチ	SX01-1	122	(48)	-	2/12	灰 N6/0	密	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ
64	須恵器	杯身	4トレンチ	SX01-27	105	(45)	-	1/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
65	須恵器	杯身	4トレンチ	SX01-1の下	136	(34)	-	1/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
67	須恵器	甕	4トレンチ	西壁掃除	/	(37)	-	1/12以下	灰 N4/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
69	須恵器	甕	7トレンチ	SD01 底部中位	-	(51)	-	3/12	青灰 10B6G/1	密	堅緻	内外面：回転ナデ
70	須恵器	杯身	7トレンチ	SD01 上位横断面 アゼ上面2層目	106	(51)	-	6/12	灰 N7/0	密	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ
71	須恵器	高杯	7トレンチ	SD01	-	(56)	122	2/12	灰 N7/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
72	須恵器	杯身	7トレンチ	SD01	-	(34)	-	1/12	灰 7.5Y7/1	密	堅緻	内面：回転ナデ。外面：回転ヘラケズリ
73	須恵器	杯身	7トレンチ	SD01	120	(37)	-	1/12	灰 7.5Y6/1	密	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ
80	須恵器	杯身	6トレンチ	45号横穴根掘中	110	(41)	-	2/12	灰 N7/0	密	堅緻	内面・口縁部外面：回転ナデ、底部外面：回転ヘラケズリ
81	須恵器	皿	7トレンチ	48号横穴	-	(47)	-	3/12	青灰 5B6G/1	密	堅緻	内外面：回転ナデ、口縁基部：しぼり痕
82	須恵器	杯	6トレンチ	45号横穴根掘中	153	4.1	9.6	3/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面・高台貼り付け：回転ナデ、底部外面：ナデ
83	須恵器	甕	7トレンチ	50号横穴 最上部最上層	/	(49)	-	1/12以下	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
84	須恵器	器台	7トレンチ	SX09 清内黄色土層	268	(54)	-	1/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
85	弥生土器	甕	7トレンチ	49号横穴 墓道 先頭の南側 田表土直下	(178)	(32)	-	1/12	浅黄褐色 7.5YR8/4	密	やや軟	摩滅により調整不明（口縁内外面：ヨコナデか）
87	須恵器	杯身	7トレンチ	51号横穴墓道	140	(35)	-	2/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ 口縁はなく受け部径
88	須恵器	杯蓋	7トレンチ	51号横穴 玄室崩落土中	137	3.8	-	11/12	灰 N7/0	密	堅緻	内面・口縁内外面：回転ナデ、頂部外面：回転ヘラケズリ、内面中央にクタクタキ
89	土師器	皿	7トレンチ	51号横穴	134	2.7	-	12/12	橙 2.5YR7/8	密	堅緻	口縁部内外面：ヨコナデ、底部内面：ナデ、底部外面：ハタのちナデ
90	土師器	長頸甕	7トレンチ	51号横穴玄室	99	23.0	-	11/12	灰白 2.5Y8/2	密	良好	口縁～頸部内外面：タテハケ。同内面：ヨコハケ、胴部外面：ハケ、ユビオサエ
91	土師器	高杯	7トレンチ	51号横穴墓道	123	8.0	8.1	6/12	橙 5YR7/6	密	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ、ユビオサエ
92	土師器	高杯	7トレンチ	51号横穴玄室	115	7.4	7.7	11/12	橙 2.5YR6/8	密	良好	内外面：ヨコナデ
93	土師器	高杯	7トレンチ	51号横穴玄室	127	(51)	-	12/12	橙 5YR7/6	密	良好	内外面：ヨコナデ

報告番号	器種	器形	地区名	出土地点	法量			残存率	色調	胎土	焼成	調整・備考
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)					
94	土師器	高杯	7トレンチ	51号横穴支室	-	(23)	7.4	10/12	橙 5YR6/6	密	良好	内外面:ヨコナテ
95	土師器	高杯	7トレンチ	51号横穴墓道	12.5	7.5	8.0	11/12	橙 5YR6/6	密	良好	内面杯部・外面:ヨコナテ, 脚部内面:しほり痕

(凡例)

○口径欄の記号 (): 復元径

○器高欄の記号 (): 残存高 []: 破片の長さ

○小数点第2位を四捨五入、第1位で表示

○ -: 該当部位なし /: 測定不能

付表12 女谷・荒坂横穴群第14次 出土石製品・骨製品観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	材質	備考
59	石鏃	3トレンチ V22-b II	SD01	3.9	1.6	5.6	3.6	サスカイト	
102	骨製品	7トレンチ	51号横穴支室	3.5	1.4	1.2	-	ニホンシカの骨	集骨が所より出土

付表13 女谷・荒坂横穴群第14次 出土瓦観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整
74	平瓦	7トレンチ	SD01 Ⅲ区	(14.2)	(11.0)	1.9	不明	灰 N6/0	密	良好	凸面: タタキ 凹面: 布目圧痕
75	平瓦	7トレンチ	SD01	(13.2)	(12.3)	2.1	不明	灰 5/0	密	良好	凸面: 縄目タタキ 凹面: 布目圧痕
76	平瓦	7トレンチ	SD01 精査	(15.1)	(11.6)	2.9	不明	灰白 N7/0	密	良好	凸面: 縄目タタキ 凹面: 布目圧痕
77	平瓦	7トレンチ	SD01	(8.1)	(10.1)	2.6	不明	黄灰 25Y6/1	密	良好	凸面: タタキ 凹面: 布目圧痕
78	聚斗瓦	7トレンチ	SD01 精査	(9.7)	(11.5)	2.3	不明	黄灰 25Y6/1	密	良好	凸面: タタキ・ケズリ 凹面: 布目圧痕
79	丸瓦	7トレンチ	SD01 上位上段横アゼ	(13.9)	(6.4)	2.1	不明	灰白 5Y8/1	密	やや軟	凸面: 摩滅 凹面: 布目圧痕

付表14 女谷・荒坂横穴群第14次 出土銭観察表

報告番号	銭貨名	国	初鑄年	地区	遺構	径 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)
86	寛永通寶	日本	3期新寛永 (1697年~1747年) (1767年~1781年)	7トレンチ	48号横穴 支室内竹根周辺	2.3	0.6~1	2.3

付表15 女谷・荒坂横穴群第14次 出土金属製品観察表

報告番号	種類	器形	地区名	出土地点	長さ (cm)	厚さ (mm)	備考
68	鉄製品	釘	4トレンチ	西壁掃除	(2.4)	0.4	
96	金属製品	耳環	7トレンチ	51号横穴 支室	2.1	4.5	部分的に金残存
97	鉄製品	釘	7トレンチ	51号横穴 支室	(6.8)	4.0	
98	鉄製品	鉄線(塞)	7トレンチ	51号横穴 支室	(4.2)	5.0	
99	鉄製品	鉄線(塞)	7トレンチ	51号横穴 支室	(3.5)	4.0	
100	鉄製品	刀子	7トレンチ	51号横穴 支室	(5.9)	4.5	
101	鉄製品	刀子	7トレンチ	51号横穴 支室	(7.2)	5.0	木材残存

圖 版

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

(1) 調査地西半部全景 (東から)



(2) 調査地北東部全景 (西から)



(3) F 1 区全景 (南東から)



下水主遺跡第4次(F地区)



(1) F1区島畑106検出状況
(西から)



(2) F1区島畑106完掘状況
(西から)



(3) F1区東壁土層断面(西から)

下水主遺跡第4次(F地区)



(1) F1区下層遺構全景(西から)



(2) F1区掘立柱建物S B0116・0124全景(南西から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 1 区掘立柱建物 S B0116 全景
(南東から)



(2) F 1 区掘立柱建物 S B0116 全景
(南西から)



(3) F 1 区掘立柱建物 S B0116・
0124 全景 (北東から)

下水主遺跡第4次(F地区)



(1)掘立柱建物S B0116柱穴S P0116土層断面(南西から)



(2)掘立柱建物S B0116柱穴S P0117土層断面(南西から)



(3)掘立柱建物S B0116柱穴S P0119土層断面(南西から)



(4)掘立柱建物S B0116柱穴S P0120土層断面(北東から)



(5)掘立柱建物S B0116柱穴S P0124土層断面(北東から)



(6)掘立柱建物S B0116柱穴S P0122土層断面(北東から)



(7)掘立柱建物S B0124柱穴S P0124土層断面(南西から)



(8)掘立柱建物S B0124柱穴S P0126土層断面(南から)

下水主遺跡第4次(F地区)



(1) F2区全景(北から)



(2) F2区北壁土層断面(南から)



(3) F2区土層確認状況(東から)

下水主遺跡第4次(F地区)



(1) F3区拡張前全景(東から)



(2) F3区南壁(東半)土層断面
(北から)



(3) F3区須恵器甕出土状況
(北から)

下水主遺跡第4次(F地区)



(1) F3区土坑SK0305遺物出土
状況(西から)



(2) F3区溝SD0309全景
(南西から)



(3) F3区井戸SE0308上部土層
断面(南西から)

下水主遺跡第4次(F地区)

(1) F3区井戸SE0308遺物出土
状況(南西から)



(2) F3区井戸SE0308遺物出土
状況(北から)



(3) F3区井戸SE0308完掘後全景
(南から)



下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 3 区井戸 S E 0311 上部土層
断面 (西から)



(2) F 3 区井戸 S E 0311 下部土層
断面 (西から)



(3) F 3 区井戸 S E 0311 完掘後全景
(南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 3 区土坑 S K 0309 遺物出土
状況 (南西から)



(2) F 3 区土坑 S K 0309 全景
(南東から)



(3) F 3 区弥生土器出土状況
(南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 4 区調査地全景(南から)



(2) F 4 区南壁(東半)土層断面
(北から)



(3) F 4 区南壁(西半)土層断面
(北から)

下水主遺跡第4次(F地区)

(1) F5区全景(南から)



(2) F5区東壁(北半)土層断面
(西から)



(3) F5区拡張区全景(南東から)



下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 6 区島畑107検出状況
(南東から)



(2) F 6 区島畑107 - 溝状遺構
S D0612検出状況(北東から)



(3) F 6 区島畑107完掘後全景
(南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 6 区下層遺構面全景 (南から)



(2) F 6 区溝 S D0603 検出状況
(南から)



(3) F 6 区土坑 S K0604 全景
(南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 6 区溝 S D0601 全景 (南から)



(2) F 6 区溝 S D0601 護岸施設検出状況 (南西から)



(3) F 6 区溝 S D0601 護岸施設 (北半部) 検出状況 (南東から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

(1) F 7 区北壁中央土層断面
(南から)



(2) F 7 区南壁中央土層断面
(北から)



(3) F 7 区井戸 S E0704 検出状況
(南西から)





(1) F 7 区井戸 S E 0704 検出状況 (南から)



(2) F 7 区井戸 S E 0704 全景 (南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 7 区井戸 S E0704 水溜め・裸敷検出状況(南から)



(2) F 7 区井戸 S E0704 井戸枠撤去状況(南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 7 区井戸 S E 0704 柄杓出土
状況 (南から)



(2) F 7 区井戸 S E 0704 柄杓・
須恵器壺 M 出土状況 (南から)



(3) F 7 区井戸 S E 0704 曲物出土
状況 (北から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

(1) F 7 区井戸 S E0704 竈串出土
状況 (南東から)



(2) F 7 区井戸掘形 (東半) 土層断面
(南から)



(3) F 7 区井戸 S E0704 掘形 (西半)
土層断面 (南から)



下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 7 区井戸 S E 0704 最下部大型
板材検出状況 (南から)



(2) F 7 区井戸 S E 0704 解体状況
(南から)



(3) F 7 区井戸 S E 0704 南西隅横桟
結合状況 (南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

(1) F 7 区井戸 S E 0704 完掘状況
(南から)



(2) F 7 区井戸 S E 0705 完掘後
全景 (南から)



(3) F 7 区落ち込み S X 0706 検出
状況 (北から)



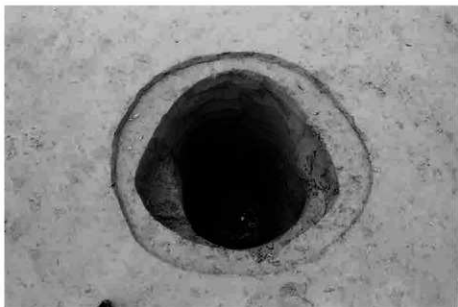
下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 8 区全景(北から)



(2) F 8 区溝 S D 0801 全景
(北西から)



(3) F 8 区井戸 S E 0802 全景
(南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 9 区上層遺構面全景 (南から)



(2) F 9 区溝 S D0901・0902 全景
(南から)



(3) F 9 区北壁土層断面 (南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 9 区下層遺構全景(西から)



(2) F 9 区井戸 S E 0939 土層断面
(東から)



(3) F 9 区井戸 S E 0930 全景
(東から)

(1) F 9 区井戸 S E 0929 全景
(西から)



(2) F 9 区柱穴 S P 0922 検出状況
(南西から)



(3) F 9 区柱穴 S P 0922 土層断面
(西から)



下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 9 区銭貨出土状況(南から)



(2) F 9 区土器溜まり S X 0932
遺物出土状況(東から)



(3) F 9 区土器溜まり S X 0932
遺物出土状況(北から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

(1) F 10 区西部上層遺構面全景
(南から)



(2) F 10 区下層遺構面全景 (南から)



(3) F 10 区北壁土層断面 (南から)



下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F10区作業風景(南東から)



(2) F10区竪穴建物SH1020全景
(南から)



(3) F10区土器溜まりSX1016・
1017全景(南から)

下水主遺跡第4次(F地区)



(1) F11区全景(北から)



(2) F11区溝S D1101・1102全景
(西から)



(3) F11区落ち込みS X1103全景
(北から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F11区井戸SE1110土層断面
(南から)



(2) F11区井戸SE1110網代出土
状況(東から)



(3) F11区土坑SK1106遺物出土
状況(南東から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

(1) F11区土坑S K1109検出状況
(東から)



(2) F11区土坑S K1109遺物出土
状況(東から)



(3) F11区落ち込みS X1115検出
状況(北から)



下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F12区全景(南から)



(2) F12区遺構検出状況(南から)



(3) F12区井戸 S E 1201 全景
(南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F 12区土坑 S K 1230遺物出土
状況 (南西から)



(2) F 12区溝 S D 1204全景
(南西から)



(3) F 12区溝 S D 1235全景
(南西から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F12区溝 S D1245全景
(北西から)



(2) F12区竪穴建物 S H1202検出
状況(南から)



(3) F12区竪穴建物 S H1202土層
断面(南から)



(1) F 12区竪穴建物 S H1202 全景 (南西から)



(2) F 12区竪穴建物 S H1202 完掘状況 (南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F12区竪穴建物 S H1202焼土・炭化材検出状況(南から)



(2) F12区竪穴建物 S H1202焼土・炭化材検出状況(西から)



(3) F12区竪穴建物 S H1202焼土・炭化材検出状況(南西から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

(1) F12区竪穴建物 S H1202遺物・炭化材検出状況(南東から)



(2) F12区竪穴建物 S H1202遺物・炭化材出土状況(南から)



(3) F12区竪穴建物 S H1202遺物出土状況(南から)



下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F12区竪穴建物 S H1202遺物・炭化材出土状況(南から)



(2) F12区竪穴建物 S H1202遺物・炭化材出土状況(南西から)



(3) F12区竪穴建物 S H1202遺物・炭化材出土状況(西から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

(1) F 12 区竪穴建物 S H1202 遺物
出土状況 (南西から)



(2) F 12 区竪穴建物 S H1202 周壁溝
炭化材出土状況 (北から)



(3) F 12 区竪穴建物 S H1202 内
ベッド状遺構土層断面 (西から)



下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) F12区堅穴建物SH1202内
土坑SK1250検出状況(西から)



(2) F12区堅穴建物SH1202内
主柱穴SP1246土層断面
(南から)



(3) F12区堅穴建物SH1202内
主柱穴SP1247土層断面
(南から)

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)

- (1) F12区竪穴建物 S H1202内
支柱穴 S P1248土層断面
(南から)



- (2) F12区竪穴建物 S H1202内
支柱穴 S P1249土層断面
(南から)



- (3) F12区竪穴建物 S H1202完掘後
全景 (西から)

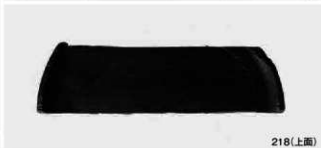


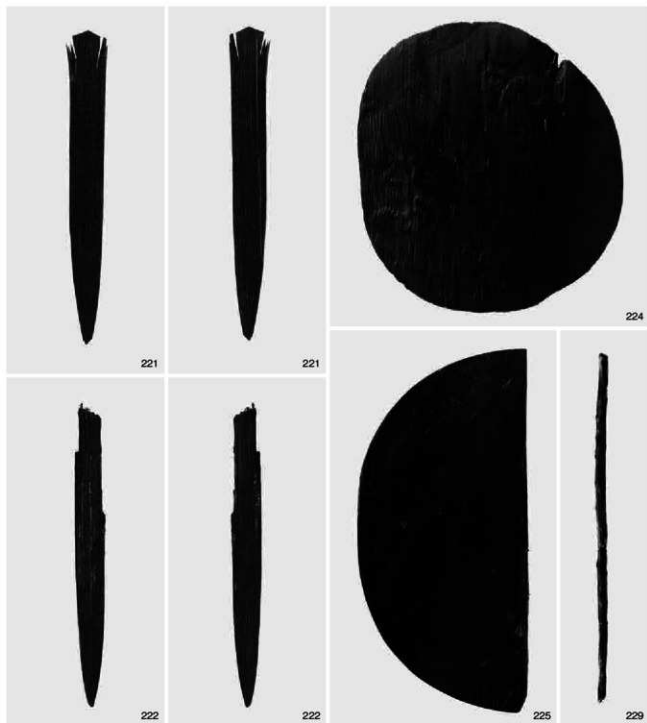


出土遺物 1 F 2・F 3 区出土遺物







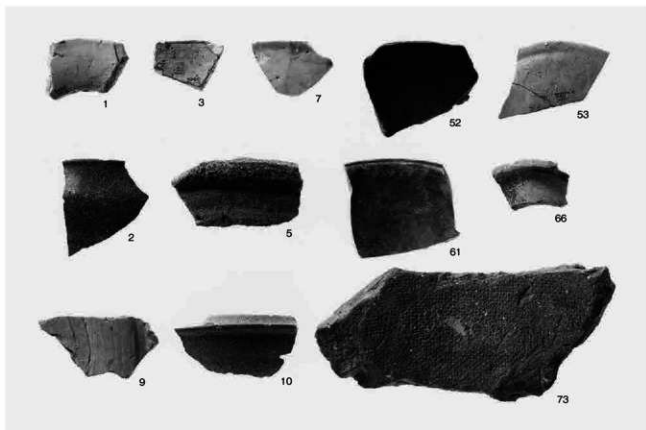


出土遺物 5 F 3 区出土遺物

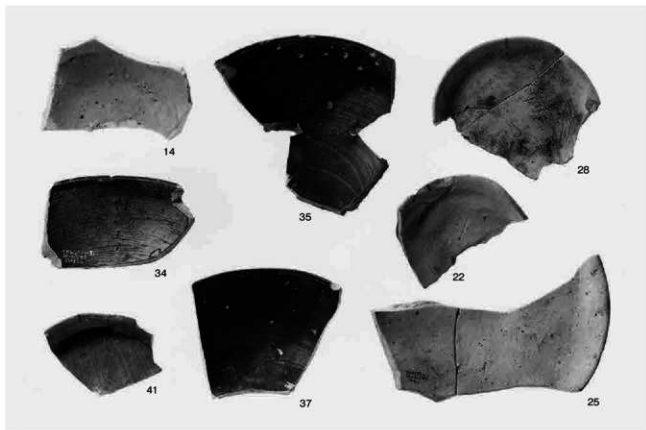




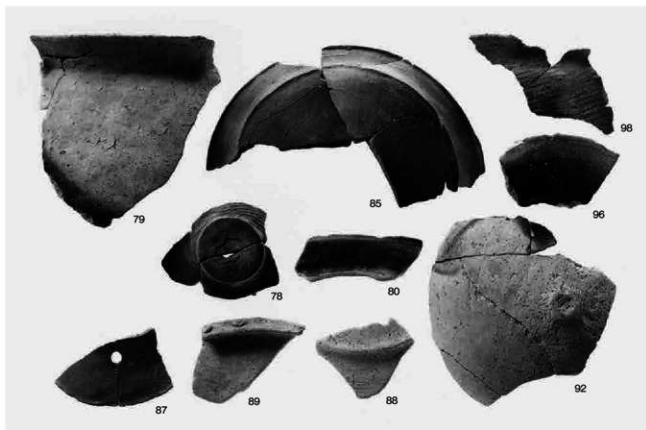




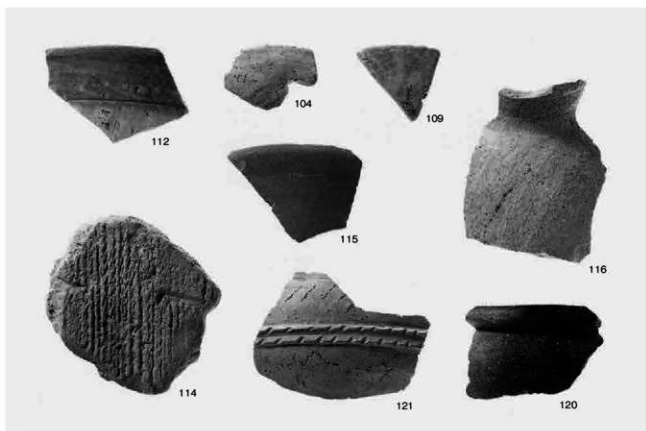
(1)出土遺物9 F1・F3区出土遺物



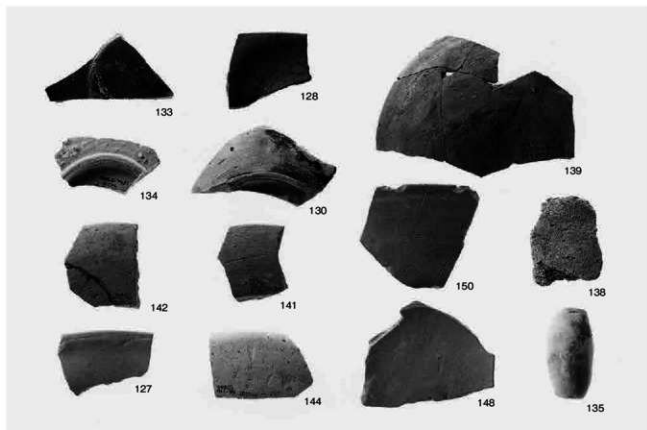
(2)出土遺物10 F3区出土遺物



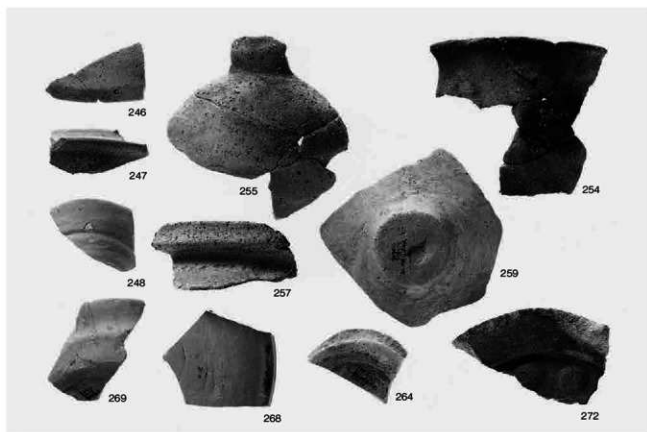
(1)出土遺物11 F 3区出土遺物



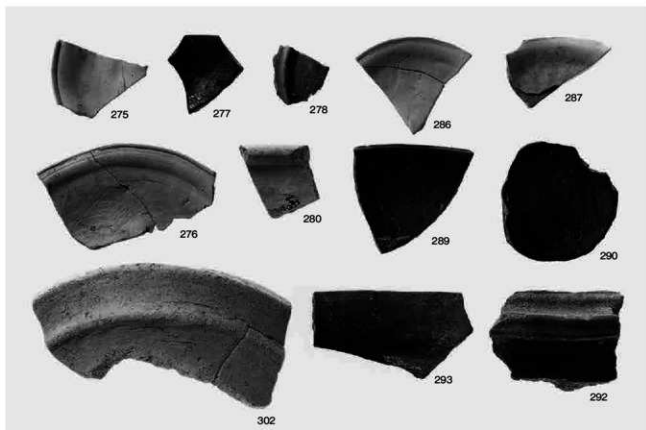
(2)出土遺物12 F 5・F 6区出土遺物



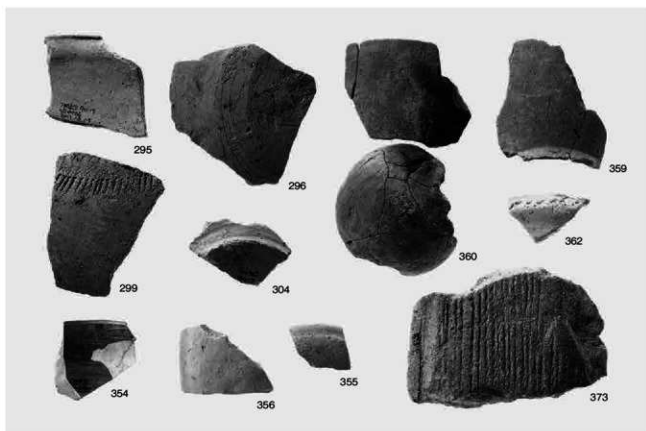
(1)出土遺物13 F 7区出土遺物



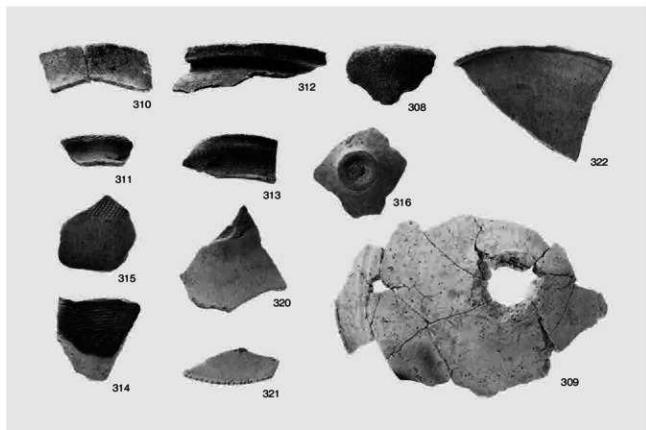
(2)出土遺物14 F 8区出土遺物



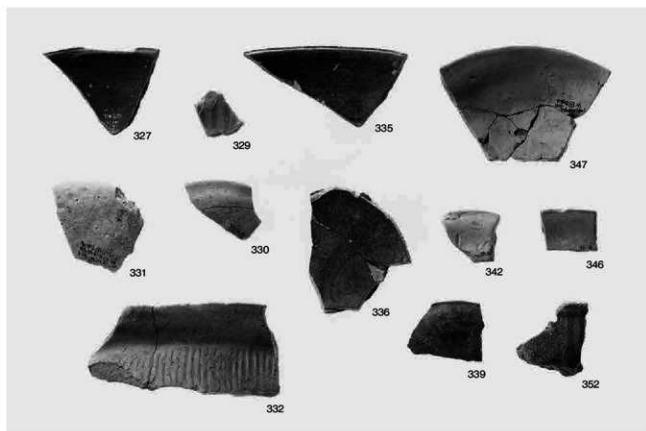
(1) 出土遺物15 F 9 区出土遺物



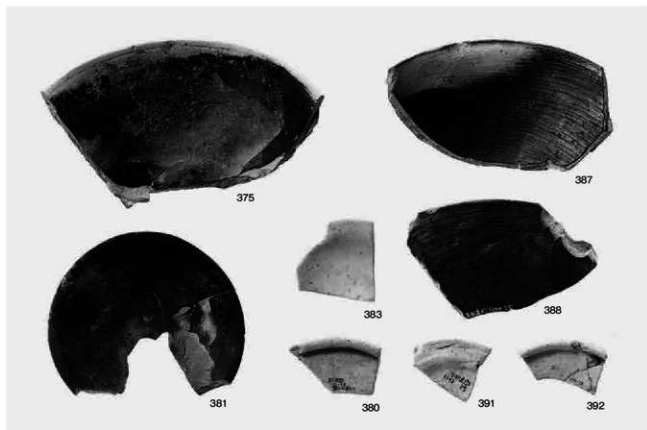
(2) 出土遺物16 F 9・F10区出土遺物



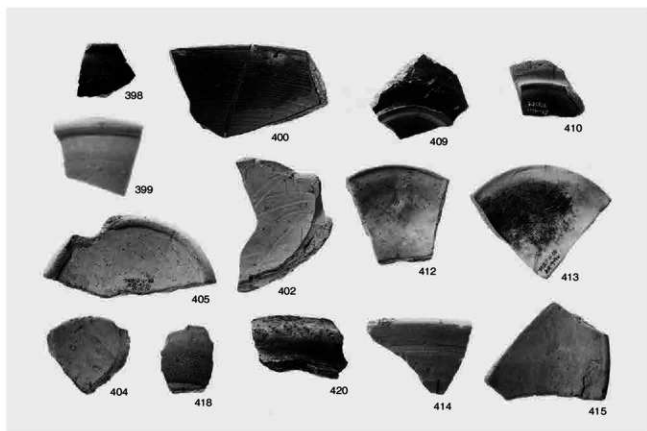
(1) 出土遺物 17 F10区出土遺物



(2) 出土遺物 18 F10区出土遺物

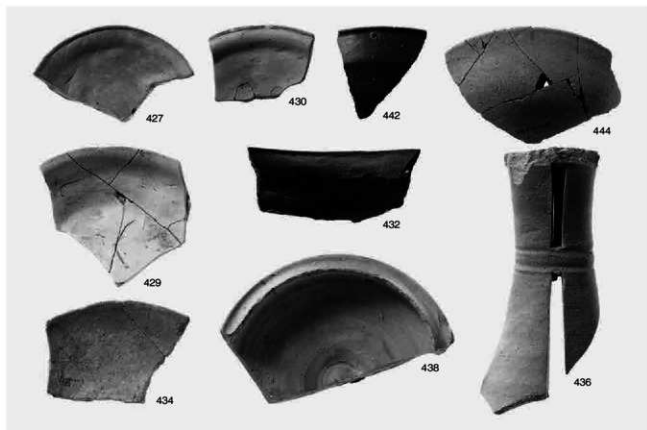


(1) 出土遺物19 F11区出土遺物

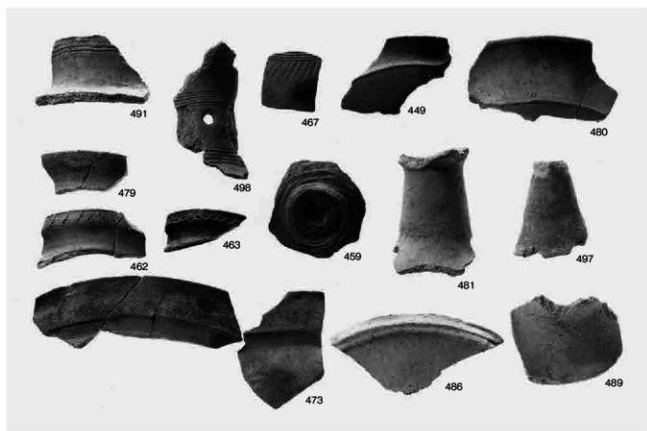


(2) 出土遺物20 F11区出土遺物

下水主遺跡第 4 次 (F 地区)



(1) 出土遺物21 F12区出土遺物



(2) 出土遺物22 F12区出土遺物



(1) 御毛通 2 号墳埴輪出土状況(南西から)



(2) 御毛通 2 号墳周溝完掘状況(南西から)

女谷・荒坂横穴群第 14 次



(1) 御毛通 2 号墳填丘盛り土
土層断面 1 (西から)



(2) 御毛通 2 号墳填丘盛り土
土層断面 2 (西から)



(3) 御毛通 2 号墳周溝内土層断面
(南から)

女谷・荒坂横穴群第14次

(1) 御毛通2号墳周溝検出状況
(南から)



(2) 御毛通2号墳周溝遺物
出土状況1 (北西から)



(3) 御毛通2号墳周溝遺物
出土状況2 (西から)





(1) 御毛通 2 号墳 1 トレンチ全景(西から)



(2) 御毛通 2 号墳 2 トレンチ全景(南西から)



(1) 御毛通 2 号墳 4 トレンチ全景(南西から)



(2) 御毛通 2 号墳 4 トレンチ S X01 遺物出土状況(南から)

女谷・荒坂横穴群第 14 次



(1) 御毛通 2 号墳
4 トレンチ S X01 完掘状況
(西から)



(2) 御毛通 2 号墳
5 トレンチ全景(北東から)



(3) 御毛通 2 号墳
5 トレンチ東壁断面(北西から)

女谷・荒坂横穴群第 14 次

(1) 6 トレンチ遠景(南から)



(2) 45・46・47号横穴全景(南から)



(3) 45・46・47号横穴全景(北東から)



女谷・荒坂横穴群第 14 次



(1) 45号横穴断面(南東から)



(2) 45号横穴全景(南東から)



(3) 45号横穴墓道縦断面(南から)

女谷・荒坂横穴群第 14 次

(1) 46・47号横穴全景(南東から)



(2) 46号横穴墓道横断面(南東から)



(3) 46号横穴墓道縦断面(北から)





(1) 7 トレンチ遠景(南東から)



(2) 48・49・50号横穴遠景(北東から)



(1) 7 トレンチ横穴天井部掘削後遠景(南東から)



(2) 48・49・50号横穴天井部掘削後遠景(北東から)

女谷・荒坂横穴群第 14 次



(1)48号横穴完掘状況(東から)



(2)49号横穴墓道・玄室調査状況
(南東から)



(3)49号横穴完掘状況(南東から)

女谷・荒坂横穴群第14次

(1)49号横穴支室完掘状況
(北西から)



(2)50号横穴、S X09・10
掘削状況(南東から)



(3)50号横穴完掘状況(南東から)



女谷・荒坂横穴群第 14 次



(1)50号横穴玄室埋土堆積状況
(南東から)



(2)50号横穴墓道埋土堆積状況
(南東から)



(3)50号横穴墓道先端部埋土
堆積状況(南から)

女谷・荒坂横穴群第 14 次



(1) 7 トレンチ S D01 全景 (南から)



(2) 7 トレンチ S D01 埋土堆積状況
(南東から)



(3) 7 トレンチ S X09・10
掘削状況 (南東から)

女谷・荒坂横穴群第14次



(1) 7トレンチS X10埋土堆積状況
(南から)



(2) 7トレンチS X13・14
埋土堆積状況(南東から)



(3) 7トレンチS X13・14
埋土堆積状況(南東から)



(1)51号横穴完掘状況(南西から)



(2)51号横穴玄室・羨道遺物出土状況(北から)

女谷・荒坂横穴群第 14 次



(1)51号横穴羨道縦断面(西から)



(2)51号横穴墓室横断面(南西から)



(3)51号横穴玄室内断ち割り状況
(北から)

女谷・荒坂横穴群第 14 次

(1)51号横穴女室・羨道遺物
出土状況(南西から)



(2)51号横穴遺物出土状況(西から)



(3)51号横穴遺物出土状況(東から)



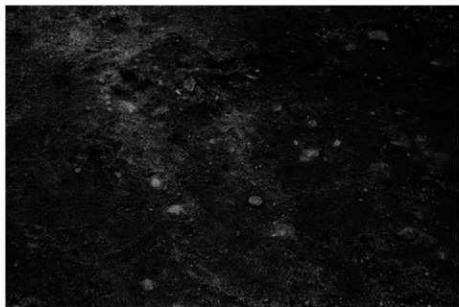
女谷・荒坂横穴群第 14 次



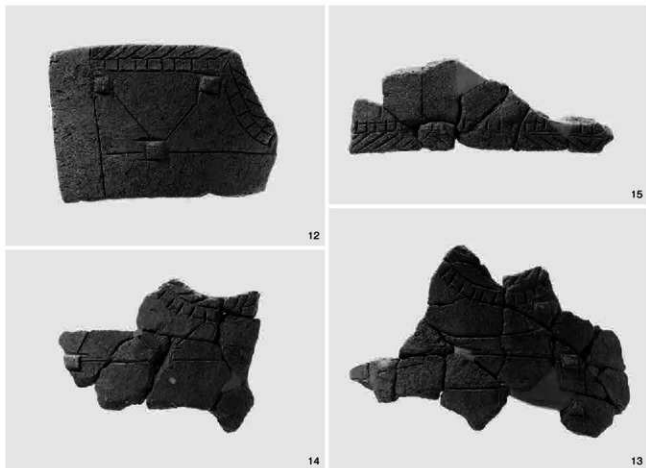
(1) 51号横穴人骨出土状況
(北東から)



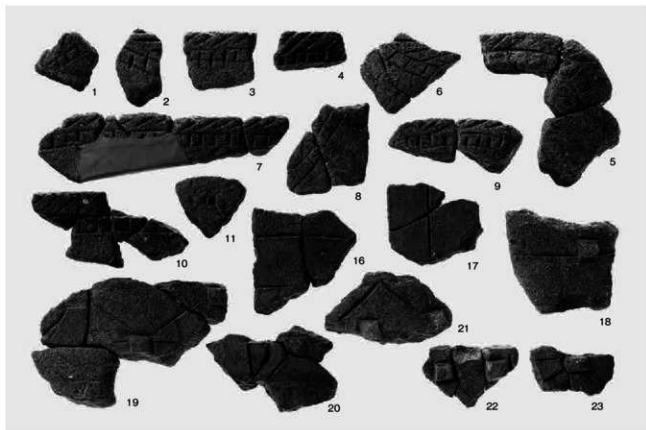
(2) 51号横穴東側人骨出土状況近景
(東から)



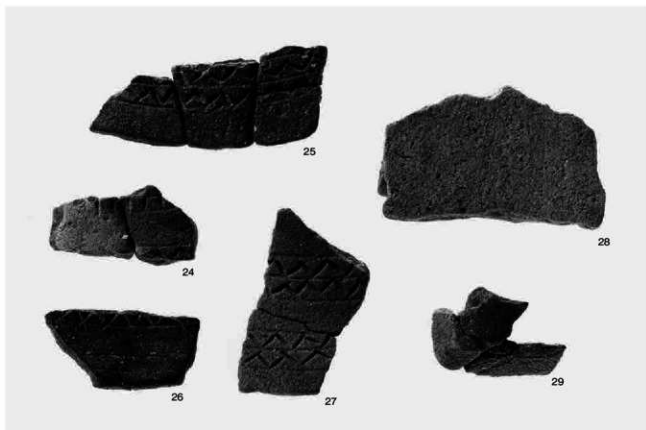
(3) 51号横穴西側人骨出土状況
(南東から)



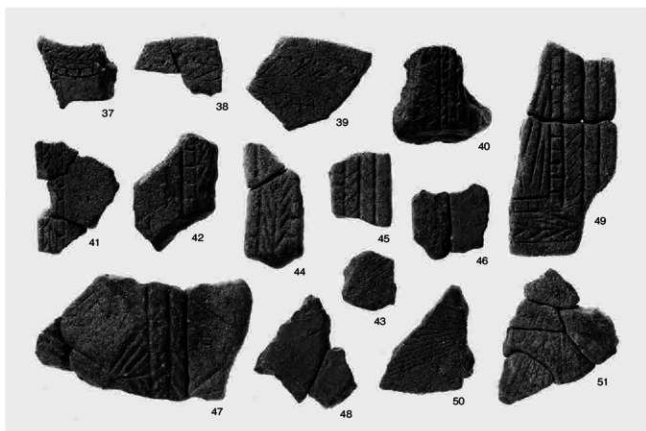
(1) 御毛通 2 号墳甲冑形埴輪 1



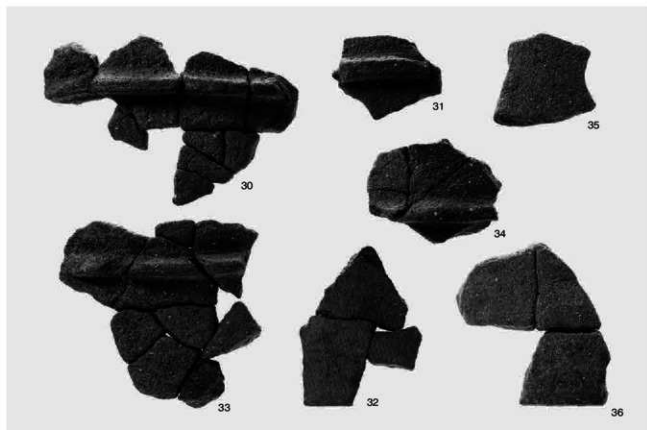
(2) 御毛通 2 号墳甲冑形埴輪 2



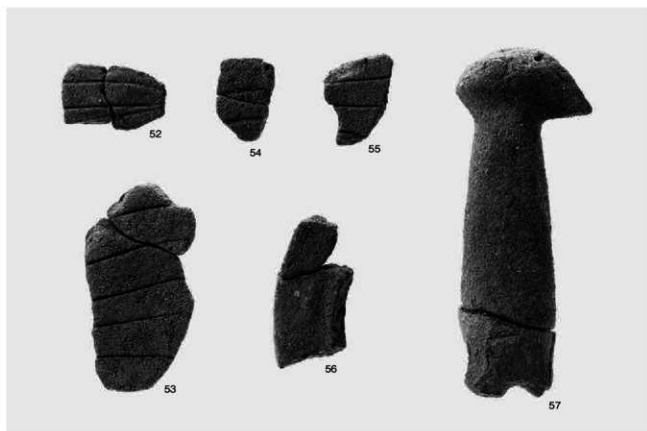
(1) 御毛通 2 号墳草摺形埴輪・家形埴輪



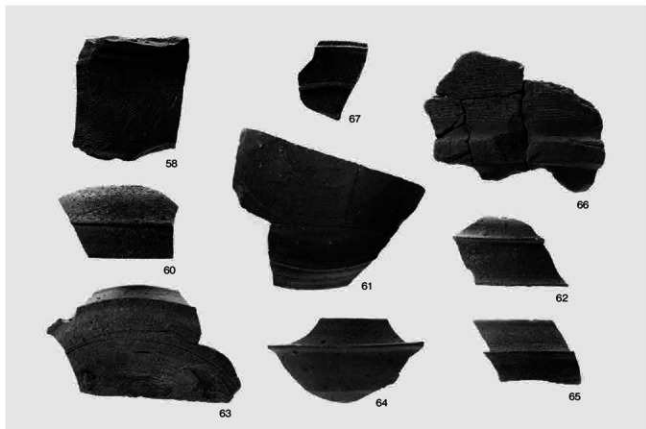
(2) 御毛通 2 号墳盾形埴輪



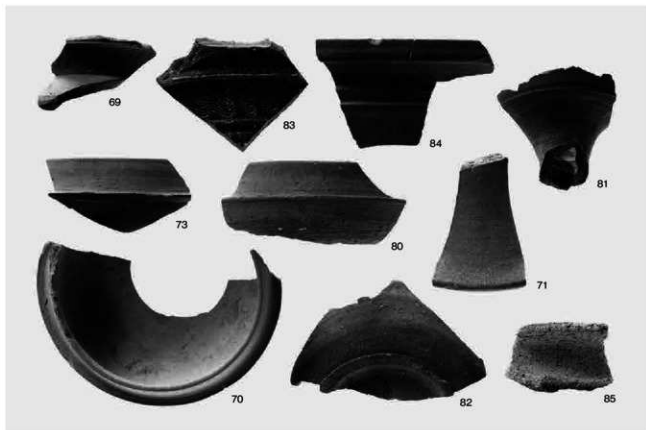
(1) 御毛通 2 号墳埴輪円筒部



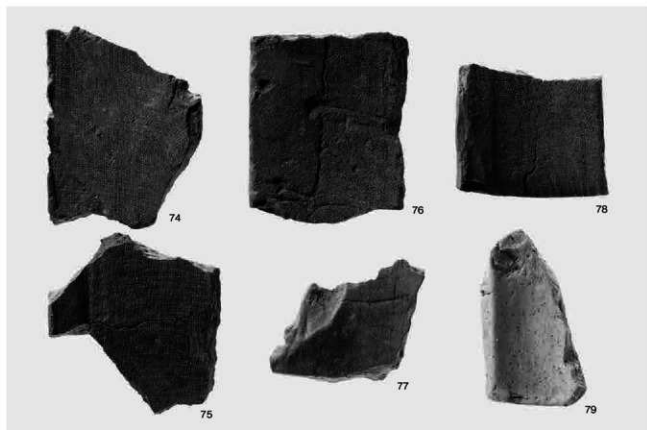
(2) 御毛通 2 号墳埴輪形埴輪



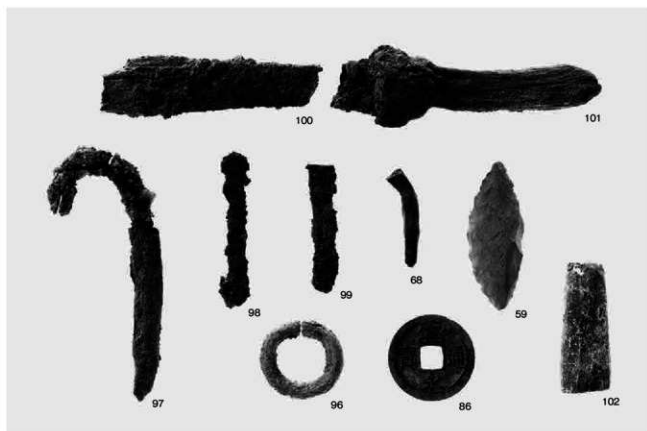
(1) 御毛通 2 号墳周溝・4 トレンチ S X01 出土遺物



(2) 6・7 トレンチ出土遺物



(1) 7 トレンチ S D01 出土瓦



(2) 48号横穴古銭、51号横穴金属製品他、御毛通2号墳周溝石製品



51号横穴出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきしょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第168冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第168冊
編著者名	筒井崇史・岡田健吾・高野陽子・石井清司・竹村亮仁・武本典子・米田拓海・清水麻里奈・伊賀高弘・松井忍
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933)3877
発行年月日	西暦2017年3月29日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯		東経		調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	'	'	'	'		m			
しもみずしいせきだいまじ(えふちく) 下水主遺跡第4次(F地区)	きょうとふじょうようしみずしだいしょうくん、てらだかなお 京都府城陽市水主大將軍、寺田金尾	26206	88	34°	50'	48"	135°	45'	33"	20130422 ～ 20140227	2,756	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下水主遺跡第4次 (F地区)	集落・ 生産遺跡	縄文～中世	竪穴建物・土坑・溝・ 井戸・鳥畑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・ 瓦器・木製品・銭貨・石製品	
女谷・荒坂横穴群 第14次	横穴	古墳～奈良	横穴・溝状遺構	土師器・須恵器・瓦・鉄製品・耳環・骨 製品	人骨出土
御毛通古墳群第3 次	古墳	古墳	円墳	甲冑形埴輪・草摺形埴輪・盾形埴輪・鶏 形埴輪・家形埴輪・須恵器・石甌・鉄製 品	

所収遺跡名	要 約
下水主遺跡第4次 (F地区)	<p>平成25年度に調査を実施した下水主遺跡第4次調査のうち、F地区として12か所の調査区の調査成果について報告した。</p> <p>縄文時代の遺構・遺物としては、F5区で晩期の土器片を1点確認したにとどまる。</p> <p>弥生時代後期の遺構・遺物としては、F3・F6・F10・F11・F12区で土器が出土したほか、F10・F12区では円形の竪穴建物を検出した。各調査区でも出土遺物が多いことから、調査地周辺に広く集落が広がっていたと考えられる。</p> <p>古墳時代から奈良時代にかけての遺構・遺物はほとんど確認できなかったが、F1区で検出した掘立柱建物は古代の遺構である可能性が高い。</p> <p>平安時代から中世前半にかけては、井戸や土坑などを検出するとともに、多数の土器・木製品が出土した。</p> <p>中世後半以降になると、鳥畑が成立してくる。調査区が狭小であったため、鳥畑の全容は明らかにならなかったものの、近世を通じて営まれたと考えられる。</p>
女谷・荒坂横穴群第14次 御毛通古墳群第3次	<p>女谷・荒坂横穴群第14次調査は、平成24年度に発掘調査を実施した地点の南延長部にあたり、丘陵斜面で7基の横穴の調査を実施した。そのうち、6トレンチの3基は墓道のみで調査で玄室部分の調査にはいたっていないが、13mの範囲に近接して横穴が配置されていることが明らかとなった。一方、7トレンチで検出した横穴は4基で、5～10mの間隔と離れた位置に配置されていることが明らかとなった。7トレンチの横穴は墓道とともに玄室部分を発掘調査し、51号横穴では須恵器・土師器とともに鉄器も出土したが、他の48・49・50号横穴では玄室床面での出土遺物はなかった。</p> <p>今回の調査では、横穴とともに丘陵平坦部で平成24年度に検出していた御毛通2号墳の北側の調査を行い、形象埴輪を多量に含む周溝の北延長部を検出した。</p>

京都府遺跡調査報告集 第168冊

平成29年3月29日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141